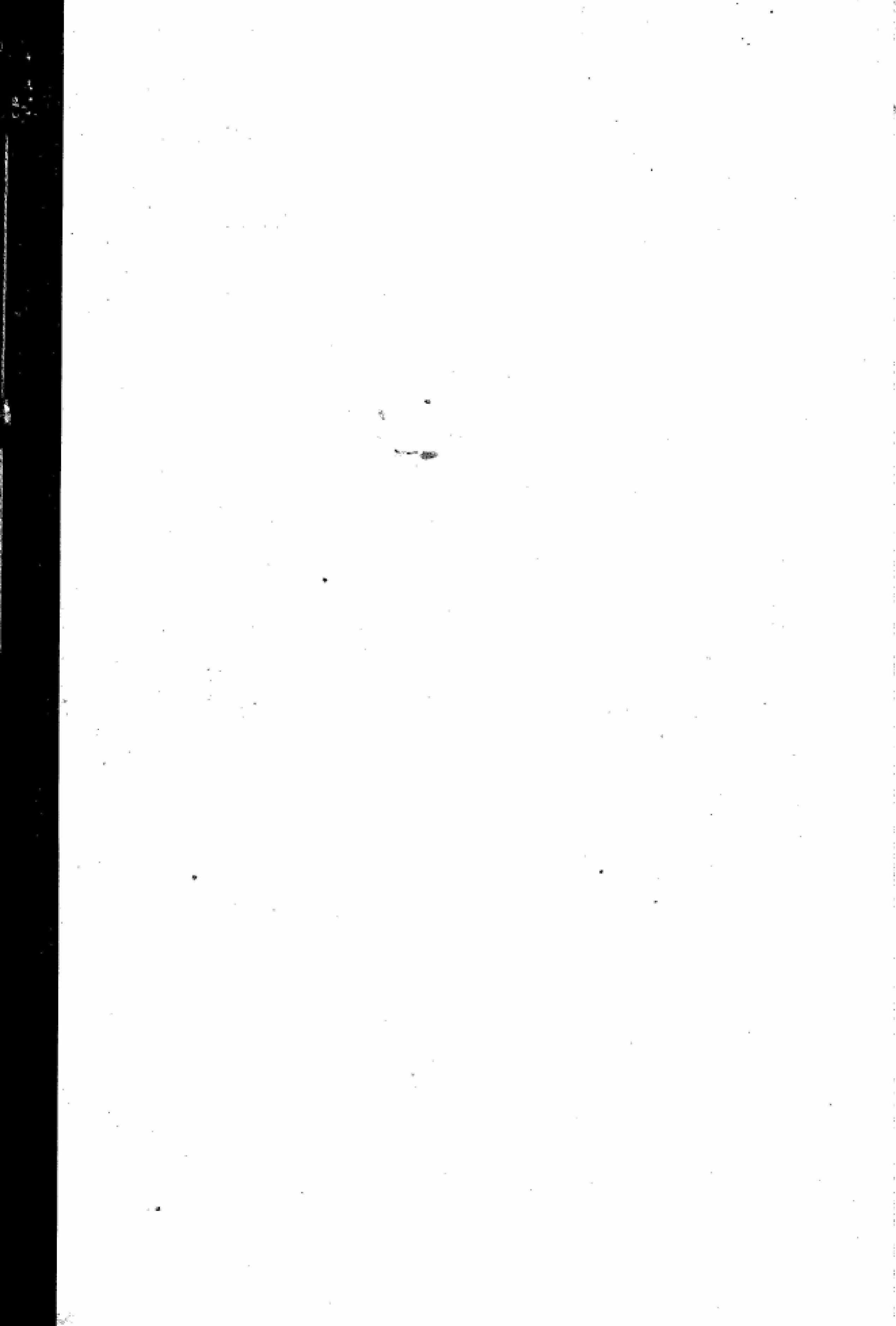
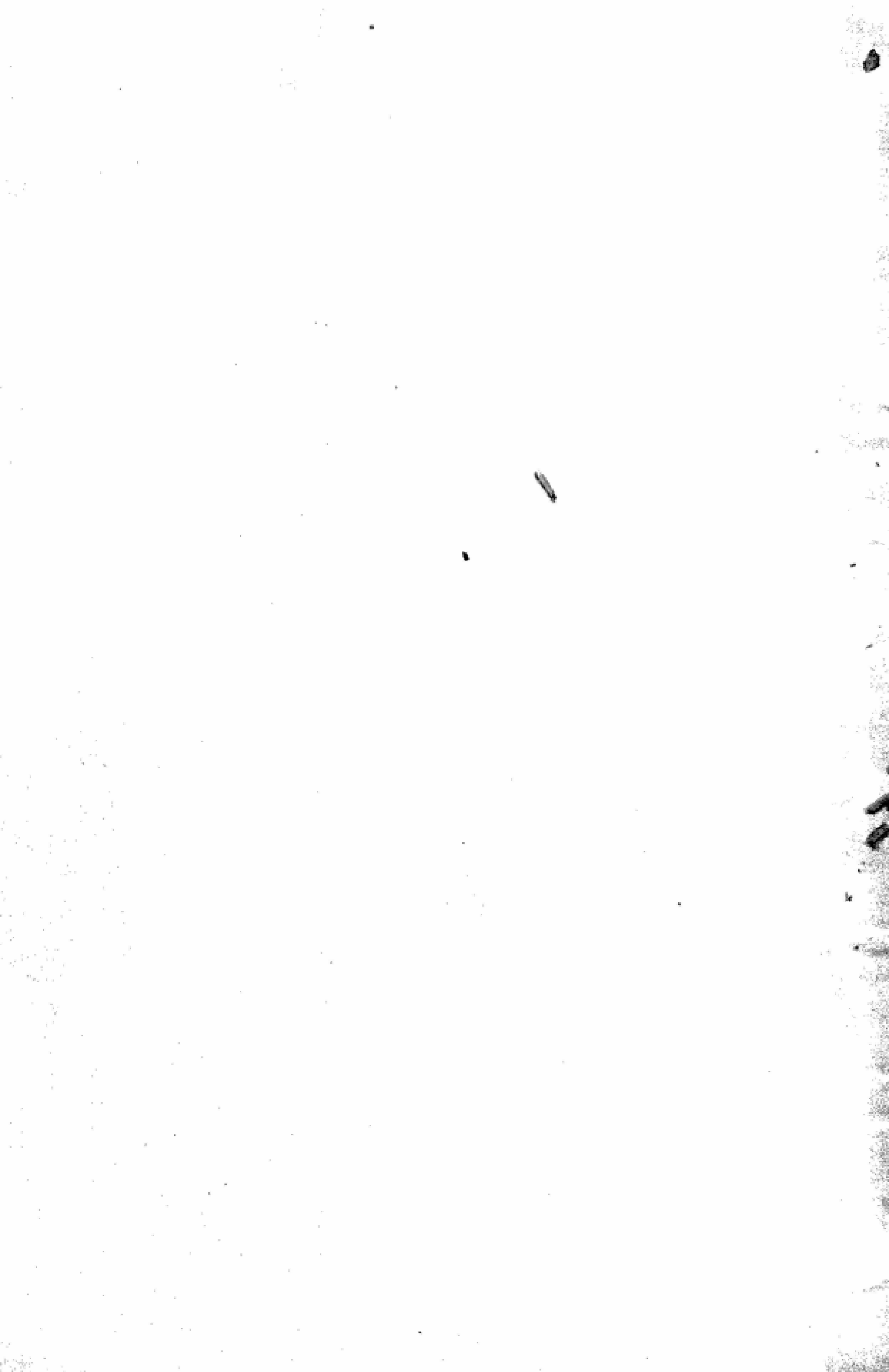




ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

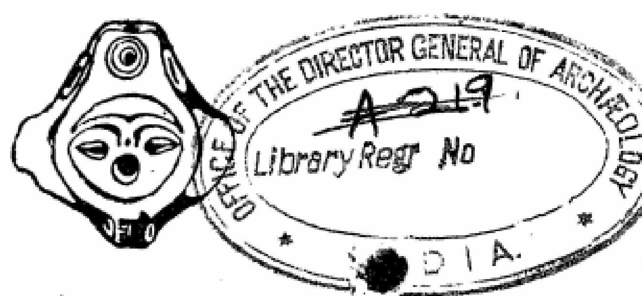
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

ORGAN DER JAPANISCHEN PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



7. BAND 1. HEFT

TOKIO

Janual 1935

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

   9. Onden Shibuya-Ku Tokio

   Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

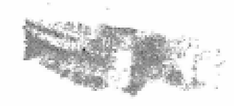
Ehren Mitglied und Ratgeder   Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa   Jookei Shibata

Vorsitzender   Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi   Keisuke Ikegami
Isamu Kohno   Kei Kanno
Iwao Ooba   Sueo Sugiyama
Kingo Tazawa   Ryuichi Yamaguchi

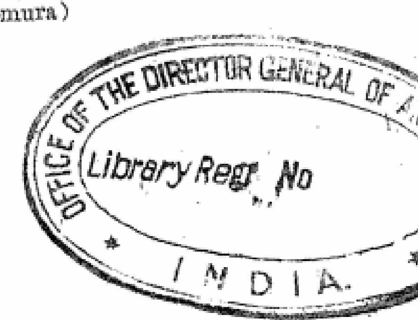



INHALT

I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

TAFELN



項より第四項は主として梅原氏、第五項より第七項迄は濱田博士、最後の第八・九項は兩氏の共著に成るといふ。吾人の通讀後感興深く覺えたことは、新羅古瓦の特質と、本邦に於ける同型古瓦の出土に就いてゞある。殊に前者に於いて新羅統一時代の文化が、單なる支那文化の繼承のみならず、新羅獨特の發達を示してゐる點と、その圖紋の構成並に華麗複雜な發達とは、當時頗る堪能な技術者の存在を推定せらるゝと共に、又一面に於いてそれ等が統制無く發達してゐることから、これを日本の古瓦と比較して、新羅のそれは Pictorial に、日本の瓦は Architectonic 發達したと結論せられてゐる。肯定すべき考察といふべきであらう。（大場）（實價十四 發行所神田區北甲賀町廿三 刀江書院）

第六卷第四、六號 土岐論文正誤表

（第四號の分）

三ニ頁十行目及十二行目のところ「約半町程手前の所で、東京開成中學校の塀に沿ふて坂を登ると（この道が…）云々」と訂正

三五頁第五圖左側五片は第五圖1、右側の一番上とその下が第五圖2、一番下のが第五圖3である。

三五頁九行目（I）は（第四圖版A）に訂正

三八頁第五圖版右の端上から三つ夫々A、B、C、その下上よりI、II、III。IIIの左隣がIV、その左隣りが7、7の上が1、1の右隣りが2、2の直ぐ上が4、4の左隣が6、6の直ぐ上が3、3の右隣が5である。

四〇頁一二行目の次へ（第六圖7）を加へる。

附記　尙ほ大野雲外氏と蒔田鎗次郎氏の彌生土器論爭の淵源となつた道灌山貝塚（實は竪穴趾）の位置については、當時文獻不備の爲、其の地點が明確に傳し得なかつたが、最近それは現田端驛の西北、省線を通ず爲の切通しの崖の附近の地點であつた事が解つた（彌生式土器と共に貝を發見せし事に就いて（蒔田鎗次郎）人類學雜誌第七卷一九二號（明治三五年三月）參照）

（第六號の分）

本論に於けるハヒガヒ助數は全部肋數の誤りである。先輩諸賢から質問御注意等を賜はり、恐縮の至りである。

型式分類や、原史時代遺物の說明に對して、相當再考の余地を有するものがあらうと思はれ、又最後の考察に就いても、全ての資料を一括して上代文化の一系列中に配列し、且つその編年順に文化現象を求むる方法が果して妥當なりや否やに就き、異論を挿むべき點があらうと考へられる。又原史時代文化に對しては吾人の見る所些か虐待視せられてゐるの感が存する。氏が右に就いてなほ多くの語るべき事があるが、紙面が許さないの理由を以て省略せられてゐるのは甚だ遺憾に堪へない。以上は何れも自分が一讀中思ひ當つた微瑕に過ぎない。卷を掩うて回想すれば、本書の眞價は既に述べた如く考古學の地域的研究に於ける典型的なものであつて、著者多年の努力と學界への寄與に對し、多大の敬意と期待とを捧ぐる次第である。非賣品、北佐久郡教育會發行(大場)

新羅古瓦の研究　濱田耕作・梅原末治共著

本書は京都帝國大學文學部考古學研究報告第十三冊として、昭和八年より同九年度に亙る事業の成果に係るものであるが、更に濱田博士の序言に見るが如く、故セイス博士を永遠に記念せむとする目的をも兼ねてゐる。故に卷頭には故博士の略傳並に著者の追憶が記され、卷末にはその肖像を揭げ、先づ讀者をしてセイス博士の風貌學德に接せしめてゐるのは本書に於ける第一の特色であらう。

次に內容は標題の如く、近年頓に注目せられ來つた。慶州を中心とする新羅一統時代の遺瓦に就いて、聚成並に研究を行つたもので、全體を九項に分ち、先づ古瓦の蒐集と研究の歷史より起り、次で朝鮮に於ける瓦甎使用の起源沿革に及び、第三項に慶州附近の瓦甎出土遺跡を記し、第四項に右の瓦甎類の內容を分類して圓瓦・平瓦及び甎並に其他とし、第五項以下七項迄右三種の實際に就きて詳述し、第八項には遺瓦の圖紋と出土遺跡との關係を記述し、第九項に新羅古瓦の特質と題して著者の考察を揭げ以て本書の結論に充てゝ居る。なほ卷末には新羅古瓦聚成圖地名索引を附する。四六倍判本文七二頁卷末索引四頁、圖版七六圖、挿圖四四圖、卷首に四天王寺地出土着釉持國天像壁甎の着色圖版を載せ、又卷末には前例に從ひ英文抄譯一五頁が添へられてゐる。

京都大學に於ける考古學研究報告が、年を逐うて益〻その學的價値を高め、本邦考古學界に於ける一水準を示しつゝあることは贅言を要しない。殊に本業は濱田博士と梅原助教授との共著であるから、全ての方面に間隙を容るゝ點なく、典型的な報告書たることを斷言し得られるであらう。例言によれば、第一

られてゐる各型式名を總括し、氏の考案によつて四群十一類としてゐる。從來の分類に比すると、第一群が大體所謂古式土器に、第二群が厚手式土器、第三群が薄手式、第四群が安行式・龜ヶ岡式に相當する。如上の分類は目下錯雜提稱せられてゐる縄紋式土器の型式に一つの統制を附與する意味に於いて面白い見方であり、又一面型式分類の了解に苦しむ人々にとつては誠に便利なものといふべきであつて、著者の勞を多としなければならないであらう。次に右の型式分類に基づく土器型式の分布を記し、更に伴出遺物たる石器類を逐一記載し、最後に總括して遺物の種類と量及びその文化期區分を考察し、大體縄文式石器時代は三ツ又は四ツの大文化期に分たれるとし、更に土器型式より見た遺跡の時代性並に土器型式と諸遺物との相關を圖示してゐる。次に先史時代以前の遺跡を述べ、先づ聚落と住居阯を記し竪穴敷石住居阯・洞窟を擧げ、次で地貌による遺跡の分類及び遺跡の平面分布と垂直分布とを記して本項を終へてゐる。先史時代後期は、從來彌生式土器並に之に伴ふ遺物遺跡を一括したものであり、記述の方法も全く前者と同樣で、先づ彌生式土器の型式分類を行つて、第一類から第二第三類並に素紋土器類とし、縄文式土器と比較對照を試み、以下伴出物並に遺跡の記述は全く前期と同樣である。次に原史時代に入つても前者と同樣、遺物から遺跡へと說かれてゐるが、本項は些か前期の敍述に比して簡單なる感を受けたのである。最後に考察と題し北佐久郡の地理と人文より詳述し、次いで上述の遺物遺跡を編年順に基き、これを文化現象に充てり、第一群縄文式土器の時期を文化の黎明とし、第二群を文化の洗練、第三群を文化の遲滯期と認め、次に彌生式土器の時期を三期に分ち、各々文化の接觸・文化の交替、文化の弛緩期と觀じ、原史時代に入つて鐵器出現の時期を文化の革命となし、最後にその末期奈良期前後を以て古代文化の終了期としてゐる。

以上の敍述は、全體を通じ從來の考古學的研究と異なり、頗る新鮮味に富み且つ氏獨特の卓說をも交へて、讀者を裨益すること大なるものがあらうと思ふ。例へば前述の如く縄文式土器の型式分類に於ける巧妙にして適當なる方法や、彌生式土器に伴ふ石器並に土偶に對する考察、原史時代に於ける祭祀場趾の記事等はその一例である。加ふるに社會學經濟學的見地から、當時の生活樣式に對して解釋を施し、或は近時一部に問題視せられてゐる彌生式土器と農業問題に觸れ、又は古墳と氏族制度とを結び付くる等、隨所に新らしい考察を挿入して一段の精彩を添へてゐる。然しながら吾人は一面に於いて必ずしも贊意を表し得ぬ二三の事例にも遭遇するのである。即ち彌生式土器の

文　獻

上代文化　國學院大學上代文化研究會發行

同誌は旣に、發刊當時から、本誌との交換雜誌になつて居り、その名のみならず、内容迄も、年報にはちやんと載つて居るから、大方の皆樣は、同誌の性質その他については、充分御存知の事で、今更申し上げる迄もないが、同誌は上代文化一般はおろか、國の內外を問はず、時の上下を問はず、文化史的乃至考古學的方面の有益なる諸家の論說を每號滿載し、且投稿を希望してゐる。この方面に關心を有するものにとつて、輕々に見逃がし得ざるものではあるが、從來寄贈雜誌となつてゐる爲、入手出來ずに居られた向きもあらうが、實は實費（七十錢）を以て、研究者の爲に、分冊申込にも應じてゐるとの事であるから念の爲これも書き添へて置く。（土岐）

北佐久郡の考古學的調査　八幡一郎著

本書は八幡氏最近の勞作であり、又昭和九年考古學界掉尾の一收穫である。著書は先年「南佐久郡の考古學的調査」を執筆せられたが、本書はその姉妹篇であつて、標題の示す如く長野縣北佐久郡內に於ける考古學的調査の結果を發表したものではあるが、そこには多年著者の有し來つた蘊蓄を氏の持論の一たる考古學の地域的研究に適用せられたもので、一面北佐久郡を背景とする著者の考古學が組立てられてゐるとも言ひ得られるのである。

内容は四六倍判本文二一七頁、挿圖一〇三、圖版四三、地圖三葉、卷末に北佐久郡遺物發見地名表一一頁を添附する。更にその詳細を見ると、先づ全體を五項に分ち、第一に序說、第二に先史時代前期の遺物及び遺跡を記し、第三に先史時代後期の遺物遺跡に及び、第四に原史時代の遺物遺跡を說き、最後に如上を總括して考察を施し結論に充てゝゐる。全體を通じて窺はれることは、先史時代前期即ち繩紋式土器關係遺物遺跡に就いて最も著者の手腕を示し、且つ他に優れた點を認められる樣である。即ち氏は先づ繩紋式土器の型式分類を試み、目下提唱せ

ものである。全長二三、三糎、最大幅五・八糎、斷面は扁平であつて、最も厚い所で二・二糎ある。石質は不明であるが、粘板岩の如く石理は細かく、色は赤銹色を呈し、全體よく研磨されてゐる。先端は圓みを帶び、幅が廣く、扁平であるが、柄部に至るに從ひ次第に頸れ、斷面はやゝ丸みを帶べる楕圓形となつてゐる。その先に、柄頭を有するが何らの裝飾的彫刻も附されてゐない。全長の上半部に於ては、背部と刄部が作られ、刄は磨製石斧に見る如き、やゝ尖い鈴刄を露してゐる。尚、伴出土器は不明であるが、同地發見の石鏃、石匙、磨石斧、環石、石錘が同圖書館に所藏されて居た。

臺灣紅頭嶼イモロルの打製石斧

金子富雄

昭和九年九月紅頭嶼に渡り見學を行つた際イモロルの蕃社で、圖示せる打製石斧を得た。ヤミ族は打製のものをチチブチブ・ノ・イナーボ、磨製をウマと呼んでゐる。ヤミ族は此れ等の遺物を祖先が遺した物として、山野で發見すれば大切に蕃舍に保存する由である。

打製石斧は附近の海岸に散在する輝石安山岩の圓石を以て製作せられてゐる。即ち島田髷、短冊形の二種であつて、一面は自然石面が其の儘表はれゐる。大きさも十三糎刄幅七—九糎あり、本地方で從來發見せられたものと變りはない。此に僅少な資料ではあるが御參考にもと報告した次第である。

1/2

紅頭嶼イモロルの石斧

圖五

て置く。

—質比較的硬く鼠色を呈し製作精巧。特にその施設に興味を覺える。皆野町小林擴英氏所藏。

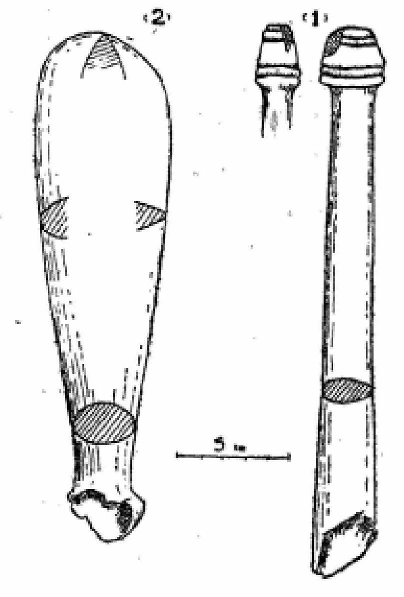
本遺跡に就いては既に大場磐雄氏に依り中央史壇第十二卷第十一號「考古學上より觀たる秩父(中)」に於て述べられ特に注意せられて居る。

本遺跡よりは土器に於て繩紋式彌生式祝部其他興味深い土製品石製品の出土、繩紋式土器の窯址と稱せられる爐址の發見等報告すべき資料は多々あるが何れ機を見て述べ度いと思ふ。唯此處に特記すべきことは所謂奥州式の存在でありそれは荒川上流に於ける繩紋式最高文化を示すものである。此の綜合遺跡に就いては將來大いに注目すべきであらう。—(三四・十一・十七)

羽前國庄內地方出土石劍

大給　尹

茲に圖示せる石劍は、何れも、山形縣鶴岡市々立圖書館の所藏品であるが、曾て昭和六年の夏、同地に滯在せる際、同館の



羽前國庄內地方出土石劍

遠藤倚吉氏の御好意によつて、瞥見し得たものである。

(1)　羽前國西田川郡田川村田川、小學校附近より出土せるものである。現品は、全長二三・八糎、最大幅三・〇糎、斷面は扁平であるが、刃と背を有し、最も厚い所で一・〇糎あるが、ほゞ全長の中央と覺しき所で折れてゐるので、長さ及び先端の形式は知る事が出來ない、刀身は眞直で反は認められない。頭部には、二線づゝ二條の線彫を繞らせる簡單な裝飾が施されてゐる。石材は黑色の粘板岩を用ひ、全體が良く研磨されてゐるものである。

(2)　羽前國東田川郡泉村今野より出土せるものである。全體が三個に割れ、頭部は半ば破損してゐるが、殆んど復原しうる

れたものである。共に上縁は全く無紋で、外側に略々厚味を持たして、廣がりを見せてゐるものである。又圖版第二の勝坂式土器の口縁部は口徑四十二糎もあり、頗る大形土器に屬するものである。豪放な隆起曲線と圓形刺突紋によつて裝飾せられてゐる燒成頗る良く厚手である。



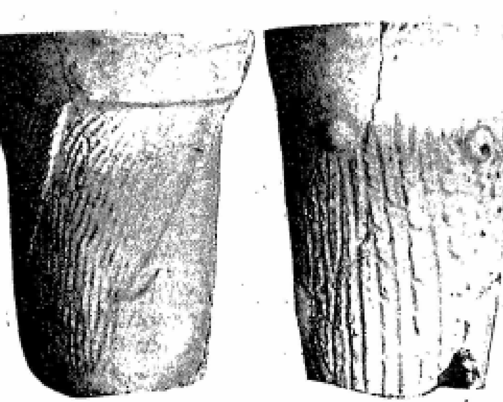


Fig. 4. 東山竪穴出土の勝坂式土器

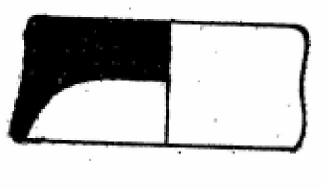
彌生式土器片も亦本遺蹟の表土層の黑土中から若干發見せられた。然し此の種の土器は私が採集に着手する以前出土したもので、明確な出土地點は不明である。土工の話によると第一回×點附近の由であるけれども、私が實査した節は盡く繩紋土器片に限られて此種の土器は發見しなかつたのである。

石器は頗る多かつた。恐らく私が採集したものは、二百個以上であつたらう。此の中、磨製刃部一ケ他は打製石斧が最も多く、其の型は短冊型のものが殆んであつた。然し此等の石器は、表土層及び表面採集のものが多く、特別に竪穴住居跡と明確な出土狀態の判明したものは少なかつた。

埼玉縣皆野町新井出土の土製耳飾

齋藤房太郎

圖示する土製品は埼玉縣秩父郡皆野町字新井出土の臼形耳飾にして秩父地方に數少き土製耳飾の一資料として此處に報告し



埼玉縣皆野町新井出土の土製耳飾

蹟の數多くの竪穴群の一部を止めたに過ぎない事は 未だ遺憾であつた。

測定の出來た竪穴は第一圖に示した六地點のもので、竪穴數は凡そ十三個であるが、其後にも工事の進渉に伴ひ多數の竪穴が單獨に或は二三個群をなして發見せられたのであつた。

竪穴は地點によつて、一定しないけれども、地表下凡そ三十糎乃至一米内外の深さで達するロームに設けられてをり、そうして又ロームを約一米内外の深さに堀開して竪穴を構築したものが多い。

竪穴の平面的な觀察は、工事の都合上充分な調査は出來なかつたけれども、圓型のものが多い樣に思はれた。然し立體的な觀察は、比較的多く出來た。それによると、本遺蹟の竪穴は一二の例外を除く外は大體一樣の構造であるらしい。卽ち竪穴は比較的淺く、廣いもので、竪穴壁が大きく上方に開いたものが多かつた。又竪穴内部の構造として、排水溝、或は柱穴等を伴ふものは、なかつた樣であつた。僅に石を以つて圍んだ爐跡のあるもの一個(第三圖)、又特別の構造のない爐跡を有するもの二三を觀察したに過ぎない。構造の略々異なつたものと思はれるものは、第二圖A竪穴の左壁に表はれたもので、二段の階段狀をなした點、又第二圖D型穴の樣式で、その平面の想像圖の如く、中央に凸起部の有るもので頗る樣式を異にして居た。

本遺蹟の竪穴は、(1)單獨のもの。(2)二個を以て構成するもの、(3)三個を以て構成するもの、以上の三種の設置樣式に分けられる。そうして各種の竪穴は土工作業の進行に伴つて、交々現出したもので、竪穴間の距離は一定の間隔を置いて構築せられた樣子であつて、一米内外を隔つてゐた。

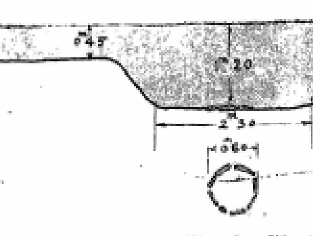
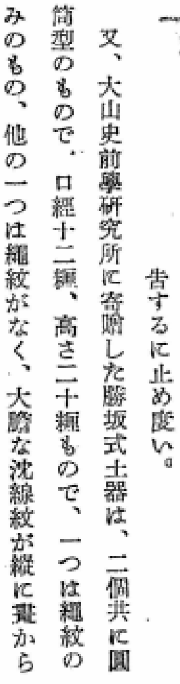
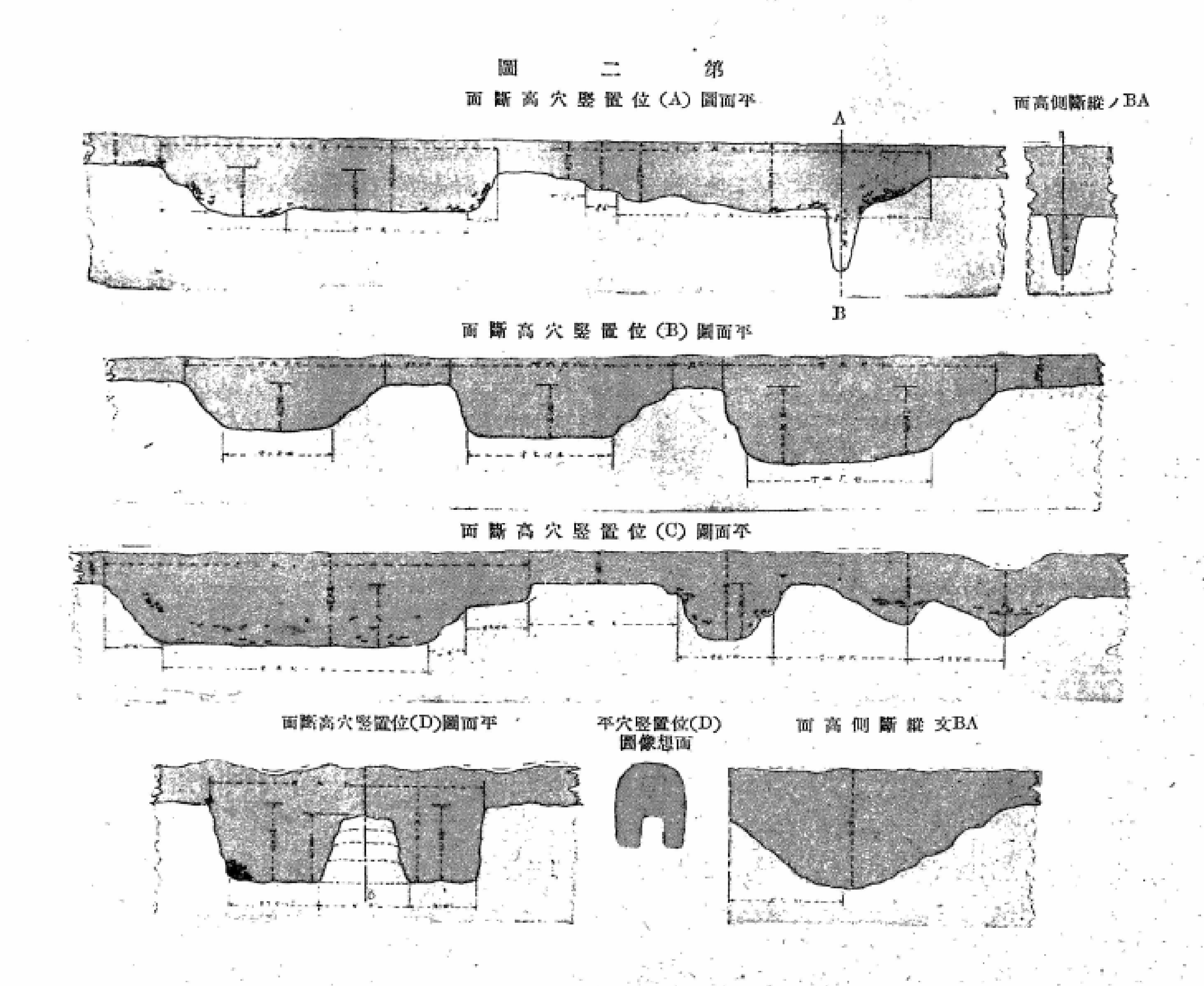



Fig. 3. 竪穴斷面圖

竪穴及び其附近より發見した遺物は頗る多い。その主なるものは、繩紋式土器、土偶、打製石斧、磨製石斧、石棒、石鏃、凹石、砥石、及び彌生式土器等である。

此等の遺物の大部は國學院大學並に大山史前學研究所に寄贈したから各々御發表のある筈だから細部に就いては省略することゝして、その大要を御報告するに止め度い。

又、大山史前學研究所に寄贈した勝坂式土器は、二個共に圓筒型のもので、口經十二糎、高さ二十糎もので、一つは繩紋のみのもの、他の一つは繩紋がなく、大膽な沈線紋が縱に畫から


第二圖
平面圖(A)位置竪穴高斷面
BAノ縱斷側高面
A
B
平面圖(B)位置竪穴高斷面
平面圖(C)位置竪穴高斷面
平面圖(D)位置竪穴高斷面
(D)位置竪穴平
面想像圖
BA文縱斷側高面

資　料

東京市上目黑東山石器時代竪穴調査報告概要

下村作治郎

大正十五年二月、東京市目黒區東山に於ける區劃整理作業に依り、多數の石器時代竪穴住居趾が發見せられた事は、當時の新聞紙上或は斯學間に可成りに注目せられたものであつた。

竪穴住居遺跡は、駒澤練兵場北方斜面の臺地上にあつて目黒川に面した所である。當時、區劃整理の爲、大規模な土工作業が行はれ、數條の道路が新設せられ、爲に竪穴住居趾並に多數の土器石器が發見せられたのであつた。

私は當時土工仲間に混入して、土壌運搬作業を手傳ひながら、遺物を採集し、工事の進捗に伴ひ顯滅する竪穴の觀察に努め、夕刻作業の終るのを待つて、現場に掘殘された竪穴の測定を行つたのであつた。

Fig. 1.

現地の掘鑿作業の方法は、先づ採掘する土壌の深さの最下部を水平に一米ばかり掘り進み、地表面から鐵棒を打込んで龜裂を作り、約四立方米の量の土を一擧に崩落させる方法であるから、學術的な調査は到底行ふ事が出來ず、辛うじて圖示した竪穴斷面圖を作成出來た位のものであつて、本遺

推測等することはやゝ輕卒であらうと思はれる。しかし大體に於て當時に二種以上の米が地域を異にして耕作されて居つたのではなからうかと言ふことは推測を許されて差支へなからうと思はれる。

本文は本誌編輯の都合上急に徴取されたので言葉の足りないところが多からうと思はれる。惡しからず御了恕をおねがひ申上げ度い。

各大さを異にする籾跡のある大和及び三河發見の土器

であるが、今までの記載中、特に意識して省略して來たこの籾の大さについてやゝ興味深く、又重要な事實かと想はれる事柄が存在するからこれを終に書き添へて本文の結びとし度いと考へる。

それは、この籾跟の雄型を撮ってそれを同一面に配列した模型標本を作った折に氣付いたのであるが、大和と、三河とではその籾の大さが著しく異る事實である。それを表記すれば上の如くなる。

一、大和例（單位厘）

遺蹟	番號	竪	横
新澤	1	二二・〇	一二・五
	2	一七・五	一〇・〇
	3	二〇・〇	一一・〇
三輪	4	二一・〇	一二・五
中曾司		二三・五	一四・〇
		二〇・〇	一一・〇
平均比		一二三	七二

二、三河例（單位厘）

遺蹟	番號	竪	横
稻荷山	5	三〇・〇	一二・〇
	6	二五・〇	一〇・〇
未詳		二五・〇	一〇・〇
平均比		五	二

上表に示すところによれば、大和の稻は平均竪二〇・五厘、横一一・八厘を有し、三河の物は平均竪二六・七厘、横一〇・七厘を有することになり、その竪横の平均比例は大和は 123：72 三河は 5：2 となる、而してこの差を了解し易く表記すれば、

$$\frac{72}{132}:\frac{2}{5} \rightarrow \frac{246}{615}:\frac{360}{615}$$

の如くなり、三河の物は大和のそれに比し著しく細長き種類であることを知るのである。その方面の專門家によれば野生の稻はほとんどカラスムギの如く細長き籾を有する由であるが、この意味に於ては三河の例がそれに近い。かゝる事實は種々興味深い事實を吾人に暗示する樣であるが、資料の少い今日、及びその資料がいづれも粘土に印して一度火に燒かれたものであることを思へば、直ちにこの事實のみを以て文化史的な

いと思つてゐる。5に示した資料は徑七・五糎位のほとんど平底に近い上げ底のもの丶底部であつて、坩形であるとすればや丶大形の物であらうと推想されるものである。この底面の外周に接して籾跟は明瞭に深く印せられてゐる。6の資料は大形甕の如きもの丶一部であつて、この破片のみではあまりカーヴを見ることが出來ない。厚さは七粍位であるがや丶不定である。籾跟はその上にや丶淺く、しかし明瞭に印せられてゐる。

三河國寶飯郡小坂井村附近(詳細不明)例

これは自分等が學校へ集めたものではなく寄贈を受けた資料であつて、町村名は不詳である。高さ二十八糎、口徑十二・五糎、頸高五糎を算し寫眞の如き完好な土器である。これは全體が灰黄色を呈し、極めて緊密な燒成であつて、表面は平滑に箆で磨かれ光澤を帶びてゐる。製法は輪積み法によるものであつて、底部は凡底であるが、この部分のみ厚さが厚い、全體に厚手で重厚な感がする。この土器の丁度底部と下腹部の境邊に土器に剝脱したところがあつて、その面に明瞭に一箇の籾が印せられてゐる。おそらくこの剝脱はこれが粘土中に混じたまゝ燒成されたためによるものであらうと考へられる。この土器はこの地方の彌生式土器としては極く精巧な方であつて、縄紋があり赤紅色等を呈し、頸緊り縁が外に反轉するもの等とはその製法を異にし、又、その年代も異なるのではないかと考へられる。むしろ、所謂土師器に近い樣な感である。(この土器についてはかつて考古學資料集第一集中に自分が略說し、又先の「日本原始農業」にも略說されてゐる。

右に報告したところは、先にも述べた如く大和及び三河發見の稲に關する資料中、特に自分の手許に在るもののみについての記載であつた。自分は右のこの簡單な報告のみで、何事かを結論しやうとするのではないの

三河國寶飯郡小坂井村平井稻荷山

本遺蹟については自分は直接智識を有してゐない。しかし貝塚として古來有名であつて、繩紋式土器、土偶、石器(石鏃、石棒、石斧、四頭石斧)、骨角器、曲玉、人骨が出土したことが報告せられてゐる。(坪井正五郎氏「三河國石器時代遺蹟發見の珍物」人誌一五ノ四二一、清野謙次氏「三河國寶飯郡小坂井村大字平井字稻荷山貝塚訪問記事及三河國の石器時代遺蹟」日本原人の研究一〇六頁)本遺蹟は清野博士によれば「洪積層の低い臺地續きであり、貝塚の地盤は平坦で極めて僅かに南に傾斜してゐる」ところであつて、特にその土器は「薄手關東貝塚土器の系統を引いたものもあるが、津雲貝塚深層土器に非常に類似してゐる」のである。玆に掲載した二箇の資料は丁度双方とも同質の物であつて、共に灰黑色、粗にして硅砂粒を多く含み堅緻であつて、比較的薄手である。その表面にはこの附近のものに多いところの、何か粗末な刷毛か、藁様の物で附けたところの同一方向に走るところの條跟が一面に附着してゐる。この土器は之を繩紋式に入れやうとする人と、彌生式に入れやうとする人とがある位、やゝ中間的な性

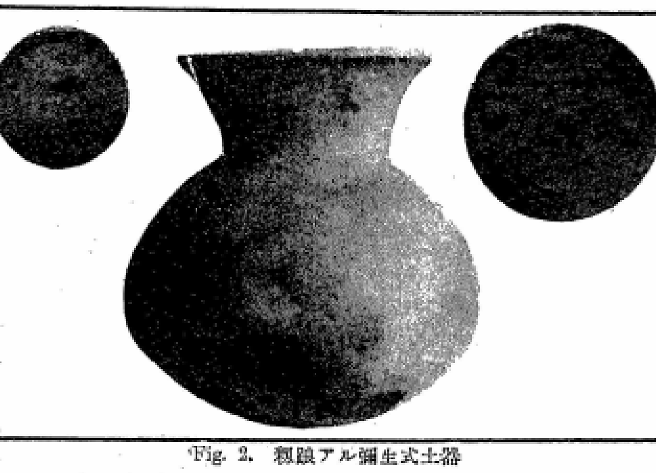


Fig. 2.　粗跟アル彌生式土器

質をも帶びてゐるが、所謂繩紋式土器の一ヴアラエテイと見るよりも彌生式土器の一フエイズと自分は考へ度

大和國磯城郡三輪町金屋天理教會附近例

本遺蹟は今日ほとんど全滅した遺蹟であるが、幸ひその主な資料は國學院大學に集め、又自分は相當長年月に汎つて之を調査し、諸所にその都度斷片的な報告を行つたが、近年之を總括してその概要を發表しておいた。(「大和考古學」二ノ四、三ノ五、大和石器時代研究、拙稿)要するに本遺蹟は一方に山を背負ひ一方は河岸の沖積地に臨む丘陵上の遺蹟であつて、發達した彌生式土器に混じ、繩紋式土器も出で、又、新らしくは祝部土器や鐵鉾をも出す連續した包含層を有する遺蹟である。自分は之を大和平野群臺地性遺蹟としてそのテピカルなものの例證としてゐる。本遺蹟から出土した資料は實測圖の千に示したものであつて、丁度先の3の物と同様所謂籠目と稱せられてゐるところの壓跟を有し、中央がやゝ突出る徑四・三糎程の底部である。色は灰紅褐色を呈し、硅砂中位に含有し、吸水性大であつてかつ堅密である。籾跟は丁度この突出する底面の中央に印せられて明瞭である。

大和國高市郡眞菅村中曾司例

これはすでに自分が詳細發表したことがあるから只今はたゞその寫眞だけを示すことにする。これには明瞭な籾跟が二個と切藁が印せられてゐる。(考古學雜誌十六卷七九四頁拙稿「大和雜報」參照)

其他

今日國學院大學の方に資料は存在しないが大和からは其他山邊郡二階堂村岩室から一例、吉野郡宮瀧(傳聞)磯城郡川東村唐古から一例及び先の中曾司、新澤から各々一例別に出土してゐる。從つて六遺蹟、約十箇以上の數に及んだことになる。

一部破損するが最大約五糎程を有し、やゝ楕圓に近い不正圓の底部で、やゝ中央に至る程高くなり凡底に近い傾向を呈するが、顯著ではない。色は褐紅色を呈し、水中に於て酸化鐵の浸透に會つて極く堅くなつてゐる。底部の厚さは二糎を有するからこの形成の物としては重厚なものである。本資料で最も注意すべきことは、この底部に附着する下腹部に於て一種の籠目樣紋が僅かに印せられてゐる點である。これは籠樣の實體に内面より粘土を貼り着けて整形した跟蹟であると一般に說明されて來、又かゝる說を實證するが如き資料も存在してゐるが、しかしかゝる物に於ては、往々關東繩紋式土器等にも見るが如き底面にまでも籠目を印した物は存在しないし、又、籠目と言つても繩紋式土器のそれとは全然組織法を異にしてゐる。この種の土器が假りに果して籠に粘土を貼り着けて作つたものであつたにしても少くともその底部だけは別の製作に成つたものと考へられる。この底部に籾が附着した原因は或ひはそのために因るのであるかも知れない。この種の土器は比較的腹部の張つた高さの高くない坩、又は廣口鉢等に多いが、その新古等は今日のところ全く不明であるが、その製作法が原始的であることが必ずしもこの種の土器の年代を遡らせる根據の第一のものではないから危險な推想は避けなければならないが、しかし、もし自分の經驗から得た想像を述べることが許されるならば、新らしい頃にもある樣に思はれると言ひ度い——古い樣式を保つてゐることは勿論肯定し得るが——。要するに以上の樣な土器に見られる籾跟は他の物同樣やゝ外周に近く明瞭に深く印せられてゐる。之は要するに本遺蹟に於ては大體異つた樣式の土器各自に同樣籾跟を有して居ると言ふことが出來る樣に思はれる、勿論この資料は皆破片であるからそれの屬する樣式は自分の經驗に基く想像に過ぎないが、しかし右は自分の今日の知見を率直に表明したものであつて、あるひは將來の研究によつてそれは變はるかも知れないと考へられる。

に籾跟ありとして圖が掲載されてゐるが、自分は實物を見てゐないし、本書の寫眞ではやゝ明瞭を缺いてゐる）であつて、いづれも土器底部に存するものである。１は徑十五糎に及ぶ極大形の土器底部であつて、その厚さは約二糎、灰黄白色を呈し、質粗、硅砂粒の大なるものを含み、底面に沿つて層狀に剝脫する性質を有して居つて製作法の一部を暗示してゐる、現在丁度底部のみを殘して大體周圍は同じ高さに缺けてゐるが、この破損線は丁度本土器整形時の下腹部と底部の接合線に當つてゐるやうである。かゝる土質燒成、整形法を執りかく大形底部を有する土器は彌生式土器の中に於ては自分等の經驗を以てすれば、相當高さの高い、頸部は緊つて口緣の外方に反轉し、紋樣を多く有する一類（おそらくは無紋、刷毛目紋等のものよりは古いと推想され得るところの）に屬するものゝ如くである。この底部に籾跟はやゝ外緣に近く中心を外れて正確に印せられて居るものであつて、穀の合せ目に存する竪線も明かに見得られて籾であることは疑ふことが出來ない。２は徑六糎の底部であるが、すべてに薄手であつて底も先の物が平底であつたのに對してやゝ輕くほんの二粍位の上げ底になつてゐる。色は灰黄白色黑斑を有し、小形硅砂を有し又雲母をも混じ、比較的堅質である。かゝる特色を有する土器底部は吾人の經驗を以てすれば、無紋にしてやゝ小形薄手にして整ひ外面平滑な一種の土器（おそらくは１の物よりは新らしいかと推想され得るところの）に屬する樣考へ得られるのである。籾跟は先の例と同樣にやゝ外周に近く深く印せられてゐる。これも籾であることは疑ふことが出來ない。元來上げ底の土器は（轆轤臍の跟を除く）底部を下にして口緣部へ向つて整形して行く場合は少い樣自分等は經驗して來たが、この場合のこの輕い上げ底に籾がかく深く喰ひ込んだのは大體の整形後底を下にして立てられたか、又は仕上げの加工の場合にでも上から轉落して來たものが指か何かで喰ひ込ませられたであらうと想像する。３の資料は

大和國高市郡新澤村大字一字東常門例

この遺蹟についてはすでに幾多の文獻があり、殊に先年同地の熱心な研究家吉田宇太郎氏によつて、詳細な報告書が公にされたから（奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十冊）茲に自分が繰り返へして述べるまでもないところであるが、本遺蹟は要するに一方に低い丘陵を負つた低地性の遺蹟であり、多種多様な石器（打石鏃、打石鎗、石庖丁、磨石斧、石劍等が主）と共に良く成熟した器形の比較的大きい有紋の彌生式土器から、薄手無紋又は刷毛目のある器形の比較的小さい彌生式土器に至る多くの様式と種類の彌生式土器を出してゐるところのある意味に於て大和の或種の彌生式遺蹟相のテピカルな遺蹟と言ひ得るところである。此處からは別に籾殼自體の泥炭狀に遺存したものも出土してゐる。

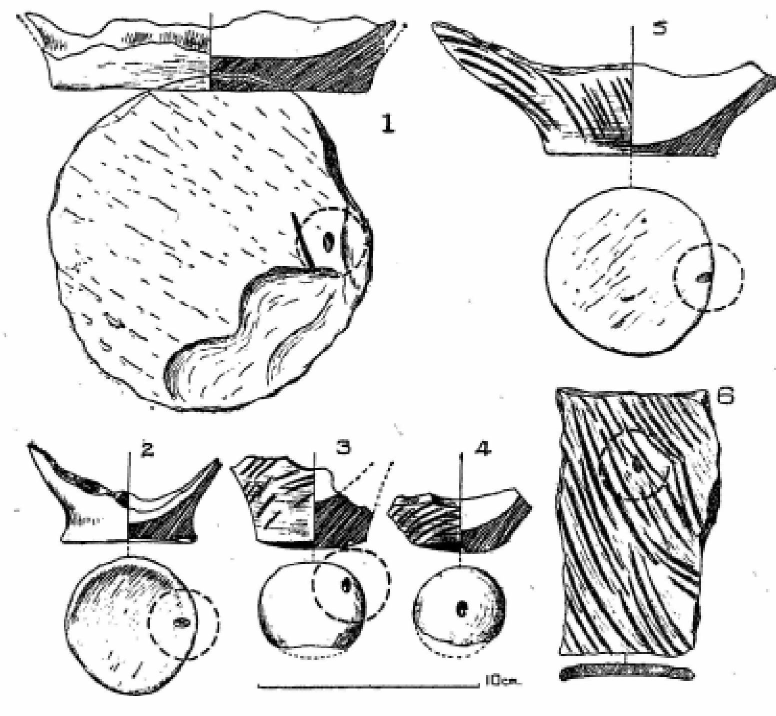


Fig. 1.

本遺蹟出土の例は實測圖に示すところの1—3の三例（「日本原始農業」にも一例口緣部近く

各大さを異にする籾跟のある大和及び三河發見の土器

樋口清之

史前遺蹟發見の土器に籾跟のあるものについては、かつて、陸前國宮城郡桝形圍貝塚の出土例を山内清男氏は報告せられ（大正十四年、同氏「石器時代にも稻あり」人類學雜誌四〇ノ一八一頁）、又自分も同樣の事實を報告して日本の古代農業への關心の一部を表はしておいたが（大正十五年、拙稿「大和雜報」考古學雜誌十六ノ七九四頁）、其後同樣の資料を機會ある毎に注意して集めることに努めた結果、自分の主宰する國學院大學考古學資料室に蒐集したもののみでも十指に近く及び、その一部は考古學資料集第一集に收めて發表したが、（昭和八年五月）後東京考古學會に於て森本六爾氏の手によつて「日本原始農業」が刊行せらるるに及んで（昭和八年十一月）この考古學資料集所收の圖版が轉載せられ簡單な解説が施こされた。自分の手許に現在あるこの種の資料には、近頃注意されてゐる所謂押型紋土器に於ける資料や、籾殻、米等に直接關するもの等も二三存在するが、それ等は現在他の事柄に關連して研究中のものであるから、今回はたゞ、大和と三河發見の同種資料を左に掲載解説して、右の如く斷片的に報導せられた事實を補訂して本誌に對する自分の責を塞ぎ度いと思ふ。我國原始農業の問題一般に關する自分の考說についてはいづれ別の機會に遠からざる將來に於て發表し度いと考へてゐる。

骨角器

骨角器は第三貝塚貝層中から鏃(有柄)銛を各一個づゝと第四貝塚の北端の貝層中から銛を一個得た。(第九圖)

貝器

第三貝塚貝層中から山田氏が貝輪一個(縦七・六糎横七・八糎厚さ五粍中心を外れて上に近く一糎の直徑の不正圓を穿つてある。貝は牡蠣である。)を發掘された。尚貝匙様の牡蠣製のものを第三貝塚で一個、第四貝塚で四個の出土を見た。

石器

石器は殆んどなく第三貝塚貝層中から山田氏が打石斧(分銅型)一個を發掘したのみで第四貝塚には一個も無く玉石が二個存してゐた。表面採集に依り石皿片石斧石錘等を得たるも此處では省略する。

V

以上で本貝塚の大體の概報を終るが天候その他種々なる事情の爲充分な發掘が出來ず從つて滿足な成果を擧げ得られなかつた事を甚だ遺憾とする。他は殘部を發掘研究の上詳述する事として今回は概報として此處に筆を擱く事にする。尚本發掘は横濱考古學研究會第二回發掘會として行つたものである事を附記する。

様のものがあり此の左右の壓痕の後上方から後頭部にかけて弧狀の沈紋があり、頭頂は破損に依り不明であるが何らかの裝飾があつた如く思はれる。色は全體に黄褐色で胴の内側及び頭部の内部は燒成度が極く低く從つて全體的に非常に脆く殊に頭の内部は燒成惡くその斷面には纖維様の物や小砂等が同心圓的に排列してゐるのを見る。

本土偶はその顔面表現より見る場合には所謂寫實的土偶にして、その形態は通常のものと甚だ異つてゐる。今その顔面表現の類例として附近に求むるならば、同丘陵本遺跡の南方に位する根岸坂の臺貝塚から私が昭和三年三月發掘した顔面把手を擧げ得る。該把手に就ては八幡一郎氏が既に人類學雜誌第四十五卷第五號（昭和五年五月）に御報告して居られるから此處では省略する。尚同氏は之を堀之内式前後のものと云はれて居られる様であるが、私は加曾利E式と見度い。

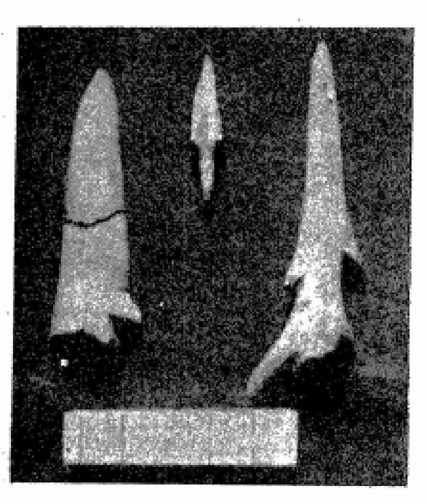


Fig. 9. 稲荷山貝塚出土骨

その他には、大正大學の關口齊氏により横濱市鶴見區下末吉、三池貝塚から發掘されたものがある。氏は顔面把手と見て居られるが、その手法等の感じ及び頸部の破損の痕跡が、本土偶と近似して居り他の遺物を比較しても多々共通する處ある様に思はれるので恐らくは本土偶と同形式のものに附隨してゐたものではないかと思はれる。

土錘

土錘は土器片を利用せる板狀横型のみで兩貝塚中から各四個合計八個を出土してゐる。



Fig. 7.　第二群土器

らは小破片のみであつたが第四貝塚からは第八圖—口徑十五・五糎高さ十六・五糎底徑十糎—第八圖—口徑三十三糎高さ(現在高)二十七糎—の如きものゝ出土を見た。

土偶

此の土偶は第三圖中(第四貝塚)⊕部の貝層下部にあり、凡原形のまゝ頭部を東に向けて伏した狀態に存在してゐたものにして、接合して初めてその形態を知つたのである。(圖版一)從つて出土狀態に就ては明らかになし得ない。身長約二十一糎、最長巾(第四孔部)で約八糎、胴の形はほゞ圓筒形で、それに長軸に平行に相直角に近く交叉する二對の有孔列がありその數は頸部から底部までに六個で各孔の間を二本の弧で縱に連結してある。但し正面の第一孔と第二孔との間に左右に對象的に乳房があるため、この部にのみ特殊な弧線を施して居る。胴は厚さ約十三粍で中空底部にはほゞ中央に直徑十八粍程の孔がある。上端には球形の頭を載せ、それに帶圓菱形に近い扁平な顏面を付し隆起せる眉と鼻(連續してゐる)及び目、口の沈刻を施して居る。此の顏面と長軸とのなす角度は約二十三度である。而して頭部の左右及び後部に頸に近く壓痕

Fig. 8.　第二群土器

より左貝層端に至る間の比較的下部及灰層上に近く、右側貝層下部及貝層下黒土層中に存在する。(第五圖、第六圖1)

第二群

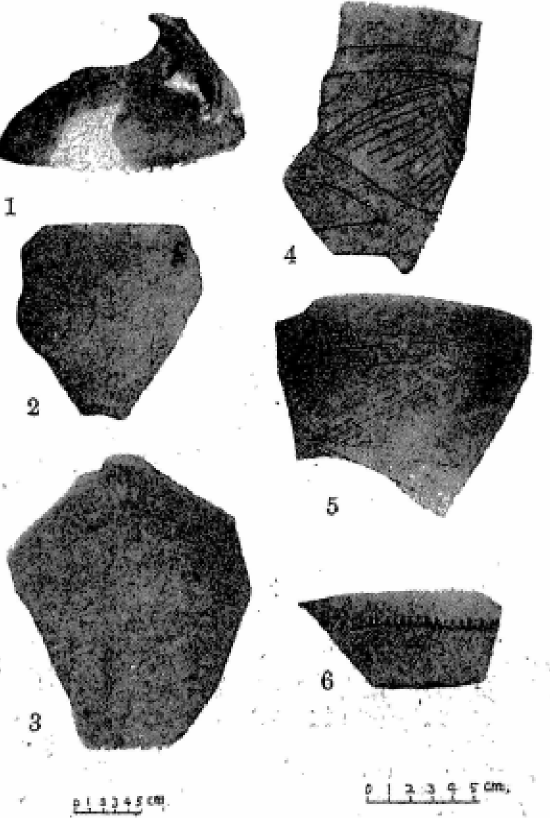


Fig. 6. 稲荷山貝塚第二群土器

或人々に依りその一部は堀之内式に屬するものとせられ又或一部は加曾利B式に屬するものと爲されるものにして或部分に於ては安行式の手法さへ認められる。形態は深鉢形を基本形態とし若干變化は認められるが口邊部近くに於て特に外曲する樣に思はれる。厚度薄手、質硬角にして光澤を帶び凡黑褐色を呈す。口唇は内部に於て急折して一條の凹痕を形成し口邊外部口唇に近く8狀小張付紋及小刻ある小浮紋を有するもの二三あれども本遺跡に於ては兩存するもの極めて少し。紋樣は概ね幾何學的沈紋を施し繩蓆紋を以て充塡する。(第六圖2—6、第七圖、第八圖)

第三貝塚に於ては第一貝層及覆土層中から第四貝塚にては貝層中概ね灰層の上部から出土した。第三貝塚か

人工遺物としては土器土偶土錘骨角器貝器石器等が存在しその中でも土器片が最も多く殆んど全部を占むると云つてよい程である。

土器

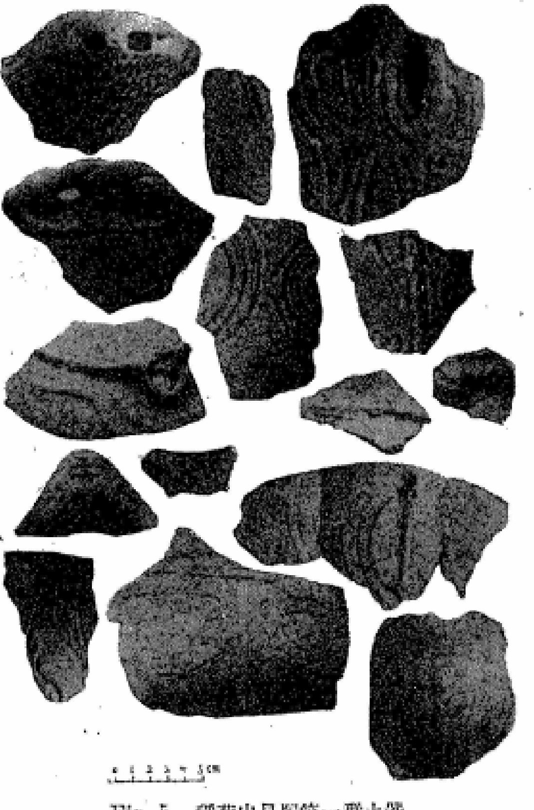


Fig. 5.　稻荷山貝塚第一群土器

所謂後期縄紋式土器に屬するものにして大體次の如く二つに大別する事が出來る。

第一群

本群は所謂堀之內式に該當するもの。或人々に依りては廣義の加曾利E式に屬すると思はるゝものをも包含する。形態は可成變化を認められるが普通該時期に見られる　鉢形狀のものを基礎として居たらしく若干注口土器―中谷氏A型が存在する。紋樣は概して曲線沈紋を主としそれを充塡區劃等補充する意味で縄蓆紋又小隆起紋が見られ把手は退化してつまみ、突起等として存在する。質比較的良く燒成度普通。

第三貝塚に於ては第三層中間黑土層中及第二貝層中に認められ第四貝塚に於ては第三圖⊗附近の灰層の下部

から左に行く程その厚さを増し、左側の終末では約二十糎の厚さを有して居り、此の部分では非常に多くの木炭が見られた。灰の色は概して白色に近く上下の貝層に何等の影響を見ない。

III

自然遺物

貝類

二枚貝　はまぐり、あさり、しほふきがひ、まてがひ、おほのがひ、さるばう、あかがひ、かき、はひがひ、おきしじみ

巻　貝　きしやご、れいし、うみにな、あかにし、ながにし、てんぐにし、つめたがひ、ばひ、へびがひ、まつばがひ等

獣骨

哺乳動物としては第四貝塚で何れも貝層下黒土層から犬の遺骨約一體分と鼠と思はれるそれを約一體分、鹿の下顎骨を一、その他長管骨關節頭齒牙等多數。

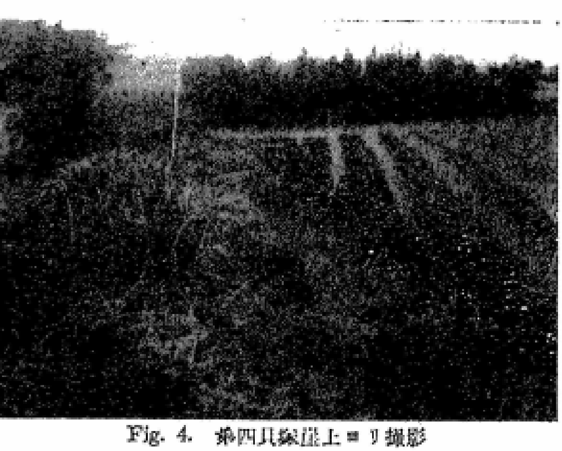


Fig. 4.　第四貝塚上ヨリ撮影

魚骨

魚類は相當多數量に存在してゐたが鯛の顎骨の他は何魚なるか不明である。

其他灰、木炭、自然石等

人工遺物



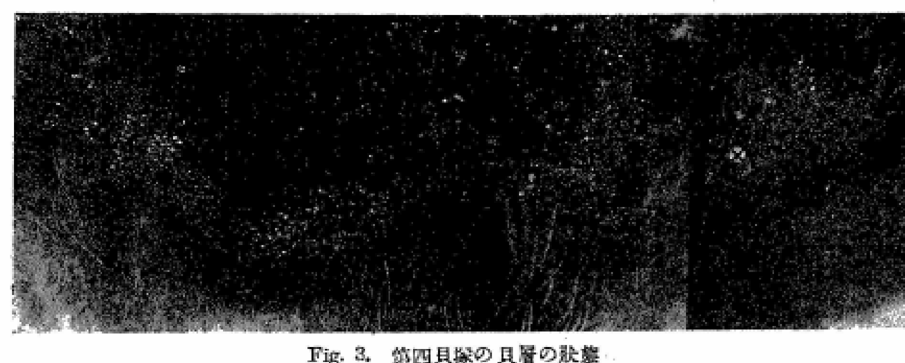


Fig. 3.　第四貝塚の貝層の狀態

には耕作時に入りしか第二貝層に包含されると同樣の土器片の混入を見る。これ等の土器片は第四貝塚のそれと同樣な土器でその量極めて少ない。その他の人工遺物としては骨鏃骨銛の他に二個の貝輪、石斧各一個づゝより發見し得ず自然遺物としては魚骨獸骨を少量採得した。

第三貝塚は約六平方米ばかりの南北に細長き貝塚であるが、第四貝塚はその約三倍の面積を持つてゐる。貝層の狀態は第三圖の樣で向つて右が北、左が南でほゞ中央を境に左右に山形の彎曲を持ち、倒W字形を呈してゐる。その位置から云ふと、左右の最高頂はほゞ同位で、左の貝層端が一番低位にある。貝類は蛤、あさり、しほふきがひを主とし、概して右側では、かきの混在が多く、巻貝は極く僅かであるに反して、左側では牡蠣は殆んどなく、キシャゴ等の巻貝が非常に多く、處に依り約三十糎四方厚さ十糎ばかりの間全くキシャゴで充塡された部分すら見られた。

地表からローム層までの層位は前記する樣に貝層下・土層の發掘不可能であつた爲に不明ではあるが大體二米位かと思はれる。發掘手法の關係から左右的の關係を見る事は出來なかつたが崖面に沿ふて貝層を追求しながら發掘を續けて行つたその結果斷面で見られる彎曲にほゞ一致して居る事を認めた。尙貝層中比較的下方に近く第三圖⊗のあたりから凡中央部までの間に灰層があり、右

二貝塚は既に畑地耕作の爲殆んど全滅の狀態で僅かに貝塚の存在を知り土器の小破片の散布するを見るに過ぎない程度である。從つてその範圍も亦不明である。此の貝塚は今回發掘した第三及び第四貝塚と文化的に見てほゞ同じ様に思はれる。（第一圖參照）

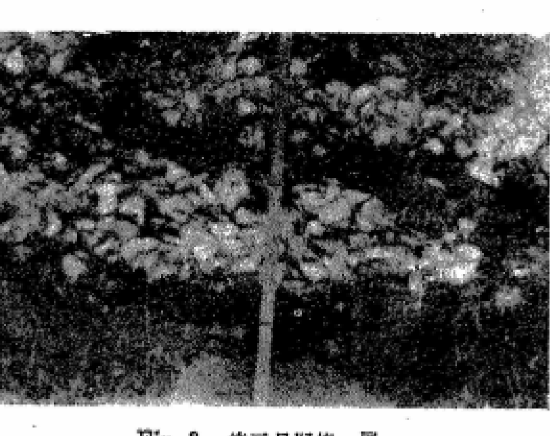


Fig. 2. 第三貝塚第一層

Ⅲ

發掘は本年九月九日、十日、十二日、十三日、十五日、十六日及び十一月十九日の七日間にわたつて行つた。

その經過に就ては、先づ第三貝塚に於ては不幸にしてローム層まで掘り下げる事は出來なかつた。現在の地表から第一貝層まで、卽ち覆土層は約三十糎で第一貝層に移行する。

第一貝層は二十―三十糎で大體上下の二層に分れてゐる。共に五―十五糎の厚さでその中間に五糎内外の貝殼を混じた土層がある。（第二圖參照物指の目盛は吋である。）第三層目は貝殼を含まない黑土層その厚さ約二十糎にして第二貝層に移行する。第一貝層は蛤を主とし第二貝層は蛤と牡蠣の破碎した貝殼を交へた混土貝層であつた。その厚さは二十糎内外と思はれるも確實の處は不明である。第一貝層の下部でその東南の貝層端と思はれる位置に土器がその破片を彎曲に沿ふて重ねて存在して居つた。之から北の方約二十糎第一貝層の最下部に五十糎四方位の廣さで約二糎―五糎位の厚さの灰層があつてその下部の黑土卽ち中間黑土層の最上部は紅赤色に變化して居た。覆土層中

尙ほこゝで甚だ殘念な事は貝塚隣地々主某氏の無理解から後記する第四貝塚はその發掘をほんの一部分で中止の餘儀なきに至つた事で、その結果不完全な試掘の程度に止つて終つた。

II

本貝塚は所謂根岸丘陵の最西北端に位し、當時は狭い地峡を以つて所謂蒔田(マイタ)臺地に連接して居たものゝ様である。而して此の地峡の北岸は即ち現大岡川の注流あつたと思はれる鐘形灣(假稱)と南は所謂岡村臺地と共に根岸灣(假稱)の海水に洗はれて居たものと考へられる。本貝塚よりは西方一粁で蒔田(マイタ)三殿臺(サンデンダイ)貝塚があり、南は九百米で古く明治年間にマンロー氏(?)等が發掘され、氏の著書「史前の日本」中に『ネギシ・サイト』として記載されてゐる根岸坂の臺貝塚に達する。東は同じ北岸の琴平社裏貝塚更にその東では舊増徳院裏貝塚及び現外人墓地内の貝塚等がある。

Fig. 1. 稻荷山貝塚位置　番號ハ貝塚ヲ示ス
I　第一貝塚　II　第二貝塚　III　第三貝塚
IV　第四貝塚　V　第五貝塚

本貝塚は大體大小五個の貝塚からなる一貝塚群にして、その中最も南に位する第一及第

神奈川縣橫濱市中區中村町稻荷山貝塚發掘調査概報

池田健夫
齋藤房太郎
佐藤陽之助

I

本貝塚は神奈川縣橫濱市中區中村町字稻荷山に存在し、最近まで本貝塚の西方に富士塚存在せし爲富士塚の俗稱がある。土地のもの丶話に依れば同塚はもと圓墳なりしが、崖くづれと共に崩潰し、今日ではわづかにその痕跡を約六十米標高の殆んど直角に近い角度を持つ斷崖上に止めてゐる許りである。現在では此の丘陵の西北端の崖の中腹に稻荷社あるを以て、又稻荷山の稱もある。

昭和五年八月十六日に私が初めてこ丶を訪づれた折には、一反歩ばかりある葱畑一面が白く見える程に貝殼が散布し、東側の崖面(下の畑との差約二米)には、ほんの一部分貝層を見る程度であつた。然るに本年六月二十一日齋藤兄と再訪の際には前記東側崖面に巾約四米半にわたり貝層が露出し、數個の土器片をその中に散見した。その後八月十九日佐藤氏と訪づれた際偶然にも當貝塚の地主山田氏令息が私の出身中學の後輩とわかりその緣故に依つて發掘の援助から現場の後整理に至るまでお世話になつた。此處に深く感謝する次第である。

「カキ」は一般に大形で、丁度我北海道鐵路のテンネル貝塚に見たと同大である。

(76) 獨り二枚貝に止まらず、後述する卷貝を合せ、我國出土の貝類數は、古く**丘淺次郎**博士、「日本貝塚の貝類」人類、十の二二二、(明治二十七年)によつて約六十餘種を檢出せられたが、其後**矢倉備田**氏、介類叢話、(大正十一年)により百餘種にまで增補せられたが、更に最近の發見を加へたら、より增大もしようが、未だ集成して居らない。然しながら、普通は一貝塚に20—30であり、少ないものが、10—15種、多いのが40種位で、これを越すものは、多く西南九州か琉球地方である。又大發掘を行へば、自然と種は增し得る。

(77) 關東地方で「キシヤゴ」層を有する貝塚の個々に就ては、何れ發表する。其一例として千葉縣古作貝塚の「キシヤゴ」層寫眞は拙著、石器時代遺跡概說、(昭和四年)第八圖に揭出してある。

(78) 北阿陸產貝塚に就ての報告も多い樣である。其一例は(39)參照。

(79) 犬の中石文化初現に就ては、拙稿、「史前生業」S. 6. u. Fig. 2. 參照。

(80) 犬肉食用に就ては、**奧村繁次郎**氏、「犬肉食用考」(人類、十五、一六七、S. 184–186)參照。

(81) 前揭、**大給**氏、S. 37–38. 參照。

(82) 前揭、**H. Reinerth**; 卷末附表參照。

(83) 前揭、**W. Koreisl**; によれば、家禽はミケーネ、エトルスカ等の文化に見らるゝらしい。

(84) 我國に於て食人問題に關する文獻は多いが、悉くは集成して居らない故、二三を示せば、**寺石正路**、「食人風有に就て述ぶ」人類、四の三四。**河上肇**博士、人類原始の生活。(明治四十五年)S. 69–81. **柴田常惠**氏、日本考古學、S. 127. 等多くがある。

(85) 前揭、**河上**博士には諸例があり、土俗にも及んで居る。

(86) 昆蟲類になると雌が生殖後、雄を喰ふこと等もあるが、こゝでは人類に近い哺乳類等について云ふて居り、これも平常的に於けることを指して居る。

(87) 史前人の鬪爭に就ては、前揭、拙稿、「原始人の鬪爭」參照。

(88) 歐洲石器時代に於ける食人跡と稱せらるゝ出土に就ては、前揭 **M. Hoernes**; **S.** 401–404. に諸例が揭出せられて居る。

(89) 天然環境の變化により史前民の生活を脅した一例に就ては、拙稿、「**舊石原人の盛衰**」科學知識、七の一、(昭和五年)參照。

(未完)

ては、未だ聞知して居らない。

（67） 史前魚類の大形であつたことは、其出土骨と現生產とを現實に對比すれば、よく解る。私共の研究所で採集した「ボラ」骨の如きも、岸上博士の復原によれば三尺程ある由である。

（68） 歐洲舊石器出土の魚類に就ては、拙著、「舊石存否」、S. 18-19. 參照。又中石魚類は、拙著、「マグレモージアン」S. 43. に「ダツ」の一例と、拙著、「デンマーク貝塚」。S. 30-32 五種程掲出し、未だ綜合してない。新石時代は、前掲、**H. Reinerth**; 卷末附表に淡水產九種が掲出せられて居る外、大切な鹹水產の方の文獻を未だ發見して居らない。

（69） 歐洲に於ける史前漁撈に對する認識不足に對しては申し度多くがある。然しこれ等の詳細は將來史前漁撈を研究するの日に、改めて充分愚見を開陳することゝして、こゝに述べない。もし必要があるなれば、拙著、「舊石存否」〔別註三〕「漁撈始原概說」に一部の愚見を開陳して居るし、漁撈始原關係文獻も掲出して置いたから、參照を勞しだい。

（70） **矢津直秀**博士、動物分類表、（大正九年）S. XVI.「現生動物の種數」による。

（71） 我國出土魚類名に就ては、拙稿、「我國石器時代の魚類」本誌、一の一、S. 97-98. に**岸上**博士鑑別の魚名三十三種を掲出してある。

（72） 魚類の研究の如きは、動もすると直接史前文化研究の對象でない様にも考へらるゝ。然しながら再考して見ると、史前人が捕獲した以上には、如何にして捕獲したかの問題が生れ、其習性に應じた捕獲法がなくては、捕獲も出來ないと考へるから、魚類の鑑別のみに止まらず、習性も研究すれば得る所もあると考へる。これが一例は、拙稿、「ブダイ」、本誌、第四の三・四號、S. 215-217. 參照。

（73） 中石貝塚の内で特に有名なのは、デンマークの貝塚であり、これに就ては、前掲拙稿、參照。其他の中新石貝塚に就ては、何れ發表もする考である。而して貝塚は、我國の外歐洲、アフリカ、南洋方面、露領沿海州、遼東半島、南北アメリカ大陸等に見らるゝ。

（74） 貝塚の終末、則ち何んが故に、貝塚を營むことを止めたかの問題に就ては、研究を要す可き重大案件の一つである。其の理由は天然現象にあり、最早や貝類の棲息を許さゞるか、或は不適當となつた樣な場合もある。デンマーク貝塚の終末の如きも、この一例であつて、**ボルシエ**に從へば、鹹度の漸昇は「カキ」の棲息に不適となつたとある。**W. Bölsche**; Von Sonnen und Sonnenstäubchen. 1931, S. 235. 參照。又「カキ」の鹹度に就ては、「多少淡水の混交する場所を好む」と、農林省水產局、水產增殖の現況、第一輯、S. 6. にある。前者と對照すべきである。

（75） デンマーク諸貝塚の如きは、其殆んどが「カキ」を主體とし、よく「カキ」塚（Oesterdynger）と呼ばるゝ程である。又同地貝塚產の

（58）前揭、**大給氏**、S. 37. に「コウヅル」、「トビ」、「カラス」、「キジ」？ の四例が揭出せられて居る。

（59）鳥類でも往々「ペンギン」の様なものは、手捕にしたり又は昆棒で撲殺したりすることもある由であるから、個々に就て見れば、夫夫の習性に應じた捕獲方法もあらうが、こゝでは白紙的に概述して居るに過ぎない。

（60）舊石文化に於ける鳥類三十三種は、拙著、「歐舊」。前編、S. 125-140. 參照。但しこの種數は、同書著作に當つて著者自身が集成したに過ぎず、其後二三の發見追補もあるが、こゝでは單なる概數として述べて居る。

（61）中石文化に於ける鳥類の一覽は、拙著、「マグレモージアン」S. 49-51. 參照。

（62）新石文化に於ける鳥類は、**Hans Reinerth**; Die Jüngere Steinzeit der Schweiz. 1926. 卷末一覽表による。其他の文化に就ては、未だ研究して居らない。

（63）北阿カプシアンに於ける、駝鳥卵の出土は、同地各所に見らるゝ。且つ卵殼に數様其他を試みたものもあり、其一例は拙著、「歐舊」。後編、S. 82. Fig. 88. にあり、單なる卵殼片は、當研究所にも所藏して居る。其文獻は同書、S. 86-88. 文獻第十二、參照。但しこれ以外の史前文化に於ける卵に關しては、記載せるものを未だ發見してない。史前經濟（Praehistorische Wirtschaft）の大家である、**Ed. Hahn** の如きも、其著、（（29）參照）にはなく、Reallexikon に同氏の記載も、ハルスタット時代の墳墓中にあるものを、最も簡單に觸れたに過ぎず、碩學**ヘルネス**すらに見當らない。只今までに見た唯一の文獻は次註にある。

（64）ハルスタット時代の倍葬品に關しては、**Wilhelm Koreisl**; „Speisebeigaben in Gräbern der Hallstattzeit Mitteleuropas." Mitt. d. Anthr. Ges. Wien. LXIV. Bd. IV. Y. 1934. S. 229-264. 參照。本文中には鳥卵（Vogeleier）S. 252-253. の記載はあるが、ハルスタット文化以前には遡らず、後述して居る如く、それ以降に下つて居る。

（65）歐洲舊石時代に於ける爬蟲類は、拙著、「舊石存否」S. 50. 註（72）に四例の出典を示してある外、未だ知らない。中石時代に於けるものは、拙著、「マグレモーゼアン」S. 48 に「イシガメ」？ の一例がある。新石文化に於て、杙上系に淡水産の「カメ」の一種（*Cistudo europaea*）は前揭、**H. Reinerth**; 卷末附表にあり、常陸余山貝塚に「アカウミガメ」（*Caretta olivacea*）？ の出土を、**岸上博士**、Prehis. Fish. S. 376. に報ぜられて居る。

（66）歐洲舊石時代に於ける兩棲類の出土は、拙著、「舊石存否」S. 50. 註（72）に出典を示して居る。中石文化に於ては、私自身未だ其出土例を見出して居らない。新石文化に於ては、歐洲では杙上系に前揭、**H. Reinerth**; 卷末附表に「カヘル」類の二例があり、我國に於

研究を行ふたことがない。

(50) こゝで野牛と云ふたのは廣い意味で、歐地の「アバルス」や「ウル」(Ur=*Bos trimigenius*)、「バイソン」(*Bison priscus*)より極北系に屬する麝香牛((*Ovimos moschatus*) 等を含めて指して居る。外にも水牛が歐地に居れば、「ヤク」の如くはチベット高原に棲むが、この最後の二者については史前文化關係は未だ調査してない。

(51) 歐洲舊石時代の象は暖期に古象(*Elephas Antiquus*)、南象(*E. meridionalis*)等が、寒期にマンモス(*E. primigenius*) が居つた。犀は暖地に *Rhinoceros ettruscus*, *Rh. merkii* 等が主で、寒地に厚毛犀(*Rh. tichorhinus*)がある。拙著、「歐舊」。前編、S. 108-112.; 121-124. 等參照。

(52) 歐洲舊石遺跡より、往々多量の象牙、象骨の出土するは事實である。其一例は前掲拙著、「舊石存否」、S. 40. Fig. 3. 參照。然し捕獲法が研究せられざる以前に不用意に食料獸とするは、尚考慮の餘地があり、旣に愚見も開陳したが、(同書、S. 41. 及び註、(65)參照)こゝに再言して置く。犀に對しても略同樣と考へる。

(53) 以上の出土に就ては、拙著、「歐舊」。前編、S. 85, 87, 92. 等參照。但し只今「シシ」は一例しか掲出してないが、尚他にありとするも多くはないと考へる。「ホラジシ」の方が遙に多いし、現在の「シシ」より更に大形であるから、捕獲には一層困難と考へる。洞熊も亦、大さ二米を越すから、これも中々手强い。(同書、S. 96. 第五七圖、人間との比較、參照)

(54) 「ネヅミ」、「モグラ」大の小形哺乳類の出土は、歐洲舊石に於けるものは、拙著、「歐舊」。前編、S. 75-81. 參照。中石文化では未だ見出して居らない。新石では歐洲杙上住居に「モリネヅミ」(*Mus sylvaticus*) が出で、我國でも見付けたことは、拙著、「舊石存否」。S. 43. 及び其註(69)參照。

(55) 以上掲出した海棲哺乳類は、「クジラ」と「イルカ」を除いては中石文化のデンマーク貝塚出である。拙稿、「デンマーク貝塚」參照。又日本に於けるものは、「クジラ」、「イルカ」の外、前掲、**大給氏**、S. 37. 參照。

(56) マグレモージアンの出土動物は、拙著、「マグレモージアン文化概說」(本誌、三の二、三號、S. 51. 52. 第十四表參照。(以下本書を「マグレモージアン」と略稱)

(57) 史前海棲類で北的でないものは、「ジユゴン」(*Halicore dugong*)があり、琉球伊波貝塚で發掘したことがある。拙著、琉球伊波貝塚發掘報告、(大正十一年) S. 37. 參照。

そこに食料不安率が減少せらるゝのである。

（39）　北阿の陸產貝塚に就ては、未だ著者として紹介したことがない。何れこれが內容を發表するの期があることゝ信ずる。こゝでは單に出典の一例を示す。A. Debruge; Les Escargotières-Kjökkenmöddings de la Région de Tébessa. (Cong. Préhis. d. France. 1911.)

（40）　「タヌキ」は我國の特產であるから、此出土は動物群に於ける特異相にも觸れたことゝなる。其出土一覽は、大給尹氏、日本石器時代陸產動物質食料、本誌、六の一、S. 35. に十例揭出せられて居る。

（41）　前揭、阿部氏、S. 101–102.

（42）　歐洲前期舊石文化終末に近い、暖ムステリアンに屬する佛國ドルドウニュー、レセリー河畔の La Micoque に於ける、野馬肋骨の出土狀態は、前揭、拙著、「歐舊」前編、S. 201. Fig. 162. 參照。又新石時代一般的な出土狀態例は、拙著、日本舊石文化存否研究、（本誌。第四の五・六代冊、昭和八年）S. 78. Fig. 17. 佛伊國境グリマルディ洞窟の獸骨出土參照。（この後者を以下「舊石存否」と略稱）

（43）　我國貝塚から獸類の完全頭骨の出土した例は、何程あつたか未だ調査したことがない。只著者の記憶にあるものは、岩手縣舞良貝塚に於て著者自から、角を有する鹿頭蓋を掘つたことがある。石卷町在の沼津貝塚からは、猪頭蓋の出土を見たことがあり、青森縣是川一王寺よりも同樣出土し、これは本誌、二の六、S. 344. Fig. 6. に揭出せられて居る。

（44）　「イルカ」の脊髓骨連積せるものは、岩手縣長部貝塚で屢々出會したことがあつた。

（45）　最近化學的分析檢出法は花粉分析法（Pollenanalyse）燐分析法（Phosphoranalyse）乃至は最近更に油の分析まで行はるゝと云ふことであるから、こうした分析により、どれだけ從來の已知範圍を突破し得るものか、其研究の進展を待つものである。

（46）　我國で鹿、猪の多いことは、前揭、大給氏、S. 34. 及〔註七〕參照。

（47）　M. Boule: Les Mammifères quaternaires de l'Algérie d'après les travaux de Pomel. (L' Anthropologie, X. 1899) 參照。但し洪積時代、カプシアン（舊石文化）。

（48）　ステップ系動物群の主要なるものに就ては、前揭拙著、「歐舊」。前編、S. 121. 第九表參照。但し本表中に野馬を入れず、一般寒系に入れてあるが、本系に入れた方がよい樣に考へ、これを改める。

（49）　前揭、拙著、「歐舊」。前編、S. 119. 第七表にタンドラ系、同、S. 120. 第八表にアルプス系の諸動物を揭出してある。但しアルプス系は歐洲に於ては卽高山系であるが他の高山系に就ては、僅にピレニー山にピレニー山羊（Capra Pyrenaica）を見る等の外、詳細は

して考ふ可きである。有史以降に於ても、饑饉其他の非常時にあつては、行はれても居り[85]、歐洲大戰以後のロシアにもこれを見たとの噂もあるから、史前非常時に於ても、こうした行爲のあつたことは、想像し得るけれども、一面に於ては舊石文化より既に死者を埋葬する習慣も生れて居るから、矢鱈に食人は考へられない。又一般天然原則としても種族繁榮の爲めには、同族相食む、所謂共喰ひなる現象はない[86]。勿論鬪爭はあり、現に舊石文化よりこれを見たが、食人とは意義を異にする[87]。要するに史前文化に於ても、時には食人も行はれたであらうが[88]、單なる人肉嗜好の上から屢々行はるゝ如きは、例外と考へる。もし萬一、食人行爲と認めらるゝ遺物の發見に當つては、其動機に就て研究を要することが必要である。

十一、動物質食料小括

遺存動物質食料を取り纏めて見ると、其重要なものは哺乳類、魚類、貝類等で鳥類これにつぎ、他は多くの場合、隨從的であつたと考へらるゝ。これ等は捕食者の生業により、自づと傾きも生じ、又土地により季節によつても一樣ではない。而して野生種が主體をなして居るから、天然環境の支配をより深く受け、動物の消長は、直に史前民の食膳に影響する[89]。然しながら今日とは異り、人類も少なく、捕獲法も現今の樣でないから、野生種の如きも、山野河海により繁殖もして居つたであらうから、平常なる天然環境にあつては、史前民としては、惠まれた生活も出來たらうし、中に生活の餘裕も見出され、食料のある充實は、嗜好選擇の自由も許されたことも出來よう。勿論食料は動物質のみでない。後述する植物質との配合も重大なことではあるが、單に動物質食料のみを眺めても、其充實なることが、彼れ等の最も望む所であつたと共に、食料範圍の擴大も亦、不足も補ふ所以ともなり、更に其日暮しの域を脱するに及んでは、食料貯藏、同加工等の文化工作が始められ、

中には犬肉嗜好者もあらうが(80)、普遍的ではない。新石文化以降、他の家畜が現るゝに從つて、犬は肉の需用より遠かつたと考へる。我石器時代に於ては、犬以外に目星しい家畜もないけれども、肉主用とは考へられない(81)。歐洲新石文化に入ると、犬の外、山羊、羊、豚、牛等多くの家畜が現れ(82)、牧者の分業も生ずるから、肉用にも供じ得られやうし、獸乳等の利用も行ふたかも知れない。そこに大陸性文化の一傾向も讀まるゝが、これとて普及したものとも考へられず、畜者直近の需用を滿すに過ぎず、獵者の如きは依然野獸を對象として居つた樣に考へらるゝ。これが青銅文化に入ると、交通貿易の發展に比例して、家畜の肉用範圍も著く擴大せらるゝに至ると考へる。又鳥の如きも史前文化では、家畜にまで馴致せられて居らず、歐洲の如きは原史文化に初現して居る(83)。我國でも記紀には「ニハトリ」もある相であるが、果して何時より飼育せられたものか、未だ知つて居らない。要するに史前文化に於ては、家畜始原は芽ばへたものゝ、未だ普遍化して居らぬが、一面に於ては文化植物の栽培と對比を要するのみならず、これ等文化動植物の出現は人類文化發展上には、重大なる意義を持つて居る。

十、食人(Kannibalismus=Anthropophagie)問題

食人問題も亦、食料關係上、こゝに觸れざるを得ないが、本問題は獨り純然たる食料問題の外、多くに連關し特に精神文化上からも見ねばならぬ所も多い。それ故こゝでは單にこれが外周に觸れるに止めざるを得ない。而してこの食人問題たるや、問題が問題である爲、世人の好奇心をそゝるものがあるに止まらず、我國の如きは、最初の科學的研究者であるモールスの大森介墟編に始まるから、食人問題の由來も古く、又研究も相應に存する(84)。然しながら史前食料の大局より見れば、日常行事として行はるゝものとも思はれず、寧ろ特殊問題と

mmoeddings）と稱せらるゝ様に多食もせらるゝ。[78]

4. 其他の軟體動物

貝塚以外の軟體動物として出土するものは、僅に「イカ」の甲が見らるゝのみで、他に「タコ」や「タコブネ」の如きも「イカ」と同様に、捕食を行ふたでもあらうが、殘骸の遺存がない。「イカ」の甲もよく見らるゝが、これも多量に集積せられた様なものは未だ見ない。

其他稀には掘足類（Scaphopoda）に屬する「ツノガイ」の如きを見るけれども、食料上からは問題にならない。

八、其他の諸動物

以上述べてきた哺乳類以下貝類までが、遺存動物質食料の主體であつて、こゝに述べるものゝ如きは、單に食料の範圍を示す一例に止まるものが多い。其内でも比較的よく見らるゝものが、節足動物（ARTHROPODA）の甲殼類（Crustacea）に屬する「カニ」や「エビ」の類である。特に前者のハサミが比較的保存良好である爲、往々發見せらるゝ。今日の考を以てすれば史前人にも美味であつたらうと想像はさるゝが、これも多出した例は聞知したことがない。この外同じ甲殼類の「フジツボ」（Balanus）も出土し、棘皮動物（ECHINODERMATA）の「ウニ」（Echinoidea）等を稀に見、水産食料範圍が相應に廣いだけは認め得る。

九、家　畜（Vieh）

史前文化に於ける家畜の研究も重要である。然し單なる動物質食料として見る場合は、自づと觀點を異にする。家畜の研究は將來改めて行ふとし、こゝでは食用家畜を見る。先づ研究を要す可きは家犬（*Canis familiaris*）であり、最古の家畜として中石文化に出現する。[79] これを食料としたか否かは明でない。非常的には屠殺もし、

ど「カキ」が主體をなして居る。[75] 然しながら我關東地方の如きにあつては、「カキ」を多藏する貝塚もあると同時に、「ハマグリ」を主體とする貝塚の方が、前者よりもより多い。先づ「ハマグリ」の榮養價値を見ると、蛋白は「カキ」に優り、脂肪は若干劣る外、ビタミンは「カキ」の如くA—Eを包含してない。それ故榮養上「カキ」に優るとは申されないに拘はらず、この方が多いことに就ても、其理由がなくてはならぬと同時に、「ハマグリ」の榮養上に於ける不足を補ふ食料がなくてはならぬと考へる。尙この問題に就ては、將來關東地方の諸貝塚研究に當り見直すこととし、こゝに多くを述べない。又この外、我國に多く見らるゝのが、「シジミ」「オヽノガイ」「アサリ」「ヲキシジミ」「シヲフキ」「ハイガイ」「サルボウ」「マテ」「カヾミガイ」等であり、尙出土少ないものと合すれば、一貝塚に於て大約二三十種が普通に見らるゝ。[76]

3. 主要出土卷貝（腹足類）

卷貝も相當に捕食せられた樣であるが、其數量から云へば、二枚貝には遠く及ばない。從つて卷貝のみで食料主體をなすが如きことは、全般的に見れば寧ろ僅少な場合と考へらるゝ。然し關東地方の如きでは、「キシャゴ」の層狀をなすものゝ如きは稀でもないから、[77] 短期間等では隨分多食もせられたことは否まれない。只「キシャアゴ」の如きであれば、一回一人の動物質食料としても、それのみであれば隨分多くの數量は要求せらるゝから、これも各貝混食の場合が多かつたと見る可きと考へる。

一般に卷貝として關東地方によく見る種は、「アカニシ」「ツメタガヒ」「バイ」「キシャゴ」「カニモリ」「ウミニナ」「カハニナ」「タニシ」等であり、「アハビ」も時々發見せらるゝ。又「カタツムリ」も往々發見するが、一ヶ所より多出した例に遭遇してない。これが北岡にゆくと貝塚主體をなし、陸產貝塚（Escargotières-Kjoekke-

Fig. 4. 「カキ」を主とせる貝層（埼玉縣黑濱村新井貝塚）

より、種も多く、大形なものも多い。現實に中石文化以降に於いて貝塚の如きが新舊大陸に亙つて遺存する上から見ても、(73)其捕食がよく行はれたことが知り得る。

2. 主要出土二枚貝（斧足類）

二枚貝は大概食用に供し得、且つ淺海の泥土砂中に棲む種が多く、且つ一般に運動敏活を缺き、有毒種もないから、一度人類がこれ等の捕食を始めるや、理由なしには捕食を停止はしないと考へる。(74)

この二枚貝中特筆すべきものは「カキ」であり、前述の如く榮養上、各ビタミンに富むばかりでなく、蛋白、脂肪をも含み、消化も良好でもあるから、貝類としては食料中樞であり、著棲生活をなす故、發見も容易、捕獲も困難でない。只「カキ」の著棲に適應した岩礁其他があり、若干の淡水を交へた所に最もよく繁殖もするから、史前漁民には、一理想的水産食料と考へらるゝ。此の如き榮養價値高きものが、動物質食料の一中樞をなすなれば、他の魚類、哺乳類等との間に動物質食料の配合問題も生じ、又同じ貝類中他の種に對する相關關係も起つてくる。歐洲に見る多くの中石貝塚の如きは、殆ん

て東北地方では「マグロ」「ソーダガツヲ」「イワシ」等を檢出せられて居らるゝが、東京灣方面では發見して居られない。

毎度發表するが、史前魚骨中、「フグ」のある點は注目に價する。一つには其顎骨の鑑別が容易な點にも起因するが、横濱市三澤貝塚の如きは、私共の發掘に際し多數を出土せしめたことがある。「フグ」は有毒であると同時に美味なことは有名であり、既に史前人によつて毒物回避の天然性を破壞して、味覺の滿足を求めた所に、文化のある進展を認めらるゝ。又毒劍を備ふる「エイ」の如きも、可なり各貝塚より出土して居る所を見ると、其習性も心得て居つたに違ひない。兎に角、我史前漁民の如きは、隨分色々な種類に亙つて漁獲もし、これを食用に供したでもあらうが、未だ研究が不實で僅に片鱗を窺ふ現況であり、將來の研究に待つ所が多い。(72)

七、軟體動物（MOLLUSCA）

1. 一般

こゝに軟體動物と稱しても、本部門に於ける史前食料の主體は貝類（動物學的に云へば、斧足類＝瓣鰓類(Lamellibranchia)＝所謂二枚貝と腹足類(Gastropoda)＝所謂卷貝とに分たれるが、これ等を總稱して貝類と稱する）であり、其他に後述して居る如く尙若干種はあるも、數と量とに於て貝類には比肩し得ない。而してこの貝類たるや、多くが脂肪に富まないが、蛋白質、或種ビタミン等を包含し、或程度の榮養價値を有するものが多いから、動物質食料の一部を擔任することが出來る。又一面に於て、貝類の多くが一個體としては、小形であるけれども、多くの場合彼れ等の棲息條件に適應した場所には、自づと繁殖もするから、種類によつては、骨が折れず或る量が得られ、且つ魚獲以上に安全に採集出來る特典もある。又一般的に南暖の方が、北寒地方

如く榮養素の配合に變化あるだけ、味にも違ひがあるから、嗜好の關係が交響し得る。更に他の一面に於ては獸肉に比すれば、より腐敗し易くもあるから、季節の影響も考へねばならない。次には魚獲なるものが、一般に一部狩獵の如き危險率が少ない故、比較的安全に食料供給も出來るから、單にこの點のみから云へば、供給せられ易いとも申し得る。而して專業的な漁者とは認められないが、既に歐洲舊石時代より魚骨の出土するものを見ると、人類はづつと古くから魚類を捕食したことが考へらる。(68)

2. 出土魚類の概要

現實出土魚類資料は甚だ不完全である。歐洲の如きは比較的魚類の種に乏しく、且つ漁撈に對する關心も少ない故か、比較的重要視もせられて居らない樣にも見らるゝが、(69) 我國の如きは、其種に於ても現棲大約二千五百種に達し、(70) 現實に漁撈生活跡たる貝塚の如きも、大約六百を算し世界に冠たる所では、餘りに放置することも出來ない。勿論魚種に富むだけ、それだけ骨骼よりする鑑別も困難ではあるが、理想から云へばこれを打破して進まねばならない。然しながら史前學者としては、特に其特徵顯著なものなら兎に角、魚學的知識にも限度があるから、魚類鑑別の如きは、專門の魚學者に待たねばならない。而して既に故岸上博士によつて、これが端緒を開かれ約四十種弱の史前魚類が鑑別もせられたが、博士の歿後は再び暗黑となり、少なくとも私共は進步して居らない。それ故この種數を以て、我出土魚類を代表？ することは、餘りに貧弱ではあるが致し方がない。(71)

關東地方で、如上の知識から見らるゝものは、「タイ」「フグ」「エイ」「クロダイ」「ボラ」「スヽキ」等で淡水貝塚よりは、「コイ」が出土するが、東京灣方面では黑潮や親潮に棲む種類は見當らない。岸上博士は主とし

に就ては、一向聞知したことがない。今日の土俗に於ては、可食もするから、或は上述の如き熱帶地方では、發見の可能性はある。

兩棲類に於ても、僅に歐洲で蛙類（*Batrachia*）の二三種を見たのみで、[66] 他は私自身多くを知らない。我國などでは、「サンショウウヲ」(*Megalobatrachus*) の如きが出土したら、特有動物群中の一つとして、一地方色を發揮も出來るが、其骨骼の如きを研究して居らない。これを要するに、これ等に對する根本的な認識不足があるから、研究も不實であり、引いて史前食料問題にまで持ち來すには、尚距離があり、獨り我國ばかりでなく、世界に見らるゝ現象である。

六、魚　類 (PISCES)

1、一　般

魚類は陸棲哺乳類に對應して、水產動物質食料の一分野を保有する。特に史前漁者の生活に對しては、水棲哺乳類や後述する軟體動物と共に、重要なる割前を負擔する。其可食部分は其肉の主體をなすこと勿論ではあるが、魚類の種によつては榮養素の配合、比較的變化に富むから、一樣には取り扱ひ難い。一般に魚肉は獸肉に比し、淡白であるが蛋白、脂肪、一部ビタミン等を含有し、獸鳥肉を攝取しなくとも、魚類、貝類等で動物質食料としての、或る榮養目的は達成し得る由である。只史前當時の魚類なるものゝ多くが、其出土に徵すれば、今日に比し甚だ大形であつて、一尾と雖も其肉量は甚だ多く、往々想像を許さゞるものすらあるから、これも考慮せねばならない。[67] 勿論多くの場合獸類、特に「シカ」、「イノシシ」等と比較すれば、其肉量も著しく劣りもする故、集團生活の如き場合では、其人員に比例して相應量の獲得が必要となる。又一面に於て上述の

れ等に對し特筆すべきことがない。又アフリカに行くと、「ダチョウ」(*Struthio*)があり、この大きさがあれば、可食量は中等哺乳類とも匹敵もする。

更に見る可きものは鳥卵である。上述の如く家禽がない以上、野鳥の卵であるが、一般に卵なる性質上、滋養に富むから、官能的にも美味となり、獨り人類に止まらず、猿其他の動物も亦愛好する。よく蛇が鷄卵を盗む如きも、現實に見らるゝ所である。それ故史前人も恐らく愛食もしたであらうが、卵殻現實出土は僅に北阿に駝鳥卵の例を見る外、石器時代の出土例は寡聞にして未だ聞知したことがない。[63] 只僅に歐洲史前文化の終末に近き史前鐵時代前期のハルスタット(Hallstatt)文化の墳墓中に、家畜に於て、豚、羊、犬、牛、馬等の陪葬せらるゝものがあるに拘はらず、未だ家禽と認む可きものがない。それにも拘はらず稀に野鳥卵(種未詳)片の陪葬せらるゝものが存した[64]點から見れば、珍味として捧げたものではあるまいか。

五、爬蟲類(REPTILIA)及び兩棲類(AMPHIBIA)

爬蟲類、兩棲類の兩者共に、從來に於て餘りに着意もせられて居らない故か、又現實發見の上からも、甚だ寥々たるもので、史前食料上、重要なる割役を演じては居らない。多くが種名を列記するに止まり、單に食料範圍上、これに及ぶと云ふに止まつて居る。或はアフリカ、印度、南洋乃至は中南米方面等、主として熱帶的地方に於ては、前揭ブッシマン土俗の如きが、(第一節、三、參照)史前文化にも見らるゝかも知れないが、それとて生活を左右する程、重要性を帶ぶるか否かは、今日暗黑なるものに向つて、想像の下しやうがない。

爬蟲類に於て現存發見は、龜類(*Chelonia*)中の一二が、稀に出土した外[65]、蛇類(*Ophidia*)や鰐類(*Crocodilia*)等

の極北未開民には必須の食料である所からすれば、史前北系漁者にも亦、同樣な生活價値が存したと考へらるる。特に鯨の如きは獨り其肉の外、脂肪の北的生活に重要なることは既述の通りである。

四、鳥　類（AVES）

鳥類は史前動物質食料として、一要部を占むるも、今日とは異り家禽(Hausvogel)も未だなく、通常は其全可食量も獸類に比すれば、少ないのが多いから、鳥類を主要動物質食料とした樣な場合は、例外ともすべきで、一般的には獸、魚類の次位にある樣に思はれる。其現實出土に於ても、大形獸骨の樣には遺存しない。嘴、爪等は朽廢するし、骨自身も中空の樣であるから、遺存率も低い。著者の如きは今日までの發掘に於て、未だ一體をなすものは勿論、頭骨にすら出會したことがない。我國に於ても往々鳥骨片は認めらるゝも、專門の種別鑑定家を缺く故、研究を進め得ない現況にあり、遺存不良と併せて殆んど暗黑に近い。(58) 然しながら今日吾人等の嗜好から云へば、一般に野鳥の肉を愛好せらるゝ樣であるから、もし史前人も同樣な嗜好があつたとすれば、捕鳥も多く試みたとも考へらるゝ。只捕鳥には多くが、弓矢、羂、網等何等かの捕獲具を必要とすることが多いから、一時に多獲が出來るには、經驗とこれに伴ふ熟練とが必要となる。(59) 勿論今日とは異り、多くの場合、鳥類の棲息數も夥しく、且つ所謂人みしりも少なからうし、根本的に危險もないから、安心して捕獲も出來、且つ場合によつては、相當の收獲もあつらろうが、それとて長期に亙り生活を左右するまでに達したかは、一顧に價する。特に渡り鳥の如きは、季節に支配もせらるゝ。

歐洲では「コウノトリ」、「カモ」、「ガン」、「タカ」の類、「ライチョウ」、「キジ」等が多い樣であり、舊石文化が約三十三種、(60) 中石文化が約二十五種、(61) 新石文化のスキス杙上住居系より約二十種が(62) 檢出せられて居るが、こ

前述した一般的に對し、特異呼ばはりする程のものでもないが、稍〻一般的でない二三を述べる。先づ歐洲舊石時代の如きでは、象、犀の如きが、寒暖兩期に、夫々種を異にするものが發見せらるゝは有名である。[51] 象肉は勿論食用に供し得るが、果して捕獲したのか、死骨を拾ふたかに就ては、若干の問題があり、犀の如きに對しては同樣に捕獲法の可能性に就て疑はれもするが[52]、捕獲したとせば、可食量からは申分ない。食肉類にあつては、歐洲舊石時代に「シシ」(*Felis leo*)、「ホラジシ」(*F. Spelaea*)「ホラグマ」(*Ursus spelaeus*)等の猛獸まで出土して居る所を見ると[53]、これも喰ふたとは考へるが、これ等の猛獸を好んで狩りしたと見るよりも、多くの場合、史前人として自衞上殺戮した結果と認むる方が穩當に思はれる。これに比し中形な「ホラヒエナ」(*Hyaena spelaea*)「ヒョウ」(*Felis pardus*)等も略同樣であつたであらう。又「キツネ」は前述した如く、各文化階梯、各地方に出土して居るが、其肉には特有な所謂「狐臭」なるものがある由だが、史前人の臭味覺には、餘り影響を與へなかつた樣にも見える。又遺跡を詳細著實に調査すると、往々「ネヅミ」、「モグラ」等の如き小哺乳類も出てくる[54]。それ故、これ亦史前人の食膳にのぼつたことが考へられ、陸棲哺乳類としては、中小形なものは、多くの場合見當り次第に獲得し、食べた樣にも見られる。

以上の陸棲哺乳類の外、海棲の「クジラ」の類(*Cetacea*)、「イルカ」(*Delphinus*)、「シアチ」(*Orca*)「ネヅミイルカ」(*Phocaena*)、「アザラシ」(*Phoca*)等も發見せらるゝが[55]、これ等は漁者の獲物であつて、史前人として漁撈生活を營んだ、中石後期のデンマーク貝塚時代以降の所產であり、中石中期で半獵、半漁の生活とも見る可きマグレモージアンには僅少の魚類や「カメ」類の外、水に緣深き「ウミダヌキ」(*Castor*)、「カハウソ」(*Lutra*)等があるが、上述した海棲類のない所は、面白い對照と考へる[56]。又これ等の海棲類は多くが北的(boleal)であり[57]、今日

哺乳類、特に大形なものは大概食用となり、且つ可食部分量が大であるから、一頭よりして數十人の主食となり得る。且つ哺乳類中には、特に有毒なものがなく、只食肉類中には、往々特有の臭氣を存する位で、殆んどが食用に供し得る。史前文化、特に石器時代に於て、氣候溫良な所では、文化の高低を問はず、森林系動物(Waldfauna) の代表たる赤鹿 (*Cervus*)、野猪 (*Sus*) が、出土の主體をなして居り、我國など其例に漏れない[46]。これは單に嗜好のみに起因するのではなく、人類生活圏に近く出入し、數も多かつたのであらうし、捕獲も比較的容易であつたからであらうと考へる。又遺骨も大きいから、遺存率も高くかく目にも止まりもする。勿論暖地では其地に棲む種類が主である。例へばアフリカ石器時代には、「シマウマ」(*Equus zebra*)「カバ」(*Hippopotamus*)「ブバルス」(*Bubalus*) 等其地方の特色が見られ[47]、寒地地方では、所謂ステップ系動物群(Steppenfauna)[48]タンドラ系動物群(Tundurafauna)乃至は極北系動物群(Arktische Fauna)又は高山系動物群(Hochgebirgsfauna)等の諸動物が見え[49]、特にステップ系の野馬 (*Equus caballus*)、タンドラ系の馴鹿 (*Rangifer*) などが多獲せられて居る。又野牛の類も寒暖を問はず、相應に見らるゝが[50]、兎に角、抵抗力を有するとしても、上述の如く草食獸が主要な食料對象をなして居る點は、一面には嗜好にも適して居つたと考へらるゝ。

此外、羊、山羊等の中等程度のものや、「ウサギ」、「リス」の如き小形なものも、比較的多く見られ、食肉類では「ヲオカミ」、「キツネ」、「アナグマ」、「カハウソ」、「テン」等餘り大形でなく且つ凶猛でないものが、多く見らるゝ。只これ等の一遺跡出土數に就ては、多くの報告に漏れ勝ちな爲、捕獲の多少に就ては知り得ない方が多いが、何れも草食獸に比すれば、一般に數少ないと考へる。

2. 特異の哺乳類

動物の可食部分の主體は、其肉にあること勿論であるが、中には皮、脂肪、臟器、血液、骨髓、胎兒、胎卵等の如きも亦、可食性を持ち、場合によつては、夫々重要性も帶びてくる。前述した如く榮養方面から見れば、重要榮養素にして、肉外に含まるゝものも、相應に多いからである。又翻つて天然に於ける可食部分に就て見ると、肉食獸などは其捕獲した鳥獸の如きは、其全部を皆食して餘まさない。其飽食狀態にあつても、其餘す所は必ずしも肉外ではない。寧ろ肉を餘すことすら見らるゝ。又未開土人に就て見るに、エスキモーの如きは馴鹿、海豹、海馬、鴨、雁、魚等悉く其臟腑一切を食する由である。[41]それ故この點も史前食料研究上、一顧すべきことゝ考へる。勿論獵獲の目的は獨り食料に限らず、場合によつては、皮革羽毛乃至は骨角等を求むることもあらうが、此の如き場合であつても可食部の捨てらるゝこともなからうし、多くの場合が食料第一と考へらるゝ。彼の歐洲舊石文化に於ける洞窟住居跡、乃至は我國一部の貝塚に於ては、通常一個體をなさない、骨角部分の散亂した不定骨を出土するが、往々肋骨のまゝ、[42]乃至は完全頭蓋骨、[43]或は脊髓骨連續せるもの、[44]等を見ることがあるから、一樣に上述エスキモーの如く皆食して餘さないとも見られない。其多獲の場合、特に我國の如き氣候環境に於ける夏の如きは、腐敗もし易いから、色々の現象も起り得よう。從つてこんな場合には、恐らく其最も好む部分が、採食せらる可きであろう。勿論今日の研究狀態にあつては、其出土狀態より、直にこうした研究に直接導き得ないのが通常にも考へるが、もし最近の化學的檢出法がより進展すれば、或は幾分なりとも解決に資し得ることゝ思はれ、[45]其將來に待つことが多い。

三、哺乳類（MAMMALIA）

1、一般

べんとする所は、大約史前文化の範圍を總括して、史前食料に對する概念を得んとするに外ならないことを御斷りして置く。

更に以下、食料の内容を見るに當つて、内容區分を考へると、必ずしも上述してきた、動、植物及び無生物質との區分のみに止まらず、水產と陸產、天然と文化食料、氣候別等色々の方法があるが、上述した順序に述べることゝする。又史前食料遺存の現實を見ると、其殘骸一部をなす貝殼、骨角齒牙等動物質が通常發見せらるゝに止まり、植物質は僅に泥炭(Torf)等多くが特殊の狀態に於て遺存するのみであつて、一般遺跡には通常見られない。從つて現實に遺存する史前食料なるものは、其當時の何分の一か、何十分の一かに過ぎない上、多くの場合は遺存し易い大形動物か貝殼等動物質食料方面に大きな傾も存するから、史前食料の研究上に於ても、著しい制限を受けざるを得ないのである。

史前民の動物質食料と概言しても、種々相があり一定して居らぬことは、上述の通りである。然しこれ等食料動物の主體は野生であつて、家畜の如き文化動物は、中石文化に始めて家犬が出現し、新石文化に入つて、始めて後述して居る樣な種類が初現(本節、九、參照)したのであり、家畜として體をなしたのは、寧ろ青銅文化以降にあるから、史前文化に於ては食料としての家畜は、未だ普遍化しては居らない。從つて野生が本位であるから、天然の交感最も大であらねばならず、其消長は直に史前民の生活を脅すことゝもなり、單なる捕獲本能の滿足や、嗜好動物の撰擇の如きは、動物質の充實を見た時に於ける餘裕から生ずべき、第二次的の慾望と考へる。

二、可食部分

史前食料概説　其二

大山柏

第四節　動物質食料

一、一般

人類は上述の如く雜食性である以上、動植兩方面に亙り其範圍も廣い。然しながら史前文化の如きに於ては、未だ食料工作も甚しく進んで居らないから、今日から見れば其種、特に加工食料に於て僅少であつたことが考へらるゝ。卽ち其多くが天然其儘である天然食料か、乃至はこれに若干の調理工作を加へたものが主體をなしたと認めらるゝ。又史前文化としては、自給自足を立前とするから、食料も其住居地方の天然環境により支配を受ける。根本に於て生物環境が夫々異り、熱、溫、寒帶地方により大きな違もあるから、それに順應して史前民の食料にも地方色（Lokalfarbe）が出てくべきと考へるから、決して一樣ではない。例へば北阿の陸產貝塚に於ける「カタツムリ」嗜食の如き、[39] 我國石器時代の遺骨中比較的「タヌキ」を多く見るが如き、夫々特色がある。[40]
又文化進展の階梯に於ても、漸次進展を見る以上、夫々其文化階梯でも食料範圍は違ふ可きである。概觀すれば文化を追うて食料の範圍は擴大せらるゝのである。更に見る可きは、史前民各自の生產行爲、卽ち生業によつても、違ひが生れ得る。而して尙も追及すれば、傳統によつても或は各個人の嗜好によつても、場合によれば、成長別、男女性別まで及んでもくるであらうが、こゝでは其最も外周的に觸れるに過ぎない。又こゝに述



資料

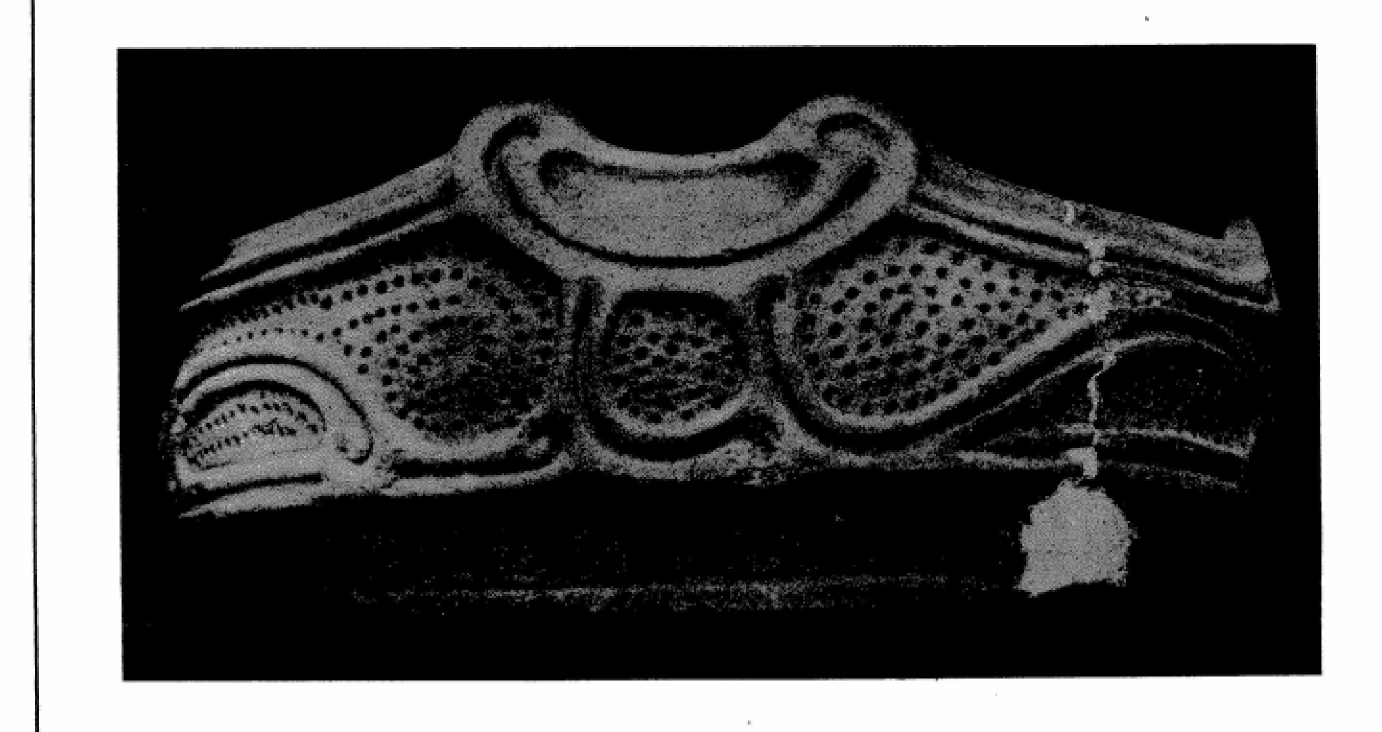
文獻

目次

史前學雜誌

第七卷第一號

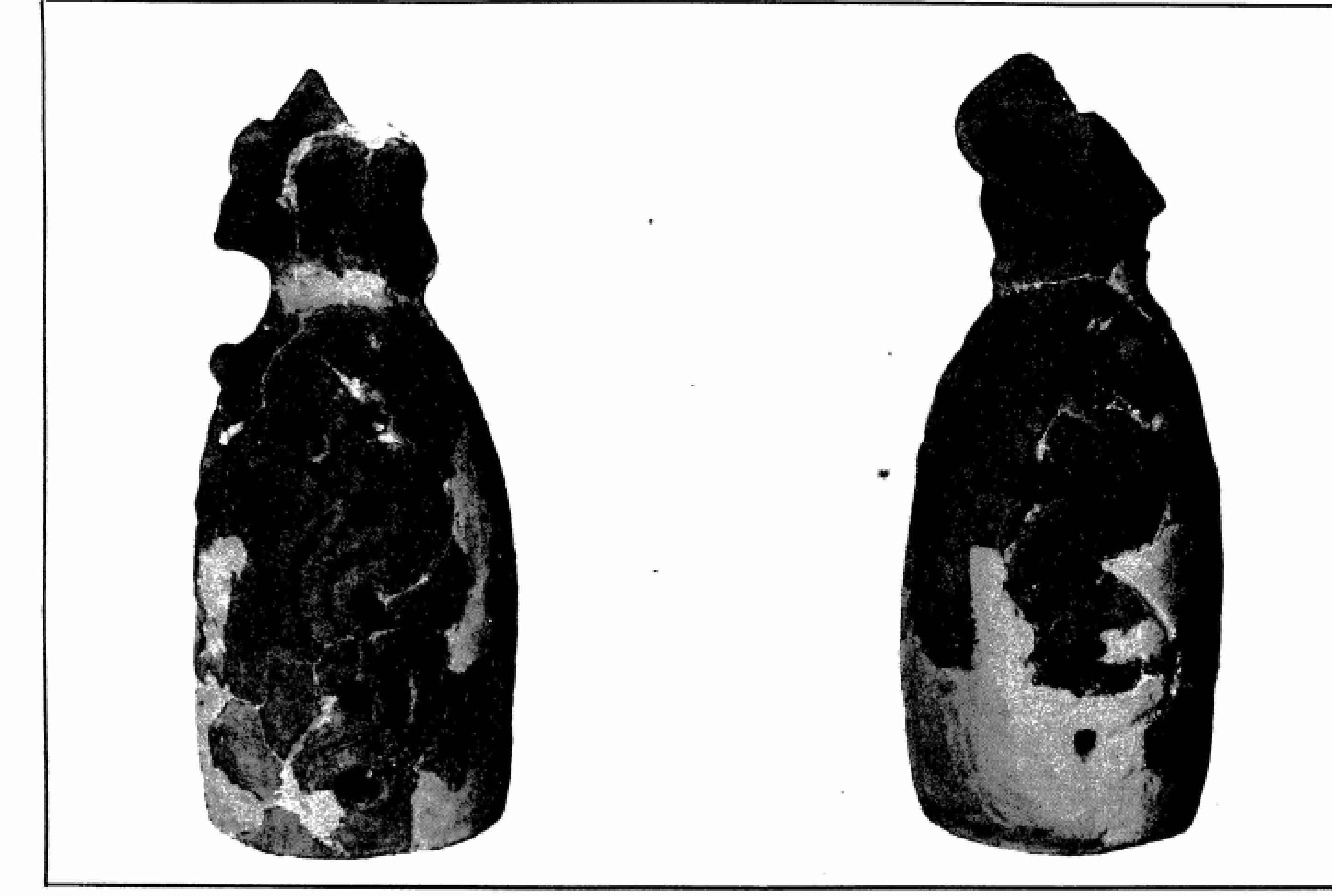




東京市上目黒東山石器時代竪穴の勝坂式土器

Joomon-Gefässe aus dem Wohngruben Higshiyama (typische Katsusaka Form), Meguro-ku, Tokio. (S. Shimomura)





橫濱市中區中村町稻荷山貝塚發掘土偶（池田．齋藤．佐藤氏論文附圖）

Tonidole aus dem muschelhaufen Inariyama, Yokohama. (Ikeda. Saito. Satoo)

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

五、入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所內

史前學會

顧問　小金井良精　中澤 澄男　柴田 常惠

會長　大山 柏

幹事　杉山壽榮男　田澤 金吾　大場 磐雄

甲野 勇　大山 柏　簡野 啓

樋口 清之　山口 隆一　池上 啓介

會計　岡田 義一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年一月二十日印刷　第七卷第一號
昭和十年一月二十五日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介

發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地　株式會社明章印刷所　鈴木越武

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所內　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第七卷　第一號

昭和十一年一月發行

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

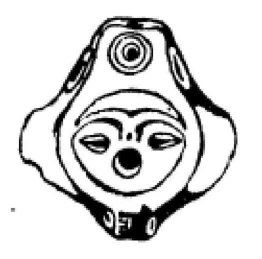
ORGAN DER JAPANISCHEN

PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



7. BAND 2. HEFT

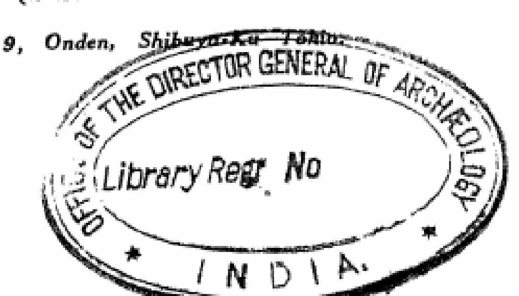
TOKIO

März 1935

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können, diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich :

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa Jookei Shibata

Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami

Isamu Kohno Kei Kanno

Iwao Ooba Sueo Sugiyama

Kingo Tazawa Ryuichi Yamaguchi

INHALT

I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)



大山史前學研究所・史前學會 刊行書目

書名	刊行	定價
史前學雜誌第一卷	(昭和四年刊行)	定價 六圓
史前學雜誌第二卷	(昭和五年刊行)	定價 六圓
史前學雜誌第三卷	(昭和六年刊行)	定價 六圓
史前學雜誌第四卷	(昭和七年刊行)	定價 六圓
史前學雜誌第五卷	(昭和八年刊行)	定價 六圓
史前學雜誌第六卷	(昭和九年刊行)	定價 六圓

研究小報第一號　神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地調査報告　大山柏著　定價壹圓　送〇、一〇

研究小報第二號　埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告　甲野勇著　定價壹圓卄錢　送〇、一〇

パンフレット第一號　史前の研究　大山柏著　定價十五錢　送〇、〇四

パンフレット第二號　石器時代の概要　大山柏著　定價十五錢　送〇、〇四

パンフレット第三號　未開人身體裝飾　甲野勇著　定價三十錢　送〇、〇四

パンフレット第四號　石器時代遺跡概說　大山柏著　定價四十錢　送〇、〇四

東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報(第一編)　大山史前學研究所　史前學雜誌第三卷六號代册　定價一圓五十錢　送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第一册　横濱市下嘗田貝塚群(昭和九年刊行)大山史前學研究所　定價六十錢　送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第二册　神奈川縣都田村折本貝塚(昭和九年刊行)大山史前學研究所　定價六十錢　送〇、一〇

(但し、史前學雜誌第五卷全部希望の方には編年資料第一、第二册を第五卷第六號とします)

日本舊石文化存否研究　大山柏著　史前學雜誌第四卷第五六號代册　定價二圓五十錢　送〇、一〇

史前學講義要録(第一部基礎史前學)　大山柏著　定價七十錢　送〇、一〇

史前學講義要録(第二部事實史前學)　大山柏著　定價八十錢　送〇、一〇

史前學繪葉書　第一輯(外國之部)　定價二十五錢　送〇、〇二錢

史前學繪葉書　第二輯(日本內地之部)　定價二十五錢　送〇、〇二錢

東京市澁谷區穏田一ノ九
史前學會
電話青山一二五番
振替東京五八九六八番

Fig. 2. 今福發見彌生式土器

で、恐らく二者は共に「高砂の松の附近の田圃を堀下げた時」の出土品であるらしい。

遺品は口緣部から頸部にかけて少しく損傷を見るも接合復原し得る完存品で、高さ二〇糎・口徑十一糎・底徑・三糎三、壺形土器に屬してゐる。底部は平底で、一方に偏してゐる。從つて器は一見するところ甚しく左右非均齊的な形をとる。淡赤褐色を呈する脆弱な土器で、文樣を全く持たない。

若しも「鏃形土製品」との伴存が確實ならば、この彌生式土器は前者製作の相對的年代の攷究にも資し得るであらう。（圖2昭和七年八月七日調査）

石川博士の訃

獨り我が動物學界の權威に止まらず、世界的名聲ある同博士が、臺灣研究旅行中に長逝せられたことは、如何にも殘念であり、哀悼して止まざる次第である。同博士が本史前學會に對しても、單に會員たるのみならず一大諒解者であつたことは、動物學者としての博士の高名に匿れて、動もすれば知られないが、常に史前學に留意せられて居つたことは、生前屢々親しく御交際を願ふた筆者のよく體驗した次第である。更に同博士によつて動物研究の一端、特に史前文化の比較資料たる哺乳類の知能に就ては、屢々有益な研究を承り、一度機會を見て、本紙に發表を願ふと思ひながら、これを果たし得なかつたことを返すすも遺憾とする所で本誌としては、僅にモールス記念號に英文の論文が、同博士を記念すべき唯一のものである點を、深く遺憾に考へる。玆に改めて同博士に對し、深厚なる弔意を表する次第である。（大山）

沼田博士の訃

先般我が史前學界の先輩であり、特に紋章學の權威として知られた、沼田博士の訃に接し、哀悼の至りに耐へない。私個人としては餘りに年輩が違ひ、且つ紋章學の方面に足を入れて居らない關係上、故博士とは親しく交際を願ふ機會がなかつたから、博士の多くに就ては知らないが、兎に角、我學界に一權威を失ふたことは、大なる損失であり、こゝに謹んで弔意を表する次第である。（大山）

羽前と播磨に於て調査し得たる彌生式土器のうち、完形に近い二例に就て略報することにしたい。

二者は共に開墾時に於ける偶然的なる發見にかかると云ふ。從つて發見遺蹟の帶ぶる考古學的性質を詳らかにしない憾みがある。しかし、何れも完形に近い遺品に屬するが故に、土器自體に關する限りその性質の認識が可能で、また地名表的なる資料增加の意味に於ても全く報告價値なきものとは言はれ難いであらう。

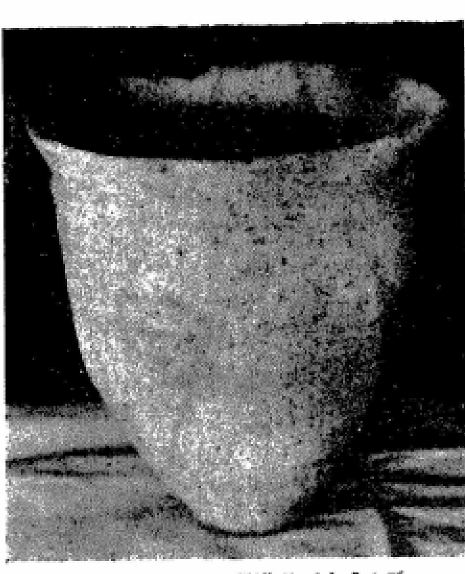


Fig. 1.　羽前國島貫發見彌生式土器

二

羽前國島貫發見の彌生式土器　羽前國東置賜郡沖郷村字島貫に屬する畠から彌生式土器の完形品が一例發見されてゐる。ただ一個のみ單獨に存したと云ひ、現に赤湯町八幡神社神官新山三郎氏の所有に歸してゐる。

遺蹟は東置賜盆地の北邊に近く、北々東から南々西に向けて連らなる沖郷河跡湖群列に並走する、やや隆起性の畠地の一隅に位し、遺品は地表下約三尺の垂直的位置に存したらしい。いま遺蹟地は地下げによる水田と化し、吾々の觀察を可能とすべき何等の徵證をも止めてはゐない。

遺品は口緣部の一端を少しく缺失せる程度の完形に近い彌生土器で、高さ廿二糎・口徑廿二糎・底徑六糎、深鉢形の器形をとる。底部は平底で、やや一方に偏在する。全體に砂礫を包含すること多く、燒成良く可成りに堅緻で、白色を混へる淡赤褐色を呈し、灰白色の部分もある。文樣全く之を認め得ない。(圖1 昭和九年四月十七日調査)

三

播磨國今福發見彌生式土器　加古川史談會長門野齊之助氏の蒐集のうちに彌生式土器の完形品が一例存し、「加古郡尾上村今福發見」と記されてゐる。加古川下流の沖積地に位する今福は、嚮に直良信夫氏が『人類學雜誌』第四十三卷第一號に八幡一郎氏への私信の形式を以て報告された。「鉧形土製品」發見の遺蹟

抑捺實體の面影は、聊か乍ら表はれてゐると思ふ。それに依ると、横に通る幾帯かの盛り上りは、箆痕を意味するものではなく、繩帯を縫ひ付けられた、獸皮か木皮かの地紋であるらしい。各繩帯は、大體定まつた間隔にヅラぬ様に縫ひ止め、その間に懸垂する繩は、その頂に於て明かに一旦地紋面を潜ぐり又出てゐる。そしてその繩の特に太く印してゐるは、その刺繡をしてゐるうち、縫りがゆるんで膨くらんだものと思ふ。

この仕事に、骨や角の細針の使用された事が想像され、又他地方からは、その實物も出てゐるのであるが、縦列する繩帯を押えるに使用した針も絲も、更に細いものであつたことが想像出來る。多分は、今日の東北地方の農民が、桶をひくに使用する肩當(かたて)を作る様に、繩を並らべ置いて、その横合から針を通したものであらう。

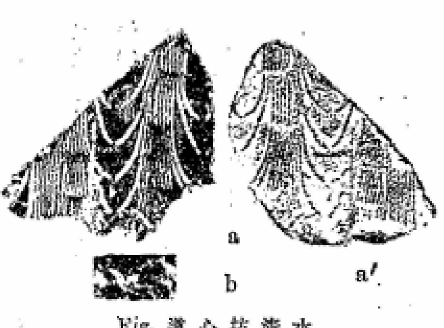


Fig. 道心坊淸水

a. 直接拓本(マイナス)

a′. 粘土復原拓本(プラス)

b. 厚さ

第二圖のものは、仙北郡道心坊淸水(しみづ)の出土品。同じく圓筒系の遺跡であるが、これは深鉢であつたらしい。胴部破片で、厚さ一糎、土質細粒の砂を混へて粗雜、燒成も弱く脆弱である。

紋樣は、網の實體抑痕である。但しこの網の目は、普通圓筒土器紋樣に多く見る、結繩に依るものではなく、且つ又、縒り合せしたものでもなく、今日の或種の網に見る如き、御互の繩の身を通し合つたものである。

そのため結び目のある網と相違して、目幅が一定しても全體が、勝手に縮み寄つてゐることが判かる。

この網シキには、勿論針を必要としたこと〻思はれるが、貝塚ならぬ一般遺跡に見る様に、骨角針は出てゐぬ。

尤もこの遺跡から、昨年用途不明の鐵器が出てゐるので、鐵針など想像出來ぬこともないが、鐵の黎明期に纖維な鐵針の存在を肯定するには、その實物證明を必要とすること〻思ふ。

一

彌生式土器の新資料二例

淺田芳朗

圖に見らるゝ如く小破片でしかも脚部を缺く爲、樋口氏が分類せられた(考古學雜誌二十三卷一號玦狀耳飾考)中のいづれの型式に屬するか判明しない。

Fig.

石質は詳に知り得ないが黑色でこの種の遺物としては便堅な方であらう。厚さは最厚部で〇・四糎ある。頭部には補修孔が穿たれ中央孔より上邊にかけての當初の割目は一部分、磨かれて平滑になつてゐる。

樋口氏の玦狀耳飾考(前出)によれば武藏に於ける本遺物の發見例は五ケ所五箇であるから此一ケ所一箇を加へて六ケ所六箇と成つたわけである。

圓筒系土器紋樣二種

武藤鐵城

圓筒系統の土器紋樣は、陸奥式の所謂擦消繩紋とは異り、浮波雨繩紋を、千差萬別に施してゐることは、人々のよく知るところである。

昭和九年中、私の手に入れたものから次の二箇の破片を摘出して、諸賢の御參考に供し度い。(共に秋田縣)

第一圖のものは、山本郡八幡岱出土の圓筒胴部破片で、厚さ一糎半もあり完形は、相當大型品であつたらしい。緻密な土質と、湛念なる篦磨きが利いたらしく、火は兩面から〇、三糎程より通つてゐないが、頗る堅質である。

Fig. 1. 八幡岱

a. 直接拓本(マイナス)

a′. 粘土復原拓本(プラス)

b. 厚さ

上方から十數條の細繩の並列から成る帶を幾通りも下ろし、相對する外側の一本宛連結懸垂して、その頂に於て一糎宛の間隔を保ち順次下方に及ぶのであるがその線は、實に優美である。佛像の衣の襞を想起せしめる。若しこの土器製作者の心理を、今日の造形美術家の心持と同じに置くことが出來るものであつたら、彼は確かにその藝術的目的に於て、成功したものと言ひ得る。

a′は、その粘土復原(プラス)を更に拓本したものであるが、

挾んで兩方に有る。併し大概我々はそれを馬籠の名の下に一括して居る」とある如く、東京市大森區馬込町の貝塚と池上街道をへだてゝ行政區劃上池上町根方とある根方貝塚をも含んで總稱されてゐる。

　兩貝塚共に表面採集からは堀之内式前後の土器を見受けるが、或ひは徹底的な發掘によつては兩者間に前後關係が認められるかも知れぬ。故に吾々二三子は假に馬込貝塚を馬込A區、後者根方貝塚を馬込B區と呼ぶ事としてゐる。

　『石器時代地名表』の馬込貝塚は江見氏の說に從ひ、之の兩者を一括して呼稱されてゐるものと思はれるが、未だ發見遺物中に、石槍・棗玉の記載を見ぬ。故に馬込貝塚發見の新資料として次に簡單な報告を試みる。

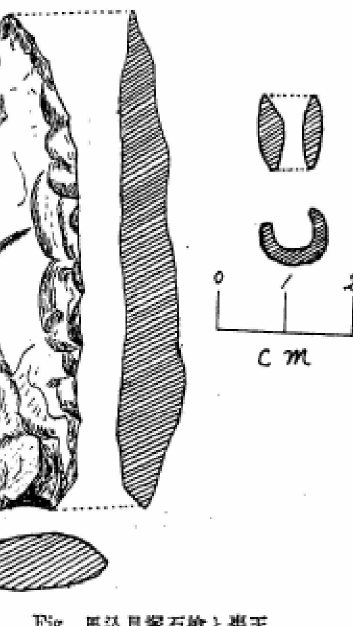


Fig. 馬込貝塚石槍と棗玉

　石槍はA區街道よりの野菜畑より發見せるものにして全長73粍、幅23粍の柳葉式のものなり、斷面は側端に於いて稍尖れる扁平楕圓形を呈し、厚さ8粍。石質は玄武岩にして表面暗褐色なれど、缺損せる左側緣の中央部及び基部は黑色を呈せり。

　棗玉はB區の中央を通つて雪ヶ谷方面に向ふ道路上にて發見せるものにして、車馬の往來のため下敷となり、その一部缺損せり。長12粍、上部の直徑8粍、孔徑6粍、孔は兩穿法により而も一方に偏して穿たれ、全面よく研磨されてゐる。石質は孔雀石にして鮮綠色の美麗なるものなり。

武藏國橘樹郡橘村發見の石製耳飾破片

關口　齊

　圖は武藏國橘樹郡橘村能滿寺住職佐々木氏の所藏品中にあつた玦狀耳飾の破片で發見地は同村大字千年小字下原宿（厚手式遺物包含地）である。

眞福寺貝塚發見の一土偶

宮崎紀
稻生典太郎

昨年十月東京人類學會の主催にかゝる埼玉縣稻崎村眞福寺貝塚の發掘並に見學會に參加した折、寫眞の如き土偶の破片を獲た。卽ち大山史前學研究所の發掘にかゝる泥炭遺跡、水田中に存する溜池の西方に、小川を隔てゝ隣した字畠中より表面採集したものである。

Fig.　眞福寺貝塚發見土偶破片

文樣は所謂磨消の手法を用ひ、二條の刻線によつて浮肉狀に盛り上つた帶狀曲線文を左右相對的に施し、下方には隆起繩紋帶が一文字に附されて居り、下方に行くに從つて厚みを加へる。表面は黑色滑澤を呈し、全面に塗朱されてゐたらしく、所々に共の殘存せるを見る。裏面は灰黑色を呈し、粗雜にして、淺い條痕(又は壓痕)が無造作に附されてゐる。土質・燒成は共に良好。この破片は、文樣及形態より見て腰部に屬するものらしく、現存部縱六糎、幅七・五糎、厚一・三糎。これを復原すれば高さ二〇糎は下るまいと思はれる大形品である。

曾て本貝塚より陸奥式土偶の首の部分が出土した由聞及んでゐるが、今述べる土偶も陸奥式酷似のもので、甲野氏分類のC類に該當するものと思はれ、空胴式である。

陸奥式文化と關東安行式文化との交涉を物語る重要な遺跡として、關東繩紋式石器時代研究の一礎石とされ來つた眞福寺貝塚から、今亦陸奥式文化所産品に類するものと考定せられる一遺品を報告する機會を得た事を喜ぶ者である。

（一九三四・二・一）

馬込貝塚發見の石槍と棗玉

久保常晴

從來一般から馬込貝塚と呼ばれてゐる貝塚は江見水陰氏の『地中の秘密』P.32 に「馬籠の貝塚と根方の貝塚とは池上街道を

前面であつて、胸部に並行した二つの突起は、女子の乳房を示し、腹部に高まりて凹點を印したのは臍を示し居り、腰部の擴がりたるは、之また婦人の姿勢を現して居る。拓影(ロ)は背面であつて、下方に至り漸次擡起して側面(ハ)に向つて彎曲し、臀部を形示して居る。背面下端には幅五粍の凸帶を作出し、之に脈痕を連ねてある。此の凸帶は一部を殘存するのみであるが、元は周圍に繞しあつた事は、剝落の痕跡により認める事が出來、衣服上着の裾と見做すべきであらう。紋様には縄文を施し、背面には、拓木(ロ)の如きS字形渦卷紋を沈刻してある。前面竪の沈線は、衣服の合せ目を示したものと考へられる。

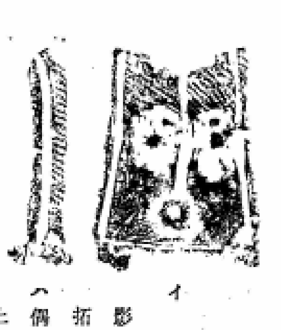


Fig. 2. 土偶拓影

二

寫眞(1の2)の土偶は、同村野津田綾部に於て、大正十四年七月採集したものであつて、四肢を缺損して居るが、大體に於て完全に近きものである。丈十三糎、體部幅四糎五、肩部幅七糎、厚さ約二糎、體部斷面は長楕圓形を呈する。色は灰褐色を呈し、灰黒色の部分がある、燒成は堅緻である、顏面には眉と鼻とを作出しあるが、眉の一方を缺損して居る、目と口部に當るものを認めないが、剝落したものか不明である。耳邊の圓形は、滑車形耳飾を示したものであらう。腹部の凹點は臍部を示し居り、肩部と腰部には切り目あり、紐狀線を繞してあるが、之は上部のものは衣服の襟を現し、腰部のものは下衣の紐を示したものと考へられる。背面には尖つた物の先端で渦卷紋を描いてある。此の土偶の體形は男性的ではあるが、顏面及び耳飾等の表現によつて女子たる事を認める事が出來る。

三

土偶は、宗教的必要品として、石器時代民衆により製作せられ、關東地方に於ては、常總及北武地方を中心として、盛んに行はれた事は、同地方より多數發見し居る事によつて明である。多摩川以南に於ては存在稀薄の樣であり、發見も稀有であつたが、近時御陵附近各地に暫々發見せられ、鶴見川沿岸地方に於ては、新治村鴨居平臺、中里村上谷本、鶴川村大蔵關山、同廣袴、同野津田綾部等から發見し居り、殊に廣袴發見土偶は、本流域に於ける最初の發見として、特記に値すべきものと思ふ。

四　出雲國知井宮(彌生式)

島根縣簸川郡知井宮村小學校西隣畑出土。昭和八年三月二十六日採集。遺跡は日本海に注流せる神戸川左岸の沖積低地にして、拓影5・6は道路擴張による桑畑の斷面地表下一米の地點にて得たる彌生式壺形土器の肩部。色調白茶色。5は六條、6は七條の斜行紋を、俱に二枚貝殼緣部と思惟される。厚さ前者は〇・八糎、後者〇・四糎。遺跡の地表は夥しき彌生式・埴部・祝部土器片の散布を見る。又近傍多聞院境內には彌生式貝塚があり(遺物は出雲大社寶物殿に陳列)、曾つて此の地は石鏃及び磨石斧の出土を報ぜられしこと(第五版日本石器時代地名表)等、一面上代文化の濃厚地域として忘るべからざるもの丶一つである。

五　筑前國立屋敷(彌生式)

福岡縣遠賀郡水卷村立屋敷遠賀川河床出土。昭和九年十月十四日採集。拓影7は微小なる破片にて器形不明。色調薄黃褐色。土質粘土質に富み砂粒を混じ吸水性に富む。厚さ一糎。少さき波狀紋は鬼蛤科に屬するハイガヒ・サルボウ・アカガヒの何れかの腹緣を器の外面に直角に押捺せるもの丶如く、紋樣としては幾何學的に先づ三條の平行を施し更に三條を束として羽狀の配列を見る。恐らく當遺跡に見らる丶沈線としての羽狀紋を貝殼に轉化せしめその美的價値を高めたことであらう。該系土器の一資料にもと逕走せながら之を示して置く。

—一九三五・一・二〇—

南多摩郡鶴川村發見土偶

高橋光藏

一

寫眞(1)及拓影は、大正十三年十二月二十日南多摩郡鶴川村廣袴に於て發見した土偶であつて、四肢頭部を缺損した體部である。丈九糎、幅五糎五より六糎五、厚さ上部二糎、下部三糎あつて、色は灰褐色を呈し、腹部に黑褐色の部分がある。質は良好で、燒成堅緻である。頭部を缺損したため、顏貌は窺知する事は出來ないが、寫眞(1)及拓影(イ)は

Fig. 1· 武藏鶴川發見土偶

層に至る地點にて得たるもの、件出遺物は口縁部の邊り軟かき外曲の深鉢形縄紋土器及び胴底部破片十數點にして悉く多分の纖維を含有してゐる。2は大形鉢の胴部と覺しく篦狀様器具にて加工せる擦跟を認められ、色調は赤褐色。厚さ一糎。ハイガヒの殼腹部を縱に頻りに押捺してあり、內面は毛狀の纖維痕による無數の褶皺を留めてゐる。3は黑褐色なる纖維含有の脆弱吸水性大なる土器胴部。ハイガヒの不整縱横の押捺。厚さ〇・八糎。三浦半島にてかゝる押紋の例は先に久里濱村茅山貝塚土器にその出土を報ぜられてゐる。今半島南端に近き三戸に之を得て、新たに前期縄紋式文化に一資料を加へて置く。

三　尾張國蜂須賀(彌生式)

愛知縣海部郡美和村蜂須賀出土。昭和七年四月十五日採集。木曾川左岸に開けたる坦々たる濃美沖積平野は數多くの散在的聚落を擁してゐる。此の間蜂須賀部落は水面よりの高さ一一・八米の墳丘狀の地點を持つ比較的早くより砂洲的地貌に營爲せられたる一村落の如く、馬見塚・淺野史前遺跡の西南一〇粁の地點に在る。拓影4は青塚部落に比接する桑畑の斷面より得たる混砂粒硬質の長頸壺頸部。色澤は灰色を帶びたる白茶。而も埋沒に因る爲か器の內外所々に酸化鐵の附着と變色を見逃がすことは出來ない。その頸部を周つて並行縱列に貝殼腹緣と覺しきもの〻壓痕紋が認められ、而もその下部は三條の平行沈線紋を二段、上部には數條の同紋と竹管紋の裝飾を施し美しき調和の効果を表出してゐる。尙本土器口緣部には麗しき流水波狀紋を描き口緣より頸部分への滑らかな流線の器形とゝもに完形品のすばらしさを想はせられる。因に口緣外直徑七・五糎、頸直四・七糎。件出土器は口唇部波狀壺形彌生式土器口緣部及び胴部にして共に粗なる刷毛目を有つてゐる。

貝殼押捺紋ある土器片

貝殼押捺紋土器資料

桑山龍進

土器紋様に於ける一樣法として斧足類貝殼の或部分をその器の內面或は外面に押捺し、以て時に紋樣的効果を表出せる例の出土は寡からざる繩文を見てゐる。か丶る施紋がよし心的表徵を見せず、たとへそれが制約せられたる期間に於ける一つの流行に過ぎずともせよ、存在するものとして或統制と意義とを與へらるべき日を期して此處に僅かな斷片的資料を送ることゝする。

一　肥前國有喜六本松（繩紋式）

長崎縣南高來郡有喜村六本松貝塚出土。昭和五年八月二十四日採集。拓圖1に示せる土器片は貝塚の南斷層面なる貝層中より出土せるもの、色調赤褐色なる廣口鉢形土器の口緣部である。この外部に施されたる太形の凹紋間の空隙を滿すに貝殼の押捺を以てして居る。放射肋上に見る結節によつてハイガヒAnadara granosa Linnéなることを知る。二條の併行沈線間は殼頂を稍〻左下に腹部を五個並列した押紋である。曲線間に於ける夫は殼頂を右に、殼腹を時に重複せしめて九個の紋を觀察し得る。勿論第二次的の施紋と考へるべく、土質は細砂粒雲母片を混在し比較的硬。厚さ〇・八糎。か丶る施紋の本貝塚出土の事實は曾つての人類學雜誌上にも見ず、尚又昭和九年夏期に於ける三回の踏査にもこの類例を見ず、取敢へず西部日本に於ける繩紋式文化の一資材にもと之を拓示して置く。

二　相模國三戸（繩紋式）

神奈川縣三浦郡初聲村三戸中込畑出土。昭和六年八月二日採集。三戸の部落より小網代（コアジロ）に至る里道を光照寺前方より左折、約一丁にして廣担なる丘陵上に至る。此の邊り初聲御用邸敷地に屬し通稱蝦田（ガニダ）畑・中込の畑と云ひ、地表は濃密なる遺物の散布を見、彌生式・繩紋式土器片の混在よりして多大の興趣をそゝられる。拓影2・3の土器は試掘により表土下約九〇糎ローム

て居る。幸に御氣付きの點に關して御叱責御鞭撻下されば此に過ぎた喜びはありません。（一九三五・一・二・夜半）

參考文獻

1. Edward S. Morse Shell wounds of Omori (1879)
2. 坪井正五郎、帝國大學の隣地に貝塚の痕跡あり。東洋學藝雜誌第 91 號。
3. 直良信夫、考古學雜誌第十四卷第十三號「貝類學的に見たる石器時代の東京附近」
4. 矢倉和三郎、貝類叢話。
5. 甲野勇、東京府下池上町久ケ原彌生式竪穴に就て史前學雜誌第二卷第一號。
6. 森本六爾、東日本の繩紋式時代に於ける彌生式並に祝部式文化の要素摘出の問題。
7. 大山史前學研究所、繩紋式石器時代の編年學的研究豫報。

脩圖で明かなことであるが大體は現在の編年的常識と一致して居る。

惟ふに現在の型式論的編年の結果は彌生式を除けば文化の爛熟期(Blüte-stadium)の編年であつて、その起源及び終末期——即ち個々の貝塚に就いては、幾分尙修正すべき點があるのでは無いかと考へる。

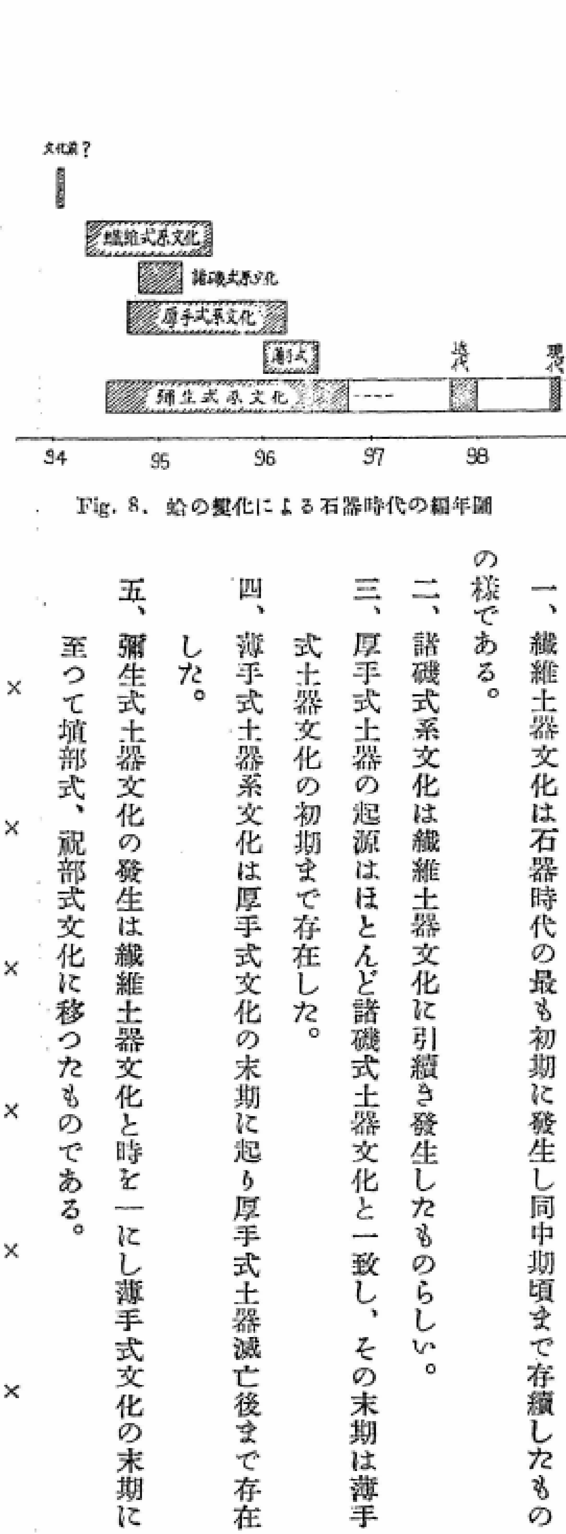


Fig. 8、蛤の變化による石器時代の編年圖

即ち本編年法による結果としては、

一、纖維土器文化は石器時代の最も初期に發生し同中期頃まで存續したものの樣である。

二、諸磯式系文化は纖維土器文化に引續き發生したものらしい。

三、厚手式土器の起源はほとんど諸磯式土器文化と一致し、その末期は薄手式土器文化の初期まで存在した。

四、薄手式土器系文化は厚手式文化の末期に起り厚手式土器滅亡後まで存在した。

五、彌生式土器文化の發生は纖維土器文化と時を一にし薄手式文化の末期に至つて埴部式、祝部式文化に移つたものである。

× × × × × ×

以上で蛤による編年を終つたが、恐らく不充分の點、又は云ひ過ぎの點も多にあることと思ひますが御寛容願ひ度い。

尙今後も及ばずながら此の研究を續行し、更に修正すべき點は修正しつつ、尙一層廣範圍に進め、度いと考へ

とが出來る。

一、相對的編年　之は變化そのものを一つの事象と考へて何等その間に具體的な、時間を加味せず相對的に年代を比較する場合である。

二、絕對的編年　相對的編年の結果より變化の連續性(Continuous)及び單調性(monotonie)を基として變化の樣式卽ち變化曲線を誘導する時は絕對的編年をも行ふことが出來る。

絕對的編年は先づおき、差當り相對的編年のみに觸れることにする。

石器時代の相對的編年　私は此の編年を行ふにあたり一つの立場のあることを御了解願ひ度い。

卽ち或は人は云ふかも知れない――いくら蛤に變化があるとしても、石器時代の編年は土器の編年である。故に何處までも土器を基とせねばならぬと。勿論私としても異論のある筈がない。未來はいざ知らず現在の狀態では個々の貝塚まで進んで解答を與へることが出來るか疑問である樣に思ふ。

假に或る長さをもつた棒があるとする。今或る評準に從つて大刻みながら目盛をつけ得たとしたら、以後はその評準から離れて、目盛を細分し、更に此を使用して物の長さを測ることが出來る樣になろう。

扨(二)の(c)に於て述べた所によつて浦安、川崎兩溪谷を混ぜ合てて土器型式に從つて更に分類し直した時得た結果は第八圖の通りである。但し此の圖の製作にあたり、石器時代土器名稱を纖維、諸磯、厚手、薄手、彌生式の五型式に分類したが、各型式內と雖も一元的であるか、又は多元的であるかは尙議論のあることと思ふが、ここでは各文化內に於ては、總て一元的と做した。從つて同一形式でありながら、ａの値がとんで居る時は、その間に於ても亦文化は連續で、ただ遺跡の發見がなかつたものとみとめて製作したことを附記して置く。

第十四表

要目 / 貝塚	個數	α	β	$\alpha+\beta$	l/h	l/d	l/p	n	備考
船橋	15	98.1	107.6	205.7	1.28	4.02	9.52	士	土器形式不明

あるが、この場合でも遺物を或る場合には想像することが出來る。例へば袋貝塚下層の如き、これである。尙この機會に私の友人・大町四郎並びに片倉修氏が私の許まで持つて來られた土器不明の千葉縣船橋町附近の低地性貝塚出土の蛤に關して、紙上を借りて御答へする。即ち計測の結果は上表の通りである。これより見ると近世の蛤に相當する。故に若し出土するとしたなら近代的な「カワラケ」狀の土器が考へられる。

七、地理的變化　今迄試みられた編年法には屢々地理的關係が複雜に混入し煩雜を極めるが蛤に於てα係數を用ふる時は、少くも浦安、川崎溪谷の如き内海の然も一番奧まつた樣な所では同一溪谷内のみならず、進んで兩溪谷間の障壁を越へて直接比較して大差はないと思ふ。他の溪谷についても、同一溪谷内では自由に比較が出來るらしく思はれる。

故に此處で私の一考を煩はし度いことは蛤に時代性があることは既定の事實であるので、一つの貝塚の報告作製に際して卷末にでも、既述の六係數を明記するか、少くともα係數を記したなら非常に便利であらうと思ふ。

但し御注意申し度いことは未だ浦安、川崎兩溪谷以外には變化の樣式は不詳であるから若し事情が許す時は附近の貝塚の蛤の値ゐも附記するとよいと思ふ。(測定法及び器具に就いては本文を參照せられ度い)

(B)、石器時代の編年

石器時代の編年は取扱ふ時間が絕對的であるか相對的であるかによつて絕對的編年及び相對的編年に分けるこ

三、蛤は關東地方ではただに石器時代のみならず現代に至るまで存在、増々繁榮して居る所より、石器時代より現代に至るまで年代さへ決定出來るなら順を追て追跡することが出來、然も材料が同一物であるから比較が容易である。

四、α角　蛤の形態の測定中、αに關する時は同一年代では同一値を、然も年代に平行して、遡上れば値は小に、年代が降下すれば値が大となる。然も其の値の變化は、連續的で然も單調な（monotonio）一方向的變化である。從つて逆にα角によつて土器形式を想像し、時には規定することが出來る。

例へば大山史前學研究所にて埼玉縣白幡貝塚の蛤に二型あることより、同地の土器に少くも二型あるを疑はせ、此を確認し、同樣な意味よりして花積下層土器と南貝塚の土器とに變化のあることを知つた。

同樣に神奈川縣駒岡貝塚よりの蛤に二型あるを見て諸磯式以外に新しい近代的貝塚のあるのを知つた。斯る例はかなりの數に上る。

五、位層的關係　未だ破壞されない貝塚では例外はあるとしても上層は下層より新しい。此の事實は蛤の變化にても見られる。例へば花積貝塚の如き、又赤羽袋貝塚の如き此である。若し土器に位層的關係が發見されれば態々蛤を用ふることの必要のないことは自明のことであるが、斯る例は少い。從つて位置的關係の無い所では結局は型式論になつてしまふものではないかと考へる。從つて時として實際の場合、即ち個々の貝塚にあてはめて誤る場合もあり得ることと思ふ。

六、出土土器不明の場合　土器を伴はぬ貝塚でも形成された時代を知り度い場合もある。此の場合「はまぐり」の形態より大凡の編年的位置を知り得る。但し屢々土器の形式不明とは發掘不充分なることを物語る場合が

あるのでは無いかと考へるのであつて、此の點で大方の一顧を煩はしたいのである。

結論

私は方法としての本編年法とこれより誘導した編年の結果との二に分けて述べたいと思ふ。

（A）、本編年法の特徴

一、材料の普遍性　關東地方の貝塚中鹹水性貝塚に於て最も普遍的な貝殼は「はまぐり」である。時には全く「はまぐり」で形成されるかと疑ふ様な場合もある。例へば赤羽袋貝塚の如きはこれである。然し鹹水性貝塚中古式の土器を出す貝塚では時としてほとんど「はいがい」のみで出來て居ることがある。例へば埼玉縣黒谷貝塚神奈川縣折本貝塚の如きはこれで、遂に材料を得ることが出來なかつた程である。此等はむしろ例外的の貝塚で他は多少とも蛤が見られるものである。又全くの純淡水性貝塚はほとんど發見されぬが私はただ一例埼玉縣小貝戸貝塚の發掘に際し全くの「しじみ」の層のみ續き、數時間の發掘にも尙蛤が二個しか出土を見なかつたが、此亦例外的で多少とも鹹度の加はつたものが多い。淡鹹性貝塚では多くの場合鹹水性貝殼中、蛤が最多數を占めることは屢々經驗されることと思ふ。

二、變化の度の强さ　石器時代の貝塚より發見せられる貝殼を仔細に檢査比較するとき何れかの點で必ず變化を見せて居る。これは既に大森貝塚編に於て充分注意されて居る所である。然し結局最も變化の度の强いものを選ぶべきである。私は未だ悉しい統計は取つたことはないから具體的に數を擧げては述べられないが最も著明に變化の現はれるものは蛤である樣に思ふ。尙此が測定に當り全體が滑であるので測定も容易に、然も比較的正確に行ふことが出來る點に於て有利である。

第十三表　彌生式系貝塚

番號	要目／貝塚名	個數	α	β	α+β	ζα	l/h	l/d	l/p	n	備考
19	(1) 久ヶ原(I)	83	94.5	108.0	202.5	1.9	1.25	3.76	8.50	+++	彌生式（甲野氏）
番外	彌生町向ヶ岡	18	古型	——	古型	——	1.25	——	——	——	彌生式（坪井氏）
18	(2) 南加瀨	74	95.1	107.7	202.8	2.0	1.26	3.67	8.35	+++	彌生式
19	久ヶ原(II)	24	95.8	107.5	203.3	1.9	1.26	3.97	9.00	++	彌生式（森本氏）
24	袋(III)	121	96.8	107.4	204.2	1.9	1.28	4.02	9.66	+	彌生式+埴部
4	波田	89	96.8	107.6	204.6	1.8	1.28	4.06	9.22	+	祝部式
1	北ノ方	110	98.8	107.9	206.7	1.7	1.31	4.26	10.37	±	現代

(1). 蛤は第七圖(9)を｝參照せられ度い。
(2). 蛤は第七圖(8)を｝

現在考へて居る所より餘程古いものではないかと考へるのである。

94.5 とは纖維ある蓮田式を伴ふ。貝塚よりの値であり 95.1 とは矢上谷戸貝塚の如き諸磯式土器の値である。

95.8°とは厚手式貝塚の蛤の値である。尙彌生町向岡の蛤は少くも大森貝塚の蛤よりも古型に見へたらしい。

此の蛤よりの事實を多少なりとも說明し得る材料として大山史前學研究所に於て南加瀨貝塚より諸磯樣の土器を檢出し、私も小破片であるが繩紋系(少くも薄手式土器に非ず)土器を發見して居る、外に箕輪貝塚の北方駒林にても彌生式竪穴中より純粹の蓮田式土器を檢出してゐる。此と類似の事實は他にもあることと信ずる。現在まだ彌生式と共に繩紋式土器が出土する時は一笑のもとに抹殺されてしまふ傾向があるが事實に忠實であり度い。以上の事柄に關聯して最近森本六爾氏は東日本に於ける繩紋式遺跡より彌生式系文化の摘出を行つて居る。(5)

尙未だ未發表の樣であるが齋藤武一氏は雪ヶ谷貝塚より諸磯式樣彌生式土器を檢出して居られる。

結局私は少くとも彌生式土器の編年に關しては尙考へ直すべき點が

あつて甲野勇氏の採集したものは α、$\alpha+\beta$ 共に古型を示し森本六爾氏採集のものは此に反して中古型を示す。土器の關係は如何と云ふに、甲野氏の發見せられた竪穴内の土器は森本氏のそれよりも古式の彌生式である。(森本六爾氏談)

(ロ)、南加瀬貝塚　　多摩川と鶴見川とに挾まれて箕輪貝塚、矢上谷戸貝塚の台地とは矢上川によつて境される長さ約一粁に足りぬ小孤島の東南端に存在し、箕輪貝塚、矢上谷戸貝塚(諸礒式貝塚)よりは共に二粁半の距離にある。純鹹性貝塚でほとんど蛤によつて形成せられて居る。他の繩紋式貝塚と異る所は著しく小形であることで1の長さはほとんど5cm以下のものが大部分を占て居る。私の發掘した地點は島の突端で傾斜地に移らんとする地點である。

尙緒論の所で述べて置いた坪井博士の本郷彌生町貝塚の報告中の數字は、私の係數にして云へば $1/h$ に相當する。故にこれらを換算すると、

向ヶ岡　$1/h=100.0/79.8 \fallingdotseq 1.25$　　大森　$100.0/78.5 \fallingdotseq 1.27$　　現代　$100.0/77.2 \fallingdotseq 1.30$

以上の中、大森貝塚及び現代の蛤の値は既に述べた所より正に常識的な數値である。從つて向ヶ岡貝塚もそれ自身、正當な値であると思はれる。然も $1/h$ は $\alpha+\beta$ と近い意義を有するので $\alpha+\beta$ に關して古型を示して居たであらうことが考へられ更に尙 α に關しても少くとも大森貝塚よりは古型に見へたにちがひないことが想像される。

次にこれらの貝塚の蛤を測定した結果を現代の値と共に表示して見る。(第十三表)

次表より考へて見ると彌生式土器中新型のものは充分繩紋土器よりも後に存在して居たとしても、その起源は

從つて以上を一言にして云へば浦安溪谷と川崎溪谷とは完全に平行するものなりと云へるのである。故に兩溪谷內個々の貝塚を直接比較することも亦可能である。

（D）、**その他の溪谷の覺書**

私は以上二大溪谷以外の他の溪谷に於ても數は僅少ながら調査をした。

その結果は其處に於ても、以上述べた樣な年代的變化を認めることが出來る。卽ち現代、薄手式と厚手式と文化の推移と共に蛤の形に變化が起つて居る。然しその變化の樣式は浦安、川崎の兩溪谷とは少し模樣が異るものの樣である。從つて兩溪谷への直接の比較は不可能である樣に思ふ。勿論變化樣式こそちがへ、或る一定の關係はあるのでは無いかと思はれるが未だ不明の點も多いので總て省略した。

ただ次のことだけは云へると思ふ。

總ての溪谷內にある貝塚の蛤は、其の溪谷に特有な變化樣式に從つて年代的變化を示すものであると、浦安、川崎溪谷に於ては恐らく條件が略ぼ同一な爲、その變化樣式も相似的になつたものであらうと考へる。

三、彌生式貝塚出土はまぐり

以上述べ來つたことの總てを應用した時彌生式は如何なる位置に位するかは興味ある問題である。赤羽袋貝塚に於て新式の彌生式及び埴部式土器を川崎、渡田貝塚に於ては祝部式土器を伴ひ、これらよりの蛤が共に新型を示すことは既に述べた所である。扨純粹の彌生式貝塚はその遺蹟の數に比して非常に少い。私はただ川崎溪谷內にて久ヶ原竪穴貝塚（甲野勇氏及び森本六爾氏採集）、並びに南加瀨貝塚の蛤を測定することが出來た。

（イ）、久ヶ原貝塚（5）　久ヶ原貝塚は竪穴內に土器と共に集積されたもので、この貝塚よりの蛤にも二樣式が

次に石器時代に於て、薄手式土器を伴ふ貝塚の蛤を比較すると川崎溪谷に於ては α が96.0—96.2 の間を浦安溪谷に於ては主として 96.1—96.3 の間を上下して居て大體平行するものである。

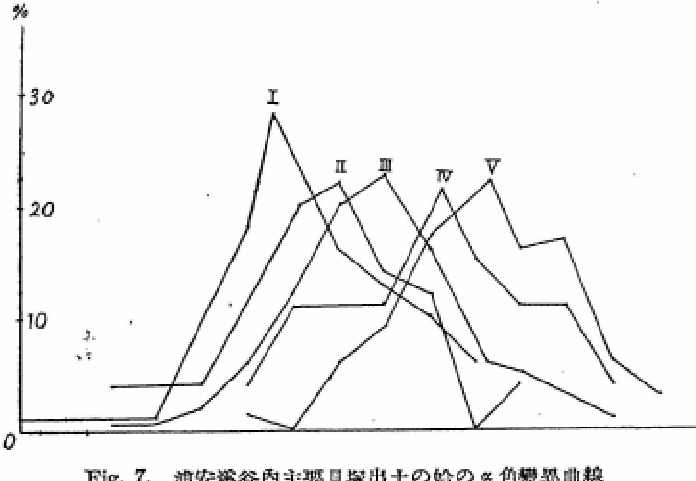


Fig. 7.　浦安溪谷内主要貝塚出土の蛤のα角變異曲線

I　袋(I)(文化前？)　II　白幡(蓮田)　III　袋(II)(薄手)

IV　西臺(近代)　V　浦安(現代)

更に厚手系に於ては材料が甚だ少いが、浦安溪谷に於て厚手式貝塚に乏しくただ花積、上本郷、姥山の貝塚を測定して居るが花積は可成問題となるので此を一時保留するとして、他は川崎溪谷のものと大體一致して 95.7—96.2 内を上下して居る。

諸磯式貝塚に就ては浦安溪谷では中臺ただ一つで甚だ少いが川崎溪谷内に於て規定された範圍内に含まれる所を見ると兩者互に平行するものと考へる。

最後に單純に纖維土器のみを出土する貝塚の蛤は川崎溪谷内では 94.4—94.5 であるが浦安溪谷内に於ては其の數も多く、同一臺地殊に同一場所内に於て二つ以上の型式の土器の存在を一致して蛤の値が異る所を見ると尚研究すべき餘地を殘すとしても、最も有力なる範圍は　94.4—94.6　に存在し然も此の範圍内の貝塚出土の土器のみ直接川崎の 2 貝塚の土器と比較出來る樣に思ふ時、私は此の型式に於ても尚平行し得るものと考へる。

次に川崎浦安の兩大溪谷幹内の變化が平行するか、否かの問題に於て現在の蛤は共に 98.7 内外の値を維持す

第十二表

型式	要目／貝塚名	番號	個數	α—角係數	$\sigma(\alpha)$	Diff	α+β
現代	浦　安	21	72	98.7	1.7	——	206.3
近代	西　塞	27	25	97.8	2.1	0.9±2.7	204.6
彌生	袋（Ⅲ）	24	121	96.8	1.9	1.9±2.5	204.2
薄手	袋（Ⅱ）	24	122	96.5	2.0	2.2±2.6	204.2
	眞福寺	36	56	96.5	2.0	2.2±2.6	203.6
	上新宿	44	13	96.4	2.0	2.3±2.6	204.3
	東本郷	29	84	96.4	1.8	2.3±2.5	204.4
	東貝塚	28	109	96.3	1.8	2.4±2.5	204.1
	小豆澤	25	65	96.2	2.2	2.5±2.6	203.6
	神　根	31	70	96.2	2.2	2.5±2.8	204.0
	猿　貝	30-	13	96.2	1.7	2.5±2.4	204.1
	西ヶ原	22	45	96.1	2.1	2.6±2.7	203.3
	堀之内	42	32	96.0	1.7	2.7±2.4	203.8
厚手	姥　山	41	29	95.9	1.9	2.3±2.5	203.9
	上本郷	43	84	95.8	1.9	2.9±2.5	203.6
	花積（雜）	33	41	94.6	2.0	4.1±2.6	202.8
	花積（Ⅱ）	38	47	94.7	2.0	4.0±2.6	203.0
諸磯	中　塞	26	99	94.9	1.7	3.8±3.4	203.7
蓮田（纖維）式	黒　谷	37	16	95.4	1.8	3.4±2.5	203.7
	白幡（Ⅱ）	34	40	95.5	2.1	3.3±2.7	203.7
	古ヶ場	40	36	95.5	2.0	3.3±2.6	203.7
	南	39	71	94.9	2.1	3.8±2.7	204.2
	小谷場	32	70	94.8	1.4	3.9±2.2	202.9
	別　所	35	32	94.8	2.0	3.9±2.6	202.6
	上十條	23	11	94.6	1.5	4.1±2.3	201.9
	白幡（Ⅰ）	34	27	94.6	1.7	4.1±2.4	203.5
	文　藏	33	31	94.5	2.1	4.2±2.7	202.7
	花積（Ⅰ）	38	32	94.4	1.8	4.3±2.5	202.6
?	袋（Ⅰ）	24	83	94.1	2.1	4.6±2.7	201.6

る。原史時代貝塚の蛤は 96.3—96.8 内を上下する點に於て一致する。然も近代の蛤が原史時代蛤と現代の蛤との中間の値を取つて居ることは、少くとも原史時代より現代に至るまでの變化は、兩溪谷に於て平行し得るものであらうと思ふ。

第十一表

番號	要目 / 貝塚名	個數	α	β	$\alpha+\beta$	l/h	l/d	l/p	n	備考
41	姥山	29	95.6	108.0	203.9	1.26	3.92	8.98	++	厚手
42	堀ノ内	32	96.0	107.8	203.8	1.26	3.64	9.12	++	堀之内
43	上本郷[1]	84	95.8	107.8	203.6	1.27	3.79	8.61	++	厚手
44	上新宿	18	96.4	107.9	204.3	1.28	4.02	9.05	++	薄手

(1) 蛤は第四圖(3)を參照せられ度い。

Fig. 6. (1) 袋貝塚第一層 (文化前か?) α=94.1
(2) 下沼部貝塚 (薄手式土器出土) α=96.1
(3) 矢上谷戸貝塚 (諸磯式土器出土) α=95.1
(4) 花積貝塚II (厚手式土器出土) α=94.7
(5) 南貝塚 (纖維土器出土) α=94.0
(6) 白幡貝塚 (纖維土器出土) α=95.5
(7) 白幡貝塚 (纖維土器出土) α=94.6
(8) 南加瀬貝塚 (彌生式土器出土) α=94.5
(9) 久ケ原貝塚 (彌生式土器出土 甲野勇氏採集) α=95.1

である。故に再び言及するを避けて直にα係數のみより本溪谷内貝塚を整理分類すれば次の通りである。(第十二表參照)

上表を見て吾々の知る所は亦各型式は大體現在の考古學的常識内に上下して表はれて居る。従つて、本溪谷内に於てもα係數を使用する時は各小溪谷による差とか、谷奥、谷中、谷口と云ふ様な區別をする必要がない様に思はれる。

(C)、川崎浦安兩溪谷間の關係

たことは、土器研究の側としても、更に尚一考を要するものでは無からうかと考へるのである。

次に古ヶ場貝塚の蛤は元來の纎維土器に伴ふ蛤の値とは著しい懸隔がある。然し吾々は本法に關する限り此を例外的値なりとする材料をもつて居らぬ。從つて私はこの値も花積上層の値と共に認めるのである。尚斯る程度の値を取るものに、纎維土器出土の白幡貝塚に於るB貝塚のあることは既述した通りである。

(三)、**江戸川溪谷**　江戸川は浦安溪谷の最東を下總臺地に沿つて北より南に走り浦安にひらく。その沿岸の下總臺も貝塚に富むが、次の四貝塚を調査した。

(37)、姥山貝塚　曾つて人類學教室に於て大發掘を試み、多大の成果を齎したことは吾々の記憶に新しい。私の發掘した個所は厚手式土器の出土を見た。

(38)、堀内貝塚　堀之内式土器を出土せしむるものとして有名な貝塚で、純鹹性貝塚で特に「きしやご」の出土が目立つ。

(39)、上本郷貝塚　純鹹性貝塚で蛤を主とする、土器は厚手式土器を出土した。

(40)、上新宿貝塚　淡鹹性貝塚で薄手式土器を出土する。

以上の四貝塚の蛤につき測定した結果が第十一表である。

即ち此等の値は吾々の常識內に存する所より本溪谷內に於ても既述の諸溪谷と同一の意味に於ける變化が認められることがわかる。

(四)、結　言

浦安溪谷は以上で終ることにする。既に各溪谷に於て明かな如く係數間の關係は川崎溪谷に於けると全く同一

第十表

番號	要目 貝塚名	個數	α	β	$\alpha+\beta$	1/p	1/d	1/h	n	備考
36	眞福寺	56	96.5	107.1	203.6	1.26	3.90	8.80	＋＋	薄手
37	黒谷	16	95.4	108.3	203.7	1.28	3.96	8.68	＋＋	蓮田（材料不充分）
38	花積（Ⅰ）	32	94.4	108.2	202.6	1.25	3.70	7.90	＋＋＋	蓮田
38	(1) 花積（Ⅱ）	47	94.7	108.3	203.0	1.25	3.70	8.23	＋＋＋	厚手
38	花積（雜木）	41	94.6	108.2	202.8	1.25	3.71	8.31	＋＋＋	厚手
39	(2) 南	71	94.9	109.3	204.2	1.26	3.88	8.68	＋＋	蓮田
40	古ケ場	36	95.5	108.2	203.7	1.28	3.98	8.85	＋＋	蓮田

（1）．蛤は第七圖（4）を ｝參照せられ度い。
（2）．蛤は第七圖（5）を ｝

花積下層及び南貝塚は大山史前學會の發表によると共に蓮田式土器を出土することになつて居るが、花積下層の蛤は$\alpha+\beta$に關しては古形に、南貝塚は中古型に屬して居る。然もαに關しては共に古型に屬するが前者は後者よりも古型の度が强い、此は數字に於ても明かなことである。從つて土器に就き兩者の間に變化があるものか否かを實際に同所で拜見させて頂いた所が少くも同一型式のものでは無いことを知つた。

次に南貝塚と花積上層の土器を比較すると、前者は纖維土器で後者は厚手式土器である。

然るに蛤に於て從來の常識とは全く逆の現象が見られる（第七圖(4)・(5)參照）即ち後者はα.$\alpha+\beta$共に古型を示す。而してαにつき兩者を比較するとき表に示した樣に著しい差がみられる。

私は南貝塚と花積上層よりの値の差を問題とする以上に、厚手式土器の貝塚にして斯る位置に位する古形の蛤が存在すると云ふ點に對して重要視するのである。土器の側よりは未だ斯る現象は見て居らぬが、惟ふに土器の型式論的な編年と實際の個々の貝塚の編年とは常に一致するものでは無い。從つて斯る現在に於てはむしろ非常識とされる樣な値が出

(34)、花積貝塚　慈恩寺丘陵の最南端に位し岩槻臺地とは元荒川に依つて約 4000 米の距離に相對峙する。大山史前學研究所の發掘により上下の二層に分れ其の間には薄い黑土の中間層が發見せられた。土器に於ても下層よりは纖維の混入强度の土器を上層よりは無纖維の厚手式土器の出土を見た。共に純鹹的貝塚で「はいがい」、「はまぐり」、「かき」が多い。當貝塚に於ても亦大山研究所々藏の蛤を使用した。此の臺地に沿つて約 300 米北方雜木林内にも貝塚が存在する。純鹹的貝塚で、「はまぐり」、「かき」、「あかにし」を主とし、土器は厚手式で、二重貝層の上層式と類似的關係を示した。今此處を花積雜木林貝塚と假稱することとする。

(35)、南貝塚　花積貝塚と非常に接近した距離にあり、貝は純鹹性で「かき」「はまぐり」を主として出土した。土器は纖維土器を出土する。

(36)、古ヶ場貝塚　花積貝塚より 3000 米程臺端に沿つて西北に進んだ位置にあり。貝塚の性質は純鹹性で「かき」、「はまぐり」「あかにし」の出土が著明である。土器は纖維を含み此の式の土器としては可成に固燒で光澤を有して居る。

此等5貝塚出土の蛤間の關係を例によつて第十表に示してあるが、大體に於て現在までの常識と一致するが一二困難なる問題に逢着する。花積二重貝層にて當然位層學の示す所により上部が下部よりも新型を示すべき筈であるが、然も實際に於て斯る關係が見られる。

花積上層を花積雜木林貝塚を比較する時土器に於ては等しく厚手式土器である。然も實際測定上に於ても兩者相等しい値を示すので花積貝塚に於ける厚手式の値は大體 94.7 と見て差支へ無い。

第九表

番號	要目 貝塚名	個數	α	β	α+β	l/h	l/d	l/p	n	備考
28	東貝塚	109	96.3	107.8	204.1	1.28	3.94	91.0	++	薄手
29	東本郷	84	96.4	108.0	204.4	1.28	3.78	8.92	++	同
30	安行村猿貝	13	96.2	107.9	204.1	1.28	3.96	9.07	++	同
31	神根	70	96.2	107.8	204.0	1.28	3.66	9.29	++	同
32	小谷場	70	94.8	108.1	202.9	1.26	3.74	8.17	++	薄田
33	文藏	31	94.5	108.2	202.7	1.25	3.72	8.20	+++	同
34	(1)白幡(Ⅰ)	27	94.6	108.9	203.5	1.26	3.84	8.14	+++	同
34	(2)白幡(Ⅱ)	40	95.5	108.2	203.7	1.27	3.83	9.04	++	同（白幡(Ⅰ)に比し粗し）
35	別所	32	94.8	107.8	202.6	1.24	3.82	8.28	+++	同

（1）．蛤は第七圖（7）を ｝參照せられ度い。
（2）．蛤は第七圖（6）を ｝

従つて各々の蛤が互に近い値を示したことは又偶然ではない。後半の大宮―浦和丘陵南端に近き四貝塚は何れも纖維土器を出土し、比較的古い遺蹟と考へられることと一致して、蛤が古形を示すことは、それ自身及び前半と對比して、ここでも年代的變化を裏書きするものの様に思ふ。此の場合白幡貝塚にては同一場所にて二種の蛤を發見し、更に2種の土器の存在を豫想し得たことより兩貝塚の値は共に本來の値であると考へる。

（二）、**元荒川溪谷**　（柏崎村眞福寺貝塚、黒谷・花積・南・古ヶ場。）

（32）、柏崎村眞福寺貝塚　甲野勇氏の大發掘に引きつづき、人類學會創立 50 年記念の遠足地として吾々に親みのある貝塚である。貝塚の性質は主淡的で蛤は可成少い方である。土器は薄手式を出土する。

（33）、黒谷貝塚　眞福寺の南方約 2000 米の臺上にあり、純鹹性貝塚で「はいがい」が最も多く蛤は全く稀である。土器は纖維土器を出土する。

(27)、神根村石神卜傳貝塚　赤山・新井宿にまたがり三個の貝塚群より成るが共に淡鹹性貝塚で薄手式土器を出土する點で共通して居る。

以上は鳩ヶ谷丘陵上にある貝塚であるが、以下は芝川(見沼中惡水)を隔てて、對岸の大宮—浦和丘陵で然も荒川に沿つた貝塚である。

(28)、芝村小谷場貝塚　石神貝塚の西方 5000 米の臺端にあり主淡に近い淡鹹性貝塚であり、纖維土器を出土する。

(29)、六辻村文藏貝塚　小谷場貝塚の西南方約一粁の臺端近く存在し主鹹的貝塚で纖維土器を出土する。當貝塚は種々の都合で發掘が出來なかつた爲大山史前學研究所々藏の蛤を使用した。

(30)、白幡貝塚　前貝塚の西北方 1000km の急傾臺端に近く存在し纖維土器を出土する此の貝塚も材料を得るまでの發掘に至らなかつたので大山史前學研究所々藏のものの使用を得た。研究所發表によると臺上に2個所を發見し此を A.B と呼んで共に蓮田式土器出土と記載してあるがその各々より得た蛤は、明に形態的に差があることを發見したので(第七圖(6)・(7)參照)測定後改めて、土器を拜見すると同一のものではない樣に思はれるが詳細は何れ研究所に於て發表せられることと思ふ。

(31)、六辻村別所眞福寺貝塚　白幡貝塚の西北方一粁の地點にあり主鹹性貝塚で「かき」の出土が多い。土器は纖維を含む形式のものである。

此等の8貝塚に於て蛤の間に如何なる關係があるかは次表の通りである。

鳩ヶ谷丘陵上に於ける前年の四貝塚は共に薄手式土器を出土し、年代の互に近き關係にあるのを思はせる

第八表

番號	要目／貝塚名	個數	α	β	$\alpha+\beta$	l/h	l/d	l/p	n	備考
32	西ヶ原	45	96.1	107.3	203.3	1.26	3.84	9.05	+	薄手
23	上十條	11	94.6	107.3	201.9	1.25	3.80	8.61	++	蓮田（材料不充分）
24	袋[1]（Ⅲ）	121	96.8	107.4	203.2	1.28	4.02	9.06	+	彌生式＋埴器
24	袋（Ⅱ）	122	96.5	107.7	203.2	1.27	3.94	9.28	+	薄手式
24	袋[2]（Ⅰ）	83	94.1	107.5	201.6	1.24	3.60	7.70	++++	土器ヲ合マズ
25	小豆澤	65	98.2	107.4	203.6	1.26	3.93	9.32	+	薄手式
26	中臺	99	94.9	108.1	203.0	1.25	3.68	8.08	+++	諸磯＋蓮田
27	西臺	25	97.8	106.8	204.6	1.20	4.18	9.84	±	近代

（1）．蛤は第四圖(2)を參照せられ度い。　（2）．蛤は第七圖を(1)參照せられ度い。

のである。

尙袋貝塚に於て埴器を伴ふ蛤と縄紋土器を伴ふ蛤とは肉眼的には全然區別がつかない。從つて測定前には或は同一値を示す代のものかと云ふことを考へて居たが回を重ねて採集及び測定するも變化がある。位層的には貝層の上部に於て埴器を、下部に於て縄紋土器を見る。私は貝塚を貫通する道の左右に於て各式の土器を最も多く出土する位層を選び一ヶ所で材料を得た。その高さの差は約一米である。

二、荒川右岸（新郷村・東本郷・同東貝塚・安行猿貝・石神卜傳・小谷場・文藏・白幡・別所貝塚）

(24)、新郷村東貝塚　淡鹹性貝塚で「はまぐり」「しじみ」を主として發見する。土器は薄手式である。詳細は人類學雜誌第四十八卷第十一號を參照せられ度い。

(25)、新郷村東本郷貝塚　東貝塚の南方 1000 米の臺端上にあり淡鹹性貝塚で土器は薄手式土器を出土する。

(26)、安行村猿貝　東貝塚の西北方 1000 米餘の地點にあり、貝塚は純淡に近い淡鹹性貝塚であるが「はまぐり」の出土は稀である。土器はやはり薄手式土器である。

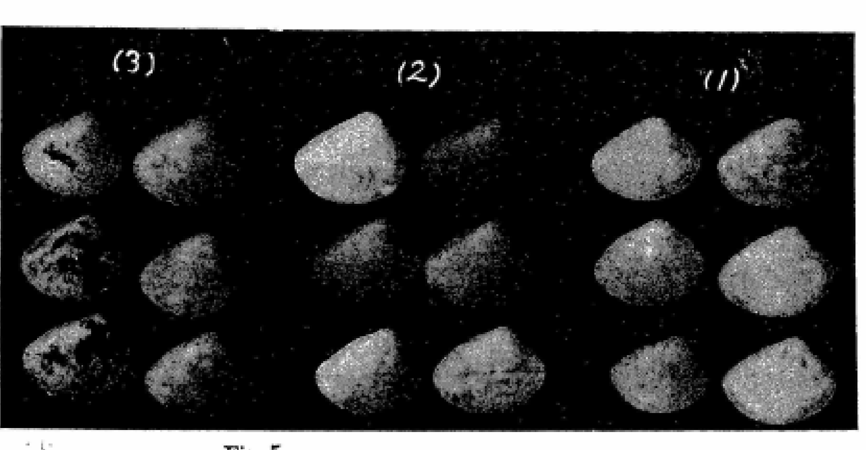


Fig. 5.

1. 浦安現生產蛤 α=98.7　2. 袋貝塚第三層蛤（彌生式及び埴部式土器出土）α=96.8
3. 上本鄕貝塚蛤（厚手式土器出土）α=95.8

器は纖維土器及び諸磯式土器を伴出し、その上の土層よりは薄手式土器を出土した。

[23]、西臺貝塚　中臺貝塚とは谷一つへだてて300米北方にあり貝殼はたにしをもつて主とし此に少量の「はまぐり」を混ずる。土器は近代的な「かはらけ」様の土器片を少量出土し、他に長さ15cmの刀劍様鐵器の出土を見た。從つて此の貝塚は近代に形成されたものであらうと考へる。

以上の七貝塚を谷口の浦安現代蛤と對比してみると次の通りである。

左表に於て現はれた結果は袋貝塚下層蛤、中臺諸磯式蛤・清水坂貝塚蛤が古形を示し、西ヶ原・小豆澤・袋貝塚の順で、更に西臺貝蛤次に浦安と云ふ順は全く常識と一致し、此の溪谷でも本誌の可能性を暗示する。

所で袋貝塚下層の蛤（袋Ⅰは$\alpha \cdot \alpha+\beta$及び他の係數に於て袋Ⅱ・Ⅲとは著しく遠ざかり、尙全然遺物の無いこと及び出土狀況が普通の貝塚と少しく異つて居る様に感ずる所より、私は或は人類文化とは關係の無いものでは無いかと考へる

土器は既に本誌上にて中根君郎氏及び關口竹治氏の報告のある通り新しい彌生式及び埴器並びに繩文式中薄手式土器を伴ひ、何れも量は極めて少いものである。(袋Ⅲ・Ⅱ)

Fig. 4. 川崎溪谷内主要貝塚出土の蛤のα角變異曲線

Ⅰ子母口(蓮田)　Ⅱ馬込(厚手)　Ⅲ諏田(諏部)

Ⅳ小田(近代)　Ⅵ北ノ方(現代)

此處に興味あることは遺物を含む蛤の層は黒色の腐蝕土であるが此が盡きると直に純然たる黄色砂層に移行する。此の層は非常に厚く、當遺跡及び附近一帶の地盤を形成するのであるが、此の層中よりも蛤を出土する。(袋Ⅰ)

此の蛤につき著しい點は上層のそれ（第四圖(2)參照）と全く形を異にすることである。即ち、上層に比しはるかに圓形を示して居る(第七圖(1)參照)尚出土狀態に於て大部分が水平の位置に相重疊し、合はせ貝も上層よりもはるかに多く、始めは數も極めて多いが下に進むと共に次第に疎となり遂に完全に砂層のみとなる。而して此の貝層よりは遺物は全々發見せられない。

この事實は研究の當初より發見したことで爾來興味をもつて見て來た所のものである。

(21)、小豆澤貝塚　袋貝塚の西方1000米臺端にあり、鹹淡性貝塚で土器は薄手式のものである。

(22)、中臺貝塚　小豆澤貝塚の西方3000米にあり、しじみを主とし蛤、あかにし此につぐ、貝層よりの土

第七表　川崎溪谷內貝塚出土蛤の角計測表

文化	No.	要目 / 貝塚名	個數	α-角	σ(α)	Diff(α)	α+β
現代	1	川崎	110	98.8	1.7	——	206.7
近代	2	小田	86	97.8	1.9	0.8±2.5	205.0
	3	姥ヶ森	49	97.8	2.1	1.0±2.7	204.6
	7	駒岡(Ⅱ)	21	97.2	1.9	1.6±2.5	204.6
祝部式	2	渡田	86	96.8	1.8	2.0±2.5	204.6
	5	生麥岸	15	96.4	1.3	2.4±2.1	204.5
薄手式	17	下沼部	116	96.1	1.8	2.7±2.5	203.5
	6	下末吉	117	96.0	2.0	2.8±2.6	203.4
厚手式	16	千鳥窪	112	96.2	2.0	2.6±2.6	253.2
	番外	榎ヶ岡	15	95.9	1.9	2.9±2.5	202.9
	13	馬込	111	95.8	2.0	3.0±2.6	203.3
諸磯式	11	矢上谷戸	115	95.1	2.0	3.7±2.6	203.5
	7	駒岡(Ⅰ)	49	95.0	2.0	3.8±2.6	202.3
	10	箕輪	32	95.0	2.0	3.8±2.6	201.8
	14	鷲ヶ谷	78	94.9	1.9	3.9±2.5	202.4
	18	六所東	74	94.9	1.4	3.9±2.2	203.1
	9	高田	37	94.9	2.1	3.9±2.7	202.2
	15	久ヶ原	97	94.8	1.8	4.0±2.5	203.0
趾田	12	子母口	144	94.5	2.2	4.3±2.8	202.1
	8	菊名	92	94.4	2.1	4.4±2.7	202.4

註．千鳥窪(16)．馬込(13)．貝塚は攪亂せられざる貝層より厚手．及び薄手が相混じて出土することは既に本文に於て述べた．この成因に就いては色々の可能性はあるとしても．少くも互に近い年代に於いて形成せられたものと考へる。

土器は薄手式土器を出土する。

(19)、上十條清水坂貝塚　西ヶ原貝塚と同一臺上にて更に西北 3000 米の地點にある。純鹹貝塚で纖維土器を出土する詳細は小生人類學雜誌第四十九卷第五號を參照せられ度い。蛤は貝塚の面積が小なる爲と貝の破壞し易さと發掘が研究前の爲とで材料が不充分であるが他の破片よりも明に古型を示てし居た。

(20)、赤羽袋貝塚　更に同一臺上を西北三千米臺地の直下沖積層上にあり主鹹產貝塚で「はまぐり」を最多とし此に「しじみ」「あかにし」「かき」を少量混ずる。

時によつて具態的に數字を擧げられぬ樣な場合に形の特徵だけでも明記することが必要になつて來る。
故に私は蛤の形の變化を次の如く分類した。即ち

古型、中古型、新型の三で肉眼に於て見た時の綜合的な形態の印象を示すものでα係數にして云へば、

古型――αが95°.5以下のもの。

中古型――αが95°.5より97°.0の間にあるもの。

新型――αが97°.0以上のもの。

此の外α+βに關しても古型、中古型、新型が區別出來るが必ずしもαの場合と完全に一致するものではないことは下沼部貝塚と矢上谷戸貝塚に於て明かである。

× × × × × ×

次に本溪谷内に於ける貝塚につき、各型式毎に・係數の値の順に分類表示する時は次の樣である。

第七表に明かな如くα角を用ひる時は相當の程度まで文化と一致し得ることは一面蛤の形態の年代的變化を裏書きし、他面變化による石器時代編年の可能性を與へるものである。

(B)、浦安溪谷編

浦安を溪谷の入口として西北方に廣がる溪谷群の總稱である。

(一)、荒川溪谷

荒川左岸（西原・上十條・清水坂・赤羽袋・小豆澤・中臺西臺）

(18)、西ヶ原貝塚　斯の西ヶ原農事試驗場内貝塚の南方約500米寺院内にあり、鹹水産貝殼をもつて主とし

察した時は同一なる感じを有す。然し遺物より倒底同一年代のものとは考へられない。

この場合αを測定すれば良いわけであるがその他の係數では如何なる結果になるか、1/h 1/d 1/p について檢することにする。

1/h 兩者共に 1.26 である。從つて前述した通りα+βと近似的な意義を有することを知る。然し全く同一な意義を有するものでないことは、又考へられることである。實際に於て多少兩者間に距離を示す場合がある。とに角α+βと近い意味に於て、特別な場合のみ此を用ふることが出來る。

1/d 兩貝塚の蛤の比較に際して厚さdが著しく矢上谷戸貝塚に於て大なることを知るのである。從つて1/dは直に 3.83 に對して 3.94 と云ふ數字になつて現はれる。一般にαが小になると共に1/dと平行して小になるものである。

1/p 本例に於ては矢上谷戸貝塚に於て 8.23 下沼部貝塚に於て 9.07 となり著しい差を示して居る一般に1/d 1/h に比して一層有力な係數である様に考へる。故に肉眼的に觀察する際にも、吾々は好んで蛤を裏返しにしてpの幅を檢する。何故ならαが小になると共に、此と平行してpが大となるからである。然しこれとても時に例外なきを保しないのである。

故に私は今日までαを主係數とし、α+β及び 1/h 1/d・1/p を補助係數と考へて來た。

卽ちαをどこまでも主とし他の係數によつて、確認する一つの檢算的係數と做すべきであると思ふ。

（ホ）、蛤の形態の年代的分類

吾々は蛤の形を見ることによつて古いものであるか新らしいものであるかを大體見當をつけることが出來る。

前者が 108.0 であるにも關らず後者は 106.8 である。從つて矢上谷戸の蛤がより長形であると云ふのはβが大なる結果に外ならない、從つて肉眼的にα角のみより觀察するなら、その形が共に古形を呈せることを知ることが出來る。此の事柄は一般視診のみによつて判斷を下す場合に應用が廣い、然し近々一粁程度の距りにも關らず大體年代の同一なる兩蛤間に、斯くも大なる變化が見られることは何によるものであるか。

矢上谷戸貝塚が直接大なる多摩溪谷に面し、それに反し箕輪貝塚が異る小溪谷、早淵溪谷に沿ふ爲に依つて生ずる矢倉氏の所謂淡水の影響によると考へる時は、兎も角說明が出來る事柄ではあるが、淡水のみによるか否かは疑問である。

(ハ)、β 角

β角間には一定の關係のないことは屢々述べた所であるから、ここではその依つて起る原因に就いて述べたいと思ふ。

前項に於ける$\left(\frac{H_c}{H_p}\right)_{現代} > \left(\frac{H_c}{H_p}\right)_{石器時代}$なる關係により H_c と H_p との變化の方向が異る、卽ち H_c が增加すれば、H_p が減小する、逆に H_c が減少すれば H_p は增加する、H_c が減少する場合は 1 が同時に增して居る。從つて H_c と 1 との變化の方向は同一であると云へる。三角形 A B D に於て底邊 A B が增加若しくは減少する時、高さが共に增加若しくは減少する時は、挾角βには、それ程の變化が波及しないことが考へられる。然も外界の影響に對して不安定である爲にβ間には一定の關係を發見することが出來ないものと私は考へて居る。

(ニ)、他 の 變 數

前項に於て矢上谷戸貝塚と、その對岸なる下沼部貝塚とは共に $\alpha+\beta$ が 203.5°である。卽ち肉眼的に全形を觀

(ハ)、既に述べた様に先端突出度(a)は石器時代蛤に於ては著明に増大して居る。(ロ)に於て述べた H_c が H_b よりもより大になると云ふ現象の大部分は(a)の増大と關係があるものと思はれる。

以上の如く底邊に於て縮小し、高さに於て増大すると云ふ二重の變化によりαは著しく變化が誇張せられる結果となる。

(ニ)、一方現生産蛤の項に於て述べた様に分泌の影響はαには及ばぬらしいので、その變化は增々純粹な年代的變化として現はれるものと思はれる。

(ロ)、$\alpha+\beta$ 角

次に $\alpha+\beta$ 係數より觀察する時は大體土器の變化と平行するが時として非常に本來の値より距ることがある。例へば矢上谷戸貝塚、箕輪貝塚の如きは著しい例である。

卽ち兩貝塚に於ては前述せる如く距離的にも非常に近い關係にあり、然も、土器文化も共に諸磯式土器を主として此に、蓮田式土器を出土する。

今α係數に於て比較する時は前者が 95.1° で後者が 95.0° の如く近似した値を示すが $\alpha+\beta$ に於ては前者が 203.5 にして後者が 20.18° である兩者の差は僅か 1.7° であるが「蛤システム」に於ては非常に大なる差である 203.5 とは對岸(多摩溪谷右岸)なる下沼部貝塚の如き薄手式土器文化の示す値である。

以上のことは肉眼的にも既に大なる差としてみとめることが出來る。卽ち矢上貝塚の蛤は箕輪の蛤に比して遙に長形を示してゐる。從つて石器時代蛤についても、$\alpha+\beta$ とは肉眼的感覺を代表する係數であり、又その變化の依つて起る所は β 角にあるものであると云ふ現代蛤に於る既述の事實が、ここでも適用されるのである。卽ち

の諸磯式貝塚の如きはこれである。

故にα係數による時は蛤の形の變化は川崎溪谷に關する限り地形的關係を無視することが出來る様に思はれる。

卽ち當概貝塚が谷奥にあるか、谷口にあるか、又は淡水の影響が如何かと云ふことは無視して、單に年代的關係のみを問題にすれば良い様である。既に述べた様に東京灣内現生產蛤に於ては長型短型に關せずα角に着目する時は一定値を取ると云ふ事實と對比して興味深く感ずるのである。從つてαに於ける値の變化は全く年代の推移と或る函數的關係を有して居る様に思へるのである。

然らば如何にしてα係數のみ變化を忠實に示し得るか。更に吟味する必要がある。

(イ)、αはlとhに關係する。然もhは石器時代にあつて增大する傾向があることを述べた。故にhを一定にして考へるならlが小になるとも云へる。卽ち三角形ABCに於て底邊が小になる。

(ロ)、今四角形ABCDにて相對するC. Dより對角線ABに下した垂線の長さをH_C, H_Dとする時、兩者の比につき石器時代と現代とを比較すると上表の様になる。

第六表

要目 / 貝塚名	文化	$(H_D/H_C)\times1000$
菊名	蓮田	842
下末吉	薄手	855
駒岡(Ⅲ)	近代	885
姉ヶ崎	現代	902

上表にては蛤が古くなる程H_CはH_Dに比して高くなつて居り、反對に現代に近づく程その長さは短縮しつつH_Dに近づいて行く様にみへる。

一般に三角形ABCに於て底邊ABが一定の場合は高さが增大すればする程その挾角αは減少する。

第五表

番號	要目 / 貝塚名	個數	α	β	$\alpha+\beta$	l/h	l/d	l/p	n	備考
13	馬込	111	95.8	107.5	203.3	1.28	3.90	9.07	++	厚手+薄手
14	蟹ヶ谷	78	94.9	107.5	202.4	1.24	3.88	8.73	++	諸磯
15	久ヶ原	97	94.8	108.2	203.0	1.25	3.82	8.54	+++	諸磯+蓮田
16	千鳥窪	112	96.2	107.0	203.2	1.27	3.95	8.63	++	薄手+厚手
17	下沼部(1)	116	96.1	107.4	203.5	1.26	3.94	9.07	++	薄手
18	六所東	74	94.9	108.2	203.1	1.26	3.91	8.35	++	諸磯

(1). 蛤は第七圖(2)を參照せられ度い。

第(二)(三)(四)(五)表は地理的に比較的近い關係にあるものを夫々一群として考へた場合の比較表であるが各群内に於ては何れも蛤の形の變化とくにα角の變化と編年的にみた土器の變化とは平行して居ることを知つた。殊に殆んど相隣る程度に近接し從つて、近似的條件内にあつたと思はれる千鳥窪貝塚及び久ヶ原貝塚にあつては土器論よりは前者が新しく、後者が舊いことは先ず異論の無い所であらう。然るに蛤に於ても前者は後者よりも遙に新型を示して居る。又同樣な例として駒岡臺上に於いては同一地點に於て遺物より著しく年代に懸隔のある二種の貝塚があり、然も此等よりの蛤に於ても著しい差をみとめることが出來た。このことに關聯して興味ある挿話がある。即ち私は本誌上に於て駒岡臺上に諸磯式貝塚のあることを承知して居た。曾つて大山研究所の御厚意で同所の蛤を調査中、本來とは著しく異つた形を示す一群の蛤のあることを發見し、必ずや第二の貝塚が存在するであらうことを豫想した。後私自身の發掘によつて、その存在を確認することが出來た。

次に可成遠隔の土地にして地理的條件を異にする樣な貝塚間に於てもα係數に依る時は同一型式間に於ては互に近い値を、又異種型式の遺蹟間に於ても、亦常識的な値を示して居る。

例へば下末吉貝塚と下沼部貝塚の如き、又は駒岡貝塚と六所東、箕輪等

めぬ。

以上の六貝塚出土土器に於て新舊がある如く當概貝塚より蛤の形態に於いても此に大體平行した變化が認められる。即ち第五表の通りである。尚以上の外、彌生式貝塚として久ヶ原貝塚を測定して居るが彌生式文化はまとめて後編に於て述べるのでここでは省略した。

× × × ×

（四）、結　言

以上で川崎溪谷に沿ふ貝塚の展望を終ることにするが、上述の諸項目によりの測定の結果は吾々に何を教へるか。吾々の先輩の努力に依つて一つの編年的結論として纖維土器（蓮田式土器）・諸磯式土器、つゞいて厚手式・薄手式・祝部式土器文化の順に進展したと云ふことは地方的に、又個々の貝塚に於ては幾分のはずれはあるとしても大局より見て、又型式論的には正しいものである様に思ふ。

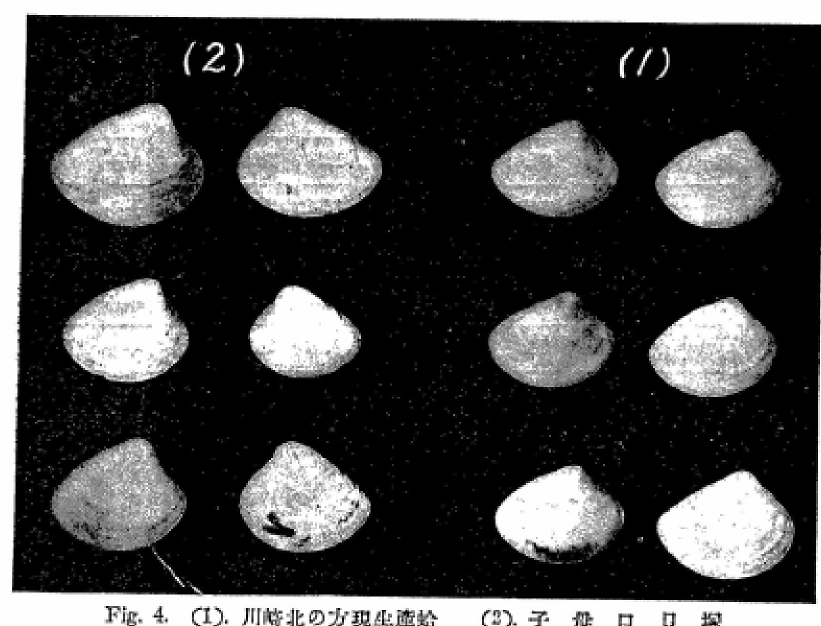


Fig. 4.　(1). 川崎北の方現生産蛤　(2). 子　母　口　貝　塚

翻へつて蛤の形態的變化と土器型式とはどんな關係があるか。

（イ）、α 角

(12)、馬込貝塚　省線大森驛の東北2粁、多摩溪谷の一小灣の奥深く位置し鹹水性貝類をもつて構成される。出土する土器は厚手式を主とし、薄手式が此に混じて居る。然も兩者間に明確な位層を發見せずして混在する。

(13)、雪ヶ谷貝塚　馬込貝塚の東3km三小灣をへだてて馬込貝塚と相對して居る。蛤を主とする鹹水性貝塚である。土器は諸磯式土器を出土する。

(14)、久ヶ原貝塚　雪ヶ谷貝塚の南方千五〇〇米、臺地の傾斜面に存し「はまぐり」をもつて最多とする。土器は出土が少いが纖維の混入ある蓮田式及び無纖維の諸磯式土器が存在する。

(15)、千鳥窪貝塚　前記久ヶ原貝塚の南三百米、非常に接近した位置にある、純鹹性貝塚で「はまぐり」をもつて最多とするがその發育は不良である。土器は末期的と思はれる厚手及び薄手式土器を出土し何等位層的關係を示さない。

(16)、下沼部貝塚　千鳥窪貝塚の西北二千米多摩川に接近して臺上にあり、「はまぐり」をもつて最多としその發育は良好である。土器は薄手式土器を出土する。

(17)、六所東貝塚　下沼部の西北4km河原に沿つて臺端にあり、蛤の發育は不良である。土器は蓮田式土器及び諸磯式を出土するが何等位層的關係を認

第四表　多摩川溪谷左岸

番號	要目／貝塚名	個數	α	β	α+β	l/h	l/d	l/p	n	備考
9	高田	37	94.9	107.3	202.2	1.25	3.86	8.52	++	諸磯+蓮田
10	箕輪	32	95.0	103.8	201.8	1.25	3.87	8.49	++	諸磯+蓮田
11	(1)矢上谷戸	115	95.1	108.4	203.5	1.26	3.83	8.23	++	諸磯+蓮田
12	(2)子母口	144	94.5	107.6	202.1	1.25	3.75	8.12	+++	蓮田式

(1). 蛤は第七圖(3)を參照せられ度い。　(2). 蛤は第三圖(2)にあり。

左岸の貝塚として、高田・箕輪・矢上谷戸・子母口貝塚を調査した。尚日吉村南加瀬（彌生式出土）貝塚も調査したが彌生式はまとめて後編に於て述べる。

（8）、高田貝塚　多摩溪谷に入れるには或は異論があるかも知れぬが矢上谷戸・箕輪貝塚に近接する關係上本溪谷に數へ入れることとした。主鹹性の貝塚ではまぐりを最多とする、外小量の「たにし」「しじみ」の淡水性貝殼を混ずる。土器は私が發掘した場所は諸磯式土器を出土したが散布的には厚手式薄手式の土器をも發見することが出來る。

（9）、箕輪貝塚　高田貝塚の東2kmの地點にあり純鹹性で蛤を最多としその外「しほふき」「かがみ貝」等を混ずる。はひがひは著明でない。土器は諸磯式土器を主として此に纖維ある蓮田式を混ずる。

（10）、矢上谷戸貝塚　箕輪貝塚の東五百米一つの灣をはさんで相對峙する、貝の性質は純鹹性で蛤を最多としはいがひ、あかにし等を混ずる。遺物は諸磯式土器を出土す。

（11）、子母口貝塚　矢上谷戸貝塚の西北四粁の地點にあり、純鹹性貝塚で蛤を主としはいがひ、あかにしがある。

土器は纖維を含み無紋厚く時に條痕を有する土器を出土する、以上の四貝塚中にて子母口貝塚の最も古き貝塚であらうと云ふことはほぼ常識的になつて居るが、「はまぐり」に於ては如何なる關係が見られるかを測定して見たのに前述の概念に最も適合する値は a. $1/d$ $1/p$ で就中 a による値は最もよく一致するものの樣である。（第四表參考）

二、多摩川右岸（馬込貝塚・雪ケ谷・久ケ原・千鳥窪・下沼部・六所東貝塚）

（6）、駒岡貝塚　下末吉と同一臺上にてこれより更に西北千米の地點にあり。純鹹、蛤を主體とし「はいがひ」「さるぼう」「おきしじみ」等を伴ふ。土器は諸礒式を主體とし此に纖維を含む蓮田式を混ずる。（Ⅰ）尚此の種の貝塚の外大山史前學研究所にては、近世の土器を含む貝塚を檢出して居る。此はほとんど「たにし」によつて形成されて居る。（Ⅱ）

（7）、菊名貝塚　下末吉貝塚の西西南四千米、純鹹性で「はいがひ」「蛤」を主體とし「おきしじみ」「かがみがひ」を伴出する。土器は蓮田式土器を出土せしむるので有名である。その外石器・獸骨の出土がある。以上の貝を測定によつて比較を行ふと上の通りである。（第三表）

第三表　鶴見川溪谷

番號	要目／貝塚名	個數	α	β	$\alpha+\beta$	l/h	l/d	l/p	n	備考
6	下末吉	111	96.0	107.4	203.4	1.23	4.01	9.50	＋＋	薄手（堀内式）
7	駒岡（Ⅰ）	49	95.0	107.3	202.3	1.26	3.78	8.62	＋＋＋	諸礒＋蓮田
7	駒岡（Ⅱ）	21	97.2	107.4	204.6	1.29	4.11	9.53	±	近代（大山研究所所藏）
8	菊名	92	94.4	108.0	202.4	1.26	3.77	8.24	＋＋＋	蓮田式貝塚
番外	櫻岡	15	95.9	107.0	202.9	1.26	3.96	9.42	＋＋	厚手（資料不充分）

扨年代的に駒岡（Ⅱ）、下末吉、駒岡（Ⅰ）、菊名の順であると云ふことは考古學的常識によつて大體認容さるべき關係である。上表に於て明なるが如くβ以外の總てに於て大體同一の結果を示して居る。特にα係數に於て正確である樣に思へる。

（三）、多摩川溪谷

秩父山地より發し、東南に向ふに從がひ愈々河幅を增し多摩丘陵・武藏野丘陵を廣く境する。兩岸には遺蹟豐富である。

一、多摩川左岸（高田・箕輪・矢上谷戸・子母口貝塚）

（3）、**渡田貝塚**　此の附近一帶が近代に形成せられた貝塚であるにも關らず祝部土器を出土する唯一の貝塚である。

貝殼は大部分が蛤で此に少量のかがみ貝を混じて居る。貝は可成大形である。

（4）、**生麥岸貝塚**　三角洲が盡きた鶴見台の台端にあり同じく祝部土器を出土する。

以上の四貝塚よりの蛤と、此に現在の川崎市外北ノ先海岸採集の蛤を加へて、前項に於て述べた方針に從つて比較を行へば上の通りである。（第二表）、表に於て明な如く地理的に全く相似的關係にあるにも關らず、土器の性質が異ると共に蛤の形態が變化し然も此の關係を最も忠實に示すものはα係數よりの價である。この事柄は先ず注意して頂き度い。

第二表　川崎三角洲上貝塚出土はまぐり

番號	要目／貝塚名	個數	α	β	α+β	l/h	l/d	l/p	n	備考
1	川崎北ノ方	110	98.8	107.9	206.7	1.31	4.26	10.37	±	現代
2	小田	86	98.0	107.0	205.0	1.28	4.06	9.68	±	近代
3	姥ケ森	49	97.8	106.8	204.6	1.29	4.08	9·47	±	近代
4	渡田	83	96.8	107.6	204.6	1.28	4.06	9.22	++	祝部
5	生麥岸	15	96.4	108.1	204.5	1.30	4.26	9.79	++	(1)祝部 (2)材料不足

（二）、**鶴見川溪谷**（下末吉、駒岡、菊名貝塚）

多摩川よりもやゝ、南方を流れ沿岸所々に鹹水性貝塚を發見する。表題の貝塚の外折本貝塚、榕貝塚があるが、「はいがい」を主とし蛤を發見することが出來なかつたので割愛した。

（5）、**下末吉貝塚**　前項（一）に於ける近世貝塚群の眞西の臺上にあり、純鹹性で蛤を主體としはひがひ、さるぼう、かがみ貝を伴ふ。土器は薄手式中堀之内式を主體とし安行式を混ずる。

(一)、荒川溪谷　(二)、元荒川溪谷　(三)、江戸川溪谷

私は以上の溪谷に沿ふ、諸貝塚に就て、これに伴ふ蛤を既述の方針に從つて調査した結果を述べる以外に便宜上各溪谷別に最初、遺跡の地理的關係、鹹度、並びに土器の形式に就いて略述し様と思ふ、然し此の說明は私が蛤採集の際、見た所見であるから必ずしも當概貝塚に普遍的であるか否かは知らない。又各貝塚を詳細に述べることは本編の目的でもないし、又紙面が許さないので必要な程度に於いて個條書の記載を行ふに止めて置くことを豫め御承知願ひ度い。

(A)、川崎溪谷編

(一)、川崎三角洲（小田貝塚、姥ヶ森貝塚、渡田貝塚、生麥岸貝塚）

多摩川の流れによつて運ばれた比較的新らしい地層であつて、吾々は狹い範圍に互に接近して極く近世の貝塚を發見することが出來る。卽ち川崎市外渡田、小田一帶に渡つて貝殼の出土が見られ、小字に貝塚なる名稱がある程である。新編武藏風土記川崎村の條に「萱野芝原にして秣場も共のあたりにあり」とあるのは恐らく此等の貝塚を指して居るものと思はれる。現在急速度の發展により大部分市街地と化して居るが唯だ社寺のある所のみ貝塚としての姿を保つて居る。材料蒐集に際し在川崎市榎本八郎氏の御厚意を感謝する。

(1)、小田貝塚　現在墓地によつて占められて居る。貝層は約一米餘で貝殼の大部分は蛤で、之に小量の「あさり」を混じて居る。伴出遺物としては最も近代的な「かはらけ」様土器が出土するのみである。

(2)、姥ヶ森貝塚　貝層は前者に比して薄く約六十糎であり、主として蛤によつて形成され貝と共に少量の近代的色彩濃厚な土器破片及び鐵器の出土を見た。

眼的外形の差と完全に一致して居ることがわかる。然らばαとβとを比較して考へる時何が變化を起させるかと云ふに、それはβ角の强い變動に外ならないのである。此に反してαは殆ど變化の無いものであることを知るのである。實際αとβとを別々に着目しつゝ蛤を觀察する時、浦安產蛤ではその下半が强く突出する故圓形に、姉ヶ崎產蛤では下半の突出弱き爲、全體として細長き感じを起させるものであることが判る。此の事實は追々述ぶる所であるが石器時代貝塚出土の蛤に於ても適用される。

以上の變化は何によつて起るか、蛤の相隣る二つの成長線間の距離を見るに、左右兩端に至る程その巾が狹く中央に至つて最も廣い、故に若し諸種の原因によつて分泌に變化が起るとすれば中央に於て最もその影響大にして、左右兩端に於ては比較的影響が少い、從つてαは總てに共通なものであらうと考へる。尙αの本質に就いては後篇に再び述ぶる所がある。從つて現代の蛤に就いて次のことが云へると思ふ。

一、$\alpha+\beta$ 角は蛤の全形卽ち肉眼的感覺を代表し、地方的な形態の變化と平行して、その値が變化する。

二、α角は之に反して比較的肉眼的感覺に支配されず大體一定値 98.7 度を取る。

三、l/h l/d l/p もほとんど一致して石器時代への應用の可能性を暗示する。

二、石器時代繩紋式貝塚出土はまぐり

石器時代貝塚は東京灣に注ぐ溪谷の中次の二大溪谷に沿ふものについて主として調査した。

(A)、川崎溪谷　東京灣の西南端にある川崎三角洲上に流入するもので吾々は更に多摩川溪谷、鶴見川溪谷の二溪谷とすることが出來る。

(B)、浦安溪谷　現東京灣の最奥部に存在する浦安三角洲に開口するもので私は便宜上次の三つとする。

第一表　現生産はまぐり

番號	要目／地名	個數	α	β	$\alpha+\beta$	$\zeta(\alpha)$	l/h	l/d	l/p	n	備考
21	(1) 浦安	72	98.7	107.6	206.3	1.7	1.31	4.22	10.40	±	丸キ觀最モツヨシ
45	千葉	69	98.6	107.8	206.4	1.8	1.32	4.26	10.32	±	
1	(2) 川崎	110	98.7	107.9	206.7	1.7	1.31	4.26	10.37	±	
46	姉ケ崎	53	98.8	108.3	207.1	1.5	1.31	4.25	10.43	±	長形觀最モ强度アリ
	平均	76	98.7	107.9	206.6	1.7	1.31	4.25	10.38	±	

(1). 蛤は第四圖(1)にあり。　(2). 蛤は第三圖(1)にあり。

も地方的に存在しはしないであらうか。

此の事柄に關しては矢倉和三郎氏(4)の研究がある。卽ち氏は既に普通蛤と稱されるものにも著しく丸味の强いもの、中庸のもの、及び後方に延びた型のあるのを認めて居られる。この中中庸のものが最も普遍的で、東京産のものも亦この型に屬すると云ふ。結論としては、一般に河口若しくは內海の淡水を混ずべき場所には長型のものを産し、直接外海に面せる場所或は潮流の烈しい所には丸型のものを産すると。私も此等の變化を確かめる事が出來た。

卽ち本編に取扱つた貝塚は總て東京灣を中心とした地方のものであるから、先ず現在東京灣に生産する蛤を調査することの必要を認め、千葉縣姉ケ崎海岸、同千葉海岸、浦安海岸、神奈川縣川崎北の方海岸の四海岸より採集の蛤の中檢査したのに、姉ケ崎海岸及び川崎海岸のものは、浦安及び千葉海岸のものに比してやゝ長型を示して居る。就中姉ケ崎に於て最長である。

今以上四個所の蛤を前記の諸要目に從つて測定を行つた結果を記するなら上の通りである。(第一表參照。)表に示す如く大體に於てその値は一致して居る、然し形に於て變化のあることは既定の事實である。自分の經驗によると相當多くの數の平均に於てα及$\alpha+\beta$角の$0.5°$以上の差は練習によつて既に肉眼的に差として認識することが出來る。故に$\alpha+\beta$の變化は、ほぼ確定的な差で、然も肉

（ロ）、ある貝塚にあつては―例へば中台貝塚、新郷、村東貝塚の如き―蛤の形ちが大で時に 13cm に達するものすら存する、私の經驗によると一般に餘り大になり過ぎても $\alpha.\beta.\ \alpha+\beta$ は小になる傾を有する樣に考へられることと何れの貝塚に於ても斯る大形のものを發見する解でもなく、又一つの貝塚としてもさ程多く發見するものでは無い、多くの貝塚中1か 8.5cm 位までは比較的多く發見される所から最長の極限を 8.5cm と定めた。

（二）、蛤の採集　本報告中の材料は事狀の許す限りつとめて自ら發掘し自ら採集した。中には他の人の手によつて、特に大山史前學研究所々藏の貝塚鹹度決定用として一個所にて多量に採集した貝より蛤を選んで測定に用ひたのもある、此等は本文に於き斷つてある。

採集に當り當該貝塚より出土する土器を先ず確認し、次に此を含み然も攪亂されて居らぬ處女層より完形のもののみ採集した。勿論位層的關係をも考慮に入れて等高にある層より行ふ樣に努めた。

（三）、蛤の左右殼　蛤の左右殼は吾々の測定の範圍に於ては全く變化なきものと認め何等區別せずに採集した。

（四）、測定に必要なる個數　出來得る限り多く測定すればそれに越したことはないが、無制限に採集することも出來ない。私の經驗によると 50—100 個を用ふれば大體の値を知ることが出來る樣である。

各論

一、現生産はまぐり

以上舊い貝塚の蛤と現代のそれとの間には、可成著明な差が認められるが、同様な意味の變化が、同じ現代で

本編に現はれる貝塚の地理的分布

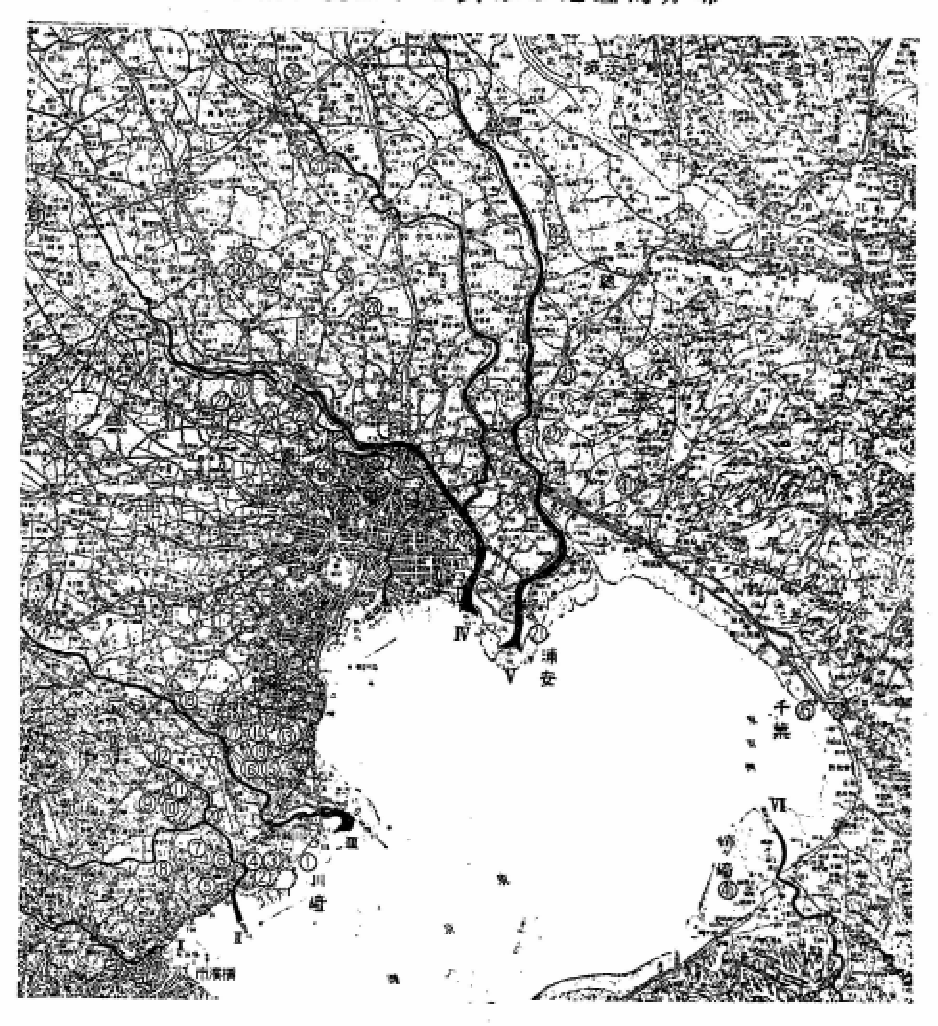


Fig. 3. Ⅰ帷子川 Ⅱ鶴見川 Ⅲ多摩川 Ⅳ中川〔荒川〔南〕+元荒川〔北〕〕 Ⅴ江戸川 Ⅵ養老川

（圖中圓内數字は本文遺跡番號と一致するものとす）

番上の目盛のみを用ひた。從つてαでは角を左の方向に、又βでは右に讀むことになる。

（二）、1. h の測定法　A. B と C. D とは互に直交せぬ爲 h の測定にも困難を感ずる所より、私は蛤專用の物指を作つた（第二圖參照）即ち一見蓋のない箱の相隣る二壁を取り去つた樣なものである。箱の底には非板目に1粍まで目盛が、兩壁の交る一角が0となる樣に刻んである。今其底及び側壁の目盛により A B が一壁に平行する樣に調節しつつAＡ及びCを兩壁に接せしめ最突出點の目盛を讀めば1及び h を同時に知ることが出來る。

（三）、d の測定法　豫め厚さの判つたガラス板例へばオブイェクトグラスの如きものを蛤の內側にあて、此を含めたままキャリパーを用ひて厚さを測り、後より、ガラスの厚さを引いて置く。此の場合、齒の突出せる個所は避けるべきである。

（四）、p の測定法　同じくキャリパーを用ひ、その柄と第一圖 (3) に於ける底線 C D とを平行せしめ、次に (1) に於ける C D 線の方向に從つて p なる距離を測定する。

次に計測に必要な材料蒐集に當り私の取つて來た注意事項を述べることにする。

（一）、長さの制限　測定に定り形及び大小を區別せずに全く自由に材料を取つたかと云ふに、一般に小形のものは大形のものよりも、圓形を帶びる傾向がある、從つて α, β. α+β は小さく現はれる。從つて餘り小なるものは不適當で、其限界には1を評準にして最小 6.0cm に最大 8.5cm とした、その理由とする所は、

（イ）、ある貝塚にあつては—例へば府下千鳥濱貝塚、久ケ原貝塚、南加瀨貝塚等の如き—蛤の大さが非常に小さく、概ね 5cm 程度のもので大形のものは極く少い。從つて材料の蒐集に非常に困難を感じた。而して蛤は1か 6.0cm に達すると大體完成せる蛤の形態を取るものであるから境を 6.0cm に置いた。

以後は ∠ACB. ∠ADB の代りに夫々 α. β 角と呼ぶことにする。從つてその和は $\alpha+\beta$ で表はす。

次に以上の變數の値を定めるに當り、取るべき偶然的方法を述べる。

(一)、角度測定に際しての A.B.C.D の決定法。

蛤の左右兩突端が正しく一本の直線上にあるが如くに調節し A. B にしるしをつける。

次に此の直線に平行する線が、上下兩突端に接する點を C.D と定める。ここに於て生じた四邊形につき分度器を用ひて角を測定する。

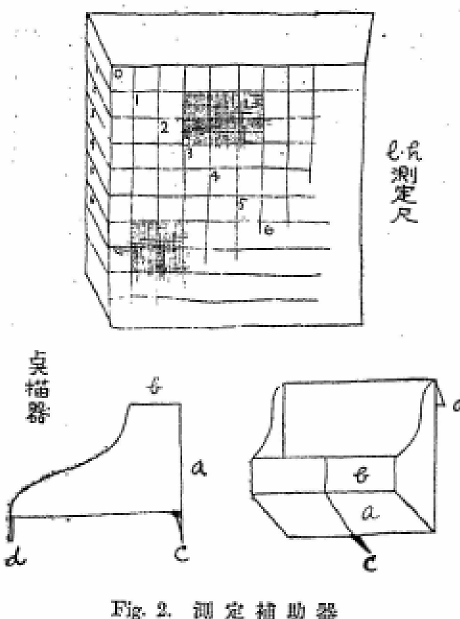


Fig. 2. 測定補助器

此の場合 o 點を正確に描くことは、常に必要なことであるが相當困難であるので一つの點描器を使用した。

主なる所は第二圖に示す如く a. b なる面と c なる針と d なる台とより成り、a 面には中央を貫いて一本の直線を有し b 面にまで延びて居る。c なる針は此の直線の先端にあり、全く a とは同一平面にあるが如く、然も a c と c d とは直角をなす様に製作してある。今一直線上に A. B 點を置き、次に點描器の a 面が此の直線に平行に、然も中心線 b a c が蛤の突端に接する様に位置せしめて點描した點が o 點である。

尚現在市販の分度器は數種存し中には非常に目盛の誤つたものがある。從つて私は最も誤差の少かつた服部時計店製作の四寸五分セルロイド製半圓分度器を使用したその表面には上より四通に目盛が刻んであるが、專ら一

aは古形を示すものでは增加して居る。

四、齒幅(b)　蛤の双片が咬合するに必要な齒列の中央部に於ける幅である。bは石器時代のものでは增加して居る。

實際の取扱に際しa及びbの兩者は共に値が小なる爲測定も困難で又從つて誤差も大になる所より、兩者を加へた距離P(=a+b)を使用した。

五、殼の肉の厚さ(n)　石器時代蛤にあつては現生のものより貝殼の肉の厚さが遙に厚い。

六、殼の重量　肉の厚さが增すと共に全體の重量が大になる。

2. 計測及びその注意事項

以上の重量以外の計測値をそのまゝに取扱ふよりも、其等相互の間の關係を見るのが興味がある樣である。其には次の二通りを擧げ得る。

(一)、比を求める方法(l/h. l/d. l/p)　既に述べた樣にlを一定にして考へに時石器時代蛤のh. d. p(=a+p) n及び重量は現生産のものよりも增加して居る故先ず比を取ることが考へられる。卽ち l/h l/d l/p l/n の四通を得る。此の中、nは値が小である爲數字的取扱ひを避け單に記載的特徵として現代の厚さを(±)とし、此より厚いものは(+)(++)(+++)と四階程にして觀察した。

(二)、角度($\alpha \cdot \beta$)　lとhとに變化があることより、第一圖に於てに上下兩突端に於けるl平行なる切線の兩切點C. Dと左右の兩突端A. Bとを互に結ぶことによつて生ずる四邊形ABCDに就き$\angle ACB$, $\angle ADB$及びその和はl, hの變化に從つて又變化する筈である、故に此等の挾角も大いに參考となる。

得、昨年四月東京人類學會創立五十週年記念講演會に於てその一部を發表したが、此程一先ず一段落が付いたので此處にその大要を述べる次第である。

稿を起すに先立ち測定上に就いて種々御注意下さつた東京帝大醫學部解剖學教室横尾安夫博士及び材料の提供に關して大山史前學研究所の方々、並びに森本六爾氏その他の先輩及び同輩各位の御好意に對して、深甚なる謝意を表する次第であります。

總論

1. 變化の諸點

先史時代蛤が現生產のそれと異る點は種々あることと思ふが、最も著明なる點を擧げると大體六個とすることが出來る樣に考へる。此處で標準として蛤の長さ(l)を選んだ(第一圖參照)これは蛤の左右兩突端 A.B 間を連絡する線分の長さである。卽ちlの略ぼ等しい各年代の蛤を觀察する時、

一、高さ(h)　長さlに平行に上下の兩突端C・Dに於て切線を引いた時、兩切線間の距離である。hは石器時代蛤では增加の傾向を示して居る。從つて一見現生產のものより丸味を帶びて居る。

二、厚さ(d)　理論的には双殼ある蛤の兩殼脊に於ける最突出點間の距離の 1/2 であるが實際には、片殼を表面の平滑な板の上に伏せた時の最高點Eの高さを使用して居る。dは石器時代のそれにあつては增加的變化をとる、卽ち灣曲度が現生產のものより强度なることを意味する。

三、殼頂突出度(a)　殼脊を下にして水平に置いた時殼の成長の起始點卽ち成長線の極限より上方にある部分の長さ、卽ち見方を變へれば殼の「內側へのまくれ込みの度」と云ふことが出來る。

現今のもの 18 の平均では 77.2 大森貝塚のもの 18 の平均では 78.5 向ヶ岡貝塚のもの 18 の平均では 79.3 でござります、是等の異同で推す時には貝塚を見た計りでも向ヶ岡貝塚の古いと云ふことは知れませう云々」と見へて居る。

氏も高さと長さとの間の變化を强調して居ることがわかる。

以上は蛤の形態が年代と共に變化するらしいと考へた最も著明なもので、大森・向ヶ岡貝塚の消失した今日私の研究には重要な資料である。

Fig. 1. 蛤の形態模型圖
(1) 表面, (2) 裏面(p=a+b), (3)側面.

(三)、直良信夫氏も同様に石器時代蛤と現生産蛤間に差異を認めて居るが、氏はその原因を年代的關係以外の他の關係例へば地理的若しくは海流等の變化に歸して居る(3)

私は此等とは別個に昭和七年たまたま埼玉縣新郷村東貝塚出土の蛤が現生産蛤よりも更に長く、更に高く然も厚いのに氣付くと同時に、後に詳述するが如く、土器型式の變化より見て年代が遡上ると共に此に平行して變化の度が著しく逆に年代が下つて現代に近附く程、形態的差違も少くなるのを認めた。即ち石器時代より現代までの形態的變化は全く一方向的連續的な變化で然もその模様は年代のほぼ完全な函數であることを知つた。故にこれに着目する時は石器時代の編年も亦可能ではないかとの推測のもとに研究を開始し、爾來、延べ貝塚數六十有餘個所の調査の結果蛤の形態的諸變化―以後は單に蛤の變化と稱する―の中の或る部分を選べば相當の程度まで編年に使用出來る確信を

はしがき

石器時代貝塚出土の「はまぐり」(Meretrix meretrix Linné)と現生產のそれとを比較すると、兩者の間には形態的に著明な差異が認められる。斯る形態的變化に就いては吾が國貝塚發見の當初より既に諸學者によつて認識せられて居る。

(一)、即ち最初の記載として Edward S. Morse 氏は氏の大森貝塚發掘報告中に(1)次の樣に述べて居る。

"The proportionate diameters vary but little, but the difference in size is noticeable at once, the mound specimens being larger

Average dimensions of ten largest specimens

	length	hight
Recent	85.8	66.1
Mound	97.3	75.1

Assuming length to be 100, hight in

18 Recent 77.2

18 Mound 78.5 " etc

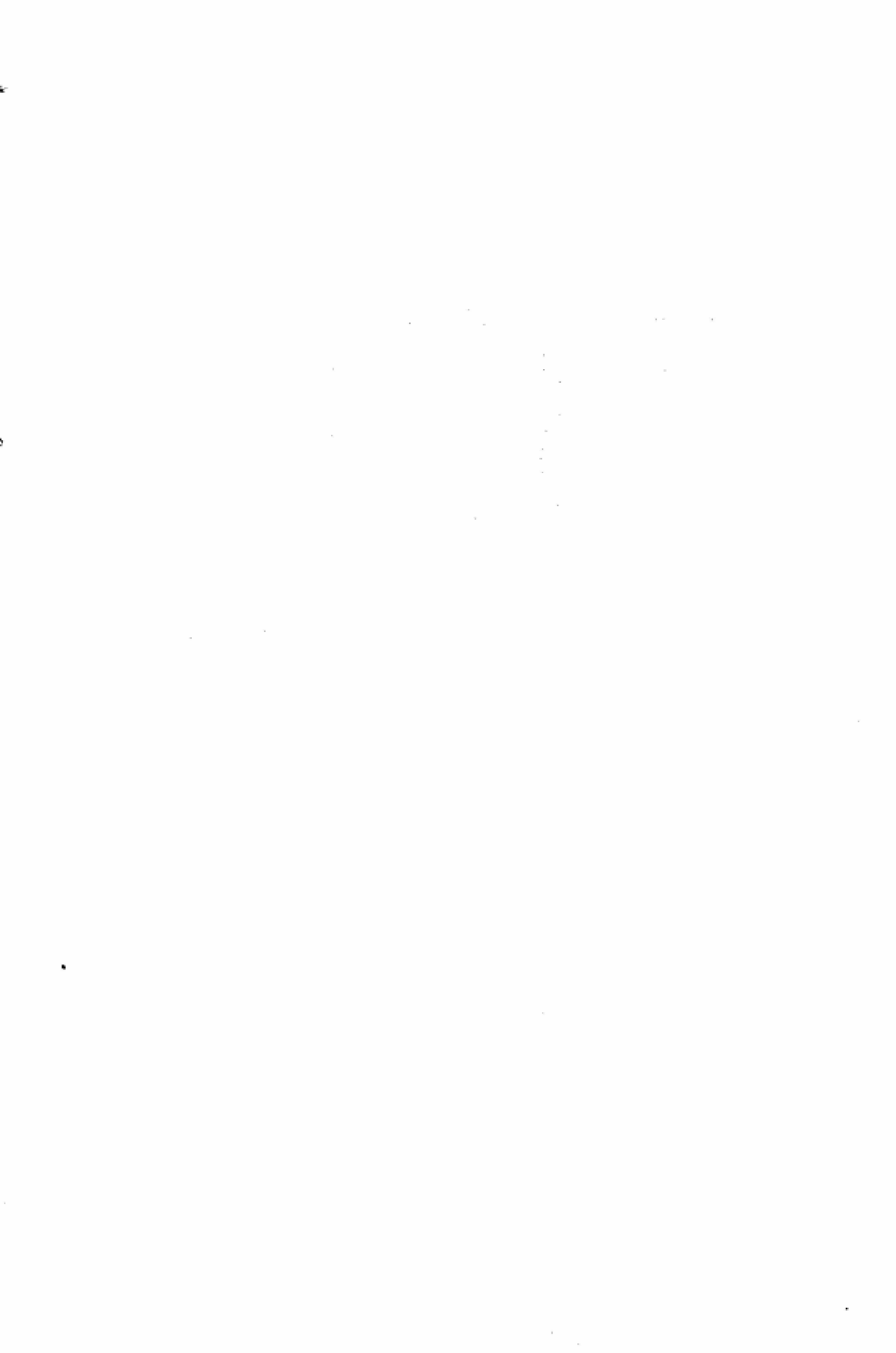
即ち氏は蛤の長さと高さの間に變化を發見して居る。

(二)、少しくこれに遲れて坪井正五郎氏は彼の彌生町貝塚の報告(2)中に「蛤の長さを100とすればその高さは

東京灣を繞る主要貝塚に於ける「はまぐり」の形態的變化に依る石器時代の編年學的研究

鈴木尚

目次



目次

史前學雜誌

第七卷第二號

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　簡野啓　樋口清之　山口隆一　池上啓介

會計　岡田養一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年三月二十五日印刷　第七卷第二號

昭和十年三月三十日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介

發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田養一

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地　株式會社明章印刷所　鈴木赳武

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第七卷　第二號

昭和十年三月發行

史前學會

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

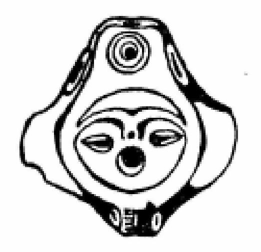
ORGAN DER JAPANISCHEN

PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



7. BAND 3. HEFT

TOKIO

MAI 1935

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

...9, Onden, Shibaya-Ku Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa — Jookei Shibata

Vorsitzender — Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi — Keisuke Ikegami

Isamu Kohno

Iwao Ooba — Sueo Sugiyama

Kingo Tazawa — Ryuichi Yamaguchi

あつて、單に農耕要具とのみ限定さる可きではない。故に打石斧の存在は農耕を積極的に證明するものでなく、我々は農耕された植物を檢出する事によつてのみ、これを正確に知る事が出來るのである。然しこの發見は決して容易ではなく、泥炭層中包含地を捜索するか、或ひは土器の底部等に偶然に殘されたその痕蹟を見出すよりほかはないであらう。更に困難なのは我々の常識以外の植物が、當時に於て農耕用として栽培されて居なかつたかと云ふ疑問である。けれども農業用栽培植物は、その生成が短期間で、且つ收穫が多量で、更に貯藏され得ると云ふ樣な條件が容求されて居るから、その範圍は必然的に制限される。所謂五穀の如きはこの最も理想的なものである。斯の如く對象とする植物に諸種の制約がある爲め、農耕は多くの場合獨立的に發生する事が少く農耕植物と伴つて移入される場合が多い。

翻つて關東各地の縄紋式貝塚を見る時、それ等は時と共にその規模が增大し、中に含まれる骨角器獸骨等も時代が降るに從つて多量となり、狩獵魚撈要具も增加する。卽ち彼等の主要生產部門は前後を通じて狩獵及び魚撈であり、それが更に後期に至るに從つて盛になつたと考へねばならない。彼等の生活に若し農耕があり、それが彼等の經濟生活に對して重要な位置を占めて居たとすれば、遺跡遺物に於て上記のものと異つた狀態を以て現れて來る筈である。斯の如き見解の下に筆者は彼等の主要生產部門を狩獵魚撈及び植物蒐集と考へるのであつて、恐らく當時に於ては garden 式の農耕すら發生して居なかつたのではないか（然し有用植物の保護は恐らくこれを行つて居たであらう。）と想像して居る。又假に極く原始形態の農耕を或時期に彼等が營み始めたとしても、それは決して彼等が以前から有して居た生產樣式を覆すほどの力を持たなかつたと考へるのである。

(2) 例へば慈恩寺畳濱丘陵上の各所に、後期石器時代に屬する遺物包含地が點在して居る狀態は、この間の消息を暗示するものであらう。然し包含地の調査を殆んど行つて居ない今日に於ては、決定的の論斷を下し得ないのは遺憾である。要するに同一丘陵上に於ける貝塚出土遺物と、包含地出土遺物との對比は、今後に殘された重要な問題の一つと云ふ事が出來る。

(3) 昭和三年八幡坂口兩氏の武藏折本貝塚發掘調査の際の知見に據る。

(4) 八幡一郎、下總姥山貝塚と住居趾　東京帝大理學部人類學教室研究報告　第四篇

(5) 下總姥貝塚と住居趾　前出

（一九三三・七・九稿了
一九三三・九・二〇補）

又、前・中・後の各期に屬する貝塚の分布狀態を概觀すると、前期貝塚は主として各河川の上流近くに密集的に分布し、後期貝塚は河川の下流地帶、又は現海岸線に近接する丘陵上、及び古利根溪谷沿岸に多く存在して居り、中期貝塚も概ね後期貝塚と其の分布圏を一にして居る。(第二十四圖參照)卽ち中期又は後期貝塚の積成時代には、前期貝塚の分布地帶は旣に冲積作用によつて陸地と化し、貝塚の生成は不可能となつた。(2) 換言すれば此等の時代に至ると斯る地域に住居する人々は fisher としての生活を營む事が出來なくなつたのである。從つて中期又は後期の石器時代人が、魚撈者としての生活を爲した所は、前述の如く現海岸線に近い地帶、又は古利根溪谷の如き比較的後世に至るまで海水の浸入を容して居た樣な地形の土地である。更に中期後期の諸貝塚が、千葉縣下の東京灣沿岸地帶、或ひは霞ヶ浦沿岸地帶に群集して居る事は、此等の地方が先史東京灣上部地域が陸化した後まで、依然として海であつた事を示すものであり、中・後期貝塚の文化中樞が斯る地方に偏在するのも、亦必然的の結果と言ふ可きである。

註(1) 純粹なる繩紋式文化期に於ける農耕の存否問題は同時代の遺跡から當時の農業用栽培植物が明確に發見された事が無い爲め、未だ疑問とされて居る。米は彌生式文化民の渡來と共に、大陸より齎らされたものらしく、東北地方に於ては龜ヶ岡式最終末期型式に屬し、彌生式文化との接觸の痕跡を示す桝形圍貝塚住民の如きは旣に米を有して居た。(山内淸男　日本石器時代にも米あり　人類學雜誌　第四十卷　一八一號)

けれども彌生式文化の影響を受けて居ない繩紋式遺跡よりは未だこの正確な出土例を見聞しない。卽ち現在の資料を以て考へれば純粹なる繩紋式文化期には未だ米が移入されて居なかつた樣である。然し米以外の穀物、例へば粟、稗等の如き割合に北方的色彩を持つ栽培植物は、更に古い時代に米とは全く異つた系路を取つて輸入されたかも知れないが、我々は不幸にして現在これを證明する材料を持つて居ない。打製石斧を digging tools と推定する事は、現在の學界に於てほゞ異論がないが、それは土に對する一般的な勞働要具で

築積されたもの丶様に考へられるのである。更に想像すれば、前期貝塚時代の生産手段を以てしては、人口の増加が或る程度以上に達すると、これを支へる事が困難となり、爲めに氏族はその分裂を餘儀なくされる。―黒濱慈恩寺丘陵に於ける前期縄紋式に屬する小貝塚の散布狀態は、斯の様な社會現象を暗示する様に思はれる。―然るに、後期貝塚時代に至ると技術の進歩に據つて彼等の生活は多少安定し、その結果氏族は膨脹し、前時代に比較してより定着性を持つに至つたのではないであらうか?

終に住居に就いて簡單に記載して置く。貝塚に於いて當時の住居趾は、貝層の下から稀に發見されたが、今回の調査は主として試掘程度の小規模の發掘のみを行つた爲め、その見る可きものを餘り見出し得なかつたが、將來より大規模の發掘が行はれたなら、恐らくこの多くを發見し得る可能性は充分にある。前期縄紋式に屬する第一群乃至―第三群を出す種類の貝塚では貝層下褐色土層上―即ち當時の生活地表―に往々にして灰燒土層の存在する事があるが明確な家屋跡は未だ見出されない。然し前期の終りに屬する第四・五群土器を出土する遺跡からは從來數個の竪穴跡が發見されて居り、その型式は方形で爐は中央より多少壁寄りに位し、特に爐として加工した例はなく、單なる灰燒土の塊として存在する。[3] 第六群土器を出す遺跡の家屋跡は殆ど總てが圓形の竪穴で、極く稀に方形竪穴及び平地住居[4]がある。爐は中央に位して拳大の石を廻らし、又は底部を缺くカリパー狀土器を埋沒してこれに當て丶ゐる。後期の家屋跡の明確な例は先史東京灣沿岸地帶に於ては未だ殆ど發見されてゐない。

今、殘された住居趾から當時の家屋の散布狀態を推測すれば、前期石器時代終末期頃には未だ極めて散在的であり、中期に至つて始めて多少密集的となるが、家屋の構造が永久的又は半永久的なものでない爲め、その使用期間は餘りに永續せず、從つて一聚落内に於ける家屋の移動は可成り頻繁に行はれた形跡が認められる。

期のそれに比してその面積が遙かに廣大なのを常とする。此等の貝塚は從來これを全掘した經驗がない爲め確言する事は出來ないが、恐らく小規模の貝塚が漸次に擴大されたものと考ふべきであらう。

貝塚の規模に就ては少くとも二樣の解釋が可能である。

A. 貝塚の規模の大小は人口のそれに正比例すると云ふ考へ、即ち前期貝塚は小數の人によつて作られた爲め少さく、後期のものは多數によつて作られた爲め大きい。

B. 貝塚の大小は居住期間に正比例する。即ち前期貝塚に於ける人類の居住期間は短く、後期に於ては之に反する。

Fig. 24 先史東京灣沿岸地帶に於ける各期遺跡の分布概觀。(△前期貝塚，×中期貝塚，○後期貝塚。)

この解釋の何れが妥當なるかを決定する爲めには、より廣範圍に亙る發掘を試み貝層の堆積狀態等に就ても更に精密に觀察を要するが、現在の知見のみに基いて考へれば此の兩說は共に考慮さる可き性質を持つ樣である。即ち前期貝塚は少數の人によつて、餘り長時間に亙らずに生成されたもので、後期貝塚はより多數の人々によつてより永い期間に

後期に至つても狩獵具の量は中期のそれより餘り增加を示さないが、貝塚より出土する獸骨の量が極めて夥多であるのは狩獵がより一般化した事を物語り、打製石斧の減少はこれによる植物蒐集が稍々衰退したか、或ひはこれに代る他の器具が出現した事を暗示するものである。

斯の如き器具の變遷は、明かに當時の民衆の經濟生活の變遷を物語るものであつて、器具の變遷が前記の如く概して進化的であつた事は、彼等の生活も亦進化的であつた事を意味する。併も彼等の生產力の逐次的發展は單に物質生活のみならず、精神的生活にも色々な影響を與へたらしい。後期石器時代に於ける土偶土版の如き宗教的遺物と推定される品物の出現、身體裝飾品の盛行等の如き現象は此間の消息を傳へるものである。土器の場合に於てもそれが後期に至るに從つて、前述の如き器形の分化を生じたが、この遠因も亦、生產手段の技術的進化に基づく生產力の增加に據るものゝ樣に考へられる。具體的に言へば生產力の逐次的增加は石器時代人の生活を漸次に安定させた、その結果彼等は字義通りの hand to mouth の生活から次第に解放され、生活に對する欲望にも變化を來し、從つてその生活型態は順次に複雜化するに至つた。斯の如き情勢は土器の如き日常容器にまで反映し、初期に於ては同一なる容器が種々なる要求に對して併用されて居たのが、後期に至つては用途の差によつて、異つた形の容器が要求されるに至つた結果と見る可きではなからうか？

次に以上の研究によつて決定された各期の土器を出す遺跡に就て見ると、前期繩紋式土器を出す貝塚はその規模が極めて小さく、且つ數個の小貝塚が相接近して小貝塚群を爲す傾向があり、中期繩紋式に屬する貝塚は一般に前者より大きく、後期に至れば更に大規模となる傾向が看取される。勿論中期以降のものと雖も、唯一個の貝塚が茫漠として廣がつてゐるのではなく、數個の貝塚群より成立してゐる場合が多いが、此等の個々の貝塚も前

の分化に乏しく、數量も餘り豊かでなく、製作も亦概して粗雜である。特に裝飾品は甚だ貧弱であつて、貝輪と少數の玉類及び笄狀角製品が見出されて居るのみに過ぎない。只精巧な針—斯樣な品は關東では中期以後には殆ど消失して了つて居る—の存在は注意を要する事實である。

中期に在つては器具—特に生產要具—の分化は一般的に行はれ、石器、骨角貝器類の中で斯うした方面の物は質的にも量的にも俄然豊富となり、裝飾品類も亦發達を示し始めて居る。此の時代の特徵的な遺物としては、豊富な打製石斧、巨大なる石棒、裝飾的價値に乏しいと思はれるイタボカキ製の貝輪等を枚擧する事が出來る。

後期に至つても生產要具は、前時代の傳統を主として繼承して居るが、型式的には多少の變化を示し、殊に幾分か裝飾的意義を加味した實用品—例へば脚を有する石皿、或は石劍の如きもの—の出現を見、裝飾品—玉類、耳飾等—はより豊富となり加ふるに土偶、土版等の如き、一種の宗教用品と推定される品も製作されるに至つてゐる。

扨、前述の如き遺物遺跡によつて投影される彼等の主要生產部門は、各期を通じて漁撈、狩獵、食料植物蒐集等[1]—換言すれば蒐集經濟の梯梯—であるが此等は時間的に或は地域的に多少の消長がある樣に思はれる。卽ち先史東京灣沿岸に於ける前期繩紋式文化期にあつては石鏃、石槍の如き狩獵具に乏しく、貝塚內に於ける獸骨殘片も亦微々たるもので、土掘要器と考へられる所謂打製石斧も亦餘り多くない。從つて此の時期に於ては、狩獵又は土掘要具を以てする植物蒐集はまだ盛でなかつたかと云つてよい。中期繩紋式の時代は狩獵具は前時代より多少增加し、獸骨もより多量に發見され、打製石斧は最も豊富に發見されてゐる。これに基いて推考すれば此の時代に於て狩獵は前の時代より盛になり、土掘要具による植物蒐集は隆盛を極めた樣である。

いものと鐖のある例とがある。前者は第七類土器に伴つて最も普通に發見されるのに反して、後者は比較的稀である。牙斧は中期のそれと相同で、釣針は大形品と共に稍小形のものが出現し、逆刺は矢張り外側に附いて居る。鏃は主として角製で有柄である。弓筈は鹿角を以て作られ頗る精巧な作品がある。牙製曲玉は食肉類の犬齒に穿孔し、或は猪牙を半截しこれに穿孔した例も見出される。貝輪はタマキガヒ、サルボウ、アカガヒ等を原料とした精成品が多く、ヨメガカサの殼頂に穿孔した美麗なものも亦併存して居る。

土製品には土偶、土版、耳飾等がある。土偶には顏面圓形を呈し偏平で、顏の表現は寫實に近く、後頭部から頭部にかけて橋狀の把手を有するもの(第四表A)と、顏形が三角形又は楕圓形を爲し眉と鼻は合してT字又はY字形を呈し、後頭部が半球狀に突出するもの—所謂山形土偶—(同B)と、顏は圓く頭部に角狀突起を有し、眼口等は圓形を以て示された木兎の顏の如き表情を爲すもの—所謂木兎土偶—(同C)とがある。(A)は第六群の土器を多少混出するも第七群を主體とする遺跡から多くの場合發見され、(B)は第七群と伴出し、(C)は殆ど第八群に伴ふ。耳飾は充實したものと(第四表A)、中を刳拔き、又は透し紋様を施した物(同B)とがあるが前者は主として第七群土器と共存し、後者は多くの場合第八群土器と伴出する。土版は殆んど第八群土器に伴ひ他のものと共存する事は尠い樣に思はれる。

(四) 綜　合

以上前、中、後、各期の遺物を通觀すると、前期に於ける器具は生産要具を主體として居るが、其等は未だそ

くない。貝輪はイタボガキを以て製作したもの(第四表B)が多く、少數のサルボウ製の物も發見される。牙製の曲玉は食肉類の犬歯に穿孔したものであるが、極めて稀に出土するのみである。

土製品としては土偶があるけれども、その分布は主として山嶽地帯に近接する低山地帯に極限され、關東平地の第六群土器に伴ふ場合は極めて稀であるらしい。

註(1)　燧質岩製の巨大なる石器類が、原産地附近に於て製作されたか、又は原石の供給を受けて各地に於て製作されたかと云ふ事は別に興味ある問題を構成する。これは特殊石器の industry がその原産地を中心として發達し、一つの既製品として各地に流出したか、又は原産地は原料のみの供給に止まり製作は各地に於て個別的に行はれたかと云ふ先史文化史上の大きな疑問を提出するものである。

(三)　後期縄紋式石器時代

石製品としては、打製石斧、石鏃、磨製石斧、石劍、石皿、石槌、玉類、其他がある。打製石斧はＡＢＣの三型式の何れも存在するが、量的に最も豊富なのは分銅形(第三表C)で撥形(同B)がこれに續いて多い。石鏃は雁股形、三角形(同C)が多數で、石は主として燧石が用ひられる。磨製石斧は全體精巧に磨製され、體部斷面が鼓形を呈する型式に限られ、石劍は偏平で頭部に裝飾のあるものが盛行して居る。石皿に普通の型式のものが多いが稀に底部に脚を有し、形が稍長方形に近いものも見出される。槌石は前の時期のものと大差がない。玉類には曲玉、管玉、小玉等があり、硬玉製品も亦存在する。

骨、角、牙、貝製品には銛、斧、釣針、鏃、所謂浮袋の口、弓筈、貝輪、牙製曲玉其他がある。銛には鏃のな

土器 ＼ 伴出遺物		骨角牙貝製品													土製品					
		銛		針		斧	釣針	鏃	浮袋口	弓筈	貝輪			曲玉	土偶			耳飾		土版
		A	B	A	B						A	B	C		A	B	C	A	B	
前期	第一群				•															
	第二群			•	●		•				•									
	第三群										•									
	第四群										•									
	第五群			•	•									•						
中期	第六群	•	•			•	•				•	●		•						
後期	第七群	●	•			•	•	•	●		●		•	•	•	●		●		
	第八群	●	•			•	•	•	●	•	●		•	•			●	●	●	●

第四表　土器と骨角牙貝製品及び土製品との共存關係

（二）中期縄紋式石器時代

石器としては最初に打製石斧を擧げねばならない。打製石斧の形式には楕圓形（短冊形）（第三表A）、撥形（同B）、分銅形（同C）等がある。此の時代の遺跡から發見される楕圓形打石斧は、主として表裏面共に打裂を加へた型式が多く、前期の打石斧に見られる様な型式のものは比較的少い。此等三型式の打石斧の中で、楕圓形のものは最も普通に發見されるが、他の二型式は前者に比して其の發見數に乏しい。石鏃は黒曜石製有柄品が多數を占め、他の型式は概して少く、磨製石斧は所謂遠州式に限られて居る。變質岩製石棒の長大なものは屢々此の時期の土器に伴ふが(1)石劍は稀である。石皿、槌石等も普通の型式の品が多い。玉類には管玉、曲玉等があるが量的には決して豐富でない。

骨、角、牙、貝製品としては、銛、釣針、貝輪、牙製曲玉等がある。銛は骨製で逆刺のない槍狀のもの（第四表A）、釣針は外側に逆鈎の附着する大形品、斧は猪牙製品、共にその發見數は餘り多

土器＼伴出遺物		石製品																
		打石斧			石鏃			磨石斧		石棒	石錘	石皿		槌石	玉類		
		A	B	C	A	B	C	A	B			A	B		曲玉	管玉	小玉
前期	第一群	•										•					
	第二群	●			•			•				•		•			
	第三群	•			•			•									
	第四群	•						•						•			
	第五群	•	•		•											•	
中期	第六群	●	●	•	•	●	●	●		●	•	●		●	•	•	
後期	第七群	●	●	●	●	•	●	•	●		●	●	•	●	●	●	
	第八群	●	●	●	●	•	●		●		●	●	•	●	●	●	●

第三表　土器と石製品との共存關係（黒點の大さは出土量の割合を示す）

石斧は所謂遠州式（第三表A）即ち尖頭部を有し體部斷面の楕圓形を呈する型式に屬し、體部の磨製は充分でなく各部に打敲の痕跡を殘して居る例が多い。石皿は楕圓形を呈する普通の型式で、槌石も後出の品と變りがなく、兩者共に殆ど安山岩を以て作られて居る。玉類としては第五群土器に伴つて、蠟石質の棗玉が唯一例發見されて居るのみである。

骨角牙貝器類としては第一に針の存在を指摘せねばならない。針は主として鹿角製—稀に骨製もある—で頭部に孔を有するもの（第四表A）と然らざるもの（第四表B）とがあり、この製作は概して精巧である。又第五群土器に伴つて裝飾ある笄狀の角製品及び食肉類の犬歯に穿孔した牙製曲玉を見る事もある。釣針は鹿角を以て作られた大形のもので逆刺はない。貝輪にはタマキガヒ、サルボウ製のものがある。

註（1）　黒曜石製石器、及びその原石の存在によつて、我々は先史東京灣沿岸地帶の前期縄紋式文化期に於て、既に該石原產地—中部山嶽地帶—との交渉を推知する事が出來る。この推定は近頃長野縣下より、各種の前期縄紋式土器が少量ながらも發見された事によつて、明かに証據づけられた。

第四章　關東石器時代文化の變遷

土器が石器時代編年設定に對して重要な規準となると同樣に、他の器具—特に生產に必要な生產要具の如き—は當時の經濟生活を顯現するものとして注意せねばならない。土器型式を規準とし、これを各種の視角より考察して獲た Chronologie に於ける我國石器時代の各種の器具の消長と、必然的にこれより導かれる石器時代人の經濟生活の變遷史こそ我々にとつて最も魅惑的な研究主題であるが、本豫報に於ては此等に就て多くを語る餘裕を持たない爲め、如何なる器具が如何なる時期に出現し、又盛行したかと云ふ事實のみに就て、それを時代別に記述する事のみに止める。此處に取扱ふ資料は單に我々が今日調査したもののみに限定せず、それ以外の信用すべき各種の發見例を斟酌した事を豫め御斷りして置く。（第三—第四表參照）

（一）　前期繩紋式石器時代

前期繩紋式石器時代の最も特徵ある石器として、我々は楕圓形で一面に打裂的加工を施し、他の半面は礫の自然面を利用した一種の打製石斧（第三表A）を舉げる事が出來る。此の型式の石器は、前期石器時代に屬する各所の遺跡より見出されて居るが、神奈川縣菊名貝塚からはこの最も代表的なものを多數に出土して居る。石鏃は硬砂岩、黑曜石製[1]の三角形、又は雁股形の無柄の品（第三表B）のみで製作は稍粗雜であつて發見量は極めて少い。磨製

沖積世の初期に日本が既に島嶼であり、氣候も寒冷でなかつた―これは古生物學的に證明されて居る―としたなら日本石器時代の先驅者は當然海上交通によつて渡來したに相違ない。この渡來の動機は意識的であつたか、無意識的―漂流の如き―であつたかは解らない。が兎に角初期の渡來者は水上生活に經驗を有し、漁撈を以て主要生産部門として居た人間であつたらう事は推定出來る。そこで今後若し大陸に於て日本石器時代住民の祖原を見出さうと試みるなら、先づ斯る生活を明示する貝塚の如きものの調査から始めるのが捷徑であると信ずる。又彼等がその樣な生産樣式を持つて日本に渡來した以上、恐らくそれを急變させる事は不可能であり、且つ又渡航後に到着する地點は言ふまでもなく海濱なのであるから、其地又は他の便宜な土地に於て渡來以前既に營んで居たと同樣な經濟生活を爲す事は殆んど疑ひない。換言すれば貝塚を築積する風習は、日本石器時代住民が日本に渡來する以前、既に獲得して居た所の特質であり、從つて我國の貝塚はその延長とも見る可きものである。卽ち我國の貝塚の中には縄紋式石器時代の住民が、日本の國土に上陸第一歩の後築積した非常に古いものも存在する筈である。而して此の樣な漁撈生活者が國內に分布した時期は、沖積初期末の沈降期に當つた爲め各地に溺れ谷が形成され斯る生活に最も適する自然環境のもとに在つた結果、この風習は永く繼續し著しい發達をとげたものと考へられるのである。

(2)　甲野勇　關東に於ける縄紋式土器の一新型式　史前學雜誌　第四卷　第三―四號

(3)　第六群土器の行はれた文化期には、綠質岩製の大石器類―石棒、石皿、凹石等―が盛に製作使用されて居た。先史東京灣沿岸の住民は、この原料又は既製品をこの石の最も豐富なる原產地―恐らく秩父山地―に求めたに相違ない。而して此の原石と共に雲母片岩の原石も亦容易に獲られたに相違なく、同石塊は、第六群土器を出土する遺跡から往々發見される。最初に雲母末を土器製作原土中に混入した動機は、これを以て從來使用して居た纖維に代用せしめた爲めか、或ひは偶然此等を含んだ川砂を使用した結果、この用法を會得したか何れかは不明であるが、兎に角、雲母末が土器製作と燒成に當つて砂粒と同樣の作用を爲し、且つ又その完成後に於ける金粉を散らした如き美しさは、恐らく彼等の興味を引いたに相違ない。その結果彼等は此の原石を遠く原產地より求めたのではないのだらうか。隅々前記の如き大石器類が多く需要されるに當つて、此等と共に雲母原石も亦相當潤澤に供給されたのではあるまいか。

纖維を混入する風習は第一群より第四群にまで及んで居るが、第五群に至つて中絶する。然るに第五群では雲母末を混入する風習がＣ類に於て出現する。此の風は第六群にまで及びＡ類に於てその極盛に達する[3]も、其後に至つて全く消失して了ふ。卽ち斯の樣な土器製造技術上より見れば、第一―四群までの連繫は明確に認知出來るし、第五、六群も土器製作土質よりすれば一脈相通じた點を窺知し得るのである。

以上記述した八群の土器をその器形、紋樣に基いて概括すれば、第一群より第五群までは一連の關係を有し、第六群はその型式上前者と可成りの隔りがある。又第七群土器の一部には第六群よりの過渡期的手法を有するものもあるが、その全般的の型式は寧ろ第八群に近似して居る。斯る事實を前述の三つの研究法によつて求められた編年に照合して、第一群より第五群に至るまでの土器を前期繩紋式土器、第六群を中期繩紋式第七・八群を後期繩紋式土器と呼ぶ事とした。然し土器型式の變遷に徴すれば前期繩紋式石器時代の存續した期間は中期及び後期のそれより遙に悠久であつた樣に思はれる。

註

(1) 第一群土器は我々の調査した範圍内に於ける最古型式の土器である事は疑ふ餘地のない事實であるが、これを以て直ちに日本石器時代の最古式土器と斷定するのは尙早である。この問題の檢討は、此種土器の分布及び我國に舊石器時代が存在して居たか否か、と云ふ事から始められねばならない。舊石器存否の根本は洪積世に我國が大陸と連續して居たか、又は既に今日の如く島嶼となつて居たか、或は既に島嶼と爲つて居ても當時の氣候が寒冷であつた爲め海水が凍結して大陸と連り、海上交通によらずして人類の移住を容したか否かと云ふ樣な地學的研究にかゝつて居る。考古學的に見て現在まで我國に於て發見された舊石器と稱せられる物の大部分は疑はしい物のみである。然し將來日本に舊石器時代の遺跡が發見され、更に中石器時代も存在したと假定しても、繩紋式文化が必しもこれ等の後繼者であるとは限られない。況んや斯る證蹟の全く見出されて居ない現在に於ては、この祖原を大陸方面に求める事は必ずしも排す可き見解ではないであらう。

は殆ど影を潛め、第六群では稜線狀の隆起線とこれに附隨する刺突點列、或は大形の爪形連續紋等又は雄健な渦紋等が見られるが、此等は何れも第五群に盛行した紋樣と直接の連關が殆んど見出されない。換言すれば第五群より第六群に至る間の紋樣の變化は飛躍的であり、其間に hiatus が認められる。唯、器形其他の特質を考慮して想像すれば、第五群C類に顯はれる口頸部細隆起渦紋帶は、第六群D類の口頸部隆起渦紋帶の先驅を爲すものの樣にも考へられる。而して此間に更に筆者が嘗つて本誌に記載した野川十三坊台(ザダイ)土器の如き型式を挿入すれば、その連絡は比較的順調となるのであるが、野川型式の位置が決定して居ない現在に在つては、單なる豫想としてこれを述べて置くのみに止める。[二] けれども第六群土器のうちに半截竹管による連續爪形紋を明確に附した一例が花積貝塚上部貝層中から發見されて居る。此の土器に於て連續爪形紋は、他の紋樣と全く孤立的に施され、その施紋技術は第五群爪形紋のそれと一致し、その延長とも考へられる程度の物であるが、何分にも斯る類例が他に殆ど見出されないのは遺憾である。然し斯の如き類例が今後續々として發見されたなら、兩群土器の間に存在する型式的間隙も漸次に埋められて了ふ可能性はあらう。

第六群以下に於ける紋樣の連關は、概して漸變的である。第六群土器の特徵的紋樣である隆起渦紋の中でも、その渦線に强弱の差があり、强度のものは渦線も雄勁であるが、弱いものは甚だ退化的で中には渦卷が全く崩されて了つて居るものすらある。後者と伴つて所謂「磨り消し」の手法が出現する。第七群A類に見られる口縁部型式は第六群のそれの傳統を嗣いで居り、第六群の渦紋は第七群の或物に於ては口縁部の瘤狀小突起として、又は更に硬化し沈線化して繼承されて居る。第七群から第八群への移行は最も自然であるが、たゞ第八群が第七群より更に洗練されて居る點が著明である。

く編年も決定されて居り、共存關係に據る解釋もこれと一致して居る。卽ち第一群より第八群に至るまでの土器は、各群ごとに多少づゝ年代を異にし、第一群は最も古く第二群、第三群……の順序を以てこれに續き第八群は最も新しいと推定される。たゞ今回の調査に當つて求められた各種の組列の數は餘り多くないが、上述の如き組合せの頻度が多ければ多いほど、此の方法に基づく編年の確實性も增大する事となる。

次に土器の器形、紋樣、製作等の如き形態的特質の觀察に據つても、第一群より第八群までの土器はその細部に於ける變化こそあれ、全般的には順次に進化發展の跡がたどられる。卽ち單純から複雜、粗雜から精巧、素朴から洗練、と言つた樣な傾向が明かに看取出來る。

最初に器形の觀察を試みる。第一群土器の器形は一般に甚だ單純であるが第二、三、四…群に至るに從つて漸次に分化し、第七、八群に及んで極度の發達、分化を示す。初期の土器は鉢、甕の如き極く一般的の炊事又は貯藏要具で、壺、皿の如き比較的特殊な用途を有する器物は未だ發生して居ない。壺は第五群土器に於て見られるが量的には甚だ乏しく、これが普偏化するのは第七、八群土器に於てゞある。皿に至つては第八群に於て僅かに見られるのみで、異形土器の如きも第七、八群に及んで初めて相當の發達を示して居る。それ故第七、八群に屬する土器の全型式を直ちに第一群のそれと比較すれば、全然別種文化所產物の樣にさへ見えるが、順次にその形態的變遷を追跡すれば、それ等がさのみ突變的でなく概して漸變的であり、文化的にもほゞ同一系統に所屬する事が理解される。

次に土器紋樣に於て、第一群中に既に出現して居る半截竹管による紋樣は、漸次複雜化して第五群に至るまで繼續し、殊に第五群に於て此の紋樣は極盛に達する。然るに第六群以下に於ては、從來斯の如く盛行した竹管紋

驗した結果を極めて概念的に記述するのみに止める。

同一時代に殘されたと推定される遺物層は、普通一群の型式の土器によつて獨占されるが、往々にして少量の他の群に屬する型式の土器を混出する事がある。我々の調査した範圍に於て、上述の混在狀態は大略第二表の如き組合せによつて發見される。卽ち少量の第一群土器が第二群土器と伴ひ、少量の第二群土器が第三群土器と伴ふ……と云ふ樣な共存關係が示されて居る。これに反して第一群土器が第八群土器と伴出するが如き例は、後世

第一群土器	
第二群土器	＋第一群土器ノ一部
第三群土器	＋第二群土器ノ一部
第四群土器	＋第三群土器ノ一部
第五群土器	＋第四群土器ノ一部
第六群土器	＋　　?
第七群土器	＋第六群土器ノ一部
第八群土器	＋第七群土器ノ一部

第二表　遺跡に於ける土器の共存關係

の攪亂を受けて居ない正確な Fund に於ては全く見出せない。斯る現象を如何に解釋するか？　一例として第一群と第二群土器との共存關係を抽出して說明しよう。第二群土器を出す遺跡―坂堂、花積、菊名等―に於ては、多量の第二群土器と共に少量の第一群土器を混出する。斯の如き類例のみに基いて考察すれば、此等二群の土器は同一時代の所產と考へる事も可能である。然し若し兩者が同一時代の所產であるなら、第一群を出す遺跡にも第二群土器が混在してよい筈である。けれども我々の調査した範圍內に於ける事實はこれに反し、第一群土器を出す遺物層中に第二群土器を混へる例は見出せない。斯の如き共存關係は、第一群土器が第二群土器より以前の時代に作られた物で、第二群土器中に混在する第一群土器は前の時代の殘存物であると云ふ事を暗示するものではないだらうか。たゞ兩者の間に存在する年代的差異はさのみ著しいものでなく、且つ土器の變化も漸變的であつた樣に考へられる。第二群以下の共存關係もこれと同樣の考へ方によつて理解する事が出來よう。特に第六群以下に於ては、他の方法に基

置いて存在する貝層中には、第四群土器が包含されて居る。(3)

今これだけの層位的事實に基いて、それ等を年代的に配列すれば、第七・八群は最も後出的で、次に第六群が位し、第五群は第六群より古く、第一群は第五群より更に古い事となる。然し第一群より第四群に至るまでの諸型式群の年代的序列を明示する層序は今までの所では未だ發見されて居ない。

註 (1) 八幡一郎、千葉縣加曾利貝塚の發掘、人類學雜誌、第三十八卷、第四―六號

(2) 昭和六年、山内、坂口兩氏と同貝塚發掘の際の知見に據る。

(3) 山崎直方、八幡一郎、中谷治宇二郎、相模國中郡旭村萬田貝殼坂遺跡、人類學雜誌、第四十卷、第五號

(三) 遺跡に於ける各型式土器の組合せ及び形態的對比

前述した二つの方法に基いて穫られた編年の結果を綜合すれば、左表に示す如き順序となるが第一群より第四群に至る間の細かい序列は未だ瞭かでない。

前期		中期		後期	方法
第三・四群	↓	第六群	↓	第七・八群	I
第一…五群	↓	第六群	↓	第七・八群	II

そこで同一時期に堆積されたと推定される遺物層中の土器の各型式に就て、其等が各遺跡によつて如何なる組合せを以て共存して居るか、換言すれば遺跡に於ける共存の組列を作り以て編年的序列の未知なる部分の解決に對する資料とした。然し此の方法は既に分類の項に於て述べた如く、土器分類が完備して後、始めて確實性を増加するものであるから、これに就ての詳細なる研究は總て次回の報告に讓り、本文に於ては現在筆者の經

次に野田町附近の中野台貝塚に於ては、貝層中に第六群土器、貝層下褐色土層中に第五群に近似した土器―これに就ては更に將來の研究を要する―が發見されて居る。此の事實によつて第五群近似の土器は第六群土器より古い時代の所產と考へられる。（第二十三圖）以上花積、中野臺兩貝塚に於て遭遇した土器の層位的變化より推考すれば、第六群土器は第三群土器及び第五群近似の土器より、更に新しいものであるとする事が出來る。

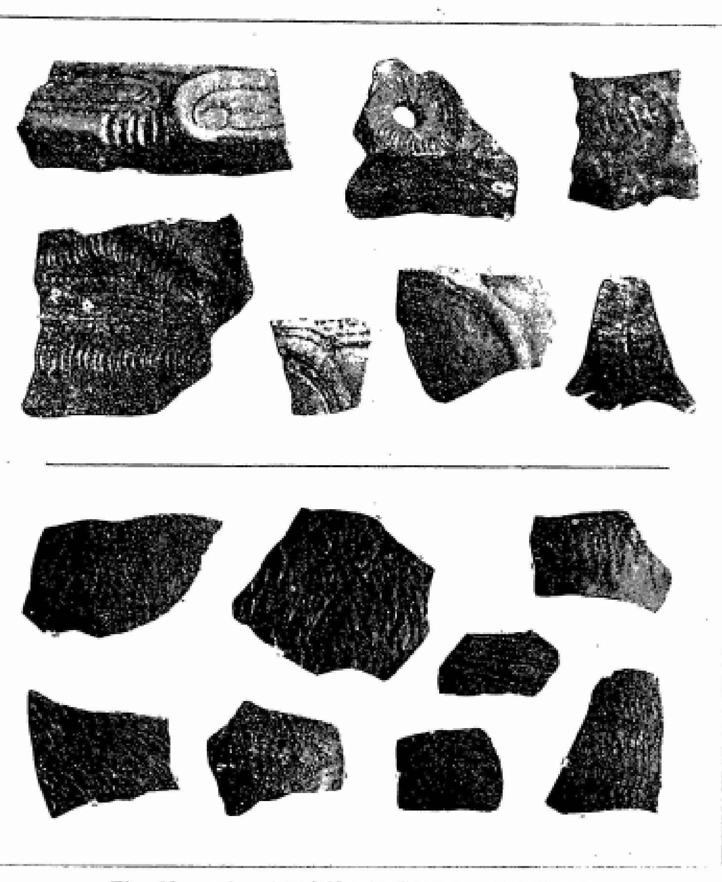


Fig. 23　上段，中野臺貝塚貝層中發見，第六群土器
下段，同貝塚貝層下土層發見，第五群土器

更に關東に於ける他の發見を一瞥すれば、千葉縣加曾利貝塚に於ては貝層中より第七群土器、下部土層からは第六群土器を混出し、[1] 横濱市外子安貝塚では、貝層中には第五群土器を包含し、下部土層からは第一群土器を發見する。[2] 又神奈川縣萬田貝塚に在つては、上部火山灰質土層中より第六・七群土器を出し、此層より更に下に砂礫の間層を

C點に在つては、貝層中に於て第六群土器、貝層下褐色土層中にはB點と同樣第二群土器が發見されて居る。即ち此の下部土層はB地點下部貝層の積成されつゝあつた頃、當時の人々の生活地表であつた爲め、彼等の使用した土器が自然とこゝに埋積したものに相違なく、B點と同じく第二群土器が第六群より、より古い事實が證明される。然し貝層を以て「漁撈者」の所產とし、貝層下包含層は「否漁撈者」の所產と考へ、斯の如く生活樣式を異にする部族の遺物を、直ちに比較するのは危險であると云ふ意見も一部にはあつたが、この疑問は中部山嶽地帶の所謂「厚手土器」と關東貝塚出土のそれとを比較する時、兩者の間に型式的差異が殆ど認められない事實によつて最も簡單に解消する。

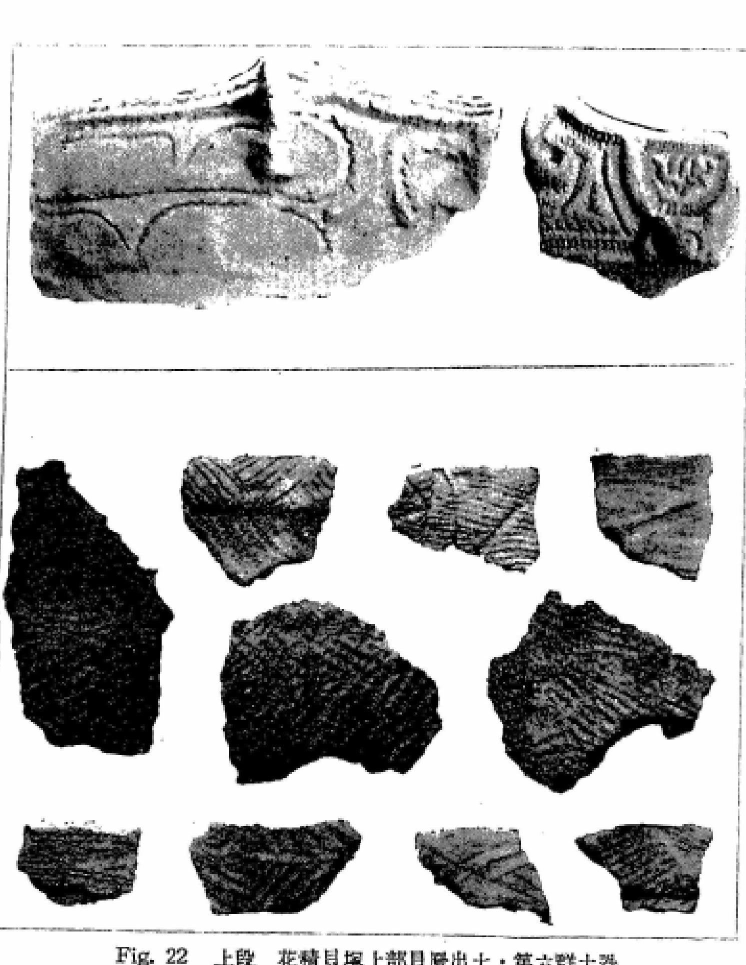


Fig. 22　上段　花積貝塚上部貝層出土・第六群土器
下段　同貝塚下部貝層出土・第二群土器

(2) 復興局建築部、東京及横濱地質調査報告、東京、昭和四年。
(3) 八幡一郎、下總國山崎貝塚に對する二三の私見、土器石器、東京、昭和五年。
(4) 埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告、前出。

(二) 層位に據る遺物の相對的年代の決定

先史東京灣沿岸地帯貝塚の調査の際我々が遭遇した最も理想的なる層位としては、埼玉縣花積貝塚B點に於けるそれを第一に擧げねばならない。花積貝塚に於ては表土下に第一の貝層があり、次に中間土層が介在し、その下に第二の貝層が堆積して居るのであつて、上記の中間土層は全く第二の貝層を被覆して居る。これは最も明かに第二の貝層―下部貝層―が築積された以後、或期間貝層の積成が中斷せられ、その際に中間土層が成生され、更にその後第一の貝層―上部貝層―が作られた事實を指示して居る。而して發見する遺物の性質は、下部貝層に於ては第二群土器、上部貝層に於ては第六群土器のみであつて、中間土層中には兩者の少量づゝが混在して居る。此の層位關係に基いて見れば第二群土器は、第六群土器より古い時代に屬するものであると云ふ事が推定されるのである。たゞ殘される問題は中間土層中に於ける兩者混在の事實である。これによつて中間層形成の頃に、兩者が共存したか否かと云ふ疑問が提出される。然し貝層と土層との境界は、現實の發掘の際にはそれ程截然と區別されることが出來ず、又上層に多い土器片が下層との境界部に或程度まで侵入して居る例は他の遺跡に於ても屢々經驗する事であるから、この事實を以て直ちに兩者の同時共存を說くのは聊か早計である。(第二十二圖)又花積

て構成されて居るが、それより下流に位する關宿町篠臺貝塚は主として淡水產貝類より成立して居る（第二十圖）。土器は山崎（鹹）貝塚、中野臺貝塚に於ては第六群土器を出土し、（第二十一圖・第十八圖）山崎（淡）貝塚[3]及び淸水貝塚、上新宿貝塚、上貝塚等よりは、主として第七・八群土器を發見し（第二十一圖）元町貝塚よりは第四群土器、（第二十圖）篠臺貝塚からは第七・八群土器を出土して居る。（第二十圖）

此の他、從來注意された例としては、綾瀨川溪谷に面する春岡村深作貝塚は、純鹹水產貝塚で第三群土器を出し、これより三粁餘り下流に位する柏崎村眞福寺貝塚に於ては淡水產貝類を主體とし第八群土器を出す事が知られて居る。[2]

卽ち此等の淡水產貝塚の諸例は、汀線が後退し附近が淡水化した時期に成生されたものであつて、從つて附近の鹹水產貝塚より鹹水地帶が淡水化するに要した時間だけ後期の所產と考へられる。これを具體的に述べれば中貝塚、長崎貝塚は他の黑濱、慈恩寺丘陵上の諸貝塚より新しく、淸水貝塚、山崎（淡）貝塚、上新宿貝塚、上貝塚等は山崎（鹹）貝塚、中野臺貝塚より新しい時代に作られたものであり、眞福寺貝塚は深作貝塚より後世に積成されたものである。

次にこれを出土する土器に基いて見れば、第四群は第六群より古く、第六群は第七・八群に先行するものであり、又第三群は第八群より古期に屬するものであると云ふ事が出來る。然し第三群と第四群との前後及び第一・二群の編年的位置の如きは、この結果のみでは全く知られないが、大體次の樣な序列「第三・四群→第六群→第七・八群」が此の方法の結果によつて認められたのである。

註（1）東木龍七、地形と貝塚分布より見たる關東低地の舊海岸線、地理學評論、第二卷、第七―九號。

のみを出土して居る。（第十九圖）又古利根川大溪谷東岸に於て、梅郷村山崎貝塚の一半及び野田町中野臺貝塚が鹹水産なるに反し、同溪谷内に於ける野田町清水貝塚、新川村上新宿、同上貝塚は淡水産貝類を主體とする貝塚であり山崎貝塚の一半も亦淡水産貝塚と爲つて居る。又この溪谷上流地帯にある關宿町元町貝塚は鹹水産貝類を以

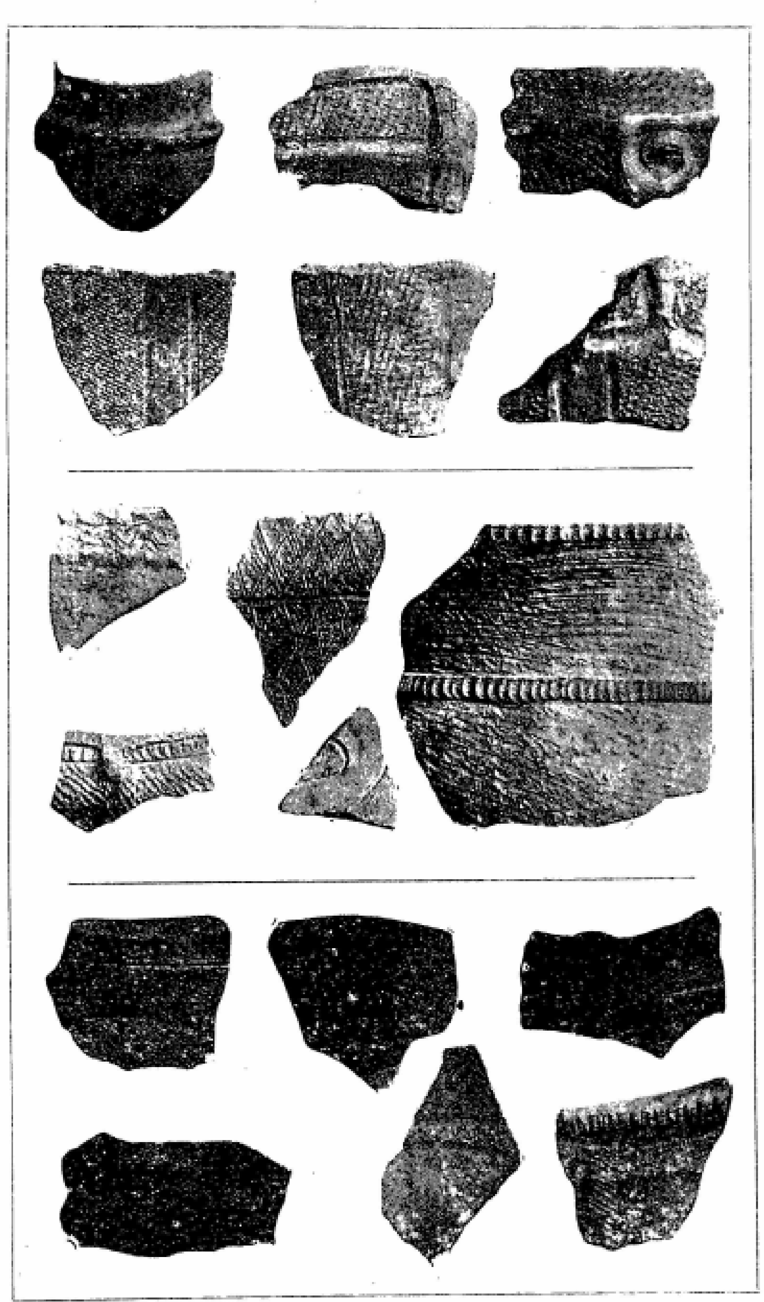


Fig. 21　最上段，山崎（主鹹）貝塚出土，第六群土器
中　段，山崎（主淡）貝塚出土，第七・八群土器
下　段，清水（主淡）貝塚出土，第八群土器

る貝塚は、上流に赴くに從つて淡水產貝類の量が增大するのが普通である。

Fig. 20　上段，元町（主鹹）貝塚出土，第四群土器
下段，篠台（主淡）貝塚出土，第七・八群土器

第一表は元荒川溪谷及び綾瀨川溪谷沿岸地帶に、散布する貝塚に於ける貝類とその出土量を示したものである。表によつて見られる通り、此等の貝塚は殆んど鹹水產貝塚であるが、黑濱村江ヶ崎、小宇、中貝塚はほゞ純淡水產貝塚であり、同村長崎貝塚は半淡水產貝塚である事が例外として注意される。斯の如き現象の解明に對して前記の推論(I)を適用すれば、この兩貝塚は鹹水產のそれに比してより新しい時代に屬する物であると結論する事が出來る。遺物としては前者卽ち鹹水產貝塚からは第四群土器を出し、後者卽ち淡水、半淡水產貝塚からは第六群土器

り、荒川溪谷に在つては、その全部がほゞ淡水又は半淡水産貝塚である。最も複雑なものは綾瀬川、元荒川溪谷で、此處では純鹹水産貝塚群中に淡水産貝塚が點々として散布してゐる。古利根川大溪谷は比較的變化に乏しく、

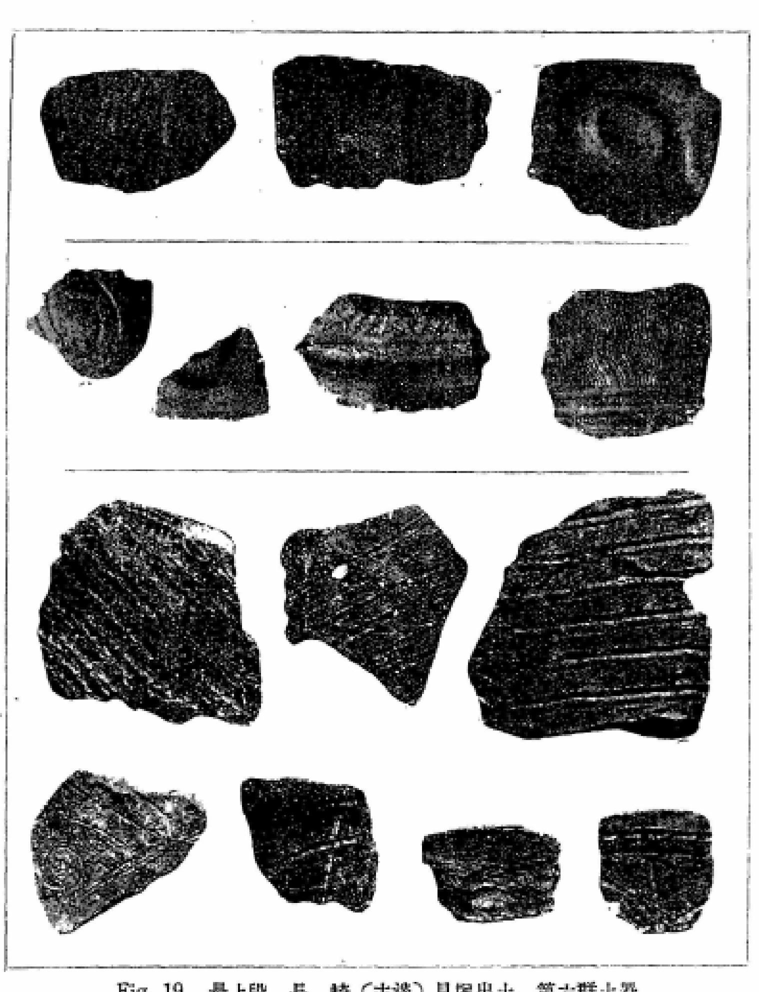


Fig. 19　最上段，長　崎（主淡）貝塚出土，第六群土器
中　段，中　（純淡）貝塚出土，第六群土器
下　段，江ケ崎（主鹹）貝塚出土，第四群土器

この溪谷の上流にある藤岡貝塚は、關東最奥部の貝塚として世に知られてゐるが、これは淡水産貝類を主體とする貝塚で純鹹水産貝塚は、それより約二十粁ほど下流に位する元町貝塚である。

一般に河川の注入して居ない溪谷注、又は入する河川が極めて小規模である樣な溪谷に分布する貝塚は、上流に存在するものと雖も、純鹹水又はこれに近い程度の物が多數を占めて居るが、大河川の流入する溪谷に存在す

第一表　黒濱慈恩寺丘陵上貝塚に於ける貝類の種類（•點は淡水產，數字は遺跡番號，第十八圖參照）

地名 / 種名	宿(13)	宿裏(14)	馬場(15)	新井(16)	長崎(18)	中(19)	江崎(20)	古場(21)	上野(22)	掛(2)
Meretrix meretrix *Linné*	Rare	Rare	Abundant	Common			Common	Common		Common
Anadara granosa *Linné*	Abundant	Rare		Common			Rare	Abundant	Common	Abundant
Anadara subcrenata *Lischke*		Rare								
Paphia (Ruditapes) philippinarum *Ad. &Rve.*	Abundant	Abundant	Common	Abundant			Abundant	Common	Common	
Mactra veneriformis *Deshey.*	Abundant	Common	Abundant				Abundant	Common	Common	Common
Cyclina sinensis *Gmelin.*		Common			Rare		Common	Rare		Rare
Dosinia (Dosinisea) japonica *Reeve.*							Rare			
Gomphia donacina *Chemn.*	Rare				Rare	Rare				
Mya arenaria (Linn.) japonica *Reeve.*	Rare	Rare	Common	Common	Rare		Common	Rare		Rare
Solen gouldi *Conrad.*							Rare			
•Corbicula nipponensis *Pilsbury.*	Rare	Rare	Rare	Rare			Rare			Rare
•Corbicula japonica *Prime.*					Abundant	Abundant				
Ostrea (Crassostrea) gigas *Thunburg.*	Common	Common	Abundant	Abundant	Rare	Rare		Abundant	Abundant	Common
Anomia lischkei *Deutz. & Fisch.*	Rare	Rare		Rare			Common	Common	Rare	
Thais (Mancinella) bronni *Dunker.*				Common	Abundant					
Rapana thomasiana *Crosse.*	Rare			Common			Common		Rare	Rare
•Thiara libertina *Gould.*		Rare				Rare				
•Thiara (Sulcospira) libertina reiniana *Brot.*	Rare									

所に群集的に集積される事は恐らく不可能であつたらう。斯樣な理由によつて貝塚は當時の人類が貝類を收獲するに最も適當な地、言ひ換へれば貝類の多く棲息する水邊近くに營まれたと考へることは敢て不合理ではなく、此の考に基いて今日に於ては貝塚の存在によつて、當時その附近が前記の如き條件の下にある水邊であつた事を推定出來るのである。又更に貝塚を構成する主要な貝類―それは量的にも豐富である事が必要とされる―の習性によつて當時の水邊の狀態を推知する一つの手段とする事も大局的に見て可能であり、殊に貝塚の數が多く、出土する貝類が量的にも質的にも亦相互に一致する場合が多ければ多い程、推定の概全性は增大する事となる。

關東の貝塚は、洪積壚坶層の推積以後それが複雜な形に彫刻された後、土地が沈降し海水が此等の丘陵の麓にまで侵入し、今日の沈降海岸に見るが如き、頗る繁雜なる小灣を各所に形成した時代の或時期に、積成されたものと考へられて居るから、[1]若し海岸線の移動が一方向的、後退卽ち負の移動のみであつたと假定したなら、奧地の鹹水貝塚はより現在の海岸線に近い部分にある淡水又は半鹹水貝塚より、更に古い時代に屬するものであると結論出來る譯である。此の逆現象は前篇研究法の項に於ても說いてある通り、現在の所ではまづ考へられない。然し最も理想的な證明法は貝塚附近の冲積地の各所に試錐 Boring を行ひ、その地層に基いて貝塚時代に相當する層を先づ決定し、その以後に再び海成層が見られるか否かを檢討する事であるが、此の方法は既に地質學の範圍に屬し、又各種の事情からこれを實現することが出來なかつたが、東京市復興局に於て行はれた各所に於ける試錐の結果は[2]我々の爲めにも參考となる所が多かつた事を附記して置く。

此處に我々が調査した貝塚を、これを構成する貝類に基準して、溪谷ごとに概觀して見ると、鶴見川溪谷に於ては上流地帶に致るまで殆ど純鹹水產貝類で、多摩川では上流地帶―貝塚分布の―に於ては半鹹半淡の狀態であ

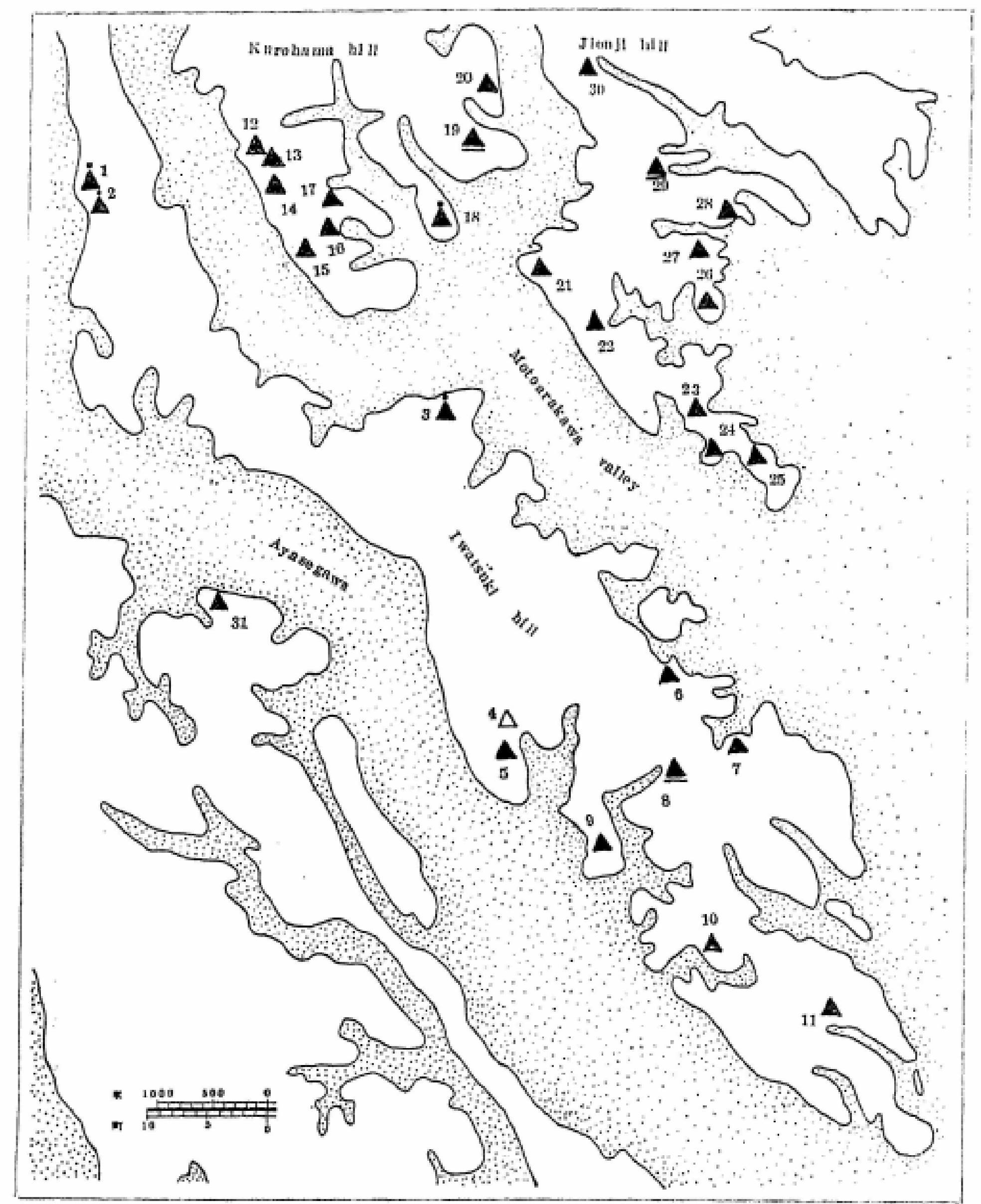


Fig. 18　綾瀬川，元荒川溪谷に於ける貝塚の分布狀態

1. 關山貝塚（第三群） 2. 坂堂貝塚（第二群） 3. 掛貝塚（第四群） 4. 加倉洞雲寺貝塚（不明） 5. 同淨國寺貝塚（第四群） 6. 太田貝塚（第七群？） 7. 木曾良貝塚（第四群） 8. 眞福寺貝塚（第八群） 9. 柏崎貝塚（第五群） 10. 淨谷貝塚（第六群） 11. 黑谷貝塚（第四群） 12. 炭釜貝塚（第四群） 13. 宿貝塚（第四群） 14. 宿裏貝塚（第四群） 15. 馬場貝塚（第四群） 16. 新井貝塚（第四群） 17. 新井耕地貝塚（第四群） 18. 長崎貝塚（第六群） 19. 中貝塚（第六群） 20. 江ケ崎貝塚（第四群） 21. 古ケ場（第四群） 22. 上野貝塚（第四群） 23. 櫃山貝塚（第四群） 24. 南貝塚（第三群） 25. 花積貝塚（上，第六群。下，第二群） 26. 表慈恩寺貝塚（第四群） 27. 同月讀社貝塚（第四群） 28. 野中貝塚（第五群） 29. 裏慈恩寺貝塚（第七群） 30. 鹿室貝塚（第四群） 31. 深作貝塚（第三群）

第三章　縄紋式石器時代の編年學的考察

(一)　貝塚を構成する貝類に基づく遺跡相對年代の推定

此の方法は貝塚中に含まれる貝類の習性に基づいて、當時の海濱の狀態を推想し、その結果に於て示された汀線の移動の年代を以て編年の一基準と爲さうとする試みである。これに就ては前篇研究法の項に於て詳述され、筆者も亦眞福寺貝塚調査の際に實際に採用した故此處に再記する事を避けるが、唯一言述べて置かねばならないのは、例へ貝類それ自體は自然物であつても、貝塚の築積と云ふ事は畢竟人類の文化行動の顯現の一つ—即ちそれは人間によつて作られたもの—に他ならないと云ふ點である。それ故に我々は貝塚に對して、地質學者が介類化石層を取扱ふと同樣な態度で臨む事は出來ない。何故なら介化石層は自然に推積したものであるが、これに反して、貝塚は當時の人類が食用として採集した貝類の殘骸を、投棄した結果築積したものであるから、其等の中には人間の嗜好、選擇、勞働等の各種の因子が働きかけて居ると云ふ事を考慮せねばならない。然し常識的に考へれば、文化程度の餘り高くない石器時代人としては、彼等の居住地の比較的近くの地に於て、その食料を求めたらうと推測するのは、最も自然であり、且つ無理の少ない考へ方である。反對に彼等がその主要食料である貝類を得る爲めに、十數里乃至數十里の遠方に赴いたとしたなら、相當廣い面積を有する貝塚が、今日見る如く各

第一の方法は貝塚の貝類より當時の汀線を復原し、汀線移動の時間を以て編年の目標と爲さんとする物で、我我の調査に際しては適當な數例を發見する事が出來た。第二の方法に對しては花積に於て最も理想的な一例と、貝層及び貝層下土層に依て土器型式の異る二・三例に遭遇したのみであるが、發掘の方法に依つては後者の如き事實は更に多く見出されるであらう。第三の方法は土器の分類が完成されて居ない現在に於ては、これに多くの望みをかける事は出來ない。然し將來に於ては此の方法によつて更に細部の編年が樹立せられ得る可能性はある。

註

上述の土器群は從來種々なる名稱の下に呼ばれて居る。第一群A類—C類は子母口式、第一群D類—F類は茅山式、又は指扇式、第二群は花積下層式、第三群は蓮田式、第四群は黒濱式、第五群は諸磯式。第六群A類は阿玉臺式、B・C類は勝坂式D類—F類は加曾利E式、又は此等を總稱して厚手式、阿玉臺式、陸平式、勝坂式、第七群は堀ノ内式、第八群A類—D類は加曾利B式及び大森式、第八群E類—K類は安行式又は眞福寺式、第七・八群を合併して薄手式又は大森式と命名されて居る。又第一群—第四群までは土器の土質内に纖維を多量に含む爲め纖維土器とも呼ばれて居る。

附記

本編に於て、第六群土器以下の型式を示す挿圖として、今回の調査範圍外の遺跡から發見した材料を多く使用したが、これは土器型式を理解する上には、破片によるより完全品に基いた方が、遙かに效果的であると考へた爲めである。然るに、我々の調査區域内の斯種の土器は、完形品に乏しく概して破片が多かつた爲めこれを一々圖示しても、一般に理解する事が困難ではないかと思つて、敢て範圍外の材料を使用させて戴いたのである。

のを使用するのを常として居る。

これを要するに、第一群より第五群に至る諸型式は、その形態及び紋樣が極めて單純で且つその製作も概して粗雜であり、器の大さは一般に餘り大きくなく中形小形のものが多い。第六群土器はその形態稍變化に富み、紋樣も力强い立體的の渦紋を基調として構成され、中には土器全體が紋樣の塊(マッス)とも見えるまでに作られて居るものもある。製作は餘り精緻とは云へないが、その技術は決して劣つてはゐない。土器の形は概して大形である。第七群以下のものは器形の分化する事顯著で、紋樣は沈線化し、製作は一般に精巧となり、器の大さも餘り大形なものはなく中形乃至小形の物が多數を占めてゐる。若し此等に就てその氣分を語る事がゆるされるなら、第一―五群までは古拙、第六群は雄健、第七、八群は巧緻と形容する事も出來よう。

以上の如く先史東京灣沿岸地帶の貝塚より發見される土器を觀察した結果、此等は大體に於て八個の群に大別され、各々の群は更に數個の型式に細別される事が明瞭と爲つた。而して各々の型式群の間に存する型式的又は製作技術的差異は相當顯著なるも、併かも其間に强弱の差こそあれ一脈の聯關が認られる事は否定出來ない事實である。卽ち此等の土器群は單にその樣式上より見ても、系統的にはほゞ其の流れを一にして居るが、この全部が同一時代の所產とは考へられない點の多い事は上述の記載に徵して明瞭である。然らば其等が如何なる編年的序列を以つて配列さる可きか？　筆者は此の疑問の解明に對して次に記する三方法を採用した。

(I)　貝塚を構成する貝類による遺跡相對年代の推定。

(II)　層位に據る遺物の相對的新舊の決定。

(III)　遺跡に於ける各型式土器群の組合せ、及び遺物の形態的對比。

口頸部に發達してゐるが胴部にも複雜な構成を持つ紋樣帶のある例も多い。所謂磨消紋は此の群の加曾利E式の中にも旣に出現してゐる。第七群に於て紋樣はより沈線化直線化し、紋樣帶は口頸部と共に胴部一帶に亙つて施される事もあり、磨消紋は益々一般化して來る。第八群に至れば、前者より更に洗練された入組渦紋、及び充塡紋が行はれ、紋樣帶は再び口頸部に局限される樣になる。

地紋　第一群子母口式では繩紋が殆ど見當らず、その代り殆ど總ての土器の內外面に一種の條痕がつけられてゐる。茅山式も繩紋に乏しく條痕が盛んに行はれてゐるが、Anadara 屬の殼背を抑捺した貝殼紋も稀にある。第二群では Anadara 屬の殼背を以てせる貝殼紋が盛行し、繩紋は多少存在するも、此等は主として粒子の顯著ならざる單方向又は羽狀繩紋であつてその變化に乏しい。第三群に至ると繩紋は飛躍的に分化し、その種類甚だ多く、且つ數種類の繩紋を混合して一個の土器に施文した樣な例も普通に見られる。然し第四群に至つてそれは再び單純化して來る傾向があり、第五群に在つては全く變化に乏しく普通の單方向繩紋のみが主として使用される。第六群阿玉台式に於ては繩紋は殆んど消失するも、再び普通種が盛行する樣になる。第七群の繩紋は單方向繩紋で、磨消紋としたものが多く、又粗い繩紋上に斜めの櫛目を附した例が多い。第八群の繩紋の種類は第七群のそれと同樣で、矢張り磨消紋として使用されてゐる、此群の土器の粗製品に於ては斜行する櫛目紋が、繩紋に代つて地紋の役割をつとめてゐる。

纖維　土器の製作に當つてその中に纖維を入れる風習は、第一群より第四群に至るまでのものには盛んに行はれてゐたが、それ以後のものには全く見當らない。又第六群阿玉台式には雲母片を多量に含んでゐる土器が多いが、此の風も勝坂式以下には消失し稍大粒の砂を多く含む樣になる。第七・八群に至ると土質は槪して細密なも

殆んど見當らない。

把手は第一群より第四群に至るまでの各種土器に於ては、口緣上に極く簡單な耳狀の突起を附するのみで此等は殆んど實用的意義を持つてゐない。第五群では前型式同樣の耳狀突起を有してゐるが、其中の或物には動物の顏面を現した例もある。第六群に至ると把手は突然大形になり、極めて複雜な環狀突起として發達をとげ、時に其上に人面を表現した所謂顏面把手を爲す事もある。第七類に於てはこの複雜な把手は消失し、僅かにそれ等の面影を痕跡的に殘す退化形式として殘存し、第八類に及んでは再び元の耳狀突起の如く口緣上にその名殘りを止めてゐるのみである。

紋樣第一群子母口式のそれは極めて單純で點列、直線紋等を主とし、紋樣の施される部分―紋樣帶―は口頸部であるが、茅山式では頸部に隆起帶があり紋樣は口―頸の間に施され或ひは體部一帶に隆起細線紋が發達する。第二群では口邊及び頸部に隆起帶が附せられ、點列、又は羽狀線紋の如き紋樣は主としてこの帶上に施される。第三群に於てはこの隆起帶が更に狹少となり、其上の裝飾も簡單化し、これと共に半裁竹管又は櫛樣器具による直線紋が口頸部に發展する。又斯の如き器具をコンパス狀に使用した施紋法も此類に於て始めて行はれてゐる。第四群、口部及び頸部に半裁竹管を用ひた沈線紋、又は爪形沈線紋、及びコンパスを使用した波狀紋を粗雜に施したものが多く、稀に土器全面に亙つて半裁竹管紋を以て葉脈狀の紋樣をつけたものがある。第五群、半裁竹管紋は益々盛行し、その構成も第四群のそれより發達し紋樣帶は胴部にまで擴大せられ、又隆起細線を以て蕨手狀曲線紋を施したものも存在する。第六群阿玉台式には一種の曲線的隆起線が最も普通で、此の紋樣は土器全體に亙つて施されてゐる。勝坂式には種々なる紋樣があるが、その最も代表的なのは波狀連續渦紋で、これ等は全部

K類　外反する口頸部を有し胴部の圓く張出した壺形土器で製作は精巧なものが多い。紋樣は胴部に發達し、主として波狀の入組曲線より成り、多くは紋樣の空間を三角形又はY字形の沈刻を以て充塡してゐる。繩紋は殆んど發達せず稀に磨消紋として使用されるのみである。(第十七圖10)

(九)　土器型式の概觀

次に此等諸形式に屬する土器の、各部分の特徵を概觀して見る。

器形は第一群に於ては極めて變化に乏しく殆んど鉢形のみに限られ、第二群に在つては鉢形、及び胴部の稍張り出して口の廣い甕形を呈するものがある。第三群も大部分は鉢・甕形のみであるが、異形土器として一種の注口土器が存在してゐる。第四、五群には鉢形、甕形、壺形、カリパー形等があり、第六群に在つては此等の他に平鉢形を加へ、第七、八群に至れば器形は更に分化し、前記せる形態以外に注口土器、臺付土器、其他各種の異形品が製作される。

底部は第一群の子母口式では尖底又は圓底で、茅山式には尖底或ひは粗雜な平底があり、第二群では平底或ひは稍々上げ底風の平底で、その底面には貝殼の背部壓痕を附せられたものが多い。第三群は平底又は上げ底狀の平底が多く、この底面には屢々繩紋又は貝殼紋が施されてゐる。第四群—第六群は殆んど平底のみで底面の變化に乏しい。第七群に於ても平底が多數を占め、此等は屢々底面に網代の壓痕を有する所謂網代底を形成し、又脚が下方發展を爲して臺を成す例も見られる。第八群の底部形態は第七群のそれと類似してゐるが、底面の壓痕は

結合し一種の尖形紋様としてゐる。口縁は平縁と波狀縁とがあるが、後者はその波頂に耳狀突起が附けられてゐる例が多い。縄紋は局部的の磨消紋として使用される。（第十七圖4・5）

E類　漏斗狀を呈し稍內曲する口頸部を有する甕形土器。口縁は波狀縁を爲し口縁及び頸部には小刻を列ねた紐狀紋が繞らされ、その間に縄紋帶の存在する場合が多い。胴部にも紋様帶があり、磨消紋による各種の紋様が發達してゐる。（第十七圖6）

F類　洋襟狀口頸部を有し、屈曲せる胴部を持つ甕形土器で胴部上方には弧狀線が連ねられ、下方には櫛目による搔紋が施されて居る。縄紋は「磨消紋」として使用される。（第十七圖7）

G類　大波狀口縁を有する淺鉢形土器、頸部と胴部との境界部に於て少さな段がつけられ、胴部は稍張出してゐる、紋様は全く無く全體よく研磨されてゐる。（圖譜、大森介墟編、第八圖版1・3・5・10・11參照）

H類　口頸部の內曲する甕形土器で底部は著しく少さい。口縁及頸部には連續的指頭壓痕又は點列による紐線狀紋が繞らされ全體に亙つて櫛目を以てせる斜向搔紋が發達してゐる。（第十七圖8）

I類　口頸部外反又は內曲する甕形土器、口縁より胴部にかけて數段の縄紋帶が繞らされ、其上の各所に瘤狀突起があり、縄紋帶の間には連續する弧線紋又は入組紋等が加へられてゐる事がある。胴部以下には櫛目紋が施されてゐる。（圖譜、大體J類に類似するも口邊波狀を爲さず、扇狀把手は平縁上に附着する）

J類　上方に開く口頸部を有する甕形土器、口縁は大波狀を呈し、その波頂は扇狀を呈する突起と爲つて居る。口頸部には數段の縄紋が繞らされ、その上に一定の間隔を置いて瘤狀の突起が附着して居る。胴部以下には櫛目紋が發達して居る。（第十七圖9）

Fig. 17　第八群土器（關東各地出土、主として原始工藝に據る）

器形はよく分化し鉢、甕、椀、壺、高杯、土瓶形等で此他種々なる異形土器も屢々出土する。底部は平底で或物は尖底に近い程度に細くて直立にたへない樣な―底面を持つ例もある。製作は概して精巧、土質は緻密、燒成は充分である。紋樣は沈線による直曲線紋で、所謂「磨消紋」は極度に發達し、紋樣として巧みに構成された入組み紋も亦盛行して居る。

縄紋は普通の單方向縄紋であるが、土器の全面にこれを施したものは殆んど絶無に近く、主として一部分の紋樣の地紋卽ち所謂「磨消紋」として使用されて居る。把手としては口緣上に小形の耳狀突起又は波狀緣の波頂に扇狀突起を爲す物が殘つて居る程度である。

第八群土器は大凡A―K類に分類される。

A類　口頸部稍外反する甕形土器、口緣及び頸部に各一本の連續的指頭壓痕又は他の器具による點列を加へた紐線狀隆起線をめぐらす。全體に亙つて粗目の縄紋が押捺され、その上に斜方向の櫛目狀搔紋が加へられてゐる。（第十七圖1）

B類　口頸部の外反する甕形土器、紋樣は胴部に數條の平行線紋を引き其上の所々に一定の間隔を置いて縱に8字を連ねたるが如き曲線を加へてゐる。縄紋は全體に亙つて發達してゐる。（第十七圖2）

C類　口頸部が漏斗狀に開き胴部が丸味を帶び、腹部以下が圓筒狀を呈する鉢形土器、紋樣は腹部に施され沈線を以て格子狀交叉線を引いたものが多い。此類の土器の中には臺を形成する例も見られる。（第十七圖3）

D類　口頸部の内曲する鉢又は椀形土器で、よく篦磨きがされて居る。頸部より胴部にかけて紋樣帶があり、紋樣は簡單なものはB類のそれと似て居るが、複雑なものは平行沈線の一端を鉤狀に彎曲させて、これを各種に

を施しその上に更に線刻を加へたものもある。（第十五圖左、第十六圖d）

E類　薄手精巧の牽牛花狀鉢形で表面は滑澤である。多くの場合頸部に紐狀線を繞らし、その上に8字形を爲す結び目狀の突起が加へられてある。主體紋様は帶狀縄紋より成り、これは胴部を繞つて施されて居る。口縁上縁には精巧なる小把手を附した例も見られ、その底部の殆ど全部は底面に網代の印痕を有して居り、口頸部内側には平行沈線より成る紋様の加へられて居る場合が多い。（第十六圖e）

Fig. 16　第七群土器
千葉縣貝塚貝塚出土

（八）第八群土器

第八群土器は加曾利B式、大森式、安行式（眞福寺式）等の各型式を一括したもので第七群のそれと共に從來薄手式と呼ばれて居た。第八群土器を出土する貝塚は野田丘陵、鳩ヶ谷丘陵等に多く存在し特に後者に於ては可成りの密集分布を示して居る。此等の貝塚から見出される土器の量は夥しく完全土器も亦決して稀でない。

亦充分である。紋様は主として沈線による直、曲線紋で縄紋は普通の單方向縄紋に限定されて居る。把手としては第六群の如き巨大なものを見ないが、稍小形のものが口縁部に發達する事は稀でない。



Fig. 15　第七群土器。左，貝塚貝塚。右，彌生貝塚

A類　外反する口頸部を持つ壺形土器、製作は比較的良好で厚さは中等度である。口縁外側に太き沈線を繞らし、口頸部は紋様なく頸部には紐狀隆起線があり、口部よりこの紐線にかけて數個の橋狀把手又はその跡痕が附加せられて居る、胴部に渦紋又は結束狀線紋が發達して居る。（第十五圖右、第十六圖a）

B類　鉢又は甕形を呈する中厚手の土器で、口縁部はA類のそれと近似し、その上に孔を有する小突起が附せられる事が多い。紋様はこの突起に向つて集注する紐狀隆起線を主題とし、其間に沈直線紋を以つて充塡したものより成立して居る。斯る紋様は口縁より胴部に及んで施紋され、縄紋はこれ以下に見られる場合が多い。（第十六圖b）

C類　製作は薄手で鉢形を呈し、口縁より胴部にかけて粗雜な數本の平行沈線を以つてせる幾何學的の直線又は不規則の曲線より成る紋様が發達して居る。（第十六圖c）

D類　口縁及び頸部に指頭による連續的壓痕を有する紐狀隆起線を繞した粗製の甕形土器で、全面に粗い縄紋

繞らされ縄紋は全くこれを缺いて居る。(第十三圖右)

D類 厚手にしてカリパー形を呈し、口頸部に數個の連續せる隆起渦紋を帶狀に廻らし、この渦卷の或物は更に立體化し中形の把手又は突起を形成する事もある。縄紋は單方向縄紋で全體によく發達して居る。(第十三圖左)

E類 厚手又は中厚手の甕形土器、口頸部は稍内曲し、口緣に沿つて點を連ねた細狀の線紋が廻らされ、全體に縦走する縄紋が施されて居る。口頸部には並行せる波狀線紋を繞らし其の間の縄紋を磨り消した例も相當に多い。(第十四圖)

F類 表裏面共に平滑なる平鉢、鉢、壺形等の土器で何等の彫刻的紋樣をも持たないが、これに丹を以て紋樣を書いたもの、縄紋は勿論少しも見出されない。

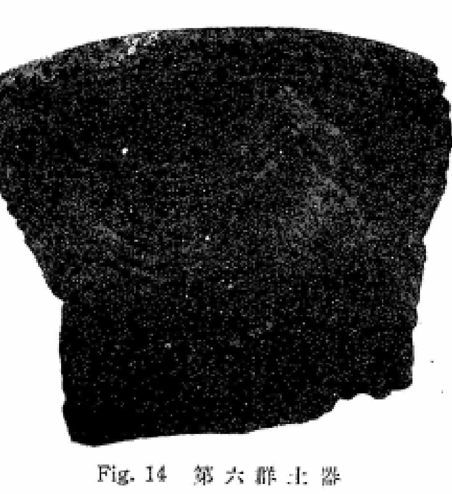


Fig. 14 第六群土器
神奈川縣勝坂出土

(七) 第七群土器

第七群土器は堀ノ内式と呼ばれてゐるもので、所謂薄手式の一部はこれに屬するものである。此種の土器を出す貝塚は千葉縣西南部の貝塚分布地帶には多く存在するが、我々の調査地域には比較的少く多摩川、荒川沿岸の一部と野田丘陵の一部に分布するのみなるも、土器の出土量は多く完形品も亦少くない。器形は鉢、甕、椀、土瓶形等があり異形品も多少存在し、底部は平底で裏面に網代の痕跡を止める例が屢々見られる。製作は粗雜なものと稍精巧なものとがあり、土質は比較的精選されて細かく燒成も

には著しく立體的に發達した把手を持つて居るものがあり、把手の中にはその一面に人の顏面を表現した所謂顏面把手もある。繩紋はA・C・F類を除く他の類に於てはよく發達するも主として單方向繩紋のみでその變化に乏しい。只E類に見られる様な縱走する繩紋は此類に特有のものである。又A類土器の殆んど總ては雲母末を含むで居るがこれも一つの著しい特徴と認めてよいであらう。然し雲母末を含む例は此類以外に第五群類土器のうちに稀に見出される事がある。（第十一圖）

此群の土器を出す貝塚は餘り多くはないが土器の出土量は相當に豐富で完形品も亦稀ではない。



Fig. 13　第六群土器
左，千葉縣加曾利貝塚。右，大島龍ノ口出土（據原始工藝）

A類　中厚手にして色は黑褐色を呈し雲母片を多量に含有する。形態は口頸部稍內曲せる鉢形を爲し、紋様は第十一圖1・2の如き隆起線とこれに伴ふ爪形或ひは紐狀點列紋より成立し、此等は土器全體に亙つて發達し繩紋を全く缺いてゐる。口緣部には山形又は扇形の突起を有する事が多い。

B類　厚手にしてカリパー形を呈し、上緣には概して立體的把手が發達して居る。紋様は垂飾狀隆起線紋を主體とし、これに沈線を充塡して複雜化したもので主として口頸部に於て盛行するが、胴部にまで及んで居る例も屢々見出される。此類に於て繩紋は餘り發達せず往々にして胴部以下に押捺されて居る事もある。（第十一圖4）

C類　厚手で頸部の縊れた甕形、表面に籠目狀線紋を有し、口唇部は內曲する事が多い。頸部には隆起線紋が

（又は磨消紋の如き手法を採つたもの）或ひはその中に丹を塗抹したもの等がある。縄紋は單方向縄紋で胴部以下に押捺される。（圖版五下、第十圖1—7）

C類　製作は薄手にして全體カリパー形を呈し、縄紋は單方向縄紋で土器全體に發達し、紋樣は縄狀の細い線を土器の上に貼りつけたもので、口縁より底部に至るまで施され、就中口頸部には渦卷紋より成る紋樣帶が廻らされてゐる。又口縁上には耳狀突起が附着してゐる例が多い。（圖版第五上、第十圖10—13）



Fig. 12　第五群土器
矢上貝塚出土（佐野氏藏）

D類　薄手で壺形を呈し、製作は精巧で燒成も亦良好である。紋樣は口頸部に發達し、細目の半裁竹管を使用して籠目狀其他を附したものが多く、縄紋は胴部以下に施されて居る。（第九圖、第十圖14—15？）

（六）第六群土器

第六群は阿玉臺式、勝坂式、加曾利E式と呼ばれる三群より成立し、此等は總て從來厚手式と概稱せられて居たものに屬する。阿玉臺式は本分類中のA類、勝坂式はB・C類、加曾利E式はD・E・F類に相當するもので、此等の土器は何れも器形が多く、厚手に製作され紋樣も主として立體的な隆起線紋を以て構成されたものが多い。器形はカリパー形、鉢、甕、壺、皿等で其れ等の中



Fig. 11　第六群土器

Fig. 10　第五群土器

し、丹を以て塗彩したものも少量ながら發見されてゐる。縄紋は變化に乏しい單方向縄紋が大多數を占め、稀に羽狀其他の類が發見される事もあり、貝殻紋（Anadara の殻背を押す物）も往々にして見出される。撚絲紋としてはＳ字狀撚絲が單獨に、或は縄紋上を恰も縫ふが如き狀態を以て横走する様な例に逢着する事もある。底部は普通の平底であるが口縁部の斷面形態は變化に富み、口縁には耳狀の突起の附着する例があり、それ等は稀に動物の顔面と爲つてゐる様な場合もある。（圖版第五、第十圖）

此の群の土器を出す遺跡は主として鶴見川多摩川沿岸地帶に存在し、遺跡より出土する土器の量は第四群より多少豐富で完全又は完全に近い土器も各所から相當發見されて居る。

第五群はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの四類より成立して居る。

Ａ類　製作は薄手にして器形は鉢形を呈し、縄紋は主に單方向縄紋で全體に亙つて發達し、紋様は全くこれを缺くものと、口頸部に半截竹管を以て施した稍細目の線紋又は連續爪形紋を繞らすものがある。（第十圖８－９）



Fig. 9　第五群土器
横濱市池谷貝塚出土

Ｂ類　製作は薄手で鉢形を爲し、口縁より胴部に亙つて半截竹管を以て施紋した紋様帶がある。此の紋様は一定の構成を持つものと、然らざるものとがあり、第十圖１・２の如き一種の渦紋が屢々見出されるが、此等は總て施紋器具に基づく技工の掣肘を受ける爲め、純正な渦紋を爲してゐない。又一區劃の線紋内に縄紋を施したもの

形で繩紋は餘り發達せず、土器の表面一帯には半截竹管を以て縦に葉脈狀の線紋が施してある。（第六圖8）

D類　製作は中厚手又は薄手に近く、器形は甕形で、纖維を多量に含有してゐる。土器面は繩紋を以て覆はれ多くの場合頸部には半截竹管を以て施紋した一種の波線紋が廻らされてゐる。（第8圖右、第六圖6?）

E類　製作は薄手、燒成良好で纖維を多く含まない。器形は胴部に比して頸部の大きな壺形で、口頸部に半截竹管又は櫛狀の器具を以て附した直線狀又は波狀の線紋を有し、胴部以下には繩紋が發達してゐる。（第8圖左、第六圖7?）

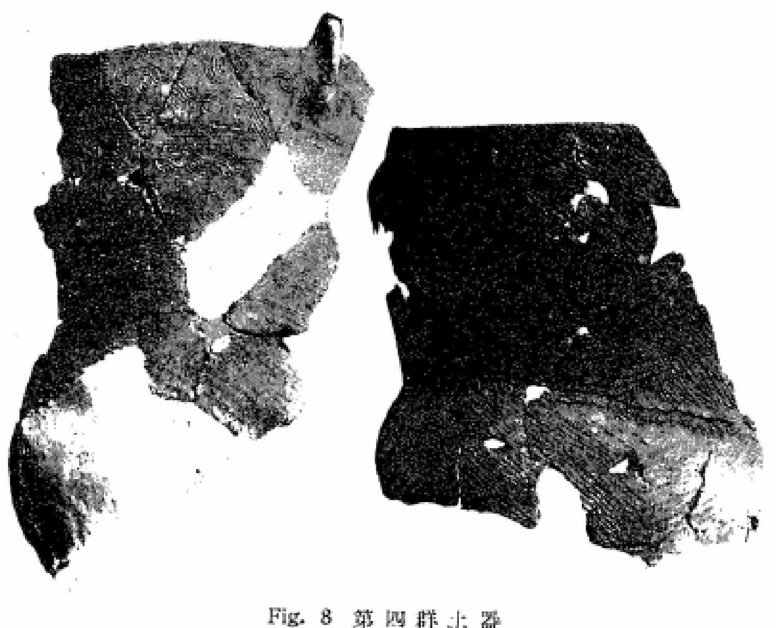


Fig. 8 第四群土器
左，元町貝塚　右，炭釜貝塚出土

(五)　第五群土器

第五群は所謂諸磯式土器で、その器形は大體に於て第四群のそれと一致するが、更にカリパー形の物を加へ、纖維を全く含まず製作燒成等も第四群より稍良好である。紋樣は半截竹管による線紋又は爪形連續紋或ひは隆起細線より成る曲線紋等から成立してゐるが、前者の紋樣構成法は第四群に於けるものより遙かに複雜化





Fig. 7　第四群土器　　左，炭釜貝塚，　右，大原貝塚

もある。繩紋粒子の壓痕は顯著なるものと然らざるものとがあり、又一條置きに粒子の少かい條の挾まれる例も少量ながら見出される。其他、網目狀の撚絲紋、橫走するＳ字狀の撚絲紋が繩紋と同樣に土器面に施されてゐる事もある。又口邊上部には耳狀の突起を附した例も少數ながら見る事も出來る。（圖版第四、第六圖）

A類　製作は中厚手、又は薄手にして纖維を含み、器面一體に各種の繩紋又は撚絲紋の施されてゐる事が多いが稀に貝殼紋も存在してゐる。口邊には半裁竹管を以て附けた線紋又は連續爪形紋が廻らされて居る場合もある。器形は殆ど鉢形に限定されてゐる。（圖版第四左、第六圖１—４、第七圖左）

B類　製作は中厚手、纖維を多量に含有し、器形は口部が稍細く胴部の張つた圓筒狀の甕形で、口頸部には蛤貝の緣或は爪の如きものを以て附けたと思はれる樣な半月狀印痕、胴上部には繩紋、胴下部にはAnadara屬貝殼の緣を押し、底部下面には同屬貝殼の背部を押捺してゐる。此の型式の明かなものは今日の所文藏貝塚から少數例を出土してゐるのみである。（圖版第四右、第六圖５？）

C類　製作は概して薄手であつて纖維を多く含み、器形は總て鉢

B類　牽牛花狀鉢形を呈し紋樣は全く見られない。縄紋の種類はA類と同樣頗る變化に富み、且つ全體に亙つて極めてよく發達し、一個體の土器に數種の縄紋を施した如き例も屢々見られる。（第四圖左）

C類　口頸部稍内反する圓筒形の土器で頸部には注口が附着して居る。縄紋は菱形縄紋で全體によく發達してゐる。類品は極めて少く、栗崎、南の二貝塚から各一例づゝ發見されて居るのみである。（圖版第三左）

D類　器形はカリパー狀を呈し、土器全面に網目狀撚絲紋が施されて居る。此類の土器は其類例に乏しく現在の所、南貝塚からその一例を出土してゐるに過ぎない。（第四圖右）

（四）第四群土器

第四群は從來廣義の諸磯式土器として取扱はれて居たものであるが、製作上諸磯式土器は纖維を全く含有して居ないのに反し此の式の土器は相當に纖維を含む點に於て前者と明かに區別される。黒濱慈恩寺丘陵、浦和丘陵等に點在する貝塚の大部分は此の形式の土器を出土するが、貝塚中に包含される土器の量は餘り多くなく、完形品も現在の所少數である。完全又はそれに近い破片によつて推定すればその器形は、稍胴の張つた甕形、牽牛花狀鉢形で極く稀に廣口壺形がある。口頸部は反りの有るものと無い物とがあり、底部は普通の平底であるが、稀に上げ底風のものも見られるがこれは第三群の物ほど顯著でない。製作は粗雜で燒成も餘り充分でなく、纖維を含む。紋樣は殆ど半裁竹管による規則的又は不規則的の直線紋又は波狀紋、及びこれが刺突による爪形連續紋で稀に櫛狀の器具を以て施した線紋も亦存在する。縄紋は單方向縄紋、羽狀縄紋、等が多く時に菱形を呈するもの

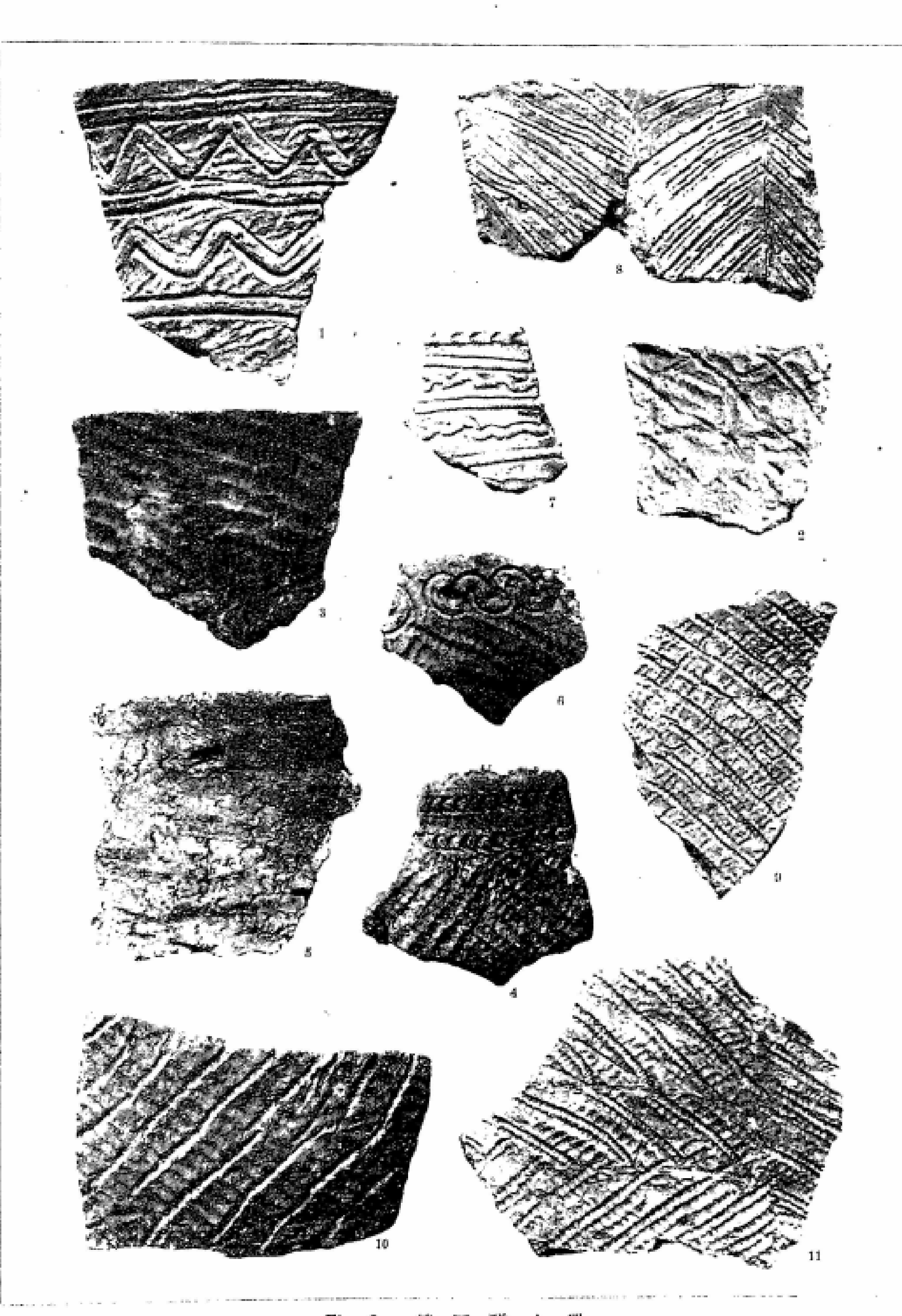


Fig. 6　第四群土器

Fig. 5　第三群土器

Fig. 4　第三群土器　　左，關山貝塚　右，南貝塚

貝殼紋も亦存在するがその量は餘り多くない。口邊部に於ける紋様としては網代狀沈線帶、及び同部分に隆起線を鋸齒狀に施したもの等がある。此等紋樣帶上の一定の場所には多くの場合小突起が附着してゐる。この他頸部に一種の波狀線の繞らされてゐるものがある。（圖版第三左―第五圖）

第三群も纖維を多く含む土器で、大體次の四類に細別される。

A類　器形は口頸部稍外反し胴部の多少張つた鉢形。紋樣は口頸部に發達し、此等は網代狀沈線紋又は隆起線、二本一組の平行沈線、及び半裁竹管を以てせる沈線より成立し、鋸齒狀を爲すもの、X字狀に交叉し或はこの交叉部に沈圓を畫いたもの等があり、線紋上には各部に圓點が附され、又線紋上或はその兩側には各種の點、又は線刻が施されて居る。縄紋は口頸部以下に羽狀又は菱形狀等に押捺され、その種類としては細い二條ごとに太い一條を交へたもの、蕨手狀を爲すもの等の如き種々の變形縄紋が認められる。（第五圖1―3）

帶上は網代狀構成を持つ沈直線紋によつて裝飾されて居る。（第二圖7）

E類　C類と一致する形態を有し、紋樣を全く缺くも土器の表面は總て貝殼紋又は縄紋によつて覆はれて居る。（第二圖8—9）



Fig. 3　栗崎貝塚に於ける土器出土の狀態
(Pl. III, 左はこれを復原せるもの)

F類　器形は口頸部外反する甕形で口緣は大波狀を呈する。口緣及び頸部には隆起線、又は隆起帶を附するものと全く裝飾のないものとがある。地紋としては普通の縄紋又は入り組むで波狀を爲す縄紋、或は貝殼紋等が發達して居る。

(三)　第三群土器

第三群卽ち蓮田式を出す遺跡としては關山、深作、側ヶ谷戸、鴻ノ山、栗崎、南、幸田等の諸貝塚がある。この種の土器の形態は主として牽牛花狀鉢形に限られるが稀に片口狀土器も存在する。製作は概して薄手、土質は稍緻密であつて纖維を含み、底部は平底又は上底狀の平底である。口邊は殆ど平緣で、稀に局部的に刻み又は突起を附して小波狀を呈せしめた例も見られる。縄紋は極めてよく發達し極端に複雜なる變化を示し、此等は單に土器の外側面のみならずその底面にまで及んでゐる事が多い。

形で、口頸部はやゝ外反し頸部がしまり、胴部の張つたものが多い。口縁には平縁と波狀縁とがありその上に小突起の附着せられた例もある。底部は上げ底風の平底を爲す物が大多數をしめ、平底も亦存在する。製作は中厚手又は薄手で、質はやゝ粗鬆、纖維を多量に含む。繩紋は中等度に發達し、その性質は粒子が粗く且つ壓痕の顯著でない單方向又は羽狀繩紋である。地紋としてはこの他に Anadara 屬の貝殼の殼脊を押捺したものが多く、此等は單に土器外側面のみならず、底部の下面にまで施されてゐる場合が多い。紋樣としては口邊周圍を帶狀に廻る網代狀沈線紋と、口邊及び頸部を廻る隆起帶とがあり、隆起帶上の裝飾には種々の變形が見られる。又口頸部に撚絲を押捺した撚絲紋も多少發見される。（圖版第三右）

第二群土器は何れも纖維を多量に含有するもので左の如き六種に分類される。

A類　薄手粗製にして器形は口頸部稍内曲する鉢形を呈し頸部に一條の隆起線を附し、紋樣は數條一組の撚絲を種々なる形に押捺し、或ひは更に其上に刺突狀點列を加へたもの等である。（第二圖1—2）

B類　口頸部外反し胴部が多少張つて居る鉢形土器で口縁及び頸部には隆起帶が繞らされ、この起起帶上には種々の線刻又は點刻による紋樣があり、此等二帶の間には點列又は繩紋が加へられる事もある。（圖版第三右、第二圖3—5）此種の土器の外面には貝殼紋及び繩紋が發達してゐるが、前者は Anadara 屬の殼背を押したもので、後者には粒子痕の餘り顯著でない羽狀繩紋が多く存在する。

C類　器形は主に牽牛花狀鉢形、纖維を含む。頸部に一沈線を繞らすほか紋樣は全く發達して居ない。繩紋はB類と類似する羽狀繩紋である。（第二圖6）

D類　C類に近似する型態を有し口縁には陵起帶を附し、又は一沈線によつて帶狀化した紋樣帶があり、この

この他紋様としては Anadara 屬の貝殼の殼脊を弧狀に重ねて押附けたもの、（第一圖4）棒狀のものに何かの纖維を巻きつけ之を羽狀に押捺したもの（圖版第二12—13）等があるがその發見數は極めて少ない。

E類　製作は厚手、土質は粗鬆で纖維を多量に含み、器の內外面に條痕を附したものが多い。器形は口頸部の多少內曲する鉢形を呈し、口緣上に餘り顯著ならざる突起を附した例も稀に見られる。頸部には一條の隆起帶又は稜が廻らされ、その上に稍幅の廣い先端を有する器具を以てせる點列を施したものもある。（第一圖5）

F類　厚手、又は中厚手で土質は同じく粗鬆にして纖維を含み、器面には條痕が施され、口緣及び頸部裝飾等はA類と相似するも、此の類にあつては口頸部に各種の凹線紋、或は點列紋が帶狀を爲して發達して居る。（第一圖6）

G類　製作は概して薄手、土質は緻密であつて纖維を多く含まない。器面の條痕は前二者ほど顯著でない。器形は單純な牽牛花狀鉢形を呈し、口緣部は大波狀を爲すものもある。口邊より胴部にかけて細隆起線による幾何學的紋樣を有し、この細隆起線間の一部は、多くの場合櫛目狀沈線を以て充塡されてゐる。（第一圖7）

（二）第二群土器

第二群は花積下層式と呼ばれ、主として花積貝塚下層、菊名貝塚等より發見され、坂堂貝塚出土品の大部分も亦これに屬する。此種の土器を出す遺跡からの土器の發見量は第一群のそれに比してはるかに多く、且つ完全品又はそれに近い程度のものは菊名、及び坂堂貝塚に於て可成り多數に發見してゐる。此等の形態は深鉢形又は甕

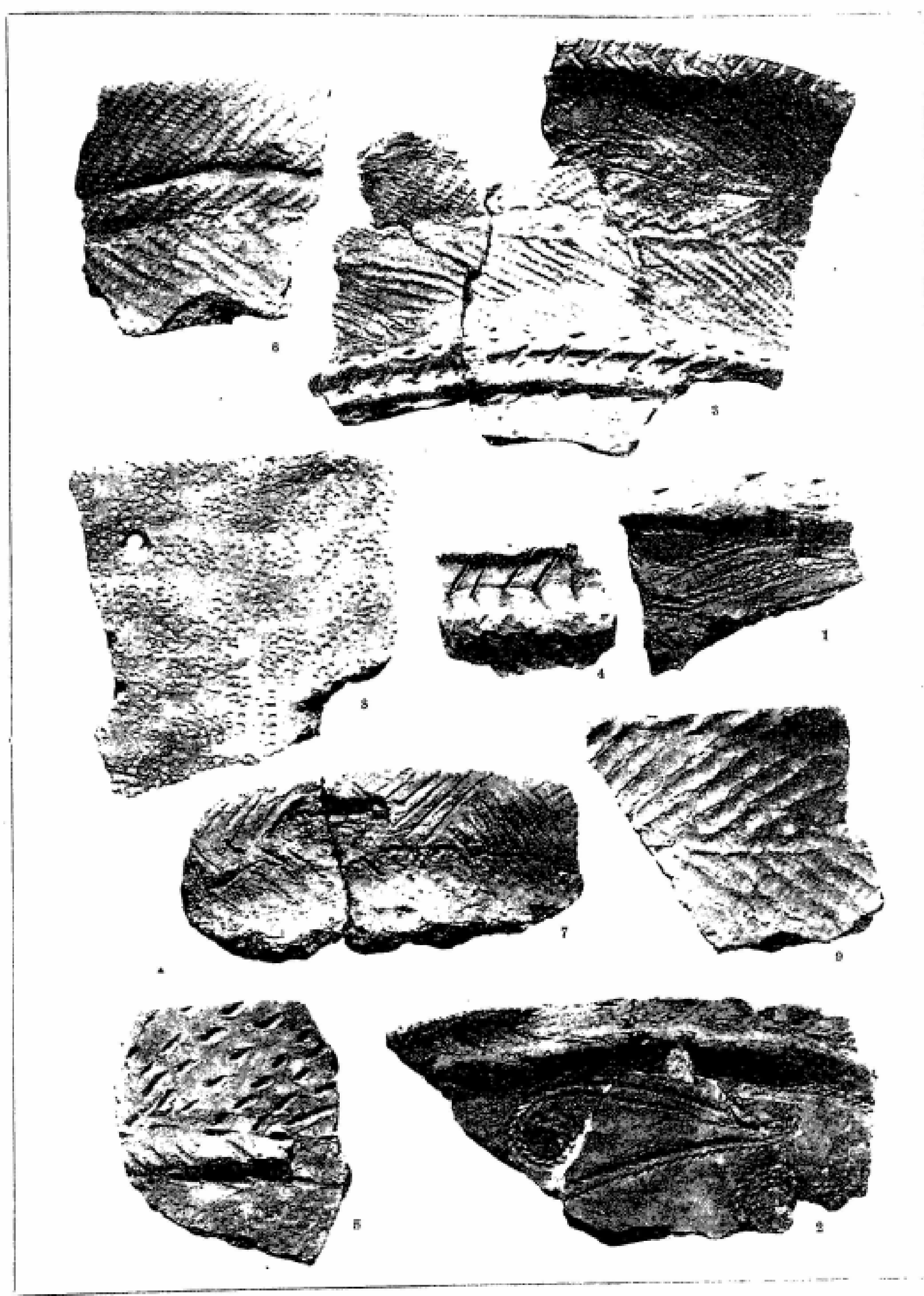


Fig. 2　第 二 群 土 器

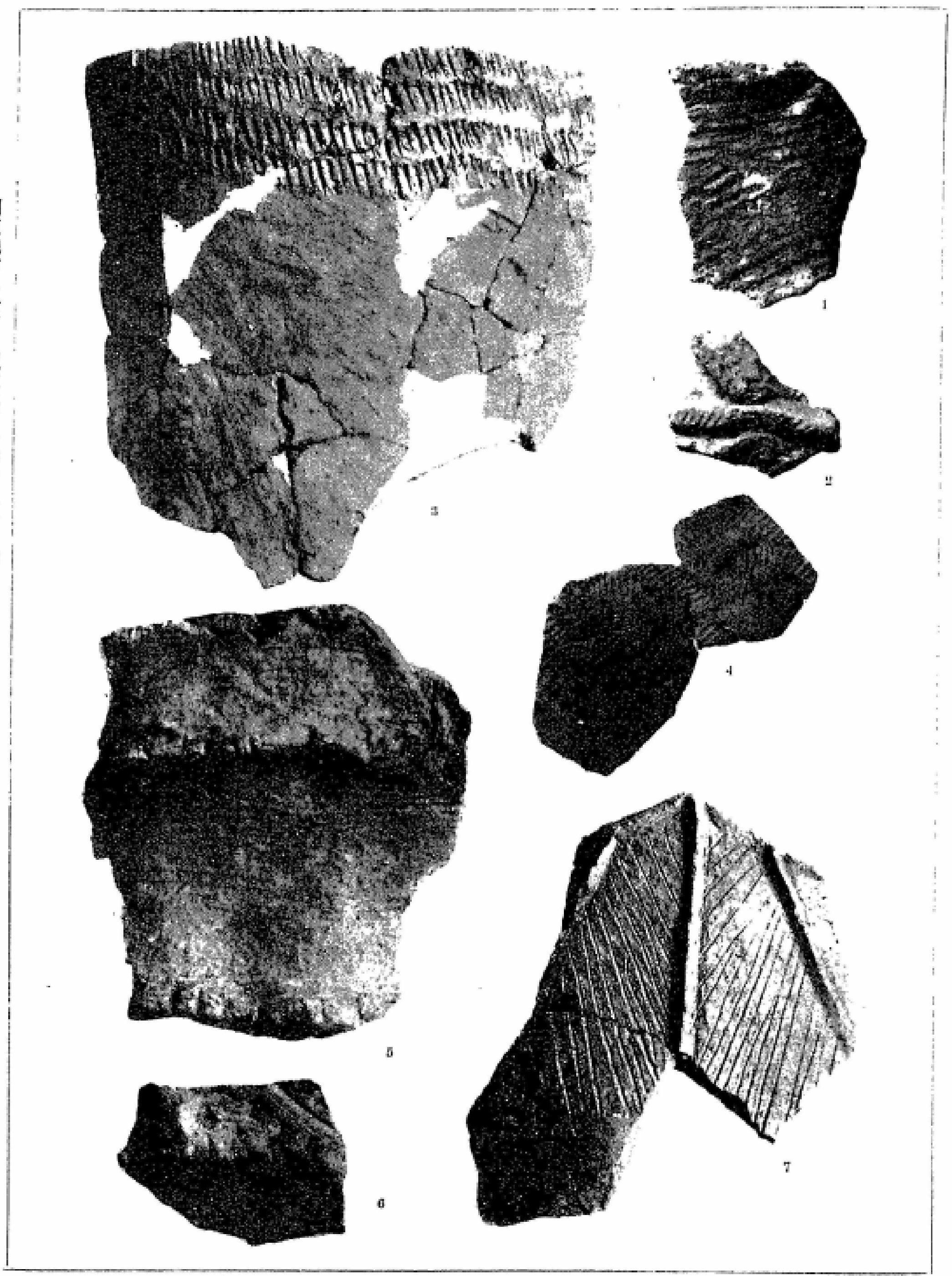


Fig. 1　第一群土器

前者に比してその數に於て豐富であるが、(1) 發見する土器は前者と同樣數量に乏しい。器形は深鉢形を呈するものが多く、底部形態は圓底、尖底、平底等である。製作は厚手、中厚手のものが多く、稀に極めて薄手のものがあり、土質は甚だ疏鬆のものと比較的堅緻なものとがあるが、概して纖維を多量に含み、土器の內外面に條痕を施した例が多く繩紋は稀である。紋樣は頸部に隆起線紋、口緣より體部に亙つて細隆起線紋が發達する。(圖版第二)

第一群土器は更に左の四類に大別される。(A類—D類までは所謂子母口式土器。E類—G類までは所謂茅山式土器)

A類　製作は厚手、土質は疏鬆で纖維を多量に含む。土器面は無紋又は一種の條痕を附したものが多い。器形は完全品が見出されてゐない爲め斷定することは出來ないが大形破片より判定すれば鉢形であるらしい。口頸部はやゝ外反するものと反りの全くないものとがある。(第一圖1)

B類　製作は厚手又は中厚手、土質は疏鬆であつて纖維を含んでゐる、器面には條痕を付けたものとこれの無いものとがある。頸部に五—一〇粍ほどの幅を有する隆起帶が廻らされ、口緣よりこの隆起帶に亙る部分に、同樣の隆起線より成る紋樣が施される。この隆起線上には刻みのあるものと無いものとが見られる。(第一圖2)

C類　製作は中厚手、薄手、土質は概して疏鬆なものが多いがA・B類に比してやゝ緻密で、且つ纖維を含むで居る。器形はA・B類と略々同樣で、口緣には平緣と波狀緣とがある。口緣上面には小刻を有するもの、及び貝殼の殼脊を押捺する物等がある。口頸部にはやゝ斜めの小刻を帶狀に連續せる一條乃至數條の紋樣帶を有し、此等は水平又は鋸歯狀をなして施されて居る。(第一圖3)

D類　厚さ、土質、口頸部形態は全部B・C類に類似して居る。條痕はA類のそれと多少異り、一定の幅の溝が平行的に深く刻まれ、その條の內にはA類のそれに多く見られるやうな細條が認められない場合が多い。

第二章　繩紋式土器の分類

(一) 第一群土器

第一群は二つの系統より成立して居る。第一は子母口式と稱せられるものに該當し、第二は茅山式と呼ばれるものに略々一致する。前者は我々の知る範圍では子母口貝塚に於て主として發見され、他の遺跡では他種古式土器と混じて、その小破片がごく稀れに見出されてゐるにすぎない。同貝塚から發見する土器は、比較的少量であつて、未だその完形品を發見しないが大形の破片より推定すれば、器形は變化に乏しく深鉢形を呈するものが多い樣である。この深鉢形の中には更に二種の別があり、一は口頸部に反がなく漏斗形を呈するもの、他は口頸部がやゝ外反し、頸部が多少しまり胴部の張つてゐるものである。底部形態は圓底又は尖底或ひは乳房狀をなす物のみで平底は非常に稀である。製作は概して厚手、中厚手のものが多く、厚手粗雜で燒成もあまり充分でなく吸水性に富み、洗滌によつて容易に溶解し、又は表面の崩落する程度の物も相當存在する。土質は稍粗く内部に纎維を多量に含むで居る。繩紋は極めて稀で子母口貝塚各地點の土器を通じて僅か二例を數へるのみであるが、それ等とてもその出土狀態は明かでない。紋樣は陵起線紋、點列紋、貝殼の殼脊を押捺した一種の線列紋等である。其の他土器面に櫛目狀の條痕を施したものが多量に發見される。(圖版第一)後者卽ち第二の土器を出す遺跡は、

（8）大場（谷川）磐雄、日本石器時代民衆の生活狀態、中央史壇、原始時代號、大正十二年。

（9）榊原政職、前出參照。

（10）H. Matsumoto: Notes on the Stone Age People of Japan. American Anthropologist, Vol. 23, No. 1. 1921. 松本彥七郎、宮戶嶋里濱及氣仙郡獺澤介塚の土器、現代の科學　第八卷、第五―六號。宮戶島介塚分層的發掘成績、人類學雜誌、第三十四卷、第十―十一號

（11）山內清男、關東北に於ける纖維土器、史前學雜誌、第一卷、第二號。纖維土器について（追加第一、第二）史前學雜誌、第一卷、第三號、第二卷、第一號。日本遠古之文化、ドルメン、第一卷、第四―七號。

（12）八幡一郞、南佐久郡の考古學的調査　東京　昭和三年。

（13）甲野勇、埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告、史前學會小報、第二號、東京、昭和三年。茨城縣小文間村中妻貝塚調査概報、史前學雜誌第一卷、第一號。

（14）赤星直忠、茅山貝塚と其の土器、史前學雜誌、第二卷、第六號。

で筆者が一型式と認定して居る或種土器の中には、更に幾何かの型式に分けられねばならないものもある。然し豫報としての性質上繁雜化をさける爲めに、大局に影響の少い小型式は、成る可くこれを同性質のものと合同させる方針を採つたのであるが、何れ正式の報告を試みる際には、より豐富なる資料を廣く全國的に集めて、完全に近い分類を行はん事を期して居る。

又、此の研究に當つて、筆者の採用した分類法は一つのFundと認定される遺物層中の土器を出來る丈け精密に、その型態、裝飾、製作等に就てこれを分析的に觀察し、更にその各々の特徵に基いてこれが綜合を試み、從來の直感的把握より、反省されたる綜合に多少なりとも進出す可く試みた。土器の研究は、細別と概括との二つの操作の間斷なき反復によつて完成さる可きものではないだらうか。

註

（1）八木奘三郎、下村三四吉、下總國香取郡阿玉臺貝塚探究報告、東京人類學會雜誌、第十卷、第九十七號。

（2）I. Ijima & C. Sasaki; Okadaira Shell-mound at Hitachi. Mem. of Sci. Dep. Univ. of Tokio. (Pt. 2) 1883.

（3）佐藤傳藏、若林勝邦、常陸國浮島貝塚探究報告、東京人類學會雜誌、第十卷、第百五號。

（4）鳥居龍藏、武藏野の有史以前、武藏野、第三卷、三ノ三號。

（5）榊原政職、相模國諸磯石器時代遺跡調査報告、考古學雜誌、第十一卷、第四百四十三號。

（6）貝塚を構成する貝類によつて當時の汀線を求めこれに基いて貝塚の新舊を律せんとする試みは、八木・下村兩氏によつて最初に爲された。（註1參照）只兩氏に依つて對比せられた西ケ原昌林寺貝塚（鹹水、大森式）と、西ケ原農事試驗場貝塚（淡水、陸平式）とはその距離こそ接近して居るが、其等が面する溪谷を全く異にする爲め、その結論を正當と認める事は出來ない。又常陸三反田貝塚と大串貝塚との關係に就ては未だ調査を行つて居ない爲め暫く疑問として保留し度い。然し結果の當否は兎に角、夙に斯る方法に着想せられたる兩先學に對し我々は衷心よりの敬意を表するものである。

（7）鳥居龍藏、前出參照。

薄手式は海岸部族—fisher—の製作に係はり、厚手式は山手部族—hunter—の手に成るものであつて、兩者は全く時を同くして併存したものと考へられた。[7] 當時大場盤雄氏も亦鳥居博士の說に合流され、更に氏は諸磯式土器を以て漂泊民族の所產と云ふ新說をも提出されたが、[8] これに反して榊原政職氏は諸磯式土器の製作が古拙なる點に注意され、これを以て縄紋式土器の古式なるものと推定せられた。[9]

松本彦七郎博士は氏の所謂「凸曲線縄紋期」—陸平式、厚手式の時代—は、所謂「凹曲線縄紋期」—大森式、薄手式の時代—に型式的にも年代的にも先行するものであると云ふ事を、層位的事實に基き更に進化論的見地に立つて證明を試みられた。[10] この新銳なる編年學的考察は、其頃依然として勢力を占めて居た素朴なる民族論的分布觀と對立して、當時の學界に二大潮流を形成するに至つた。近年に至つて山内淸男氏は關東及び東北地方に於て、[11] 八幡一郎氏は信濃に於て、[12] 筆者は關東地方に於て、[13] 各々の地方より發見する土器に就て調査した結果、從來行はれてゐた「三大別」の中には更に幾多の型式が介在し、異つた型式的組列を持つ各個の型式群は、それぞれ多少づゝ年代又は文化期を異にするらしい事が判明するに至つた。又從來少數の人々によつて僅かにその存在をのみ知られてゐた、古式縄紋土器の內容及びその編年的位置も、茅山、[14] 子母口、花積、關山等の諸貝塚の發掘調査によつて漸次明瞭となつた。

本論に於て筆者の試みた土器の分類は、先史東京灣 (Prehistoric Tokio Bay) 沿岸地帶の貝塚より、史前學研究所員の蒐集せる資料に基いてこれを行ひ、他の資料例へば三浦半島に於ける田戶、又は三戶遺跡出土品の如きもの、或ひは關東平野周圍の低山地帶の土器等に就ては全くふれて居ない。從つてこの分類は、單に關東地方なる地域に分布する縄紋式土器に對してすら、多くの缺陷を有する事はまぬかれない。又嚴密に分類すれば、本篇

薄手にして精巧なる類と、その製作が厚手にして粗大なる類との二様の型式の存在する事を認められ、前者は武藏國大森貝塚より主として發見する爲めこれを「大森式」と呼び、後者は常陸國陸平貝塚より多く出土する故を以てこれを「陸平式」と命名された。(1) 然し此等二型式に屬する土器の間に存在する型式的差異は、これより以前、既に陸平貝塚の研究の際、佐々木忠次郎、飯島魁兩博士によつて實質的に認知せられて居たものである。(2) 阿玉臺貝塚の調査に稍遅れて、佐藤傳藏、若林勝邦兩氏は常陸國浮島貝塚の發掘を行ひ、その結果同貝塚出土の土器は「大森式」又は「陸平式」の何れにも屬さない型式のものであると云ふ事を指適された。(3) 佐藤、若林兩氏は此の式の土器に就て何等の名稱をも與へられなかつたが、事實上に於ては浮島貝塚發掘の直後—卽ち明治二十八年代—に既に關東に於ける縄紋式土器の三大型式が認定されたのである。大正の中頃に至つて鳥居博士は關東の縄紋式土器を「厚手式」「薄手式」の二型式に分類されたが「厚手式」は「陸平式」に該當し、「薄手式」は「大森式」と一致するものであつた。(4) 又榊原政職氏は浮島貝塚と同型式の土器を出土する事を以て知られた相模國諸磯遺跡の發掘調査を行つた結果、此の型式の土器を「諸磯式」と命名された。(5)

斯の如き土器型式の差異が何に基因するかと云ふ事の解釋は、研究者の各々の立場によつて全く相違してゐた。例へば八木、下村兩氏は「大森式」「陸平式」を含む貝塚の貝類の研究の結果、「前者は後者に比して技術的には一見進歩した型式の如く推定されるが、年代的には寧ろ後者より古期のものと認める可きである。然し此等兩型式の土器が混出する遺跡が往々にして發見される所より見れば、所によつてはこの二型式の土器は同一時期に併用された場合もあるに相違ない」と結論されて居る。(6)

鳥居博士は厚手・薄手兩式の差を、全然生活樣式を異にする部族の精神活動の表現の相違に基くものと爲し、

す可き事を豫想するものである。特に第一群より第四群までの記載が比較的精しく、第四群以下が粗雜であるのは、前者に就ては未だ餘り多く學界に發表されて居ないのに反し、後者は屢々先學諸氏及び筆者等によつて、相當精しく記載されて居る爲めこれを再錄する煩をさけた爲めである、がこれ等に就ても尙多くの推敲の餘地を存して居るから、他日各方面より再吟味した結果その詳細を發表するつもりである。

尙本文の内容は全く筆者一個人の私見であつて、大山史前學研究所員全部の意見を代表するものでない事を此處に明記する。從つて本研究に對する責任の總ては筆者自身になければならない。研究所としての統一されたる研究は他日精査報告に於て發表されるであらう。

終りに思考の自由と共に言說の自由をも寬容されたる大山所長に衷心より感謝の意を表する。

(二)　關東繩紋式土器研究略史

繩紋式土器は時代的に又地方的に、極めて多くの變異性を示し、隨つてその特徵を簡單に云ひ表す事は出來ない。ことに最近の研究の結果、從來我々が懷いてゐた繩紋式土器なる概念の外延は、益々擴大せられ同時にその内包も今迄より更に嚴密に吟味される必要を生じた。

本論に入るに先達つて、現在の研究をより明瞭に理解する爲めに、關東地方を中心とする繩紋式土器の型式別に關する過去の業蹟と、その型式的差異の生ずる原因に就ての先人の考察とを概觀して見度い。明治二十七年に八木奘三郞、下村三四吉兩氏は「下總國香取郡阿玉臺貝塚探究報告」中に於て、繩紋式土器のうちにその製作が

關東地方に於ける縄紋式石器時代文化の變遷

甲野勇

第一章　總説

(一)　序言

最初に筆者として御斷りせねばならないのは、本報告の發表が豫告の期日より遙に延引したのは、偏へに筆者の研究が遲延した事に原因するものであつて、これが爲め會員諸氏及び共同勞作をされた諸氏に對して、多大の御迷惑をかけた事は筆者の最も遺憾とする所である。併も筆者の分擔する土器の研究は、益々多岐に亙り、且つ繁雜となり、又更に材料の不備を痛感する部分も多く見出されるに至る等の諸種の事情により、この研究の完成には未だ更に多くの日月を要する樣な狀態にある。且つ又これを詳細に記載する事は豫報としての性質に悖る恐れがある爲め、今はその極めて概略を誌し以て僅かながらも筆者としての責任を果し、他は研究の完成を俟つて再び先輩及び會員諸氏の嚴正なる御批判を仰ぎ度いと希望してゐる。

此の報文中の土器分類の項は前記の如く筆者自身もその不完全なる點を自認し、完成の曉には多くの改變を要

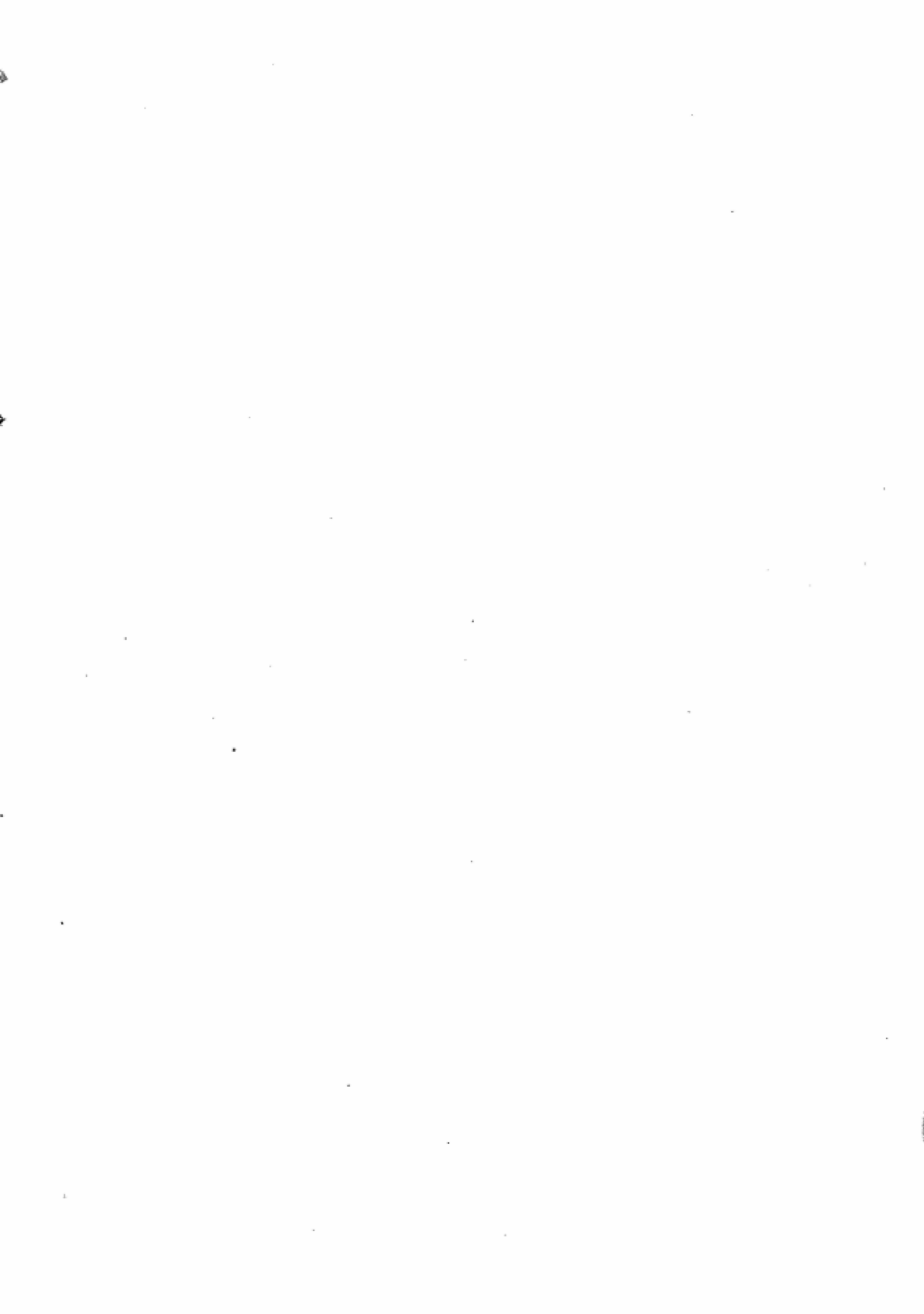
第三章　繩紋式石器時代の編年學的考察

第四章　關東石器時代文化の變遷

目次

第一章 總說

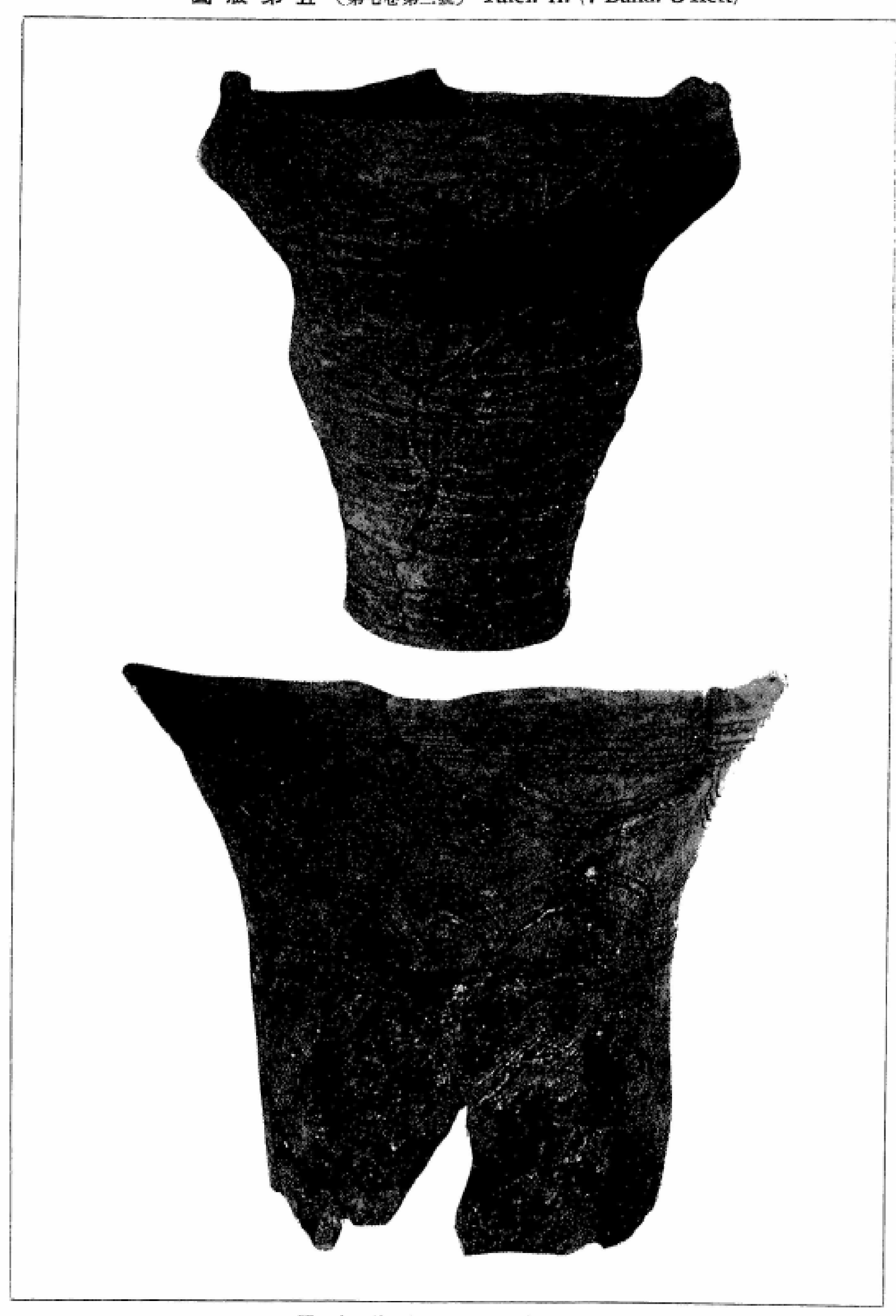
第二章 縄紋式土器の分類



史前學雜誌第七卷第三號

關東地方に於ける繩紋式石器時代文化の變遷

甲野 勇



關 東 前 期 式 繩 紋 土 器

Aeltele Jômon Keramik vom Kwantô



關東前期式繩紋土器

Aeltele Jômon Keramik vom Kwantô





關東前期式繩紋土器

Aeltele Jômon Keramik vom Kwantô

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル
二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關聯スル諸學ヲ考究普及スルニアル
三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ
四、會員
　本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル
五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得
　入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ
六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル
七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得
八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得
九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
　東京市澁谷區隱田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠
會長　大山柏
幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　樋口清之　山口隆一　池上啓介
會計　岡田淺一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關聯スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル
原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス
原稿提載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ
寄稿ノ別刷ハ豫メ申込アル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年五月二十日印刷　第七卷第三號
昭和十年五月二十五日發行　定價一圓

編輯者　池上啓介　東京市澁谷區隱田一丁目九番地
發行者　岡田義一　東京市澁谷區隱田一丁目九番地
印刷者　高田壬午郎　東京市神田區神保町一丁目三十四　株式會社開明堂東京營業所

發行所　史前學會　東京市澁谷區隱田一丁目九大山史前學研究所内　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　岡書院　東京市神田區駿河臺町一ノ八　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第七卷　第三號

昭和十年五月發行

關東地方に於ける
縄紋式石器時代文化の變遷

甲野　勇

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

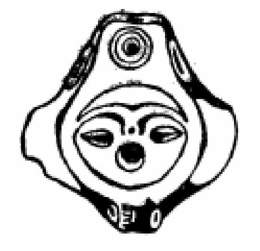
ORGAN DER JAPANISCHEN

PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



7. BAND 4. HEFT

TOKIO

Juli 1935

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibaya-Ku Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A. Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa   Jookei Shibata

Vorsitzender   Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi   Keisuke Ikegami

Isamu Kohno

Iwao Ooba   Sueo Sugiyama

Kingo Tazawa   Ryuichi Yamaguchi

INHALT

I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

III. BUECHER BESPRECHUNGEN

SONDERAUSGABE

TAFELN

直徑一・〇糎。高さ一・〇糎。内部充實せる圓筒狀なり。色は赤褐色。

四、同　上　同　上

一方の直徑二・五糎。他方の直徑二・〇糎。中空。一方の周圍に隆起帶を附せり。

五、同　上　下總國北相馬郡文間村立木貝塚出土

一方の直徑一八・〇糎。他方の直徑一・二糎。高さ一・八糎。内部充實し、色は褐色。（第三圖10）

六、同上破片　武藏國北足立郡紳根村貝塚

直徑一三・五糎。中央四・五糎。高さ二・〇糎。黒色にして滑澤あり。

七、同上破片　同　上

直徑一四・五糎。内部四・五糎。高さ一・八糎。黒色にして、沈紋を朱でうづめたり。

八、同上破片　南埼玉郡柏崎村眞福寺貝塚

高さ二・〇糎。外徑約五・五糎。内徑約四・一糎。幅〇・七糎。一方に細かき沈點と沈線紋の模樣あり。高さ一・八糎。（第四圖6）
黒色と褐色

九、同上破片　同　上

高さ一・六糎。外徑約八・〇糎。内徑約六・〇糎。黒色。

一〇、同上破片　同　上

高さ一・九糎。内徑五・五糎。外徑七・二糎。幅〇・八糎。横斷面は蒲鋒型。

一一、同上破片　下總國東葛飾郡手賀村岩井貝塚

高さ一・八糎。外徑八・九糎。内徑六・五糎。幅二・一糎。赤色。

石器類

一、大形石斧頭部　一個　下總國印旛郡阿蘇村大字神野出土
二、凹石　同　武藏國北豐島郡赤塚村字上赤塚出土
三、凹石　同　下總國千葉郡都村字貝殼邊田貝塚出土
四、凹石　同　下總國東葛飾郡大柏町テンヨシ△出土
五、打石斧　二個　武藏國北多摩郡國分寺村國分寺附近
六、打石斧及磨石斧　一九個　武藏國南多摩郡連光寺村
七、打石斧磨石斧　一個　横濱市神奈川區小机町住吉神社附近
八、石鏃　同　武藏國橘樹郡宮前村野川十三菩提
九、石槍　同　東京市小石川區植物園內
一〇、石槍　同　武藏國都筑郡新治村上菅田字笹山小字茂八丸貝塚

貝塚玉類

一、貝塚曲玉　一個　武藏國北足立郡紳根村卜傳貝塚

頭部に切り込みあり。全長二・二糎。頭部横幅一・二糎。翡翠。（第二圖7）

骨角器類

一、骨銛破片　四個　常陸國稻敷郡太田村寺內中坂貝塚出土
二、骨針　一個　同　上
三、骨銛破片　九個　下總國北相馬郡文間村立木貝塚出土
四、骨針　一個　同　上
五、浮袋口　同　同　上
六、浮袋口？　同　同　上

貝輪

一、未成貝輪破片　五個（サルボウ）　常陸國稻敷郡太田村寺內中坂貝塚出土
二、貝輪破片　四個（サルボウ）　陸前國氣仙郡大船渡村獺澤貝塚出土
三、有孔貝輪破片　一個（サルボウ）　同　上
四、貝輪破片　同（サルボウ）　下總國千葉郡都村貝殼邊田出土
五、貝輪破片　四個（サルボウ、イタボガキ）　下總國北相馬郡文間村立木貝塚出土

Fig. 4

一、土　版　　　陸前國氣仙郡大始戸村獺澤貝塚出土
長さ縱一三・〇糎。横七・七糎。厚さ一五糎。楕圓形。淡黄色を呈す。

土　偶

一、土偶頭部　　　下總國北相馬郡文間村立木貝塚出土
その高さ六・二糎。頭の幅五・五糎。頸の幅三・三糎。耳の間の幅七・〇糎。厚さ頭部四・〇糎。中央一・五糎。頸部四・〇糎。黒色にして、滑澤あり。頭部上面は平にして、三線を刻む。眼及鼻は頭部に集り、口のみ飛び離れて下にあり。

二、完全土偶　　　常陸國稻敷郡太田村寺内中坂貝塚出土
頭の幅二・五糎。頸の幅三・〇糎。手の先の幅五・二糎。胴幅一・五糎。胸の太さ〇・八糎。足の太さ一・二糎。高さ五・五糎。灰白色のみゝづく型に近き土偶。全身に點を刻す。

三、土偶頭部　　　同　　上
眉の位置にて幅六・〇糎。口の位置にて幅六・五糎。その高さ五・三糎。頸の厚さ二・三糎。縱の横斷面は上尖形。黒色の山形土偶なり。

四、土偶頭部　　　同　　上
眉の高さにてその幅五・〇糎。耳の幅七・〇糎。口の位置にてその幅四・〇糎。山形土偶。黒色。

把手類

一、把　手　　五　箇　　陸前國氣仙郡大船渡村獺澤貝塚出土
二、把　手　　一　個　　東京市小石川區植物園内出土
三、把　手　　一　個　　東京市大森區馬込貝塚出土
四、把　手　　五　箇　　東京市板橋區池袋氷川神社裏貝塚出土
五、把　手　　一　個　　東京市大森區入新井町（新井宿）望翠樓跡出土

耳　飾

一、耳飾完全品　　　武藏國北足立郡神根村貝塚出土
直徑六・八糎。中央空直徑三・七糎。高さ二・〇糎。色は黒褐色。處々に黒き斑紋あり。（第三圖9）

二、同　　上　　　同　　上
直徑二・一糎。高さ一・四糎。内部充實して、兩面約〇・三糎程凹めり。色は赤褐色。

三、同　　上　　　同　　上

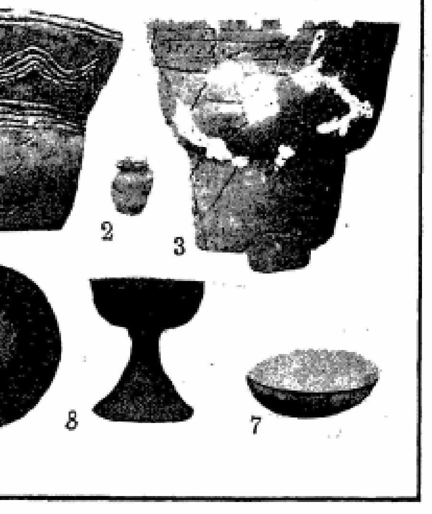


Fig. 3.

底部を缺損す。口徑二八・五糎。頸部直徑一八・五糎。現在の底徑一五・五糎。現在の高さ二二・五糎。厚さ〇・八糎。上部黑色、底部に至るに從つて淺黃色。（第三圖5）

二一、深鉢形繩紋式完全土器　同　上
口徑一二・〇糎。底徑五・五糎。高さ一五・五糎。厚さ〇・五糎。赤褐色にして、頗る堅緻なり。（第三圖6）

二二、深鉢形繩紋式土器　都筑郡新治村上菅田笹山貝塚出土
底部缺損せり。口徑二九・〇糎。現底徑一八・五糎。高さ二五・五糎。厚さ〇・五糎。赤褐色にして堅緻なり。（第四圖2）

二三、深鉢形繩紋式土器　同　上
口脣部一部破損。口徑一七・〇糎。底徑八・〇糎。高さ二〇・〇糎。厚さ〇・七糎。赤褐色。（第四圖3）

二四、深鉢形彌生式完全土器　東京市大森區久ケ原町貝塚出土
口徑二一糎。底徑四・五糎。高さ二八・五糎。厚さ〇・二糎。無紋、赤燒の土器。

二五、深鉢形彌生式土器　東京市板橋區池袋町氷川神社裏貝塚
口脣部のみ。口徑一三・五糎。現在の高さ七糎。厚さ〇・三糎。赤色。

二六、壺形彌生式完全土器　東京市世田ケ原區代田嶋ケ丘出土（中原驛附近）
口徑四・五糎。底徑五・〇糎。高さ八糎。その中口頸部高さ二・〇糎。厚さ〇・二糎。紫色。

二七、壺形彌生式土器　東京市大森區久ケ原町出土
一部剝落せり。口徑五・六糎。胴徑一五・〇糎。厚さ〇・七糎。高さ一五・〇糎。（第四圖4）

二八、皿形彌生式土器　東京市大森區久ケ原町竪穴出土
口徑一四・〇糎。高さ五・〇糎。厚さ〇・二糎。一面に赤色を塗布せり。（第四圖5）

二九、高坏豆形祝部式完全土器　出土地不明
口徑一一・〇糎。底徑一〇・〇糎。全高一二・〇糎。臺の高さ八・五糎。（第三圖7）

三〇、蓋付淺鉢形祝部式完全土器　出土地不明
口徑一一・〇糎。全高六・五糎。蓋の高さ二・〇糎。（第三圖8）

土　版

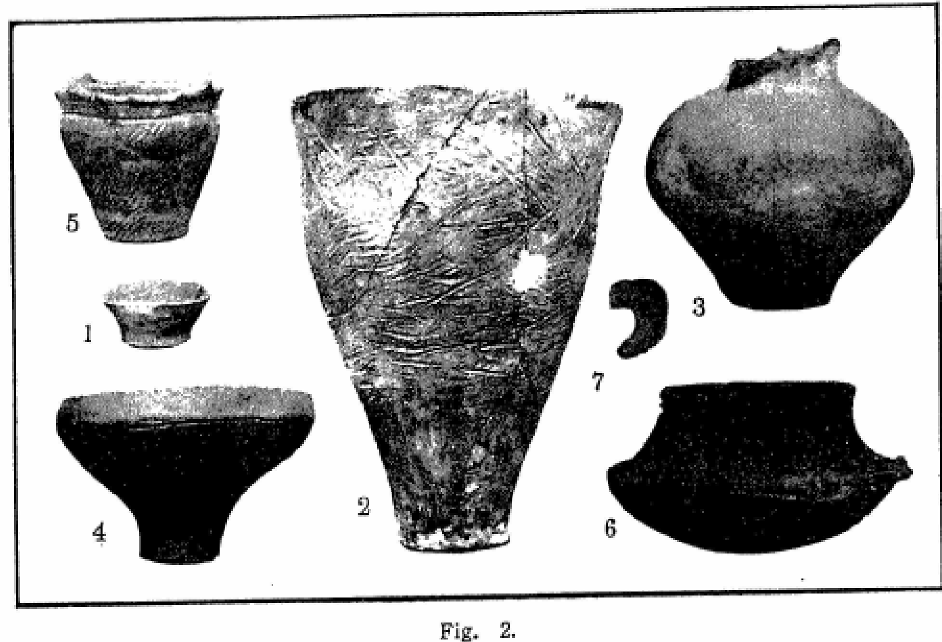


Fig. 2.

木貝塚黒褐色。（第二圖４）

一〇、鉢形縄紋式完全土器　陸前國氣仙郡大船渡村猟澤貝塚出土
口徑一一・〇糎。底徑五・〇糎。高さ九・五糎。厚さ〇・七糎。黒色。（第二圖５）

一一、壺形縄紋式土器　同　上
口唇部缺損せり。現口徑四・六糎。胴徑一二・五糎。底徑四・〇糎。高さ六・五糎。厚さ〇・二糎。黒色。（第三圖１）

一二、注口土器　同　上
長口徑一二・五糎。短口徑一二・五糎。胴徑一九・〇糎。全高一一・五糎胴高六・〇糎。（第二圖６）

一三、縄紋式土器　同　上
蓋の如きもの。一部缺損す。直徑六・〇糎。高さ四・〇糎。上部つまみの長さ二・三糎。厚さ〇・二糎。空洞にして黒色・

一四、壺形縄紋式完全土器　同　上
一個の小把手あり。口徑四・〇糎。底徑三・〇糎。總高五・二糎。口唇部高一五糎。赤色。（第三圖２）

一五、壺形縄紋式完全土器　同　上
口徑六・〇糎。頸部直徑四・三糎。胴徑九・五糎。底徑五・〇糎。全高一〇・〇糎。口唇部高二・五糎。黒色。底部に四つの足の如き突起あり。（第四圖１）

一六、コップ形縄紋式土器　東京市小石川植物園貝塚出土
口徑一六・〇糎。底徑六・五糎。高さ一〇・〇糎。厚さ〇・五糎。明治四〇年六月九日採集。（第一圖６）

一七、小形鉢形縄紋式土器　下總國東葛飾郡手賀村岩井貝塚出土
口徑五・二糎。高さ四・〇糎。赤褐色にして、手づくれの極めて荒づくりの土器なり。

一八、深鉢形縄紋式土器　東京市大森區池上町庄仙貝塚出土
底部なし。口徑二五糎。頸部直徑一四糎。厚さ〇・七糎。現在の高さ二四・五糎。黒褐色にして堅緻なり。貝紋。（第三圖３）

一九、深鉢形縄紋式土器　同　上
底部なし。口徑三二・〇糎。頸部二〇・〇糎。現在の高さ二二糎。厚さ一・〇糎。淡黄色。（第三圖４）

二〇、深鉢形縄紋式土器　同　上

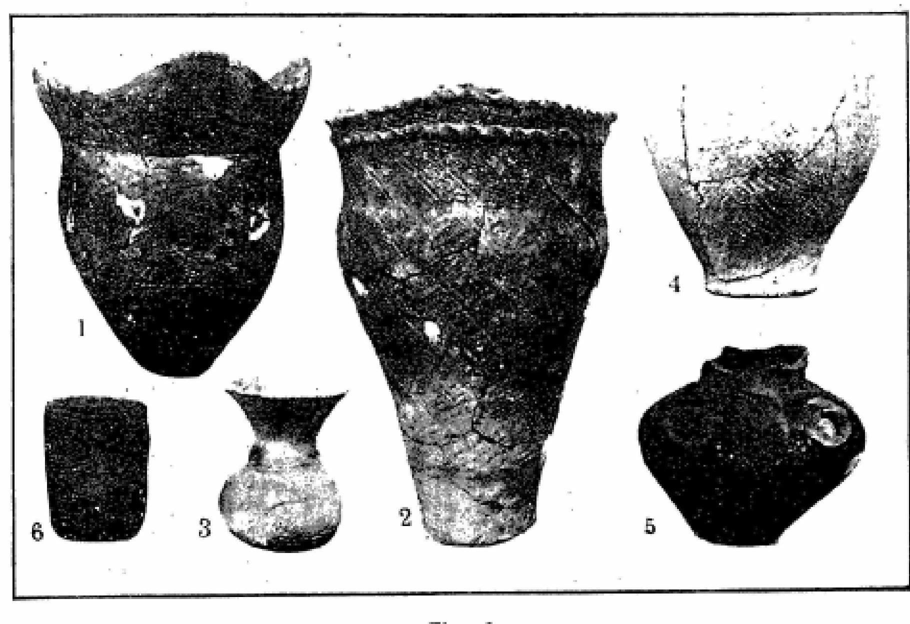


Fig. 1.

故簡野啓氏藏品要目錄

土　器

一、深鉢形縄紋式完全土器　下總國北相馬郡文間村立木貝塚出土
口緣部の波狀なす間隔二二・五糎。頸部直徑一八・五糎。底徑三・五糎。高さ二二・〇糎。頸部以下一八・五糎。厚さ〇・四糎。黒色（第一圖1）

二、同　　上　　同　　上
口徑二四・〇糎。底徑八・五糎。高さ三二・〇糎。厚さ〇・六糎。黒色、荒い縄紋と條痕とを附せり。（第一圖2）

三、壺形縄紋式完全土器　　同　　上
口徑九・〇糎。頸部上方徑一一・五糎。胴部直徑一〇・〇糎。高さ一一・五糎。厚さ〇・四糎。黒褐色、滑澤あり。（第一圖3）

四、椀形縄紋式完全土器　　同　　上
口は楕圓狀を呈すその長徑一九・〇糎。短徑一六・〇糎。底形三・五糎。高さ一五・〇糎。厚さ〇・六糎。黒褐色を呈す。底面に木葉紋あり。

五、壺形朱塗縄紋式土器　　同　　上
彩文土器。頸周、渦狀紋上及底部に朱を施せり。口唇部一部缺損す。現口徑六・五糎。胴徑一五・〇糎。底徑五・五糎。高さ一九・五糎。その中頸部高八・〇糎。厚さ〇・五糎。（第一圖5）

六、鉢形縄紋式完全土器　　同　　上
口徑九・八糎。底徑五・〇糎。高さ三・七糎。その中底部高五・〇糎。厚さ〇・四糎。黒褐色にして、多少滑澤あり。（第二圖1）

七、深鉢形縄紋式完全土器　　同　　上
口緣部の極一部剝落せり。口徑二二・五糎。底徑六・五糎。高さ三〇・〇糎。上半黒色、底は赤色。條痕あり。（第二圖2）

八、壺形縄紋式土器　　同　　上
口唇部缺損。現口徑七・〇糎。胴部直徑一九・五糎。底徑一三・〇糎。高さ一八・〇糎。その中、口頸部高さ三・〇糎。厚さ〇・四糎。灰白色。（第二圖3）

九、朝顏鉢形縄紋式完全土器
口徑一五・〇糎。底徑五・五糎。高さ一〇・五糎。厚さ胴部〇・六糎。立

を巡視す。

○昭和八年十一月五日

浦和方面に向ひ、與野町本村屋敷貝塚を尋ね、更に上峯諏訪祠附近にて、息源三郎は完全なる小形磨石斧を採集す。

○同年十一月十二日

眞福寺貝塚を六個所發掘するも結果不良、更に黒谷貝塚等を見學して歸宅す。

○同年十一月十四日

千葉縣臼井町方面に向ふ。師戸字戸ノ内貝塚に至りしも厚手土器の散布せるを見る。更に古谷貝塚に至る。同貝塚は相當の貝層あるも遺物は少なし。尙石神嚢貝塚にて近代の石棒を見る。

○同年十一月二十八日　磐田町に向ふ。椎名村六通貝塚に至り同地主小川賀三氏方にて出土遺物を見、更に同地の鈴木藏吉氏邸にて石劍を見る。大勝野、並に椎名崎にて貝塚を發見し更に菊間村にて新貝塚を發見す。

○同年十二月三日　久ヶ原にて人骨在中の彌生式土器を採集す。

○同年十二月十二日

板橋區小竹町方面に向ふ遺跡遺物次の如し。

北足立郡片山村石神　　打石斧

入間郡柳瀬村阪ノ下殿山　　土器　打石斧

同　郡　同村阪ノ下横杉　　土器　打石斧　磨石斧

○同年十二月二十九日　源三郎を伴ひ、馬込貝塚、雪ヶ谷貝塚庄仙貝塚、千鳥久保貝塚等を巡回す。

○昭和九年一月十八日　本年初めの採集を久ヶ原並に庄仙を巡り、庄仙にて錘石一個を採集す。

○同年一月廿一日

鈴木尙氏と共に馬込、雪ヶ谷、下沼部、日吉臺、加瀬等を巡回す。雪ヶ谷町三〇五番地の竪穴より彌生式土器片と共に打石斧を得。

○同年二月十一日

史前學研究所一同及び國學院大學々生等と共に下沼部貝塚を發掘、史前學研究所の發掘區よりは内紋土器及び人骨一體を出土し、國學院の方よりは角製銛を發見す。

も悪天候の爲收獲なし。

常陸國行方郡玉川村藤井字平明神脇貝塚　土器　凹石　半磨石斧

○同年六月廿七日

下總國東葛飾郡明村上本郷貝塚に小發掘を行ひ、長驅、茨城縣北相馬郡に至り早尾貝塚及立木貝塚を訪問し、大野一郎氏に立木貝塚出土の繩紋土器を貰ひ受く。

○同年七月十二日、一泊の豫定にて、茨城縣土浦町方面に採集を試む。

新治郡中家村上高津貝塚及び筑波郡旭村今鹿島等の遺跡を尋ぬ。新治郡中家村下高津藥師裏竪穴遺跡にて彌生式土器を發見す。

○同年八月十九日

眞福寺貝塚及び南櫻井村西金野井貝塚等を歴訪、柏町に一泊翌日豐四季村篠原貝塚に至る。又、八木村前ヶ崎に新貝塚を發見して歸宅す。

○同年八月廿一日

北足立郡に遠征を試む。芝村小谷場貝殼坂貝塚を調査し、更に神根村新井宿貝塚、赤山貝塚を發掘す。

○同年九月一日

久ヶ原方面を歴訪し下末吉方面に及ぶ。

大森區池上久ヶ原八二一番地貝塚、及び横濱市鶴見區東寺尾町寺谷一五七七貝塚を新發見す。

○同年九月十二日

小机方面に向ふ。神奈川區小机町泉谷寺アラクにて土器　石斧都筑郡新治村鴨居東追（繩紋土器）及び、同郡同村上菅田字茂八丸貝塚にて土器　打石斧　石鏃を採集す。

○同年九月十五日

北足立郡神根村卜傳貝塚にて異形土器及び曲玉を採集す。

○同年九月二十三日・二十四日

神根村卜傳貝塚及び神根村新井宿貝塚の發掘。

○同年九月二十九日

大山公及び史前學研究所一同と馬込貝塚發掘。

○同年十月十七日

大野一郎氏東道の上、江戸崎方面に向ひ、椎塚、及び寺内貝塚を調査す。

○同年十月二十三・二十四日　寺内貝塚の發掘土偶　土器骨角等多數發見す。

○同年十月二十七日

大山公一行と鶴見溪谷に於ける下菅田、茅ヶ崎、折本貝塚等

石塚藤之助氏の多數の遺物を見學す。

下總國結城郡大花輪村大輪字築地石塚氏所有石劍　曲玉

同　　同　管原村大生郷字馬場東、(新發見)　土器

○昭和八年二月二十六日　埼玉縣蓮田方面に採集を試む。

此の日の發見したる遺跡遺物左の如し。

武藏國南埼玉郡黑濱村黑濱炭釜屋敷　土器　打石斧　磨石斧

　　凹石

同　　同　慈恩寺村古ケ場服部山貝塚　土器　打石斧

○同年三月一日　北足立郡木崎村北袋並に上木崎を經て片柳村に入り同村大字中川にて一貝塚を發見し多數の收獲あり。卽ち、

武藏國北足立郡木崎村大字北袋　土器　打石斧

同　　同　　村大字上木崎　土器

同　片柳村大字中川八幡耕地貝塚　土器　打石斧

　　磨石斧

同　原市町陣屋　土器

○同年三月十八日　先般發見したる(昭和七年十二月廿七日)テンゲース貝塚に至り、磨石斧　凹石を採集す、次いで大井船戸貝塚に至り、貝塚所有者、並に遺物の所有者、石戸英太郎氏と語り、新船戸に遺物を發見する由を聞知し、之れを調査し、手賀村岩井貝塚を經て歸宅す。

下總國東葛飾郡風早村新船戸　土器　打石斧　石鏃

○同年三月廿八日　千葉方面に採集す。卽ち、都村貝塚、貝殼澁田草刈場貝塚並に加曾利屋敷貝塚矢作貝塚等を見學す。

○同年三月三十日

久ケ原方面に採集、例に依つて竪穴を巡見し、更に千鳥久保貝塚を訪問網代底土器大片一個を採集す。

○同年四月二日

多摩溪谷方面に採集を試む、久本貝塚は頗る貧弱にして何等得る所なし。次に宮前村梶ケ谷方貝塚に至るも之は單に一個の古墳にして石器時代に關係なし、されど同地小字原にて小貝塚を發見す。

○同年四月十七日

下總國久賀村東栗山貝塚に至る、同地は淡水貝塚にして、發見古きが爲か相當の大貝塚なるも遺物の發見のなし。それより神生貝塚に至り、次に下總國筑波郡板橋村鎌田にて、繩紋式土器と祝部式土器の點々たるを新發見す。

下總國筑波郡板橋村鎌田　繩紋式土器　祝部式土器

同　北相馬郡高井村上高井神明貝塚　土器　凹石

○昭和八年五月二日より三日間茨城縣行方郡方面に採集を試む

故箭野啓氏採集日誌拔

日誌は氏個人の採集日誌であつて、勿論公表する心算で記されたものでない。言はば一種の覺帳である。從つて、記載の方法は、區々であるが、新發見の遺跡や遺物の記載があつて、興味深く拜讀する事が出來る。今回御遺族の御好意により、その一部を拔抄させて戴いた事を感謝する。（池上啓介）

○昭和七年十二月三日
　八王子方面に二十餘年振りにて、考古行脚を試む。
南多摩郡多摩村蓮光寺八幡祠附近にて打石斧一個を採集す。

○同年十二月一日
　國分寺方面に採集す。國分寺裏山にて磨石斧一、敲石一を得。

○同年十二月十九日　茨城縣下立木貝塚方面に採集す。
下總國北相馬郡布川町山王臺　土器
同　國　同　郡文村早尾塙臺貝塚　土器
同　國　同　郡同村大平字大平臺大平神社附近　土器凹石
同　國　同　郡文村閻村立木字上臺　土器敲石

○同年十二月廿七日　千葉縣柏町方面採集。
千葉縣柏町字高橋とテンヨシの中間に貝塚を發見し、土器打石斧　磨石斧　凹石　石皿を得、鰭ヶ崎、大井舟渡、三輪野山等の諸貝塚を見學して歸る。

○昭和八年二月十二日　本年最初の採集を池上町方面に試む。

○同年二月十五日　埼玉縣眞福寺方面に採集。
武藏國南埼玉郡柏崎村眞福寺貝塚　石劍石皿の破片
同　　同和土村木曾良貝塚　石劍凹石
武藏國東葛飾郡柏町豐四季字道灌塙　土器　磨石斧
同　　　字笹原貝塚　土器　輕石浮

○同年二月十六日　埼玉縣浦和方面採集
武藏北足立郡芝村小谷場貝殼坂貝塚　土器　土版　石劍
同　　與野町上峰諏訪神社附近　土器　打石斧　敲石
　　彌生式土器
尙小谷場貝殼坂貝塚の土版、石劍は浦和中學校にあり。

○同年二月二十四日下總結城町方面に採集を試む。結城郡大花羽花島貝殼貝塚を尋ねしも不明、同村大輸築地に至り同所の



故簡野啓氏追悼記念

追悼の辭

大山　柏

本學會幹事簡野啓氏が突然腦溢血に殪れられたことは獨り簡野家の不幸に止まらず、本學會としても哀悼に耐へない所であり、茲に謹んで弔意を表するものである。特に生前最も熱心に本會幹事として盡力せられ、又屡々研究調査に參加せられて、史前學推進に努力せられたことに就ては、御禮の申し樣もない程であり、更に氏が尙春秋に富まれたに拘はらず、今爾の不幸を見たことは、反す反すも學會の恨事である。茲に氏が生前の知遇に對し謹んで感謝すると共に、我學會を代表して永別の意を表するものである。

大山史前學研究所 史前學會 刊行書目

史前學雜誌第一卷（昭和四年刊行）定價六圓　史前學雜誌第四卷（昭和七年刊行）定價六圓

史前學雜誌第二卷（昭和五年刊行）定價六圓　史前學雜誌第五卷（昭和八年刊行）定價六圓

史前學雜誌第三卷（昭和六年刊行）定價六圓　史前學雜誌第六卷（昭和九年刊行）定價六圓

研究小報第一號　神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地調査報告　大山柏著　定價壹圓　送〇、一〇

研究小報第一號　埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告　甲野勇著　定價壹圓廿錢　送〇、一〇

パンフレット第一號　史前の研究　大山柏著　定價十五錢　送〇、〇四

パンフレット第二號　石器時代の概要　大山柏著　定價十五錢　送〇、〇四

パンフレット第三號　未開人身體裝飾　甲野勇著　定價三十錢　送〇、〇四

パンフレット第四號　石器時代遺跡概説　大山柏著　定價四十錢　送〇、〇四

東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報（第一編）　大山史前學研究所　史前學雜誌第三卷六號代册　定價一圓五十錢　送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第一册　横濱市下菅田貝塚群（昭和九年刊行）大山史前學研究所　定價六十錢　送〇、一〇

關東縄紋式文化編年學的研究資料第二册　神奈川縣都田村折本貝塚（昭和九年刊行）大山史前學研究所　定價六十錢　送〇、一〇

（但し、史前學雜誌第五卷全部希望の方には編年資料第一、第二册を第五卷第六號とします）

日本舊石文化存否研究　大山柏著　史前學雜誌第四卷第五六號代册　定價二圓五十錢　送〇、一〇

史前學講義要錄（第一部基礎史前學）大山柏著　定價七十錢　送〇、一〇

史前學講義要錄（第二部事實史前學）大山柏著　定價八十錢　送〇、一〇

史前學繪葉書　第一輯（外國之部）定價二十五錢　送〇、〇二錢

史前學繪葉書　第二輯（日本内地之部）定價二十五錢　送〇、〇二錢

東京市澁谷區穏田一ノ九　史前學會
電話青山一二五番
振替東京五八九六八番

同　世田谷區下馬町二ノ一〇三二山本英太郎方　小田湛彥氏
同　牛込區辨天町一四九　鈴木恒治氏
同　澁谷區原宿一ノ八五　和島誠一氏
栃木縣那須郡金田村羽田　平山助右衛門氏

轉居

東京市中野區鷺宮一、一三五　山内清男氏
同　世田谷區代田二ノ七一二　佐野淺一氏
同　板橋區石神井町二ノ八一九　小林靜生氏
同　目黑區綠岡三〇〇三佐藤方　久米本稙幸氏
同　板橋區戶塚町三、九六三中村綠野方　藤田嗣治氏
同　小石川區原町一〇　大塚彌之助氏
同　杉並區高圓寺四ノ五三七清風莊　大給尹氏
同　牛込區早稻田鶴卷町早稻田大學文學部　瀧田芳郎氏
同　世田谷區太子堂町一〇一　唐端勝氏
朝鮮釜山府佐川町陵風莊　及川民次郎氏
同　京城府蓮建洞一三二　有光敎一氏
東京市目黑區下目黑四ノ九七四　今宮新氏
同　豐島區長崎南町一丁目一九四〇　依田雄甫氏
朝鮮京城府舟橋町內藤方　藤井誠一氏
大分縣大分市大分縣廳內　佐々木新七氏
兵庫縣加西郡下里村笠原佐伯助太郎方　栗山一夫氏
京都市左京區下鴨北園町五八　梅原末治氏
東京市瀧野川區瀧野川町五四六　八幡一郎氏
同　小石川區指ケ谷町八五　中川德治氏
同　淀橋區諏訪町一四三中根方　松本吉治氏
仙臺市鹽屋下四五高橋方　片倉修氏
神戶市御崎町一丁目鐘紡武藤理化學研究所　和食和氏

死亡

石川千代松氏　尾崎亮司氏
簡野啓氏

きことは論を待たないが、家畜全般に就いて、かうした手頃な書物が我々の手近なところに提供されたことは誠に喜ばしい。

本書を一讀して考へさせられたことの一つは、史前學が期せずして斯うした方面の動物學の一分野に少なからざる寄與を爲してゐる點である（エヂプトに於ける諸發見、舊石器時代洞窟壁畫の發見、瑞西杭上住居址の研究等）。それにつけても本書に於て、東洋、殊に日本の資料が殆ど缺けてゐる點などは我々にとつて充分反省の餘地が有ると思ふ。それは日本の從來の考古學に關心を持つ者達が、餘りにも直接的な人工遺物の追及にのみ急にして、やゝともすれば自然遺物を等閑に附する傾向の有つたことにも其の責任の幾分かゞあるのでは無からうか。發掘に當つては人工遺物に對するのと全く同等の注意を自然遺物に對しても拂ひ、發掘された自然遺物を擧げて其の方面の研究家に提供して共に研究を進めるだけの用意を持ちたいものと思ふ。

本書が史前學研究家に對して示す處のものは必しも直接的では無いかもしれないが、史前學が土器の文樣や石器の形式のみに始終するものでなく、少くとも古代文化を對照とする學問であると考へる者達にとつては、甚だ貴重な知識を與へてくれる良著であると信じ、敢へて一文を草した次第である。（昭一〇・五・二五　山口）

會報

入會

Regional Seminary Aberdeen, Hong-kong, China.　Rev. D. J. Finn氏

朝鮮平壤公立中學校　笠原烏丸氏

埼玉縣浦和市東太前町三七八　石田外茂一氏

東京市淺草區淺草寺内　關口齋氏

岡山市國富八〇四　畠田和一氏

横濱市中區西戸部町境谷一六七〇　池田健夫氏

東京市淀橋區諏訪町一四三中根方　松本吉治氏

同　品川區五反田三ノ一六五飛田邸內　齋藤武一氏

するものと考へても大過はないかも知れない。

此の二品は鹽野氏によれば同一竪穴より出土した。即ち確か昭和七年の秋、道路に接した湊地線即ち後藤氏の第三遺跡と呼ばれる地域を發掘せられた際、その最南端に竪穴が半分現れた。遺跡は表土より約四尺にしてローム に達し、竪穴は右ローム層を約一尺の深さに穿つたもので、徑約九尺を有する不整楕圓形であるらしく、中央に甕形土器、その右から土偶足部、左から深鉢形土器、顏面部が發見せられたと云ふ。中央に存した土器は、口徑三五・六糎、高さ現存部二五糎、厚さ約一糎の黃褐色を呈する甕形土器。口邊部は裝飾文に乏しく、僅かに一條の刻線列を廻らす。頸部には一方が耳狀把手を成す六個の楕圓形の隆起文を廻らし中に 光塡文を施す。胴部以下は破損の爲不明（第一圖A）他は高さ三九・四糎、口徑三二糎、厚さ約一糎。主體部圓筒狀を呈し、口部に至つて開いた深鉢形土器。口邊部は無文。頸部以下底部に至るまで隆起渦卷文を施す。（第一圖B）共に勝坂式に屬する。

之を要するに、楢原遺跡が信・甲等の山嶽地帶に發達した厚手式文化と同一文化圏内に屬する事が、偶々斯くの如き特殊な遺物によつて一層明瞭に裏書きせられたと云ふべきであらう。

文　獻

家畜系統史　コンラット・ケラー著

加茂儀一譯　（岩波文庫　定價四〇錢）

本年五月十五日發行の本書は Aus Natur und Geistwelt 叢書中の CONRAD KELLER 著「Stammesgeschiche unserer Haustiere」第二版（一九一九年）の譯である。

内容は四章に分たれ、I 近代的家畜研究の變遷、II 家畜發生の時間的經過、III 馴致の結果としての家畜に於ける順應性、IV 個々の家畜の系統並びに馴致發生地、となつてをり、最後の章に於て、犬、牛、馬、羊、鷄等十五種の家畜の各々に就き系統史が述べられてゐる。史前時代研究に於て家畜の重要視さる可

見せられてゐる。〔兩角守一氏「伏見宮博英王殿下に御伴して諏訪郡遺跡を尋ねる」（史前學雜誌二の一）〕以上は等しく厚手式土器が濃密に分布する地域より發見せられる。されば、比較的大形にして安定に適し寫實味に富み、往々指・爪・踝等の表現を持ち、且つ裝飾文を有する土偶足部は、信・甲・武等の山嶽地帶を中心として發展した厚手式文化に屬するものではなからうか。然し足部に指の表現を持つたものは薄手式にも存する。〔例へば、下總國北相馬郡文間村（「考古圖集」三〇集）、武藏國下沼部貝塚發見品（鳥居、內山「武藏國荏原郡調布村砦下沼部貝塚」人類學雜誌八の八六）〕次に顏面に就て記さう。顏面は、表面に磨きがかけられ黃褐色滑澤を呈する。眉は連續せる二つの弧線によつて表され、その接合點に圓形を呈する鼻が稍上向きに附せられ、縱に加へられた二つの刻線によつて鼻孔を表してゐる。眼は釣り上つた柿の核狀を呈し、口は圓形の凹みによつて現されてゐる。幅七糎長四・五糎。本品は顏面把手か若くは土偶の顏面部の殘缺であつて、中空である。元來厚手式土偶には顏面把手と酷似した表現を持つたものもあり、稀ではあるが中空のものも存する。今の場合、伴出した土器が顏面把手を有せざる樣式のものであり、且つ土偶足部が伴出したのであるから、本品を中空土偶の殘缺と認めて、前記足部と同一個體に屬

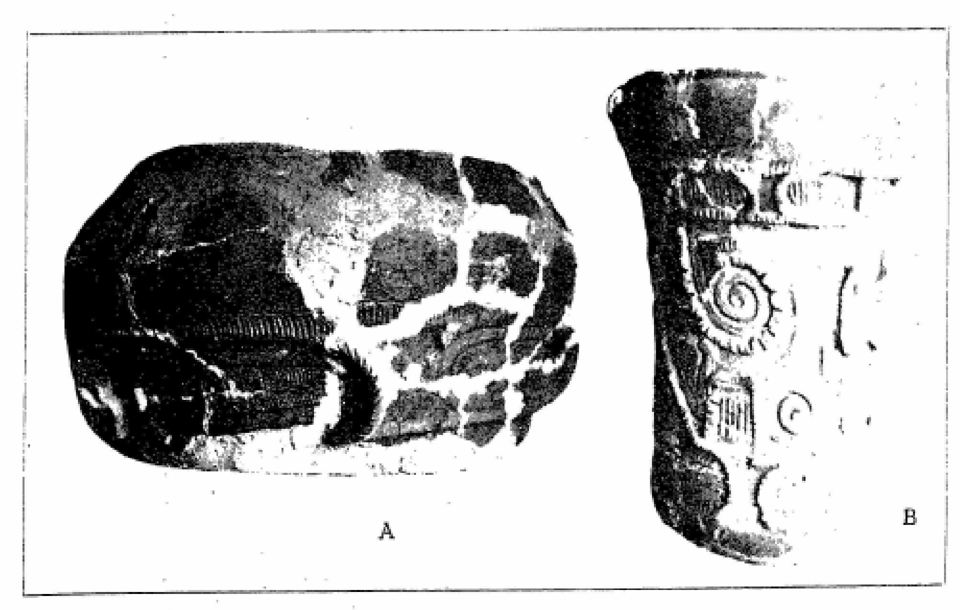

A　B

Fig. 1.　檜　原　發　見　土　器

資料

武藏國南多摩郡椚原發見の土偶

宮崎糺

去る三月十七日、田澤・大場・竹内・池上・稻生の諸氏と共に多摩川流域に考古ハイキングを試みた。終日、石器時代遺跡遺物を始め古瓦、板碑、古墳、鏡等を觀て歩き、夕刻椚原土器の所藏家鹽野半十郎氏宅に少憩した。其の折の事である。一昨々年同氏自ら發掘せられたと云ふ土偶足部と顏面とを拜見する事が出來た。發見地は南多摩郡川口村大字椚原石器時代遺跡である。椚原遺跡は、言ふ迄もなく夥しい厚手式土器の發見せられた事を以て著名な遺跡であり、本遺跡の一部を發掘せられた後藤守一氏によつて學界に紹介せられたものである。(後藤守一氏「府下に於ける石器時代住居址發掘調査」(東京府史蹟保存物調査報告第十冊))然し鹽野氏が本品を獲られた時は、既に同報告は完成後であつた爲め、同書の記載には洩れた由である。依つて玆に簡單な紹介を試みておかうと思ふ。

土偶足部は現存部高さ九・四糎、脛の徑四糎、踵の長さ九糎その最大幅五・五糎。踝部の直上に幅約〇・五糎の粘土紐を廻らし、其外側下に踝を表現したと考へられる扰狀の隆起を有する此の紐の上方に二・四糎を距て丶更に幅約一・五糎の凸帶を前面に廻らす。踵の外側に近き部分より脛の中央へかけて徑〇・七(上)——〇・四(下)糎ある一孔が貫通してゐる。足の先端には五條の刻線を以て指六本を表し、横に淺き弧線を以て爪を附してゐる。全體黃褐色を呈し、小砂粒を含めど燒成は堅緻である。(圖版第四參照)山梨縣下からは、足部が比較的大形にして寫實的であり、安定にしたものが數例發見せられてゐるが、何れも簡單な沈線文を持つてゐる。殊に北巨摩郡穗坂村字宮久保發見のものに大さは稍匹敵し「クルブシ」を表した隆起部がありその上部の約五本の太き沈線を廻らしたものがあり、又同郡秋田村字太刀男山發見のものは「足腕部に太き二本の凸帶を廻らし、その上下に二列の連珠文を配」してゐるものがある。(仁科義男氏「山梨縣出土の石器時代土偶」(考古學雜誌二三の一二))又長野縣諏訪郡下からは「指が六本あり大なるもの」が發

翻つて我が大和の石鏃を分布上觀察すると、平地遺跡は厚手系で有柄式が多いのに反して、山岳遺跡は薄手系で無柄式が多い。此の二大分類に就ては「大和石器時代研究」に割讓し、唯當遺跡が兩者の系統を混在してゐる事實を改めて注意せねばなるまい。

三、餘言

金剛葛城山麓は石器時代遺跡に乏しい。然し竹之內の如く豐富なる彌生式系と繩紋式系の共存と石器が打製品であるのに特色を有する遺跡で、又最近研究されてゐる脇田遺跡の兩者との關係に就いては當遺跡がその列に加へる上に興味があるのではないか、それには表面採集の二種類の石器が分類上二者系統を保つてゐるもののみならず、今後伴出土器の發見と合せて十分注意せねばなるまい。

（昭一〇・二・三再記）

められるもの、346がある。是等は下の三段目と比較して小形であり且つ稍々薄手に屬し、殊に1の如く鋭利精巧な三角凹底を見受けられるのはうれしい。有柄式のものには三角形有柄や二等邊三角形有柄があり、柳葉形や櫻葉形は形態が殊に整つてゐる。これには13 15の樣な變形があり、14 17の如く全く菱形のものも存する。有柄

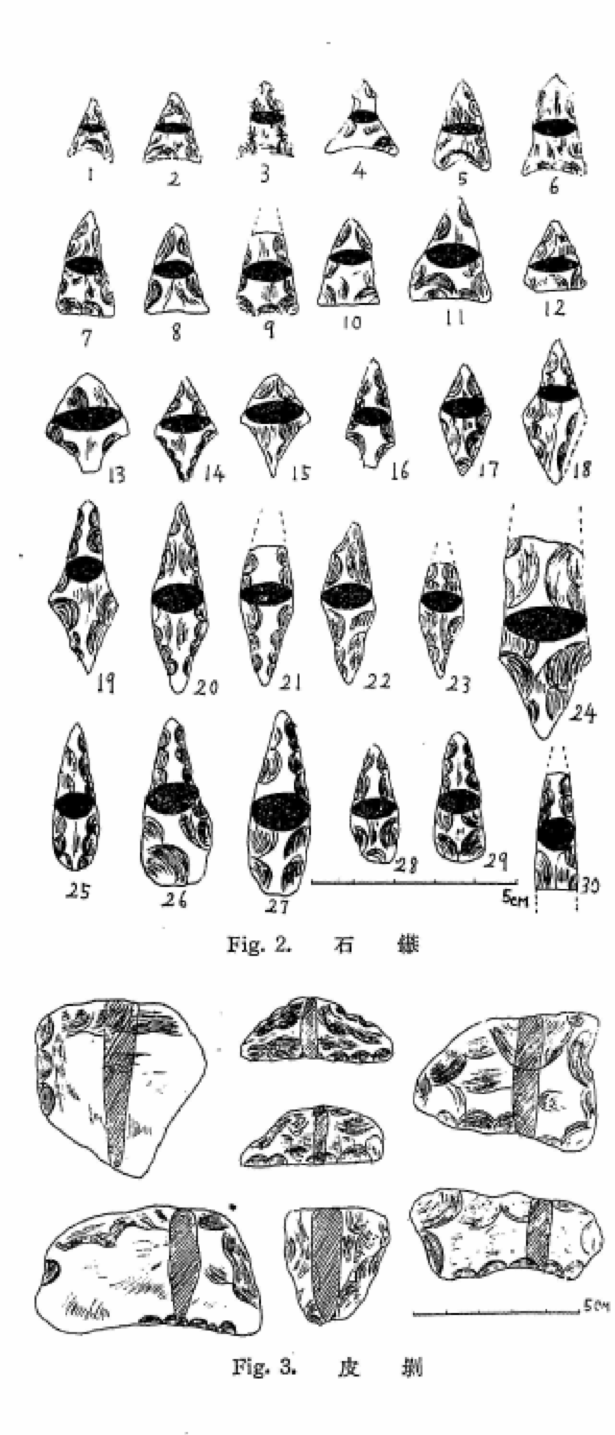


Fig. 2.　石　鏃

Fig. 3.　皮　剝

の何れもが共通に厚手で棒狀のものさへある。のみならず、裂面は極めて短い上に數度の加力を施すことなく極めて簡單にされ勝で、殊に柳葉形は濃厚に表はされてゐる。無論有柄は無柄に比して鋭利さを欠除してゐる事實は見逃せない。

増加するであらう。

皮剝。第三圖に示す様に、形式は大體に於て一様にウーマンスナイフ形である。何れも厚手を示し、裂面は周邊に多様に隨所に大きく加工されてゐる點は、製作手法の精巧といふよりも、むしろ製作完成への過渡的技巧と見る方が妥當ではないかと思ふ。

Fig. 1.　大和新庄町寺口附近遺跡分布圖

從來大和に於ける皮剝の發見は、大和盆地に僅少でかへつて丘陵地や傾斜地に多く分布してゐる樣であるが、例へば當遺跡に近い竹之内や二上山麓の穴虫・關屋の遺跡に於ては、可成多量に見受けるのである。當遺跡が地勢上、竹之内や關屋と同樣に山岳遺跡（岳陵・傾斜兩地を合せて名づく。）とするならば、皮剝の存在は「不思議なる現象」とのみ考へ難いけれ共、遺物の製作法に就いては兩者に多少の距がある樣に思はれる。若し穴虫・關屋の如く石器製作所址と推定すると當遺跡の皮剝は製作技巧の劣と云ふよりも蓋し未完成品と見做すべきか。私は此の遺跡を山岳・平地のいづれの遺跡に屬せしめるべきかは多少躊躇するものであり、尙將來に殘された問題であると考へるのである。

石鏃。第二圖は代表的な遺物三十個を示したものであるが、是れは形態上相當の變種に富んでゐる樣である。先づ、圖示する上の二段は共に無柄式であつて、正三角形と二等邊三角形及び凹底三角形の外、可成變形品と認

大和新庄町寺口附近の石器

島本一

一、地勢

遺跡は奈良縣北葛城郡新庄町大字寺口に存する。今、その景觀を示すと第一圖の如くであるが、先づ葛城山麓の東面に南北に長く續いた一の斷層線があつて、北方は池側・中戸・久保・太田の各聚落、南方は南藤井・山田・笛吹の各聚落に迄延びた margin扇狀地の中間に、新扇狀地を作り、寺口・二塚の聚落は殆どその中央に位してゐる。此の寺口と二塚の聚落の東方、道路を中に挾んで南北の田畑に石器が散布するのである。

採集者塚本文彌君に據れば遺跡の表面には石器や石屑が彌生式土器の破片に混つて相當多量に分布して居る由であるが、未だ層位的研究はされてゐないから、今後に俟つこととして、今は表面採集された石器に就いてのみ二三の報告を致したいと思ふ。就いては遺物を貸與せられた塚本君に敬意を表したい。

二、遺物

此の遺跡を代表する遺物は、石器であつて僅かに二種類ではあるが、然し今後注意をすれば、更に遺物も漸次

一、人工遺物

採集し得た土器約五〇片の中、繊維を多量に含む土器と、全く含まざる土器とが相半してゐる。前者が蓮田式に（第四圖A）、後者が諸磯式に（第四圖B）屬する事は、圖によつて明かであらう。石器は石斧二個。一は左右兩側に打敲の痕を殘した磨製石斧、全長一〇糎、幅最大五糎、斷面は半月形に近く、刄部及び頭部を缺く。（第五圖1）他は打製であつて、片面頭部に自然面を殘した粗製品である。長さ約八糎。下半を缺くが稍々反り味を帶びてゐる。（第五圖2）

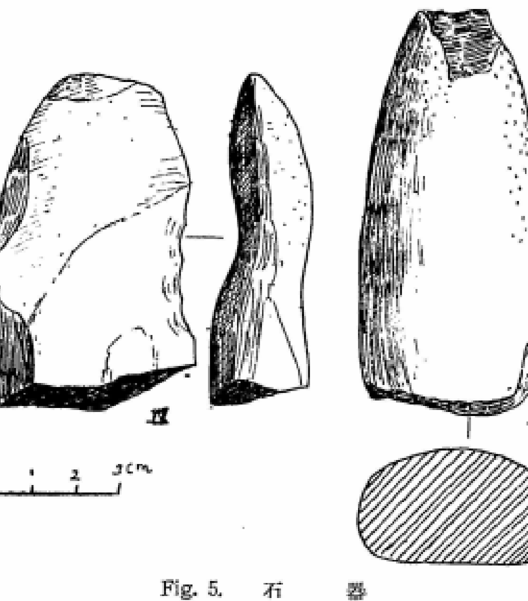


Fig. 5.　石　　器

二、自然遺物

檢出し得た貝類は、ハイガヒ、シホフキ、アサリ、キシャゴ、ツメタガヒ、アカニシ、オキシジミ、バイ、キセルガヒ等である。右の中ハイガヒが絶對多數を占めてゐるが、此の事實をば、谷を距てゝ呼べば應ふる位置にある堀之内貝塚を構成する貝類と照し考ふる時、少くともこの場合文化遺物と自然遺物との間には或る必然的關係が伏在してゐるであらう事を想はないでは居られないのである。

ないかとの疑問を懐かす個所がある。褐色土がローム層に約一八糎の深さを以て陥入して居り向つて右側には段を有する。底部は長さ一九五糎あり、壁は左右共底面に對し傾斜をなす。尚底面に接した部分にだけ殼が三―四糎の厚さに含まれて居た。

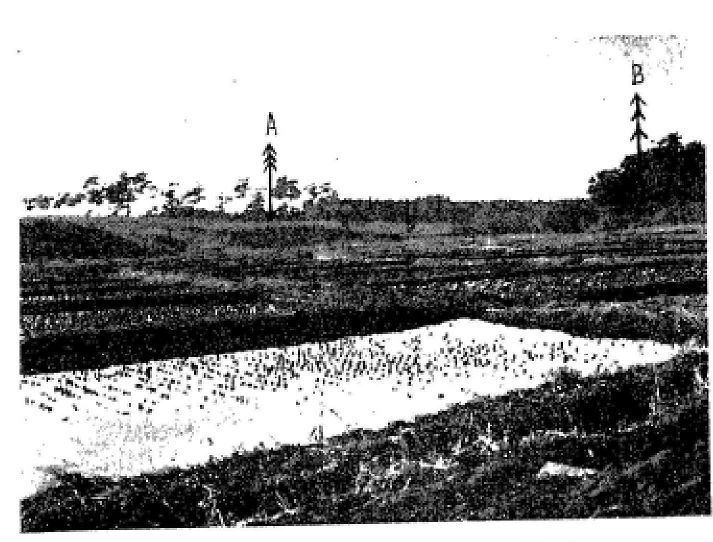


Fig. 3. 貝塚遠望（A. 遺跡 B. 堀ノ内貝塚）

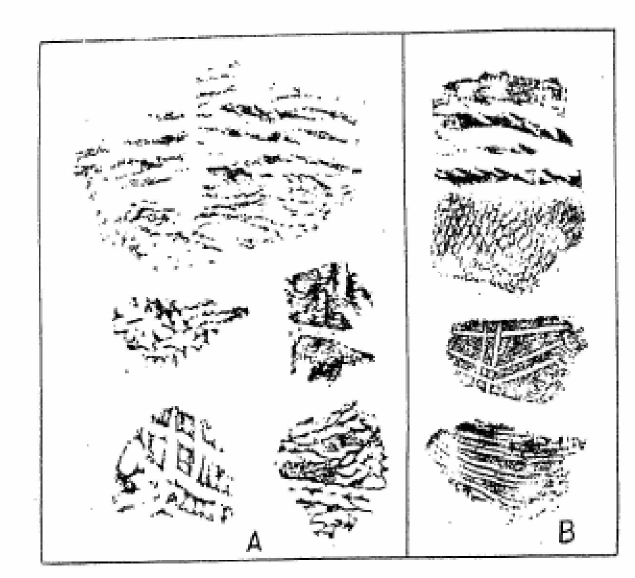


Fig. 4. 土器拓影

遺物

貝塚の位置並狀態　下總國府臺は、所謂下總臺の一支丘を成すが、それ自身も亦更に幾多の支脈を派生せしめてゐる。本貝塚は此等支脈の一を占める東練兵場の西北端に位し、ほゞ東西の方向に突入する狹長な谷を距てゝ有名な堀之内貝塚群に對してゐる。（第一圖）而して本貝塚は臺地北緣を東西に走る小路の兩側に貝層斷面を露出せしめてゐる爲に、其の存在が確認せられる程度であつて、面積も恐らく五坪内外であらう。道路の北側に現れた斷面は長さ約十米、南側は數米である。而して最も明瞭に觀察を施し得るのは北側である。其れに據れば貝塚は約十糎の表土を覆り、次に一〇――二五糎の厚さを有する貝層があり、更に約一〇糎の褐色土層を距てゝローム層に達する。而して第二圖に示した如く、西側に於ては貝殼の含有量少く且つ層も薄いが、東側に於ては貝層厚くなり貝殼も增して來る。遺物は貝層及び貝層下より發見せられ、私達が最後に觀た所では、同遺跡を通じ、西方には纖維混入なき土器を主とし、東方には纖維混入ある土器を主とする如くに感ぜられる。西方に或は竪穴の斷面では

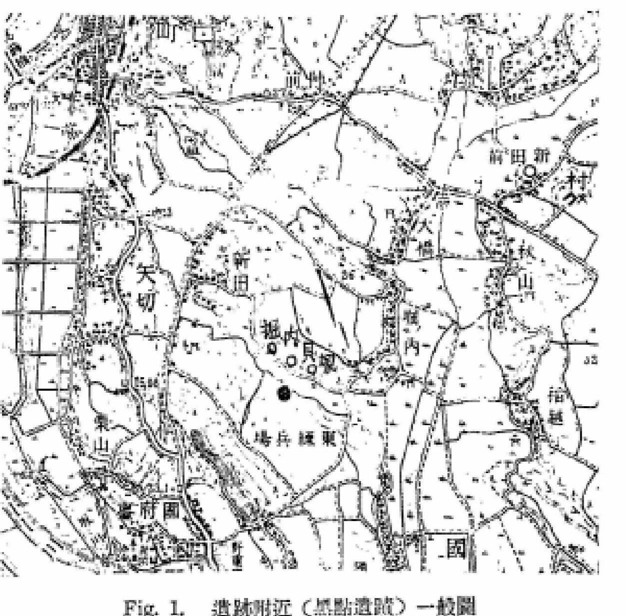


Fig. 1.　遺跡附近（黑點遺蹟）一般圖

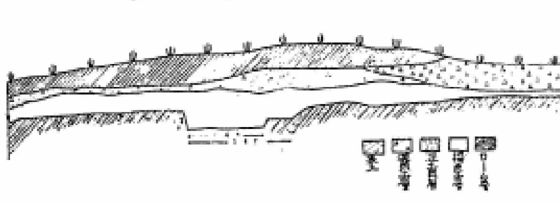


Fig. 2. 貝塚斷面圖

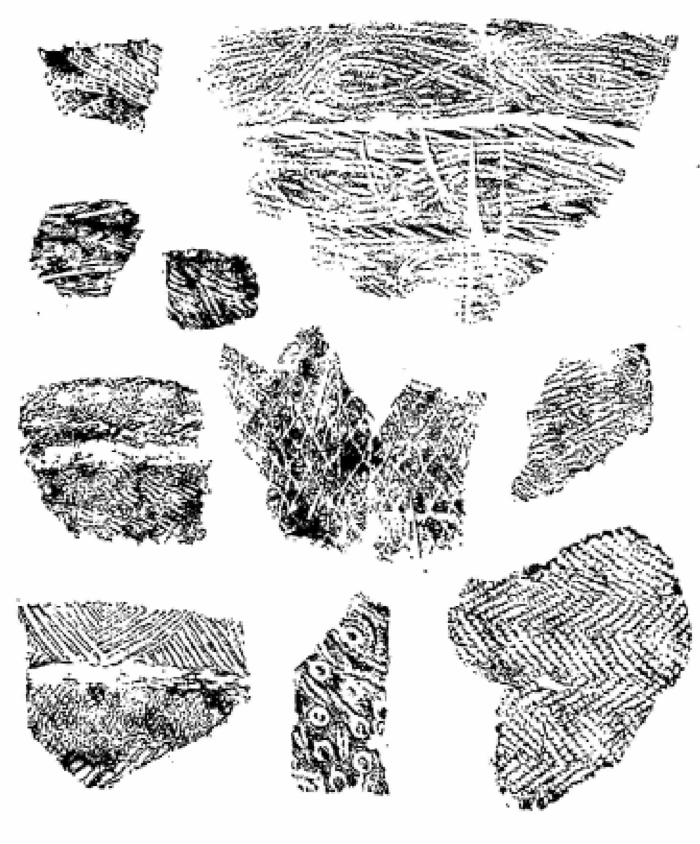
下總堀之内貝塚對岸に於ける古式縄文式土器出土の一小貝塚

＝東練兵場北側の貝塚＝

宮崎　糺
稻生典太郎

はしがき　下總國東葛飾郡國分村字國分新田東練兵場の西北端に所在する一小貝塚は、其の存在だけは一部の人々の間に知られたけれ共、特に深い注意は拂はれずに居つたらしい。從つて今日其の性質は未知に屬してゐると云つて良いであらう。然るに昭和九年四月の事、稻生は市川附近遺跡を採訪の途次、本貝塚に於て十余個の土器片を採集した。此の土器は紛れもなく古式縄文式土器であつた爲深き興味をそゝられ、爾來同方面へ採訪を行ふ折は本貝塚を訪れる事を忘れなかつたのである。されど此の貝塚は陸軍練兵場の一部を成して居り、且つ極めて小面積であるため、滿足するに足る丈けの資料を集める事は不可能に近いので、今日資料の不備なる事は充分に意識しつゝも、せめて其の存在だけでもお知らせして同學諸賢の御參考に供し度いと思ひ、簡單なる記述を試みんと欲したのである。

殼緣等の諸部分を以て土器の内外口緣部、胴部、底部等に押捺し、かくて紋様的効果を表現せんとする大きな企てが窺はれる。かゝる貝殼紋樣土器の多量出土は曾つて菊名宮谷貝塚の發掘に於いて夫れを見又本貝塚によつて一段と夫自身の投する意義と價値を再考せざるを得ない。延いては本貝塚の文化的價値性を思ひ、今新たなる再調査を前にしてこゝに拙き豫報を送る次第である。



北寺尾上宮貝塚土器拓影

尙彼此多大の御援助を下されたる加山善吉・柴田欽夫・柴田和夫諸氏の御厚意を感謝する。

—一九三五・四・二〇—

及び夫以下の黒土層中に包含され、貝層の消失する北東端の黒土中、地表より約一米半の地點に於いて土器の密集せる一現象に當る。

試掘の結果、土器は纎維包含の條痕並びに繩紋土器を夥多とし、僅かの非纎維土器の混在を認む。その層位的解決はかゝる不完全なる小試掘を以てしてはその保留を止むを得ず、近き調査に讓りたいと思ふ。

本貝塚出土の自然遺物は、獸骨、鳥骨、貝殼、自然石、燒灰等にて獸骨は比較的多量なるも特に齒牙に於いて一二の哺乳類なることは認められやう。自然石の石質は未詳、然し河海に於ける夫らしきもの丶破碎痕は明らかである。貝塚構成貝類は、オホノガヒ・カゞミガヒ・ハマグリ・オキシヾミ・シホフキ・カキ・ハヒガヒ（二枚貝）アカニシ・ウミニナ・カハアヒ（卷貝）等にて、特にハマグリ・ハヒガヒを以て最多量とする。

人工遺物は石器一、角器一、土器等にて、石器は打痕と破碎面を見せる未完成のものらしく、角器は鹿角枝を切斷して擦磨せる製作途上のものと思はれる。

土器は多量にて全器形を復原し得るものは二個、形態は深鉢形、圓筒形を推考せしむるもの丶外、その變化の多樣性は認められない、口縁部は上斜直口、外曲等にて、底部形態は平底、亞揚底、圓底、亞尖底等がある。土質は硬質のもの、軟弱のものは纎維含有によつて吸水性大。色調は黒色、黒褐色、灰色乃至赤褐色等にて、器壁の厚さは三粍より一・五糎に及ぶものも在る。紋樣は波紋を主體とし時に口縁部にて隆起帶を見る。繩紋、突刺紋、竹管紋、貝殼紋、網紋、線束山形紋、平行線紋等あり、之等の紋樣分子は或は單一、或は複合形式をとつてその効果の表出が窺はれる。中にも繩紋及び貝殼紋は絶對多數を占め、而も兩者の複合組合せを許さず、本遺跡出土土器紋樣は現在まで二つの流を判然と分けるもの丶如く見られる。特に貝殼紋はハヒガヒの殼項、腹部乃至

武藏國北寺尾上ノ宮貝塚調査豫報

桑山龍進

此處に豫報せんとする上ノ宮貝塚は關東西南における纖維系統の遺跡として、蓮田式及び夫前後の系列を包含するものと思惟せられるを以て、その試掘の概況を一先づ提示することゝする。

遺跡は東横電鐵菊名驛東東北六百米、菊名より鶴見方面に至る里道、鄕社八幡神社の西方に位し、行政區横濱市鶴見北寺尾町上ノ宮に所在する。貝塚は鶴見川溪谷右岸の旭村二ツ池近邊より狹小に深く侵刻せる一小支谷や奥の丘陵東斜面に構積せられたるものゝ如く、南北に走る該丘陵の西部對照地點には蓮田式を以て鶴見溪谷を代表せる菊名貝塚を始めとし、南西には篠原諸磯系貝塚を指摘し得、附近の榎本、太尾臺、オトボリ坂等の古式繩紋土器包含地を觀る時、當遺跡の先史横濱地方文化年に好き資材たることに躊躇しない。

昭和九年十二月九日、風化せるハヒガヒ數個の地表散布により疑念と希望の下に貝層の探索を行ふ。

試掘は貝塚東端に相當し、ローム層には到らざるも、黑色表土約四十糎の下に燒灰を交へる稀薄なる混土貝層を認め、更に約二十糎の黑土に次ぎ二十糎の混土貝層に遭ふ。而も貝層の一部は懸垂舌狀をなし、遺物は該貝層

a類　口縁部の開いた、高さよりも、口の廣い、主として平行沈線紋とその渦卷紋と縄紋とを附したもの。

b類　普通深鉢形をして、上述の諸紋様のうち縄紋のみを伴はず、製作手法比較的粗雑なるもの。

c類　b類より更に小形、薄手の深鉢形で、諸種の美しい沈線紋及び時には縄紋を伴ふものゝ三種が認められた。此等の外、注口土器　その個數比較的多く、その形は全部胴部が急折したもので、多くは無紋、製作の手法又粗雑なるものが多かつた。

異式土器　之等の外に、ごく少量の纖維土器及、勝坂式土器を出した。

5)　臺上の平坦地にある一部のものは小貝塚が一連をなし、住居趾等も、それに近接して存在するもの丶如く思はれたが、全面的發掘を行はざる今日では、何事にも言及する事が出來ない。

2.　自然遺物

1)　貝類は鹹水産を主とした主鹹貝塚である。

2)　獸骨は甚だ少量であり而も小破片である。魚骨は比較的多し。

3)　鳥骨と覺しきもの數片あり。

4)　顏料（朱色）辨柄の附着せる貝殼を出土す。

5)　木炭、灰、燒土等を相當量發見す。

3.　人工遺物

1)　石　器

今回の發掘及表面採集にて一個も發見せず。

2)　骨角貝器

大形骨製加工品　一

貝輪破片　一

3)　土　器

土器出土量は多かつたが、出土狀態について特記すべき事はなかつた。

土器には、

されるもので、この尖三角形の二邊に沿ふて、まばらな爪形紋を附した、二條の細い平行沈線紋が見られる。孰れも發掘中第一區中央部貝層下部から得たものである。

（ロ） 厚手式土器破片一〇個　そのうち口唇部破片四個。孰れも赤褐色の簡單な形のものもあるが、厚さ一糎以上、厚手特有の繩紋等が附いてゐる。

即ち異式土器は、全體で破片一二個、全體の一・〇九％を占むるに過ぎない。

以上を要約するに、本貝塚の土器の大部分は、a類を主體とし、それにc類及b類の順につづくものであつて異式土器の混入量は、極めて微量であると云ふ事が出來る。

第四節　結　言

本遺跡に關しこれを綜括して見ると次の樣である。

1. 貝　塚

1) 本遺跡は鶴見支丘の突端附近にあり、現東京灣に最も近き距離にある。鶴見溪谷口右岸附近の奥位にある。

2) 其位置は丘上及斜面上にある。

3) 現在發見したる所は、大小十一個の貝塚よりなり、比較的廣範圍の地域にあつて、一大貝塚群を形成する遺跡である。

4) 發掘を行つたA貝塚は特別に、狹義の住居跡と認められるものはなく唯、斜面に貝殼其他の不用物を遺棄したと云ふに止まる樣であつた。

その他の不詳なる土器及把手破片　以上の外、特殊な土器破片を一纏めにして、説述すれば

1.　赤色顔料を外面に塗つた土器破片一種六片　これは模様の狀態から推測すると、略々a類に屬するものとは想像出來るが、全器形等は、もとより不明。滑澤ある黑色で、朱は一面に塗つてあり、厚さは〇・五糎。比較的小形の土器と推定される。

2.　赤色顔料を外面に塗つた土器破片一種二片　細砂と、貝殼粉とをつなぎに入れた、厚さ〇・三糎程の、極めて脆弱土器小破片で、これも頗る小型な土器の破片と推定される。

3.　把手破片一〇種一〇片　此等は上述a類に屬するものが大部分を占むるものと想像される。中に厚さ一糎を越える圓筒の如きものが一個ある。これも口邊部とそれに附屬した把手の一部なのであらうが、色は赤褐色で厚手の一種かと思はれる。

4.　不詳土器　繩紋が極めてあらく、厚さ一糎程の灰色をした土器破片二個。小形淺鉢形土器の口邊部らしく思はれる、表全面にこまかい繩紋がある、鼠色の土器片一個、口邊部に貝殼を用ひて附したらしく思はれる、〇・七糎程の縱線が羅列されて居り、以下の紋樣不明瞭であるが、燒成相當堅緻なるもの一個、黑色にして、粒砂を頗る多數混じへたるもの一個。その他表面磨滅して、紋樣不明のもの三個。此等は孰れも、上述の如何なる類にも屬せず、且その他の異式土器に歸屬せしむべしとも考案し得ざる故不詳土器として一括した譯である。

異式土器　本貝塚から出土した上述諸類の土器以外に、發掘中及整理中に、次の如き數片の異式土器を發見することが出來た。

（イ）　纎維土器破片二個　一片は繩紋ある小破片、他は諸磯式の口緣部にある、淡黃色の尖三角形の把手に想定

る、相當美しい紋様が附されてゐる。注口のうち一個の下部には、半月形に、刻み目ある細隆線が施されてゐるが、その他の特殊な裝飾紋の附されてゐた痕跡はない。

號數＼部位	口徑	胴徑	底徑	高さ	厚さ	注口徑	注口長	把手長	把手巾
I	10×9	27×24	9.5×8	19.5	0.5	外35 內10	|	11.0	3.0-1.0-1.0
II	4	19.5	4.2	4.5	0.6	外2.2 內1.0	|	2.5	1.3-1.0-1.1
III	|	18.0	?7.0	?	0.5	?16.0	|	7.5	5.5-2.2-4.4
IV	|	|	|	|	|	外2.8 內1.8	4.2	|	|
V	|	|	11.0	|	|	|	|	|	|
VI		?							
VII		?							
VIII		?							
IX						外2.8 內1.7	3.5	?	
X						外2.5 內1.8	4.0	?	

備考　外は外徑、內は內徑、斷りなきものは外徑なり。

第四表　注口土器各部計測表

全器形は、胴部の中央部で上下に急折してゐるものばかしで、この種の類品は、下總國堀之內貝塚出土のものに見られる。

第七圖2は、大小一九個の破片を整理接合したもので、足りない部分もあるが、全器形は明かである。これは全く無紋の比較的大形の注口土器で、把手は縦に、橋形について居り、その長さ一一・五糎、その幅は狹く、多少波狀を呈し、その眞中に、一つの縦線が、細く、深く刻まれてゐる。この把手は、口邊の突出部と、その約六糎下の、長徑〇・六糎ある楕圓坐をもつた脚とによつて、本體に連接されてゐる。注口部は、缺損してゐて不明である。

同3は、前述の如く、b點貝層最下部から、このまゝ發掘されたもので、全器形は、前者と全く同じで、頗る小型。その一つは缺損してゐるが、注口部の眞上と、その正反對側に、前述した把手と全く同じ樣式で、たゞ形式の違ふ二つの把手がある。注口部は、これも同じく不明、單孔の直徑は〇・九糎である。灰色がかつた、全くの無紋土器で、多少滑澤がある位のものである。

IIIは兩把手及胴部破片合計九個を一類と認め得るもので、胴部直徑二〇糎、口徑、底徑、高さは、共に不明。厚さは〇・六糎ある。把手の樣式は、之もIと同じもので、長さ六糎、Iより幅が廣く、沈線の上部に一つの深い點が附されてゐる。外面はI及IIと同樣、滑澤ある黑色で、折れ曲つた胴部の下面に、數條の細い平行沈線紋が、此面全體を、幾つかの扇形に區切る意圖を以つて、四角く施されてゐる。

此等の外に、明瞭に、注口土器破片と思はれるものは、口緣部破片一個、胴部破片三個、把手破片一個、注口破片二個である。此等は恐らく全部別個のものであらう。胴部破片二個には、細沈線紋による四邊形を主體とす

以上この類の土器の特徴を要約するに、

(一)　全器形は深鉢形、口緣部が波狀を呈するものと、呈せざるものとがある。

(二)　紋様は、細かい繩紋帶と、深く太い沈線紋の渦卷紋等と更にその充塡紋として細かい繩紋を以つてしたものがあり、紋様は一般に美しく巧である。

(三)　製作は最も精巧で、土器は薄めであり、滑澤あるものが多い。

測點／比較	口徑	底徑	高さ	厚さ
I	一九・二[illegible]	一一・四[illegible]	三〇・〇[illegible]	〇・四[illegible]
II	三六・四	—	—	〇・七
III	二〇・〇	—	—	〇・五
IV	—	一一・五	?二〇・〇	〇・六
V	—	二三・〇	—	〇・四
VI	—	二〇・〇	—	〇・四
VII	—	一三・二	—	〇・六
VIII	—	七・〇	—	〇・五
IX	—	九・二	—	〇・六
X	—	八・〇	—	〇・四
XI	—	一五・二	—	〇・四
XII	—	六・二	—	〇・四
XIII	—	八・二	—	〇・六
XIV	—	八・八	—	〇・七

第三表　c類II土器各部計測表

此等の外に、厚さ〇・五糎に達しない、皿形土器の破片三種四片ある。孰れも、口邊部の破片で、色は黑色、滑澤あり、外面は全く無紋であるが、內面には口緣部と、更にその下部とに諸磯式の浮線紋に似た二條の細隆線紋がある。製作手法から見て、純然たる異式土器（大森式のあるもの）として、考察すべきものかも知れないが、假にこの類の一亞形と見て置かう。

（第十三圖9及10）

此等全部を統計すると、第一表の如くc類土器片は、八三種二一二片で、全體の一七・九一%に當る。

注口土器　注口土器の破片は、全部で十種三六片に達し、全體の三・〇五%に當り、相當に多い方である。

は〇・四粍乃至〇・六粍どまりで、燒成好く、質は堅緻、粘土の粒子も頗る細かい。

第二　大體の形は、深鉢形であると云ふにつきてゐる。

口唇部は、全く無飾であるが、大きく波狀を呈して、その波頭は、二個乃至四個位かと思はれ、小形で、薄手ではあるが、樣式は第十四圖1及2の如く第九圖の把手と一脈相通ずるものがある。

胴部の模樣は、その直下からはじまり、比較的深く明確な、巾の廣い沈線紋を、自由に組み合はせて、ある場所には渦狀紋を作り、他の場所にはこれをぶつ〳〵切つて、點列紋的な效果を生ぜしめたり等しつゝ、巧に一組の模樣を構成し行くあたり、仲々優秀な技巧を示めしてゐる。のみならず纎細な細紋を併用してゐる破片も、相當に多い。あるものになると繩紋を伴はず、手法稍ゝ粗雜でb類に酷似した紋樣と、形とをもち、その間に明瞭な區別をつけ兼ねる程のものもあるが、唯多少b類より、すべての點が細かく、華奢に出來てゐると云ふ特質によつて、之をc類の(2)に加へたものもある。（第十四圖2―9）又、同圖10に示めした樣に、その中央の切斷面は正圓たるべき把手を、胴部中央の稍ゝ上方に、傾斜して附して居る樣なものもある。この手の如きは、滑澤ある赤燒でその製作、最も巧である。（第十四圖10―12）

底部は何れにしても無紋で、壁と底の爲す角度は、何れも九〇度内外である。（第十一圖右側諸圖參照）

この類に所屬すべく想像される土器破片は、全部で五七種一八三片に及び、全體の一五・四五％に達する。

大體の製作手法を見るに、一、二の例外を除いては、頗る精巧堅緻なる薄手（〇・七粍乃至〇・四粍）のもので、つなぎには細砂を用ひ、燒成度高く、粘土の粒子は細かく、且土器表面に滑澤あるものが多い。色は大體黒色、赤色等が多い。

大破片について見るに、口徑約二〇糎、高さ凡そ三〇糎位と想像される。

この類に所屬すべく想像される破片は、口脣部破片は四種六片、その他の破片一六種一九片、合計二〇種二五片で、全體の二・一一%に當る。

Fig. 13. 下末吉小仙塚貝塚出土 c 類 I 土器破片

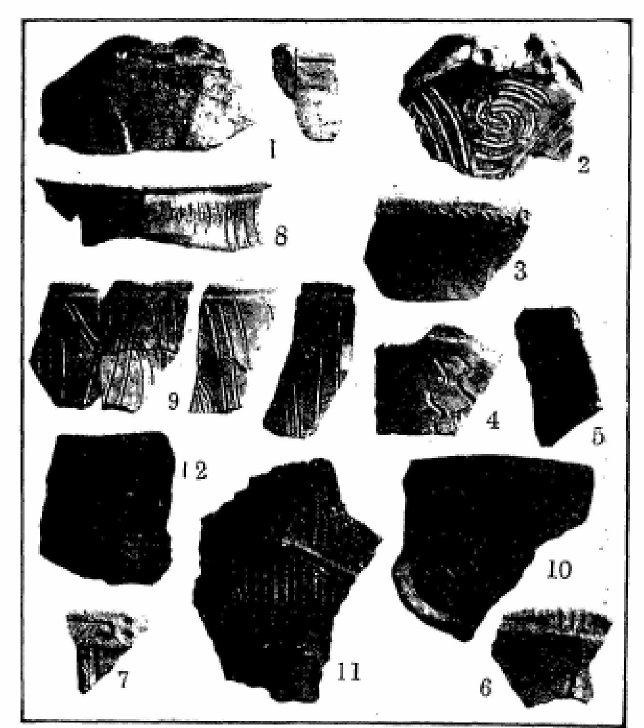


Fig. 14. 下末吉小仙塚貝塚出土 c 類 II 土器破片

製作手法を見るに、つなぎには多く多量の細砂を交へて居り、縄紋帶以外の部分には、多少滑澤があり、厚さ

ない。このうちに網代目のついたものがある。

　この類の土器の製作手法を見るに、a類土器よりも、土の粒子粗大で、つなぎには粒砂を用ひ、土器表面に滑澤等あるもの殆んどなく、直感的に粗製粗悪の感じがする。厚さも大概は〇・七糎乃至〇・九糎程度で、a類よりも概して厚く、表面淡黄色又は鼠色を呈するものが多い。

之を要するにc類土器は

(一)　全器形は大體、口唇部の稍ゝ開いた深鉢である。
(二)　口唇部に、一つの隆起せる紋樣帶をもつもの等ある外把手等は見られない。
(三)　胴部紋様は、太い淺い沈線紋によるU字紋又は雲形紋、大なる刺突紋等である。
(四)　製作は稍ゝ粗雑で、厚目である。

　c類　此類に屬するものは、何れも小型の深鉢形、薄めの土器で器形紋様共に美しく、製作手法精巧である。此等に屬するものを、便宜上更に二つに分けて説述することとする。

　第一　全器形は口の開いた深鉢形である。

口唇部は外曲した、平圓口で、口縁に、内へ折れまがつた縁がついてゐる。

　胴部紋様はその直下からはじまつてゐるが、それは幅約一・二糎位の平行線の間を、精緻な縄紋をもつて、充塡したものであつて、この帶がこの土器の主軸に平行、それと直角な方向及この兩者のつくる直角を凡そ二等分する方向に用ひられてゐる。(以上第十三圖1—8參照)

　底部について全く不明であるが、やはり第二類に似て、更に細い圓底のものと推測される。

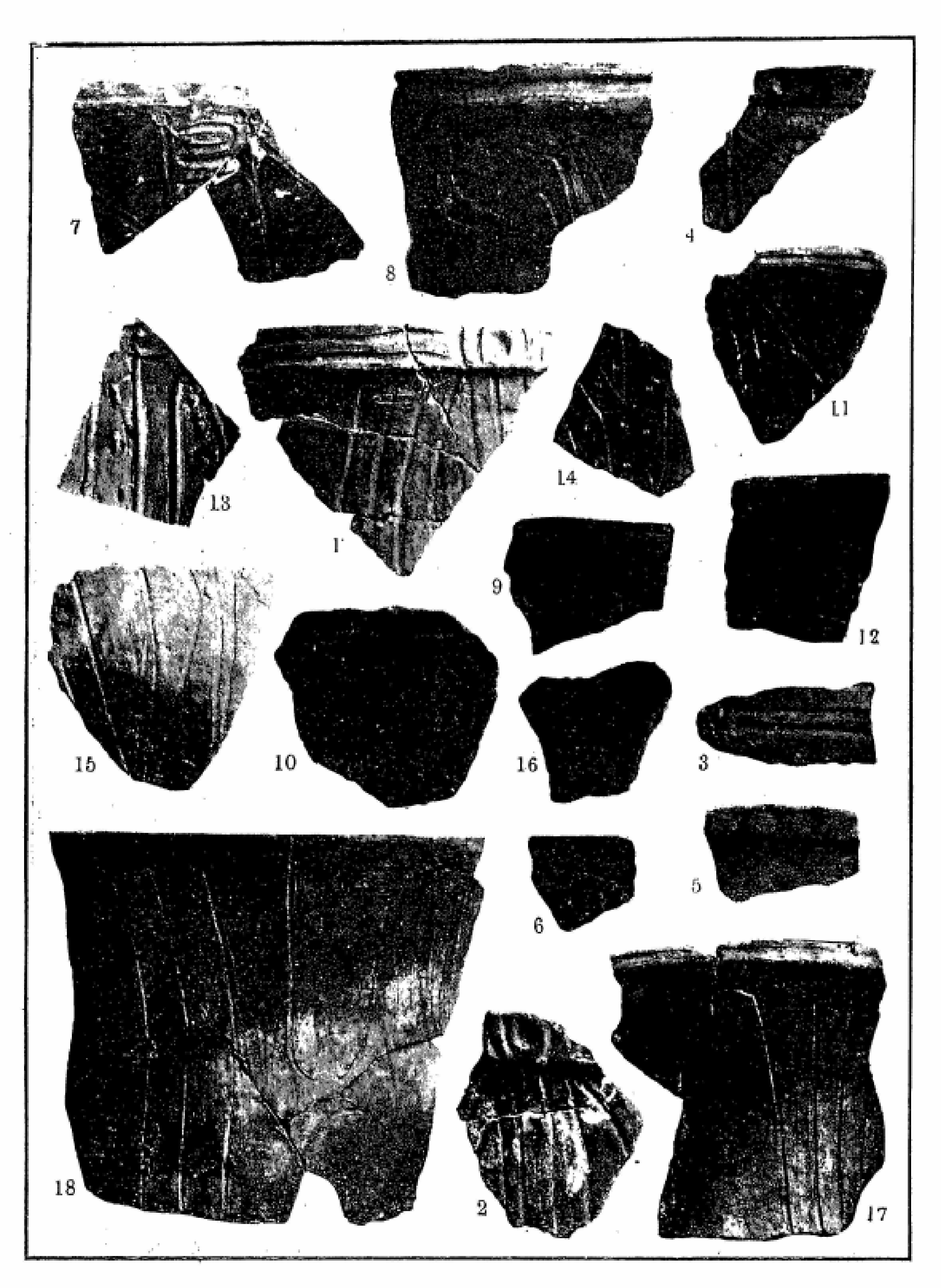


Fig. 12. 下末吉小仙塚貝塚出土 b 類土器破片

仍ち、口唇部は多少外曲し、所謂上尖平緣型で、現在採集し得た破片から推ずに把手の如き特別の裝飾は絶無であると思はれる。唯、これにつづく外面部には、一段高くなつた一めぐりの紋樣帶があつて、これが一―二箇所に於て、圓及び太く淺き括弧紋及沈線紋を組み合はした一種の裝飾紋を形成してゐる。(第十二圖1―3)他の一種には、同じ裝飾帶に、直徑約〇・八糎位の、略ゝ圓形の深からざる凹點が、約〇・三糎位の間隔を置いて附されて居り、(第十二圖4―6)更に他の類例は、此處に余り深くない、一條の溝がある丈である。(第十二圖7―12)要するに口緣部の裝飾は、極めて粗大で、自由であると見られる。

口唇部以下、胴部の裝飾を、同じ之等の破片について見るに、頗る粗大且自由で、一定の規律を發見する事が困難である。(第十二圖13―16)然し多くは太い、淺い沈線紋を用ひて、U字狀の如きもの、雲形紋の如きものを附してゐる。或るものには、之等の外に、粗大なる刺突紋が、沈線紋の間に附されてゐる。(第十二圖12及14)中でも同圖18の如きは、厚さ〇・七糎程の大破片で、第二區から發掘したものであるが、口徑二八糎、現在の高さ一八糎、口唇部に全く裝飾なく途中が輕くくびれて、又脹らまりそのまゝ底部につづくものと思はれる。紋樣はU字形沈線紋で、燒成はこの類一般に比して、頗るよく、色は赤褐色である。此の如き破片が、尚他に一片ある。(第十二圖17)

何れにせよ底部は無紋で、製作及厚さによつて、a類と區別する事は出來るが、前述のa類土器も、底部に到つては、此の類と酷似するものも多いので、一々區別する事は差し控へて置かう。

唯底そのものは、底から壁へ移行する箇所の角度と、厚さとを見れば、製作手法と相俟つて、明瞭にこの類に屬すべきものを區別する事が出來る。底の厚さは大概〇・六―〇・九糎位で、全部で二種二片程を算へ得るに過ぎ

のとすれば、この類の土器の總片數は五六七種七六六片に達し、全土器破片數の六四・九四%に及ぶのである。

此類の土器の製作手法を見るに、つなぎには多く細砂又は粒砂を用ひたるものが多く、雲母の入つてゐるものは一片もない。燒成熱度の相當に高かつた事は、火がよく土器の內部までとほつてゐる事によつてもわかる。厚さは全部〇・五糎乃至〇・八糎程度で、色は外面黑色、多少滑澤があつて、內面赤色のものが最も多いが、赤褐色、黑褐色、白色に近い灰色のものもある。質は堅緻で、粘土の粒子は細かく、ヘラ目は、細く且つ短く、その內面の如き、口周と平行の方向に、一回の長さ約〇・三—〇・四糎位に、丁寧に引きこすられてゐる。

之を要するにa類土器は

（一）全器形は口脣部の漏斗狀に開いた口緣部直徑よりも、高さの低い甕である。

（二）その上面に一種の把手を持つほか、口脣部は全く無紋である場合が多く、然し時には一種の隆起線紋又は繩紋を以つて裝飾される。

（三）胴部紋樣は、沈線紋と、一種の充塡紋として使用された細かい繩紋とを以つてし、前者は渦狀紋を中心にx形又はO形狀裝飾紋を構成してゐる。

（四）製作手法上相當堅緻上手に屬する。

b類　本類に屬するらしく想像出來る土器破片は、總數二八種三八片丈で、僅に全破片數の一〇・九八%に過ぎず、胴部以下の無紋部の破片が、之に多少加算されるものとしても、本貝塚に於て、決して多い方とは考へられない。全器型を略〻想像し得る樣な大破片を羅列すれば、第十二圖の如くである。

分は、全く無紋である爲に、類別するのに頗る困難でもある。

之を要するに、口唇部から、底部に至るまで、その横斷面は一つの美しい線の流れを示めし、全體の觀念は先づ甕の部類に屬するものであらう。

Fig. 11. 下末吉小仙塚貝塚出土土器斷面圖 a 類土器斷面圖
c 類II 土器斷面圖

接合整理して、原型を知り得るに至つたものの、口唇上部直徑、口徑部直徑、口唇高、上半胴高、下半胴高、底部裏面直徑を表示すれば、上圖左半の如くである。

これ等の土器の口唇部及底部の横斷面を圖示すれば、上圖の如くである。此等のうち、第一號土器は四一片、二號土器は二四片、三號土器は六片、四號土器は二三片、五號土器は六片、六號土器は九片、七號土器は六片、八號土器は二片、九號土器は一〇片、一〇號土器は三片より成り、この外にこの類の土器に屬せしめられると推定されるもの、口邊部破片六九種六九片頸部及胴部破片一九九種二五〇片、底の破片一六種一六片を識別し得る。更に此等の外に、無紋の比較的厚い赤褐色、黒褐色、黒色又は灰黒色の土器片二三九種二六六片及底の破片三五種三五片の大部分が之に加算されるも

ひたものが大部分で、多くの平行沈線紋が、胴の中央部で渦狀紋を構成し、それを中心に同じく數條の平行沈線紋が、四方へx狀に放射して居ると云つたものが多い。中にはxが二つ連續して、xx狀を爲し、中央のOが持つ裝飾的意義の方が顯著であるものも多少ある。（第九圖及第十圖參照）何れにしても、此等の沈線紋が、構成する紋樣が、多少なりとも幾何學的である點と、大部分繩紋を伴ふ點とは、燒成其他をも考慮に入れて、本類を、b類と區別した一つの標準點である。（以上第七圖—第十圖參照）

土器號數＼部位	口緣部直徑	口唇高	頸部直徑	上部胴高	胴徑	下部胴高	底徑
I	四〇・〇（推）	五・〇（推）	二三・〇（推）	九・〇（推）	二一・〇（推）	一〇・〇（推）	八・五（推）
II	五八・〇	一〇・〇	四〇・〇	—	—	—	—
III	四二・〇	一三・〇	三〇・〇	一二・〇	?三四・〇	—	—
IV	三四・〇	八・〇	一九・〇	六・〇	一五・〇	一〇・〇	七・〇
V	—	—	—	—	—	一二・〇	一三・〇
VI	—	—	—	—	—	一六・〇	八・〇
VII	—	—	—	—	—	—	九・〇
VIII	—	—	—	—	—	?一七・〇	一〇・〇
IX	—	—	—	—	—	—	九・五

第二表　a類土器各部實測表

他に一類三片の同じくこの類に所屬せしむべく考へられる、赤褐色の土器片は、沈線紋、繩紋に加ふるに、小刺突紋をもつてして美しい裝飾的效果を擧げてゐる。（第八圖12及13）

直胴、外曲胴の如何に拘らず、胴部上面の模樣は、一定の下限を示めさずに、何時しか無紋の底部へ移行する。前述の如く、底そのものが、比較的小さいものが多いので、此の部分の下斜角度は、相當に大きい。この部

線紋の鉢卷が施されて居り、これが胴部上半の種々な手法による裝飾の上限を示めして居る。
胴部上半の裝飾は、實に本土器の裝飾の主體を爲すものである。斜め上から見た場合に、人の目につく裝飾を

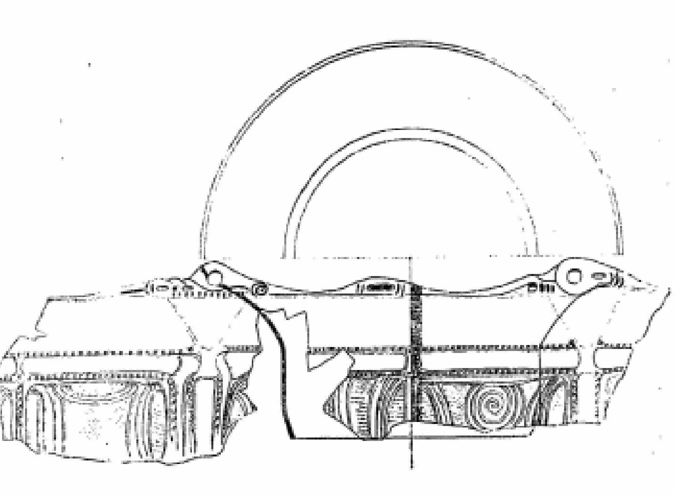


Fig. 9. 下末吉小仙塚貝塚出土 a 類土器展開圖

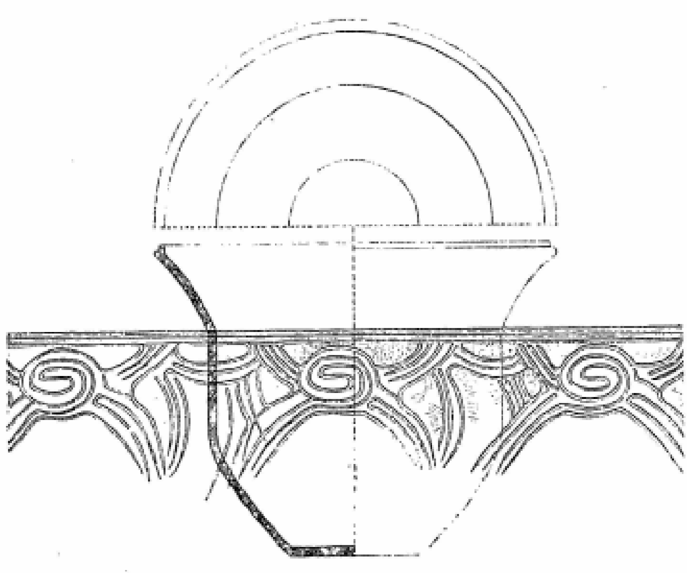


Fig. 10. 下末吉小仙塚貝塚出土 a 類土器展開圖

付すべき樣な部分は、此處を除いて他に求め得べからざる譯でもある。紋樣は稀に、太い淺い沈線紋のみを以つてしたものもあるが、大部分は太い又は細い、淺い沈線紋と、一種の充塡紋として用ひられた、細い繩紋とを用

これと直角に交はる方向にも用ひられ、所謂薄手全般に見られる一種の隆起線紋であつて、太い細い等の區別はあるが、諸磯式の浮線紋に對して、こうした種類の土器の一つの明確な特徴を爲すものである。（第八圖3・4及第九圖參照）

尤も、この隆起線紋は、こうした凹點を伴はぬものもあり、把手の直下に之と相接して短い距離にのみ存するもあり、又Y字形に、施されて、その上部の兩端が、大きな把手の裝飾を、支へる様な位置にあるものもあり、この三線會合の中心點に、小さい把手を、別に附したものもあり、（第七圖參照）中には全くこの部分全面に亘つて、何等の裝飾を伴はぬものも相當に多い。他の破片について見るに、この無紋の部分に、餘り細かくない繩紋を伴つてゐるものもある様であるが、この方は器形が多少小さいもの丶如くである。然し口唇部に溝のあるところや、口唇の外曲狀は、本類に所屬すべき事を明示してゐる。

Fig. 8. 下末吉小仙塚貝塚出土 a 類土器破片

この部分から、直胴又は外曲胴に移行する境目附近にも、これは殆んど例外なしに、前述の隆起線紋又は、沈

そのまゝ比較的小形な圓底につづく甕である。

各部を詳細に觀察するに、凡そ次の如くである。

口唇部最上端は、何れも小さく内折し、この内接部が二ヶ所位に於て、殊に隆起して、第九圖、第十圖及第七圖1、第八圖1參照の如き把手を形成する。他の破片によつて見るに、把手の更に退化したものがあり、又この口緣部上面に刻み目を入れたものもある樣である。

Fig. 7. 下末吉小仙貝塚出土注口土器及 a 類定形土器

　この口唇部最先端につゞく、外曲した口唇部を見るに、先づ前者に後者が接續するその境目に、通常一つの溝がある。この溝の巾は、その土器の大きさに比例して、大小、深淺種々あるが、大體は淺い、太い、底及側面の造る横斷面が、略ゝ半圓形を呈するものが多い。この溝の直下に、これと僅かばかりの間隔を置いて、これを平行に、一條の隆起線紋が施されて居り、その線紋の上面には、相當に尖端の太い、棒狀のもので押したかと思はれる、大體小判形の押紋が付されてゐる。この小判形の長軸は、その線に對して、左右何れかに傾斜してゐる。或ものに於ては、この押紋が相接して羅列されてゐる爲に、一見紐れ繩目紋の如き、裝飾的效果を擧げてゐるものもある。（第八圖8）

こうした線紋は、この部分に於ては、上說の如く、土器全體の主軸に直角水平の方向にのみ施されてゐるが

他の貝塚に向つて、表面採集を多少試みた、その貧弱な少量の資料から想像するならば、此等多くの貝塚の各々の土器も、大體以下の記述に、餘り隔絶したものでない事丈は畧々結論出來そうに思ふが、決してそれに自信は持ち得ない。

土器出土狀態に關する特殊事項を、殊更に列擧すれば、次の數項に盡きると思はれる。即ち、

[1] 注口土器は、その大小、形式、紋様の如何に關せず、悉く貝層内深部より發見せられた。

[2] 異式土器中、纎細を含む數片は、之も第一區貝層内深部より發見せられた。

[3] 後述する如き、本貝塚出土土器の主體を爲すA類土器は、貝層中、上中下層の區別なく、全く無秩序に、孰れの部位からも發見する事が出來た。

[4] 彌生式と、明瞭に認め得るものは、一片も發見し得なかつた。

本貝塚第一、第二、第三諸地區に於て發見せられた土器片總數は凡そ一〇九八片、(此等のうち二五二片が第一區以外に於て得られたものである)(第一表參照)此等を接合整理した結果、畧々完形に近い土器、甕形二個、注口土器一個を復元する事を得た。別に土岐は、第一區西側中央部貝層最下部附近(一・三米下)から畧々完全に近い、小形注口土器一個を得た(第一表參照)

以下、本貝塚に於ける土器を、便宜上a類、b類、c類の三種とし、別に注口土器と、異式土器との各項に分けて記述しようと思ふ。

a類　本類に屬する土器は、本貝塚の土器の主體を爲すものであつて、全形及その大半を復原し得たものについて、これを見るに、全器形は、口縁部漏斗狀(所謂外曲口)を爲し、一旦くびれて、直胴又は外曲胴をなし、

るが、同時に池上、大給の發掘したる第三區の土器も全體の約四分の一程混入してゐる。各地點の、貝層其他の狀況は、既述の如くであつて、第一區は、丁度舊道路直下に當つて居たため、貝層攪亂の痕跡少くなく、よしんばその痕跡があつたとしても、上層以下に及ぶ程ではなかつた爲に、他地區に比し、廣範圍に發掘する事を得たのであつた。これに比して、他の二地區は、殆んど處女貝層の明瞭なるものを發見する事を得ず、土器片又、大部分小破片のみであつた爲に、殆んど試掘程度で中止せざるを得なかつた。然しこの三地區を通じて、土器の出土量は相當に多かつたが、その出土狀態には、殆んど何等特記すべき特徴なく、器形、紋樣等によつて、上層、下層の區別をすべき樣な結果等は全然得られなかつた。此等の三地區の位置も、殆んど相接して居り、同じ貝層の延長部に互に屬しても居るので、この一大貝塚群中の東北隅一貝塚の、一小區に於ける資料として出土土器片一切を取り纏めて、此處に記述する事にした。

第一表　發掘土器片總數表

種別	口邊	胴部	底部	總數	%
a類	九六(66)	三三八(219)	三三五(300)	七六九(567)	六四・九四
b類	一一(8)	一〇七(100)	一二(12)	一三〇(114)	一〇・九八
c類Ⅰ	六(4)	一九(16)	—	二一二(83)	一七・九一
c類Ⅱ	一四(9)	一四五(39)	二六(15)		
注口土器				三六(10)	三・〇五
未詳				二五(19)	二・一一
異式土器				一二(12)	一・〇一
總計				一一八四(805)	一〇〇・〇〇

備考　(一)羅馬數字は種別數を示めすものとす。
(二)此等の他に尙數十個の小破片あれども加算せず。

從つて、同じこの貝塚群に屬する、この貝塚以外の他の十數個所の各〻の貝塚が、如何なる土器を出土するものなるかは、本報告に於ては、全く關知せざるものである事を、特に附記する。尤も、我々が、仕事の餘暇に、

(3) 哺乳類の學名は、主として谷津直秀氏の分類に從ふ。

(4) 通常、彩色土器等に見る朱と稱せる赤色に近いものであるが、この少量を削り取つて鹽酸に溶かし、赤血鹽を加へたる所、青色を呈し、別に硫酸溶液に硫青化加里を入れて深紅色を呈するを見た。この實驗の結果、酸化鐵、卽ち辨柄と認められる。

二、人工遺物

I 石器　今回の發掘に於ては、石器類は一個も發見し得なかつた。

II 骨製加工品　A貝塚第一區の東南隅の貝層下部、表土下一一六糎の個處より、一骨製加工品を發見した。形狀は長さ三八糎、幅三糎、厚さ一・四糎の彎曲せる棒狀のものであるが、恐らく海獸の肋骨と思はるゝものに多少の加工を施したもので、兩端は單に切斷せるものゝ樣であるが、兩側面は平坦に削り、保存狀態が不良の爲め加工の跡の不分明の所もある。この類品は曾て大場磐雄氏によつて同じく當貝塚より發見された事がある由であるが(註)今の所この材料に使用された骨骼から種名を明かに爲し得ないし、又その用途も遽かに決し難いものである。

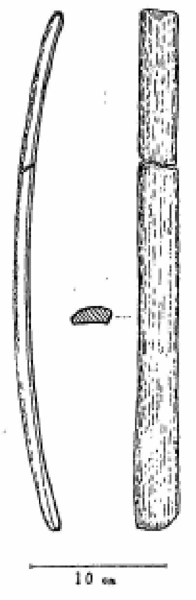


Fig. 6. 下末吉小仙塚貝塚發見骨製加工品

註　卷頭文献 (4)

III 貝輪　貝塚第二區よりアカヾヒ (Arca inflata) の可成り大形の右殼を以て作れる貝輪破片一個を發見した。(大給)

IV 土器　以下述べんとする土器類は、主として、土岐及竹下が發掘したる、第二區に於て採集したものであ

b.　Mammalia(3)

1.　シカ　Cervus sika

2.　キノシヽ　Sus leucomystax

3.　ウサギ　Lupus brackyurus Fem.

獸骨は關東貝塚一般に見る如く、その大部分は、シカとキノシヽであるが、今回の發見量は比較的尠く、然も細片となつてゐたものが多い。ウサギは僅かに下顎骨一個を發見したに過ぎない。猶、海獸の骨骼と思はるゝものも發見してゐるが、種名を詳かになし得ない。

c.　Aves

鳥類の骨骼と覺しき小骨數個を發見したが、種名を明かにする事が出來ない。

III　その他

a.　辨柄　シホフキの良く發育せる殼の全面に、多量の辨柄(4)が附着せるものを發見した。

b.　木炭・灰・燒土　何れも相當多量に發見したが、爐趾と思はるゝ所はなく、從つて何れも細片として貝層中所々に散見し得たものである。

註

(1)　軟體動物門の學名は、主として平瀬與一郎氏、岩川友太郎氏の分類に據る。
猶、貝類の整理には當研究所の竹下氏を煩せる處多く、又、ムラサキガヒ（Sanguinolaria adami Reeve）は、東京科學博物館の百瀬文雄、大垣御門經輝兩氏に御鑑定を願つたものである。茲に感謝の意を表する。

(2)　魚類の學名については、主として田中茂穗、D. S. Jordan, J. O. Snyder; A Catalogue of the Fishes of Japan. に據る。

c. Cephalopoda

1. イカ　Sepia sp.

卽ち、貝類では二枚貝類十四種、卷貝類十種、合せて二十四種を檢出し得たが、キセルガヒ (Phaedusa sp.) とマイマイ (Eulota sp.) の陸產種を除いた他二十二種は何れも鹹水產のもののみである。而してハマグリが最も多く、形狀も一般に大型であつた。次いで、カキ、シホフキを相當多量發見したが、オキシジミ、アカニシも少なからず、他は量に於いて乏しかつた。

又、イカ (Sepia sp.) の甲羅の形狀完全なるものを相當多量發見した。

II Vertebrata

a. Pisces[2]

1. ボラ　Mugil cephalus Linne.
2. スズキ　Lateolabrax japonicus (Cuvier & Val.)
3. タイ　Pagrosomus major Tem. & Schl.
4. クロダイ　Sparus latus Houttuyn.
5. フグ　Spheroides sp.
6. エイ　Dasyatis sp.

魚骨は豐富にして獸骨類より遙かに多量を發見した。檢出し得た種類は上記の六種に過ぎないが、その中殆んど大部分は、スズキとタイの骨骼と認められ、他は稀であつた。

9. アサリ　Tapes philippinarum Ads. et Rve.
10. ムラサキガヒ　Sanguinolaria adamsi Reeve.
11. マテガヒ　Solen gouldi Conrad.
12. シホフキ　Mactra veneriformis Reeve.
13. ミルクヒ　Tresus nuttalli Conrad.
14. オホノガヒ　Mya arenaria Linne.

b. Gastropoda

15. スガヒ　Turbo coronatus Gmelin.
16. ツメタガヒ　Polinices ampla Phil.
17. ナガニシ　Fusus perplexus Adam.
18. バイ　Eburna japonica Reeve.
19. イボニシ　Purpura tumulosa Lisch.
20. アカニシ　Rapana thomasiana Grosse.
21. ウミニナ　Potamides multiformis Lischke.
22. ヘナタリ　Potamides micropterus Kiener.
23. キセルガヒ　Phaedusa sp.
24. マイマイ　Eulota sp.

上にあるものは、東西に直線的に連なつてゐて、斜面にあるものとは貝塚構成の趣が略異つてゐる様に思はれる點があるが、未だ地表上に貝殻の露出せざる部分も相應に存在するらしく、その遺跡全貌を明にし得ないのが今日の狀態である。(池上)

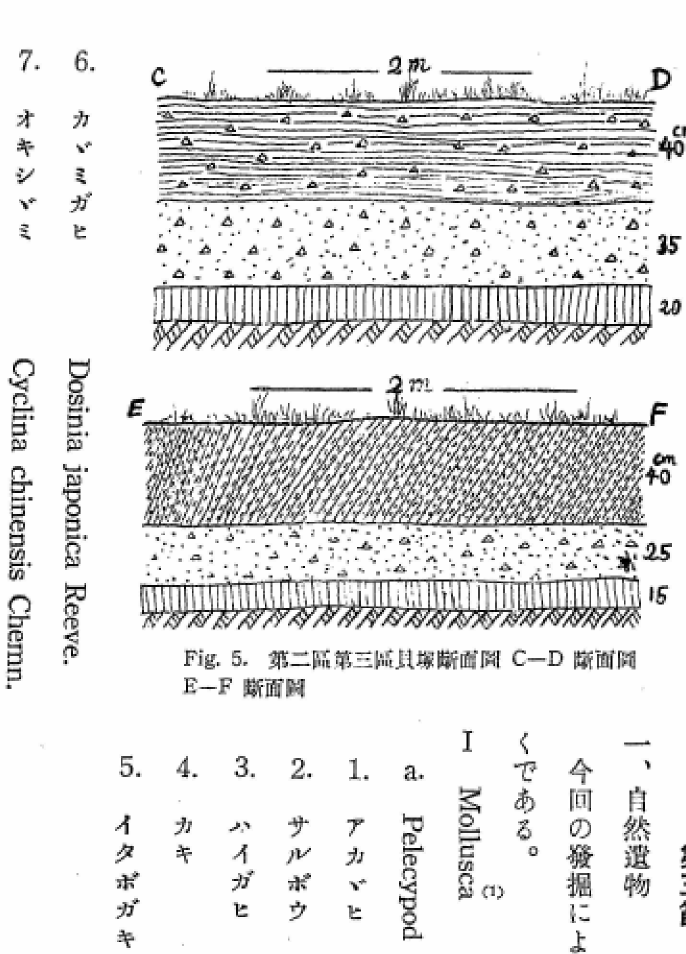


Fig. 5. 第二區第三區貝塚斷面圖 C—D 斷面圖 E—F 斷面圖

第三節　遺　物

一、自然遺物

今回の發掘によつて檢出し得た自然遺物は大略次の如くである。

I Mollusca(1)

a. Pelecypod

1. アカガヒ　Arca inflata Reeve.
2. サルボウ　Arca subcrenata Lischke.
3. ハイガヒ　Arca granosa Linne.
4. カキ　Ostrea talienwhanensis Crosse.
5. イタボガキ　Ostrea denselamellosa Lischke.
6. カガミガヒ　Dosinia japonica Reeve.
7. オキシジミ　Cyclina chinensis Chemn.
8. ハマグリ　Meretrix meretrix Linne.

より十米隔てた斜面上方にして、二米―一米五〇、深さロームに逹する七十五糎を發掘す。第三區は第一區の北方五米を隔てた第一區と同高位にある地點を二米四方を發掘した。（第三圖參照）

以上の如くA貝塚の發掘壕によつて知る貝塚内部の狀況は、第一區、第二區にては貝塚表面は四十糎乃至五十糎の黑土層にして、若干の貝殼、及び土器片を含んだものであつた。

Fig. 4. 貝塚斷面圖（第一圖）
A—B 斷面圖
Y—X 斷面圖

次に貝層は第一區が最も純貝層の厚い部分があつて九十糎にも逹した。（第四圖A—B斷面圖）第二區に於いては純貝層と混土貝層とが、區々であつたが、純貝層は三十糎あつた。（第五圖C—D斷面圖參照）第三區は以上の二者とは趣が略異なり、貝層上部は黑砂をもつて覆はれ（厚さ三十糎）てゐた。此の黑砂は第三區附近の小範圍に限られてゐた樣であつた。第三區の貝層は最も薄く約二十糎あり、その北端に於ては尖くなつてゐる。（第五圖E—F斷面圖參照）貝層下部は、何れの發掘區に於ても狀況を同じくし、十糎乃至二十糎の褐色土層あり、更にその下部はローム層になつて居る。

尙表面觀察によるA貝塚以外の地點の貝塚はその東斜面にあるものは一般に大きく、反對の西斜面にあるものは小さい。即ち、A貝塚に次いで丘の中央にあるE貝塚が大きく、約二十米の長徑の楕圓狀をなし、B・C・Dが次いで大きい。西斜面のF・Gは後世の攪亂を受けて、貝殼散布の狀態が甚だ不整である。又、H・I・J・Kの如く丘

れた形跡が明かであるものや、地主との交渉の關係等で發掘を行はず、表面採集と測量を行つたに過ぎなかつた。

Fig. 3. 下末吉小仙塚貝塚發掘A貝塚

A 貝 塚

A貝塚は貝塚群の最東北隅にある貝塚にして、臺地の東北斜面に形成せられてゐる。現在荒地で耕作物なく、一部は山林にかゝつてゐる。貝塚の一部は近年迄貨線道路が通じてゐた所で、發掘には總ての點から容易の所であつた。

發掘はA貝塚の中央部及びその兩側二箇所で行つた卽ち此の三個の發掘壕を第一、第二、第三區とし尙此等の周圍に十三ヶ所の試掘を行ひ、A貝塚の全貌を明かにする事に努めた。此の結果、A貝塚の廣さは、東西（臺上より斜面にかけて）約二十米、南北に約三十米余あり、本貝塚群中最大のものと思はれに。而して、貝殼の散布區域は臺上より斜面にかけて貝殼が堆積しゐると云ふに止まつて、貝塚其のもの丶形態は甚だ不明瞭である。

發掘に於ける第一區は斜面の中途で、東西約三米、南北に四米、深さ一米五十糎を發掘した。第二區は第一區

貝塚附近の標高は四十三米内外を算し鶴見方面の現沖積地までの比高は三十米以上に達する。又丘陵の傾斜も急峻であり所謂背狀丘陵を呈し、僅に丘上に狹長なる平地を存するのみであるから、此の如き地形に住居を營爲するには、丘上か或は谷頂附近の傾斜の緩な所を選ばざるを得ない。從つて第二圖の如く臺上及び斜面にかけた部分に小貝塚が營まれ一大貝塚群を見るに至つた所以のものであらう。此の鶴見支丘の臺端附近は特に不規則に發育走行し、丘陵局地錯雜してゐると同時に、貝塚構成當時は、諸所に、風浪の安全な入江の交雜して居つたことも考定し得らる。卽ち、當時に於ける漁撈生活によく適應して居つた地形であつたが爲に、本貝塚以外に前述の寶泉寺、不動堂、愛宕社の貝塚を見る他駒岡、二本木、池ノ谷、鶴見總持寺、池ノ端、別所、二見臺等の諸貝塚の存するに至つたものと考へる。

二、貝塚の狀態

貝塚は現在畑地及び斜面の森林の一部にあり、其表面に貝殼の散布を認めた所は十五箇所の多きを數へた。此等の貝塚は、僅に十五米乃至二十米を隔てゝゐるに過ぎず、その大きさも大小樣々である。

本遺跡を便宜上、第二圖の如くA——Kの十一個の貝塚とし、他の四ヶ所の貝殼の散布せる部分は、近年貝殼を運搬した結果と思はれるものもあつたから、單に？の符號を附して置くに止めた。A——Dの貝塚は東側及び東北斜面にあり、F・Gの貝塚は其反對の斜面西側にあり、E・H・I・J・Kは臺上平坦地にある。卽ち本遺跡は臺地の東西兩斜面及び其中央にあつて小貝塚が廣範圍の地域に群集した一大貝塚群をなすものである。

三、發掘、調査

發掘を實際に行つたものはA貝塚のみである。卽ちA貝塚を三ヶ所三日間連續して發掘した。他は近年攪亂さ

粁半の長さで入り込んでゐる。此の支谷の端が三個に分たれ、此れが現在の三池貯水池である。貝塚は此の三個の貯水池の中二つの谷に狭まれた臺上及び斜面にかけて形成されてゐる。

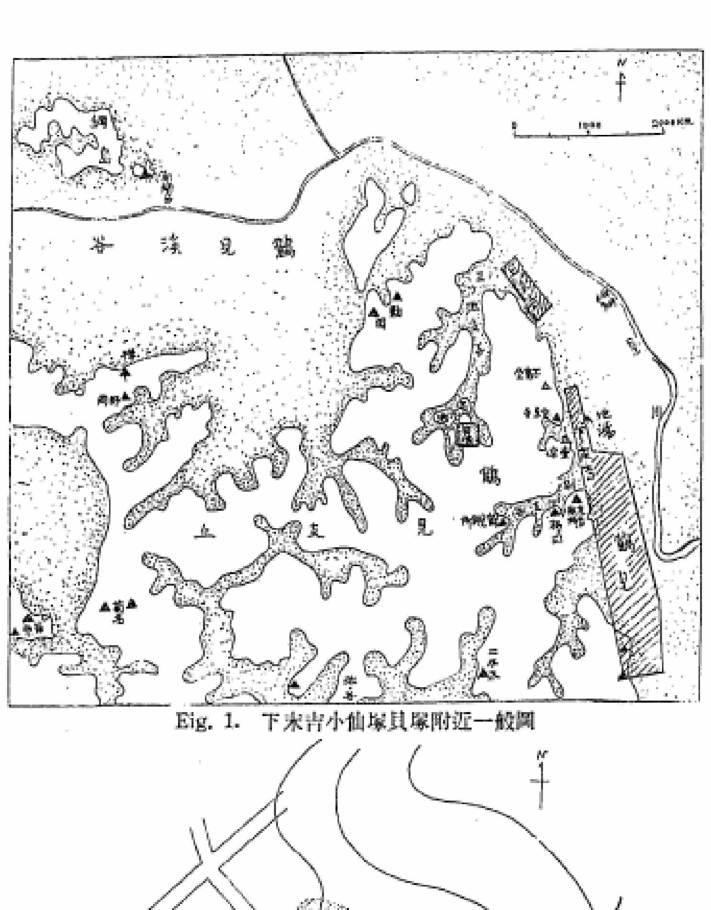


Fig. 1. 下末吉小仙塚貝塚附近一般圖

Fig. 2. 下末吉小仙塚貝塚貝殼散布狀態

此の三池支谷は現東京灣方面に谷口を開いてゐるから、本貝塚は鶴見溪谷とは、直接の關係はない様であるが大局から見れば鶴見溪谷口右岸附近に發達した一貝塚と見るべきであらう。

(1) 玉川沿岸の貝塚、（内山九三郎氏）人類雜、九ノ九四（明治廿七年）
(2) 三條家陳列の石棒、石劍 考古界八—十二（明治四十三年）
(3) 朱鎗把手（卷頭圖）石ノ上一ノ一（大正五年）
(4) 下末吉探險記 石ノ上一ノ三（大正五年）
(5) 橘樹、都築兩郡の石器時代遺蹟遺物（下末吉と高田貝塚）（谷川磐雄）武相研究一（大正十一年）
(6) 採集紀行（加山宏三）武相研究一（大正十一年）
(7) 採集追想記（谷川磐雄氏）武相研究二ノ一（大正十四年）
(8) 多摩川右岸の先史遺蹟概觀（谷川磐雄氏）橘樹考古學會誌二ノ三（昭和七年）
(9) 神奈川縣橫濱市中區中村町稻荷山貝塚調査報告（池田、齋藤、佐藤）史前雜、七ノ一（昭和七年）

註 石ノ上雜誌なるものは大場磐雄氏主宰の廻覽雜誌である。現在の發行なし

第二節 遺跡

一、位置及地形

本遺跡は行政區劃上、横濱市鶴見區下末吉町にあり、從來より下末吉貝塚と稱せられるものは、下末吉町の住宅街より西方約一粁の臺上にあつて、俗稱小仙塚と稱せらる所のものである。尚、下末吉町附近には不動堂、寶泉寺、愛宕社等の小貝塚が多數あつて本遺跡と動もすれば混同される點も多い所から下末吉小仙塚貝塚と呼稱する事とした。

地形學的位置は、多摩丘陵の一支丘である鶴見支丘の突端に近い所にあつて、現東京灣には最も近い距離にある。遺跡附近は鶴見溪谷及び現東京灣兩方面の影響を受けて、狹長なる支谷に依り、錯雜たる地形を呈してゐる。卽ち、これを第一圖に就いて見れば、鶴見支丘の突端附近の、上末吉町方面より南方に三池支谷（假稱）が約一

横濱市鶴見區下末吉小仙塚貝塚

池上　啓介
大給　尹
土岐　仲雄

第一節　總記

一、緒言

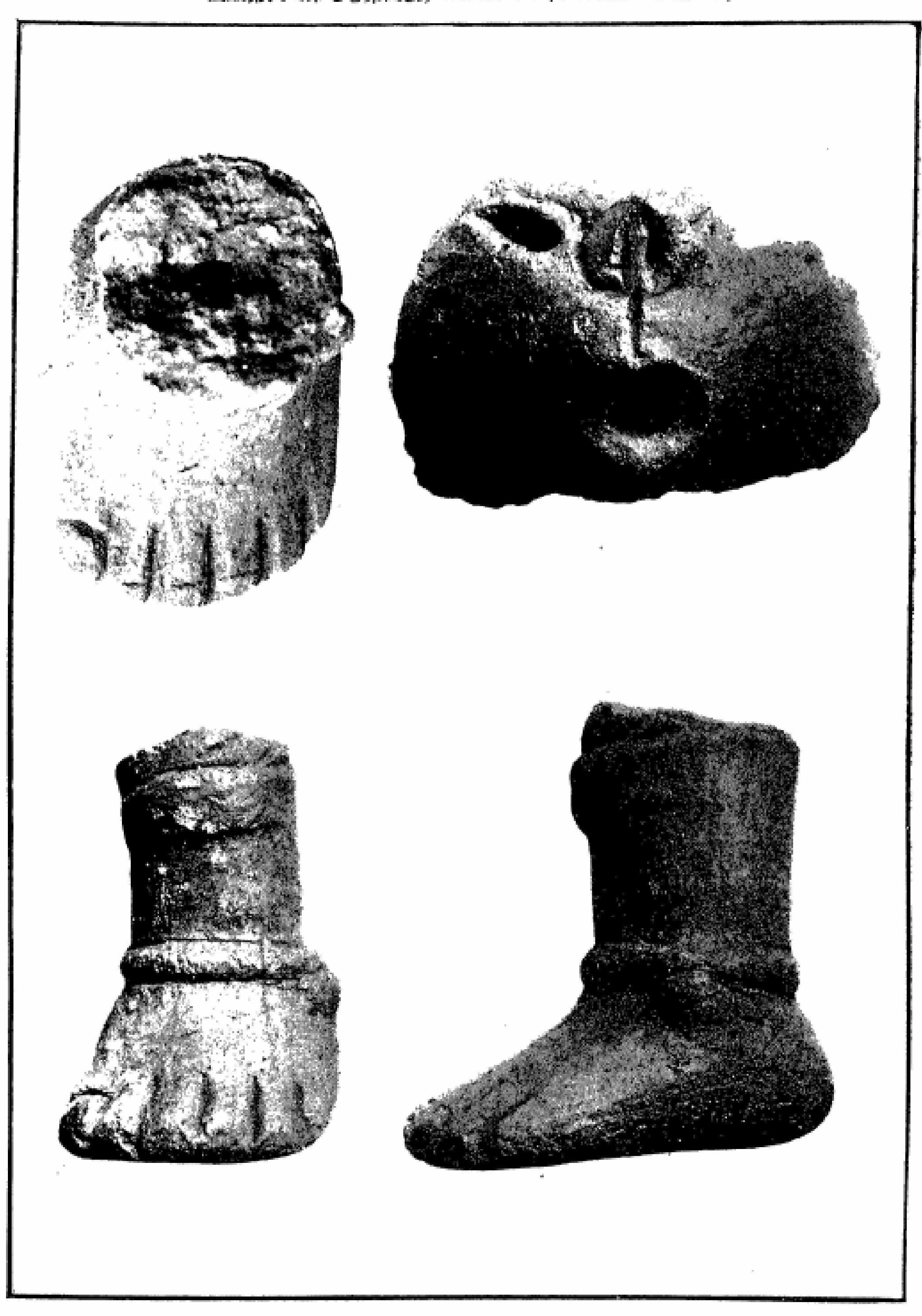
昭和十年三月十三日より三日間表記の貝塚の發掘調査を行つた。本貝塚は別項の如く、明治廿七年頃より東京人類學雜誌上に一部の報告がある如く、本遺跡の歴史を尋ねれば隨分古いものがある。特に大場磐雄氏の本遺跡に於ける業績は諸誌に散見する事が出來、又鶴見區生麥町に在住せられる池谷健次氏の如きは現在完全土器を數多御所有せられる程で、本貝塚の發掘は絶えざりしもの丶如くであつた。現在、後述する如く、貝塚に近接する三池と稱する貯水池は風景の美に富むを以て附近一帶を遊園地にする工事が行はれて居り、遺跡附近も亦早晩發掘の余地を失はれんとしてゐる。今回の發掘は貝塚の一部の發掘に過ぎないが、失はれんとする遺跡の發掘報告として止め度いと思ふ。

本貝塚に關する主要記錄

目次

史前學雜誌

第七卷　第四號



武藏國南多摩郡川口村楢原發見土偶（宮崎論文參照）
Tonfigur von Narabara, Tokio-Fu. (T. Miyazaki)

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關聯スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會ヲ行フ。臨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ賛成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

五、入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄
甲野勇　大山柏　樋口清之
山口隆一　池上啓介

會計　岡田毅一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關聯スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿提載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込アル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年七月二十日印刷　第七卷第四號
昭和十年七月二十五日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區神保町二丁目三十四　株式會社開明堂東京營業所　高田壬午郎

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第七卷　第四號

昭和十年七月發行

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

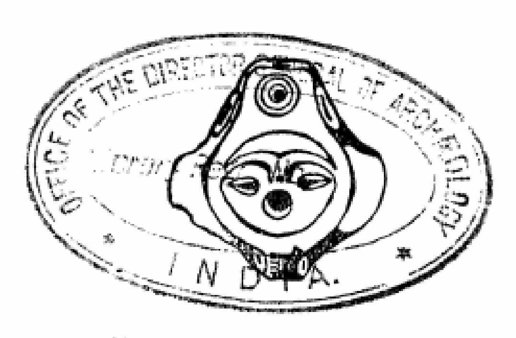
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

ORGAN DER JAPANISCHEN PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



7. BAND 5. HEFT

TOKIO

October 1935

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A. Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa   Jookei Shibata

Vorsitzender   Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi   Keisuke Ikegami

Isamu Kohno

Iwao Ooba   Sueo Sugiyama

Kingo Tazawa   Ryuichi Yamaguchi

INHALT

I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

TAFEL

3・4）や、安行式（眞福寺式拓影の8・10・11）と呼ばれるものが在り、更に奥羽式又は龜ヶ岡式に酷似する型式も相當に認められるのである。（拓影の7・9・12）殊に自分にとつて興味深く思ふのは、それ等の各型式が漸次推移變遷して行つた狀態が認められることで、曾て自分が奥羽式土器に對して試みた考察（本誌三卷五號及四卷一號參照）に、若干の裏書を加ふる事實を知り得ることである。然しこの問題に就いてはかゝる僅少な材料から云々するのは冒險であるから他日の機會に讓ることゝしよう。

少しく岐路に入つたが、上述の大岩版は恐らく前記土器型式中の奥羽式土器又はこれに接近する時期の土器と併行するものであらう。而して單にその形狀の大なるを誇りとするのみならず、前記高崎市内發見の岩版と共に、關東と東北との中間地帶に於ける石器時代の重要な一遺品として、注目せらるべきものであらうと思ふ。最後に今回の調査に當り種々御配慮を得た金井氏竝に本品所有者金子氏に對し、篤く感謝の意を捧げる次第である。

會報

入會

東京市京橋區京橋二ノ一一　吉川弘文館氏
滿洲國哈爾賓文物研究所内博物館　稻島一郎氏

轉居

東京市豐島區長崎南町一ノ一九四〇　森貞成氏
仙臺市北二番町八五　伊藤信雄氏
京都市左京區下鴨泉川町五二ノ二　小林行雄氏
東京市牛込區原町二ノ五五近岡博方　湊晨氏
大阪市東區高麗橋二丁目松下商店　松下胤信氏
東京市杉並區西荻窪一ノ二四　田澤金吾氏
滿洲國新京室町四丁目四番地金城アパート　曾崎三文氏
東京市澁谷區向山五八　北村嘉太郎氏
愛媛縣越智郡富田村日東製絲株式會社愛媛工場　片野貞明氏
東京市向島區吾嬬町西五ノ七二　稻生典太郎氏
橫濱市中區境ノ谷三〇番地　池田健夫氏

に見る如く長方形を呈し、表裏に若干の缺損があるのは、發掘當時の瑕である。全長八寸六分五厘、同幅中央部で五寸二分五



厘、同厚一寸六分を算し、一面には這種岩版に特有な所謂山字紋と一個の圓形凹所を有し、反面には渦卷文と工字文とを全面に刻してゐる。側面から見るとやゝ彎曲を示し且つ中央部が膨れてゐる。石質は軟質の凝灰岩らしく粗鬆で風化を受け且つ若干火中したかの如き痕跡が認められる。さて言ふ迄もなく岩版は土版に比してその發見數少なく、殊に關東地方に於いては僅少例であるが、更にかくの如き大形品の存在は

稀有といふべきで、曾て自分が考古學雜誌上に紹介した群馬縣高崎市大字石原發見の岩版の如き相當大形とはいへ、本品の約三分の二に達しない。その外東北地方發見の同種遺物に徵しても、現在知り得る範圍では何れもこれを凌駕するものはない。又同種遺品たる土版に就いて見ても、常陸稲田貝塚發見品や(永谷乙次郎氏藏)武藏眞福寺貝塚發見品(大山史前學研究所藏)等は、從來大形を以て知られてゐるが、前者は長さ五寸五分、幅四寸六分であり、後者は長さ五寸八分、幅四寸四分を算する。故に目下の所、本品は土版岩版を通じて最大のものと言ふことが出來ようと思ふ。

さて私は以上本品が形狀の大なる點に於いて他に優れたことを力說したが、なほ忘れることの出來ない點は、その表裏に刻まれた文樣に就いて再考する必要があらうと思ふ。即ちそれは奧羽式(又は龜ケ岡式)土器文樣の要素を濃厚に存してゐることであつて、これは出土遺跡の性質を考察する上からも興味ある事實といふべきであらう。この點から少し同所發見の土器を一瞥して置かう。圖示の拓影はその一部を擧げたものであるが、中には少なくとも數種類の型式が認められるであらう。即ち厚手式の後退型式と思はれるもの(拓影の1或は加曾利E式とも呼ばれる)から、薄手式に屬するもの丶中でも、堀之內式(拓影の2・



該遺跡は上野國内に於いても遺物の豊富な點に於いて屈指のもので、夙く柴田常惠氏によつて調査報告され、その他地方研究家の踏査も亦少くない。遺跡は新田郡の南利根川流域沖積層地に存する一小丘に存し、村社米岡神社以西一帶の桑畑がそれで、その間數戸の人家が介在してゐる。勿論遺物包含層でその面積は相當

群馬縣新田郡世良田村米岡發見の大岩版

に廣い。従來發見の遺物には、繩紋式土器及び土偶・土版・耳飾等の土製品を始め、石器に石鏃・石匙・打石斧・磨石斧・石劍・石皿・石錘等と玉類が認められ、それ等の遺物の主なものは、遺跡の一部に居住する前記金井氏と、米岡神社及び境町の中澤勝彦氏並に伊勢崎町相川之賀氏等に保藏せられてゐる。さてその中の珍物たる大岩版はもと金井氏の所有であつたが、今は同氏の令弟で金子家を嗣いだ金子規矩雄氏（世良田在住）の秘藏する所となつてゐる。發見の狀態は金井氏宅前の畑中地下二尺位の個所に單獨に横はつてゐたといふ。圖

越中人が見た佐渡、それはあまりに接近したものを感じて驚いた自分である。勿論佐渡と越後は近い。而て越後と越中とは山一つ彼方の國である。越中の土器と關東の土器との差程無い事は勿論であらう、然し此の土器を見るに、一つの流れを觀るのに何の不思議はあるだらうか。佐渡への道は何れも晴れた日、對岸を見得るといふ狀件にある、越後と能登が頭に來る。現在の交通を以て往古の文化侵入を考ふべきでないとするならば、能登との文化の接觸は何うだつたらうか。今ふと僕の頭に浮んだ事は、海流の如何に依て、必ずしも否定さるべきでは無いと思へる。



Fig. 2.　佐渡の繩紋式土器拓影

終りに此全然異つた二つの土器相は、我々に單純なる土器論を以ては解釋を爲し得ない事を教へて吳れる。此に就て「佐渡史苑」に谷川（大場）磐雄氏は此諸遺跡の地理性と遺物相の關係を、文化の波動的浸潤と說いて居る。

第一圖10は三宮貝塚發見、近藤嗣雄氏所藏の土器片である。黄色のやゝ粗雜な感じを與へるものであるが、その器形、模樣、繩紋等は陸奥式土器の樣式で、口緣部の點列は退化した陸奥式土器のそれである。

但し各所で三宮貝塚の遺物を見たが、陸奥式土器に屬すると思はれるものは此以外に無く、當遺跡の土器と此寫眞の土器とは、全くその關連性を認め得ない程度の間隔がある樣だ。

群馬縣新田郡世良田村米岡發見の大岩版

大場磐雄

本年八月偶然の機會から群馬縣下を踏査したが、その際新田郡世良田村大字米岡字本郷に石器時代遺跡を訪づれ、且つ附近の所藏家金井好造氏宅で種々發見遺物を拜見してゐる中、口繪(圖版第七)の如き大岩版の存在を知つたので、參考の爲めに御報告する。

分に見られる。但し當遺跡の土器は寫眞に見られる如き相ばかりで、他の相は見られなかつた。而して此遺物相は佐渡の南半

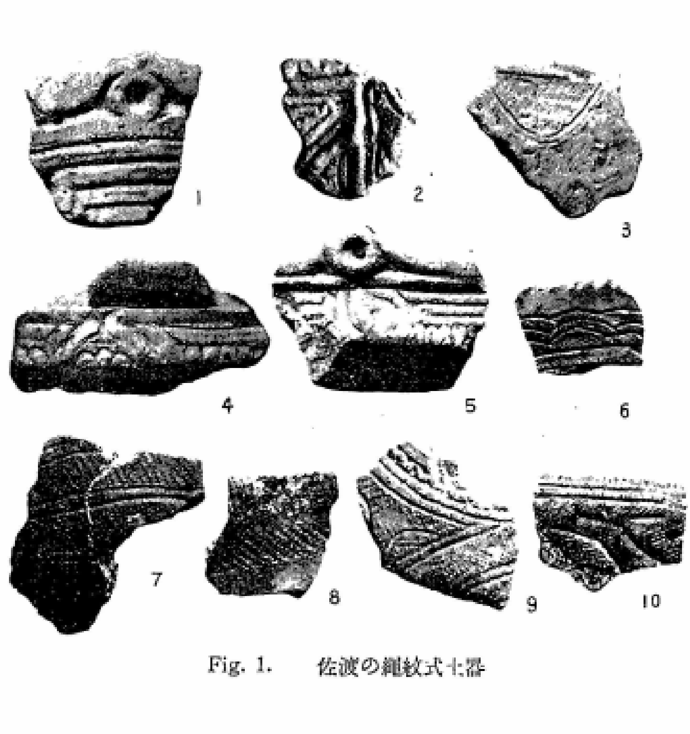


Fig. 1.　佐渡の縄紋式土器

に密にして、北に延びて國中平野の金澤村大字中興、城貝塚(縣農事試驗場佐渡分場構内)等にも出土する。

　其後清野博士が両津町福浦遺跡、及び畑野村三宮貝塚等を發掘して、其發掘せし土器より、佐渡土器の一端(日本石器時代人研究)が窺ひ得られる。福浦遺跡の土器は長者ケ平のそれとは一寸違ひ、此遺物相は両津を中心とした地域に多く、河崎村より加茂村に至る諸遺跡は此に屬する樣である。大體に於いて厚手、薄手なる語では説明、概念を得ない土器で、確かに長者ケ平遺跡の土器の退化型と思はれる土器があるかと思ふと、磨消、沈紋の手法で縄紋を美化した土器も存するのである。而して此等は時間的に差はあつたとは思へないものである。

　第一圖(6—9)は長者ケ平遺跡とは全然對象的位置なる、東北方、内海府村セ=ノ濱洞窟より出土せしものである。僕は實際に當洞窟を見る暇なく、聞く所に依れば、波打際に近い洞窟と言へば大袈裟で一寸岩の影といふ小遺跡であるらしい。此遺物は両津町の藤村太郎氏宅にて實見した。何れの土器片も石灰水が浸み込み、その硬質を増して居た。大體彌生式土器と縄紋式土器とが半々で、割合に新らしいものに屬する彌生式土器もあつたが、古い方に屬するものもある。卽ち拓本の中の口縁部がそれである(第二圖1)。

　第一圖6縄紋式土器は所謂薄手式土器で、沈紋、模樣構成、器形等その特徵を具備す。第二圖の拓本(2)(3)は朱を塗布した痕跡あり。

に研磨され、その兩面より中心に向つて穿孔せられてゐるが、その口徑の一方は幅廣く約七粍に達し、他方は狹く四粍程である。（大給）

五、石　臼

第四圖の石臼は上部の直徑一九糎、胴部中央直徑二三糎、底部直徑一七・五糎、高さ一三・五糎あり、外觀は稍々太鼓の胴の如く、中央が膨める圓柱形であるが、上部に深さ八・五糎、口徑一五糎の半球形の凹みを有してゐる。底面は平坦であるが、その中央に近く、極く淺い凹みがある。石材は砂岩質、表面は石皿に見る如き粗面である。前者同様、戸畑氏所藏品にして、那須郡川西町余瀬にて發見せりとの事である。（大給）

10 cm

Fig. 4　石　　臼

佐渡の縄紋式土器資料

湊　　晨

僕が佐渡に遊んだのは、今より二年前の昭和八年の事、暑いさ中をルックサックを背いで唯一人、五日に渡り、採集家、蒐集家、研究家等を歴訪した。次の寫眞は、佐渡郡金澤村近藤福雄氏の撮影になり、僕の親しく實見せし土器の一部である。樂しかりし當時の思ひ出を、此資料欄の一角を借りて、寫眞は、佐渡の縄紋式土器の中より、好んで取り上げたもので、その遺物相の全然異つた事を注目したからに外ならぬ。

第一圖（1—5）は長者ケ平遺跡とて、佐渡の西南方、本土とは最近距離の地點なる小木町字宿根木の一寸した高臺にある遺跡で、僕は當遺跡の遺物を新町、本間周敬氏に依り、新町尋常小學校所藏になるものを見た。見た感じは、對岸の糸魚川の長者屋敷遺跡や氷見、朝日貝塚其他諸遺跡出土の、所謂、北陸に盛行する厚手式土器で、器形、模樣の構成、燒成、色等全く同じい。當遺跡より土器は相當出土し、各蒐集家の藏を賑して、一時は佐渡の土器を代表した觀を呈し、佐渡土器論の先驅をなした鳥居博士の報告（有史以前の跡を尋ねて）には此傾向が多

ものである。底面には第二圖の拓影に見る如き、直線を組合せる沈刻があるが、質物を見る前に、某氏から一八三八年と年號が刻られてある印と聞いて、何んな品物かと思つてゐたが、この拓木をとり乍ら成程と感心したエピソードがある。（大給）

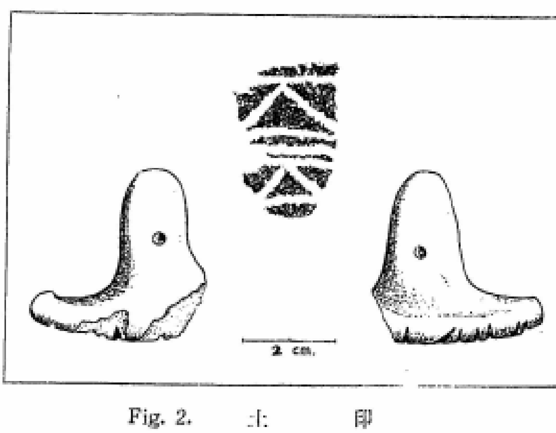


Fig. 2.　土　　印

三、那須郡金田村乙連澤長者平出土玉

第三圖下方に圖示せる如く、扁平なる、赤褐色の光澤ある硬質の自然石の一方に稍々片寄つて、兩面より中心に向つて穿孔せられた勾玉である。最大長二九粍、最大幅二〇粍、最厚部で一〇粍を計りえた。穿孔部の斷面は滑かな漏斗狀を爲さず、幾分段階狀を呈してゐる。

これは、次に記す平澤川土の玉と共に、戸畑氏の所藏にかゝるものである。（大給）

四、那須郡野崎村平澤出土玉

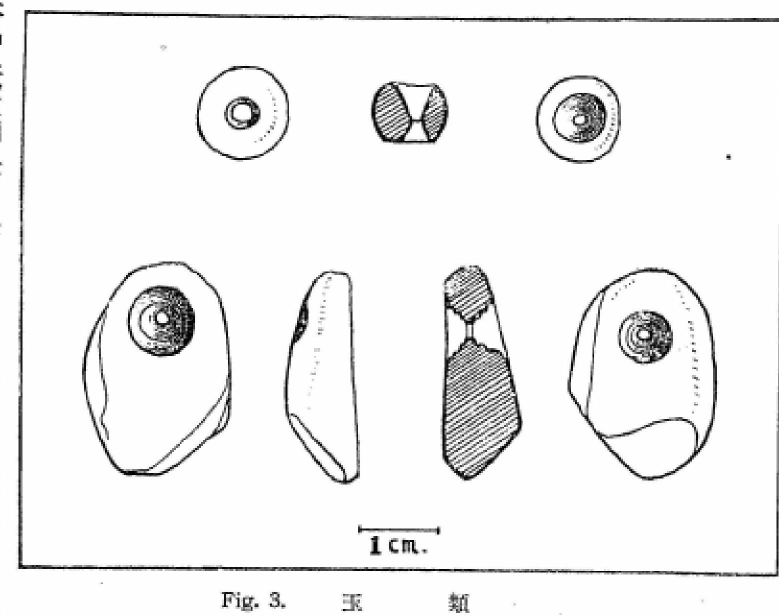


Fig. 3.　玉　　類

本品は第三圖上方に示せる如く、經約一二粍、厚さ八粍許りの綠色玉質製の丸玉であつて、表面は稍々上下に扁平なる球形

期縄文式文化に相對するものと考へられ、而も中期の後半に於ける一遺蹟と憶測せられるものである。

本遺蹟は頗る廣範圍に亙り、勝坂式土器を主體として他に石製品、玉類等豐富な遺物を出土してゐる。勝坂式に伴ふ土偶は甚だ數少ないものとせられ今日吾人等の腦裡に一般的に影ずるものは信州、岩代兩方面に發見せられてゐるものである。本遺蹟に於いて出土を見た事は、少なくとも、私には地域的に見て興味深く感じたのであつた。



Fig. 1. 長者平遺蹟の土偶

土偶は圖示する如く頭部のみであつて、最長五糎半あり、頸を不自然につき出し、顔面が斜上方に向いた特異な形態のものである。これが完形の場合は、頗る大形のものであつた事が想像せられる。

顔面の表現は、一見猿を想はしめるものがあり、頗る寫實的である。即ち、眉丘及び鼻の表現は一連の隆起によつて効果を擧げ、特に鼻孔が面白く表現され、眼は關東地方の顔面把手にあるもの、口は圓形で咽喉に向つた貫通孔によつて、ボカンと表現せられてゐる點等は一種の懐しみさへ感ずる。兎も角も、關東地方北方に於ける勝坂式系統に屬する本遺跡に唯一個ではあるが、此種の遺物を見た事は、文化上特筆すべきものと考へられ、又、本遺跡の研究上の價値を增大するものと信ずる。遺物は金田村羽田小學校の所藏である。(池上)

二、土　印

第二圖に圖示せる土印は、那須郡金田村乙連澤より發見せられ、戸畑氏の所藏されるものである。一部破損してゐるが、底面は長い楕圓形を爲してゐたものゝ如く、その上部に高さ三八粍程の把手が作られてゐる。把手部の斷面は圓形に近い楕圓形であつて、その稍〻中央に兩面より穿たれた孔を有してゐる。全體赤味を帶べる土製であつて、質は非常に砂を混えた粗雜な

等の名稱を與へてゐる等我國と御同様に繁雜たるものがあり、更に混沌としてゐる様である。

濱名湖畔發見の有溝石斧

松本吉治

圖に示す有溝石斧は靜岡縣新居町字中之鄕から最近發見せられたものである。今これは鷲津町の柴田寛氏の藏品となつてゐる。全長二〇・二糎あり、硬度の可成高い重量ある石材で作られてゐる。この石斧の側面形態を朝鮮、九州、中國及び近畿地方等に發見せられた類例に比して見ると、頭部より有溝部、並に刄部へ移行するカーブが著しく緩和せられてゐること

0　5cm
濱名湖畔發見の有溝石斧

に注目せられる。特に近江朝日村發見のものに最も好く似た形態を備へてゐる。これは這種石斧の東進を暗示するものであらう。尙有溝石斧は梅原、大場氏等によつて彌生式系統に屬する遺跡より發見せられてゐることが報告せられてゐる。中之鄕出土のものは單獨に發見せられたのであつて、附近に古墳及び祝部式土器が發見せられるのみで、未だ彌生式土器は發見されて居らない。故に濱名湖畔に於ては祝部式土器使用時代の或る期間に於てこの有溝石斧が用ひられたことの推定が可能となる。

栃木縣那須野原の石器時代資料

池上啓介
大給尹

本年五月本研究所員一同にて栃木縣西那須野方面の石器時代遺跡の發掘調査を約三週間に亙つて行つた。此の報告は最近發表の豫定になつてゐるが、此の發掘の餘暇を利用して、同地の研究家並に各種の遺蹟を訪問した。此所に記述する資料は、此の際吾人等が見學したものゝほんの一部に過ぎないが、石器時代の那須野原を知る一資料たる事は疑へない。調査研究に際し、資料の提供と發表の自由を與へて下さつた戸畑逕治氏並に平山助右衞門、澁井、蓮池佼の諸氏の御厚意を感謝致し度い。

一、栃木縣那須郡金田村乙連澤長者平（オトレザワチョウジャダイラ）遺蹟の土偶

表記の石器時代遺蹟に就ては、他日細述する事にするが、本遺蹟は、關東地方の貝塚に於ける編年學的見地から見れば、中

幅の廣いもの等種々あるが、有柄が多い。最大のものは長さ十二糎もある。第一圖6はColchester 出土のもので、三角形のもので（無柄）長さ十糎もある頗る大形のものである。（第一圖 1 4 9 10 Addison　第二圖5 Mallett's Bay　19 Highgate）

石鏃（六個）何れのも無柄三角形のものが多い。中一個（圖5）は石錐様の形をしたもので、少しく異形である。然し所謂アメリカ式石鏃と云はるゝ特殊の柄あるものは見られなかつた。（第二圖 1 2 14 Essex 9 10 15 Addison）

石小刀（Scraper or Knife）二個

二個共に小形楕圓形にして一個は有柄であり、細いレトシエを行つてゐる。寧ろ形態の上からは石鏃の異形品とも云ふべきものである。（長さ三糎半 青綠色の美麗なるもの。）（第二圖 12—13 Vermont）

石錐（一個）六糎半の此の種のものとしては頗る大形のものである、寄贈目錄によるとKnife or Scraperとしてあるが、形態分類上、石錐とした方がよい樣に思ふ。（第二圖17 Essex）

石製垂飾（Pendant）二個、一個は木葉形のもの（長さ八糎、幅六糎、厚さ五粍）他の一個は四角形（長さ六糎、幅六糎、厚さ六粍）のもので、前者は一端に、後者は中央部に兩面より孔が穿たれてゐる。（第一圖 2 Highgate 3 Colchester）

以上はバーモンド州の各地の遺物であるが、此等の他、アメリカ西部のオレゴン州の石器六點がある。石鏃一個（第二圖16）石鏃六個（第二圖3 7）等がある。

バーモンド州とオレゴン州はかけはなれた二地方ではあるが

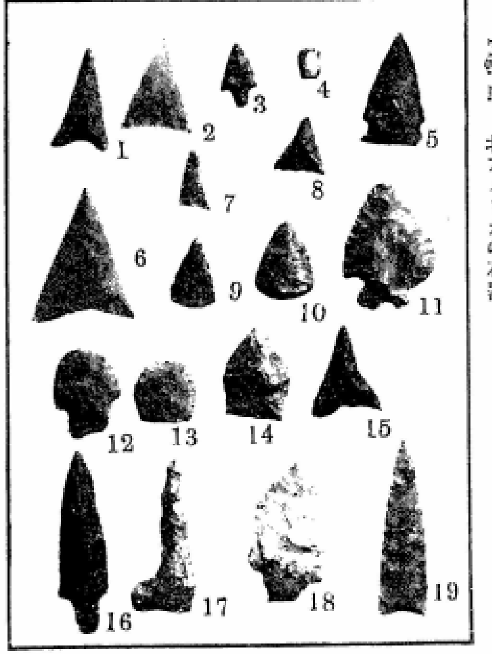


Fig. 2. 北アメリカの石器

私は此の方面に就いては全く未知の所であるが、寄贈を受けた遺物中では、地方的な特徴を認められない。又寄贈目錄によれば、此等の簡單な說明が附されてゐるが、形態の上では何等の差異のないものを、Knife とし或ものは Arrow Point Speat

か。

・特にこの部分にツマミを附する必要あつたか。

・製作者が腕が悪く、この抵抗力弱き部分に、何等思慮なく附着けてしまつたものか。

・それとも亦、この横型を絶對に必要としたが、他にその型を作る可き材料片が無く、餘儀なくこの縦型材料を以て横型品を製作したか。

など、種々考へられるのである。

若し他にこの形式の斧柄石小刀の類例あらば御教示賜はり度いものである。

北米バーモンド大學寄贈の石器

池上啓介

昭和九年十一月、バーモンド大學教授 H. F. Perkins 氏が史前學研究所を訪問せられた際、同氏を介して、遺物交換を行つた處、バーモンド大學より石器土器の寄贈を受けたから、次に此等の石器に就いて御紹介をする。

遺跡の大部は北米東北部のバーモンド州フヂソン縣のチャプレン湖の東岸に位する Highate. Colchester. Vergennes. Addison. Essex 等の諸遺跡のものが含まれてゐる。

遺物は磨製石斧、石鎗（石鉆）、石鏃、石錐、垂飾 (Pendant) 及び土器小破片五個及び、アメリカインデアンの土俗品數個が加へられてゐる。

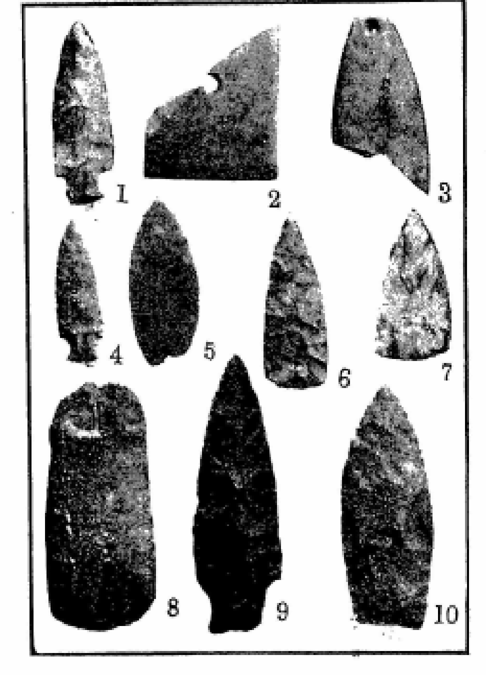


Fig. 1. 北アメリカの石器

磨製石斧（一個）短冊形のもので、青緑色の比較的硬質、一面は扁平、一面は膨みのある蒲鉾形の石斧である、長さ一〇・五糎、幅四・五糎バーモンド Vergennes の發見。（第一圖8）

石槍(石鉆)(十個)、有柄、無柄、大形、小形、細長いもの、

胴部厚さ二糎、焼成比較的不良。

第一圖Bの土偶は、貝塚所有者の故原田靜作氏の寄贈によるもので、貝塚表面にて採集せられたものの由である。此土偶は頗る小形であり、粗雜な中にも良く木兎形土偶の特徴を表現してる點は敬服の他はない。卽ち、顔面の表現と云ひ、手、脚部の大膽な線の表現は頗る面白い。乳部は二個の突起で表現す。土偶全體が扁平であり、良質の粘土にて製作されてゐる。全長七糎半、厚さ一糎半。

石小刀着柄異例

武藤鐵城

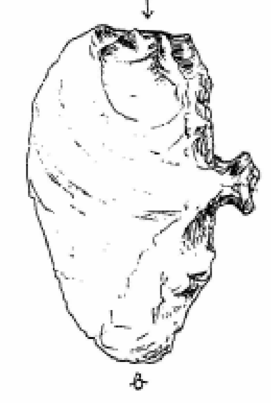
昭和八年十一月、秋田縣仙北郡西明寺村八津部落の安樂寺下の道路を、救農土木で改修中、龜ヶ岡式土器系統の遺跡が現はれたこと同地小學校長小松恕助先生から御知らせがあり、發掘踏査してあつた。

別段特異のこともなかつたが、唯この二つの石小刀着柄形式が稀らしいと思つた。

共に左利き、片鑢刃のものであるが、そのツマミが一般に見る樣に、コブ卽ち原料石のストライキング・サークルの面の附

着いてゐる部分には附いてゐないで、裂けて行つた側面に附着いてゐるのである。(矢の向つた部分はコブ)。

始めその一箇を手にした時、或は一旦厚いコブの部分にツマミを附けたが折れたので、餘儀なく薄いけれども側面に附着けたものかとも思つたが、直ぐその近くの地點から同じ形式のものが又出て來たので、あながち再度の着柄とも思はれなくなつた。



然も實際兩者のコブの部分を見るに、明白に折れた痕跡はなく、風化した原料石の打撃面も其儘に殘してゐるのである。

この小刀が何故に、一般に見る如く厚味の打撃部分に着柄せず、薄くて甚だ不安な部分に特にツマミを附けたものであらう

資　料

眞福寺貝塚の土偶二例

池上啓介

第一圖Aの土偶は、昭和七年十月、埼玉縣下眞福寺貝塚で發掘したものである。發掘地點は甲野勇氏の報告（史前學會小報第二號、眞福寺貝塚調査報告）のA點の西北方約二十米の所であつて、貝層のない有機黑色土がローム層中に約二米の直徑で漏斗狀に約一米の深さに落込んでた所の燒土の中から出土したものである。土偶は宛も島田髷の如く髙髻的なものである。顏面は目、鼻、口、顎等が判然とし、殊に鼻孔が二個の孔によつて、表現されてゐる點は、頗る面白い。而して頭部以下には四肢なく、乳部、陰部等の表現はなく、甚だ簡略である、唯、胴部の兩面に右卷の渦卷があり、その下部に三條の沈刻がある。胴部だけで見ると土版的な感が多分にする。

私は此種の例品を知らない。少なくとも、澤山土偶を出土した眞福寺貝塚では唯一のものと思ふ。全長九糎半、顏面幅四糎、

B　A

眞福寺貝塚土偶二例

文化植物と認めて居る様である。又デンマークの貝塚文化には、未だ文化植物を見て居らない。兎に角、マグレモーセと云ひ、貝塚文化としても、緯度高く、佛國から見れば、より北的の點は注目に價する。これ等に就ては、更に將來、史前農耕を研究するの日、再說する。

（105）史前文化植物に就ては、前揭、**Maurizio**; **Hoops**; **Reinhardt**; 等の外、**M. Much**; Vorgeschichtliche Nähr—und Nutzpflanzen Europas. (Mitt. d. Anthr. Gesell. Wien. Bd. XXXVIII. 1908. S. 195—227): **V. Hehn**; Kulturpflanzen und Haustiere. 8. a.l. 1911. 等の專攻書參照。又、これ等の和名は、市村氏、動植物学典、による。

（106）**山內清男**、「石器時代にも稻あり」、人類、四〇の五參照。

（107）拙稿、「史前生業研究序說」本誌、六の二、第七〇項、新石文化の食料、參照。

（108）**小倉清太郎**博士、首狩人種の打診。第一五二項、參照。又同氏の撮影せられた、映畫にはこの實際をよく寫されて居る。

（109）前揭、**藤巻**、**有本兩氏**、S. 93. 參照。又著者にも、屢々馬、牛に食鹽を與へ、彼れ等が悅んで喰べる所を體驗して居る。

（110）前揭、**M. Hörnes**; I. S. 151. 參照。

（111）本例は **K. Weule**; Die Urgesellschaft und ihre Lebensfürsorge. 1912. S. 31-33. Abb. 9. による。これを說明すると、先づ掘棒（圖中伏臥の下に見へる）で穴を穿ち、水線に達すると、中空な吸管を挿入吸飮し（b圖）、口中よりa圖に見へる駝鳥卵の容器に入れる。又吸管端は草を卷き付け、濾過裝置がしてある（c圖）。

（112）前揭、（11）の **Weule**; S. 31. 參照。この爪の名が明示せられてない。又同書によれば、一人一日約二十個を食するとのことである。

（113）茶、コーヒーに就ては、**塚本又喜氏**、飮料篇、明治二十八年、に來歷が述べられ、茶は支那の原產、我國では有史以降の樣に述べられて居る。コーヒーはエチオピア原產にて新しき樣に述べられて居る。又前揭、**Reinhardt**; Hf. 1. S. 455 にも同樣、コーヒーは西紀一四四〇年に記錄があるとのことで、史前關係の有無は只今不明である。

（114）前揭、**Reinhardt**. Hf. 1. S. 500. による。但しアメリカの史前は、コロンブス發見まで下るから、注意を要する。又同書は何んに基き、かく述べて居るのか、其出典も揭出してはない。

（115）酒の來歷に就ては、前揭、**塚本氏**に詳である。同書には、我が紀記に述ぶる所より始められ、外國に於ても、起源は遠く西紀以前に遡るとて、麥酒、葡萄酒等に迄て述べられて居る。

（97） 奥ウェッダの掘棒使用に就ては、前掲、M. Hoernes; I. S. 509. にある。又掘り棒の概念に就ては、拙著、神奈川縣下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告、S. 31—、參照。

（98） 榮養素としては、本文記述の主要々素の外、尿分或は、無機鹽類と概稱せらるゝ、多くの榮養素があり、これに就ては、七に觸れて居る。

（99） 果實を分類して、漿果、仁果、核果、乾果にすることは、前掲、註、（19）の3、藤巻、有本兩氏、S. 242. に依る。

（100） スキス杙上住居に於て、新石・青銅兩文化相關々係の一例に就ては、H. Reinerth; Pfahlbauten am Bodensee. 1922. にある。同書、S. 34. Taf. 6. U. S. 35. Taf. 7. にボーテン湖に於ける兩者の分布一般圖があり、對照し得る。又同書、S. 13. Taf. 1. S. 17. Abb. 1. には個々の遺跡に於ける兩者の關係圖がある。

（101） 前掲、A. Maurizio; S. 445—455. Uebersicht der Sammelerpflanzen. 參照。但し本表には獨り史前時代に止まらず、自然民、文化民、史前時代（Vorgeschichtliche Zeitne）、一九一四—一八年の空腹時代（歐洲大戰間を指す）の四時代を集めてあるが、史前時代に就ても、出典者名はあるが、個々の出土地名がない。又史前時代とあつて其中の文化階梯は解らない。

（102） 是川の研究は本誌、二の四、是川研究號參照。又同地出土、「トチノミ」は前掲、（90）參照。眞福寺泥炭文化層に就ては未だ發表してない。

（103） 「マグダレニアン」に於ける舊石浮彫（モルチエはソリユートレアン）で、大麥と認めたものに就て、發見者 Nelli の報告は見て居らないが、J. Hoops; Waldbäume und Kulturpflanzen. 1905. S. 277— に、これを詳述して居る。Hoops も Nelli の共働者たる Ed. Piette も、強調はして居らないが、否定はしてない。大麥が寒氣に耐へ得る點は、認めらるゝ（前掲、（93）參照）。發見地が如何に南佛ピレニー地方であるにしても、馴鹿の棲んだ氷河環境に、果して溫帶農耕が生れたかは、大なる疑問である。文化の上からも未だ尙、舊石文化を脫せず、且つ發見は、浮彫で實物ではない。大麥それ自身なればよいが、浮彫を大麥也とすることにも、蓋然性に乏しい。又他には實物の發見さへ聞知しないから、尙疑いが深まる。前掲 Hörnes I. S. 545. は明確に否定し、H. Obermaier; Der Mensch der Vorzeit. S. 444. も亦不確實として居る。

（104） 中石文化に於ける、最も古く、舊石文化の遺承と認めらるゝ「アジリアン」の代表遺跡たる Mas d'Azil よりピヘトは多くの果核と共に、小麥等を發見して居るけれども、其後、E. Cartailhac; H. Breuil 等と調査したオーバーマイヤーは、其の仕業として否定して居る。前掲、同氏、S. 215. 參照。又北歐の中石文化で文化上中石中期に當るマグレモージアンには未だ文化植物の發見はない。前掲、拙著、マグレモージアン概說（本誌、三の二・三號）參照。所が中期後期に屬するカンピニアン（Campignien）の一土器片には、大麥（Gerst）の粒子の附着したものが發見せられた。M. Hörnes; Das Campignien. （Globus. Bd. LXXXIII. 1903）S. 143. これに對し、ヘルネスも、前掲、フープス S. 281. も

つて居らない。只酒は必ずしも醸母の作用のみによらず、バクテリアによつて醸造し得るから、天然に出來ることもあり得る。又原史文化には既に見られ、(115)簡易に出來もする由であるから、或は史前文化まで遡し得るかも知れないが、果してこれを肯定し得るだけの、資料に出會することは困難と考へるが、兎に角、心得てだけは置くことゝ考へる。

（未　完）

（90）　青森縣是川出土の栃の實に就て、アメリカ、インヂアンが食料に供することを、本誌、五の五、餘白録に書いたら、我國でも食用にすることを、本誌、六の一、餘白録、鵜川氏が報告せられて居る。又今日のスカンジナビアは比較的寒く、植物にも惠まれて居らないから、栽培する外、山から熊苺（Raspberry＝Himbeere）を取つて食用にして居る。この熊苺に就ては、**藤原咲平**博士「氣象から見た人間生活の種々相」（科學と人間生活）第三八項に面白く書かれて居る。

（91）　註(27)に於て、「ジャガイモ」「マニオーク」は南米原產とし、「サツマイモ」は單に南暖產として置いたが、今回、前揭の **L. Reinhardt**: Bd. IV. Hf. I. S. 360. に甘藷も南米原產とあるから、これも亦南米原產に補入する。

（92）　前揭、**F. Ratzel** I. S. 536. Fig. による。又この和名は直譯したに過ぎない。

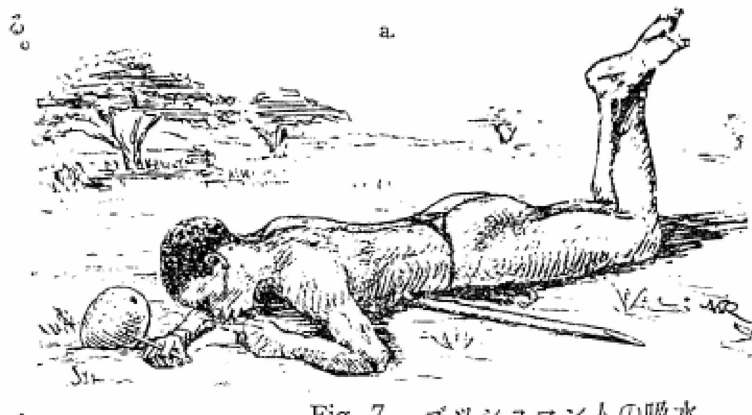
（93）　**井上長太郎**氏、續人生と地理。S. 112. に「ソバ」（蕎麥）のみが、生育期間短少なる故、米國では北緯七十度を越へて、栽培せられて居る。又同氏、人生と地理。S. 283. に依れば、大麥及びライ麥も亦又可なり寒氣に堪へ、ライ麥は通常北緯六十四度まで、大麥は北緯六十八度までも栽培せらるゝ。

（94）　史前文化の北限分布に就ては、未だ私も發表はしたことがない。又これに就ての論說も未だ氣付いて居らない。こゝでは單に北限線の一例である、ノルウエーの東北端に近い、パスウヰッツ河畔住居跡、及びシベリア、コルワ河畔、ボルシエセメルスカヤの櫛目土器系の二遺跡（拙稿、櫛目土器、本誌、第一の五號、S. 405. 參照）を例示するに止め、改めて發表を期する。

（95）　農耕始原の研究に就ても、私として未だ研究發表はして居らない。將來原始農耕の研究の際まで總てを讓る。

（96）　オーストラリア土人のことに就ては、前揭、**M. Hoernes**. I. S. 509. に印度セーロン島、ウエッダの食物に就ての所で、奧ウエッダは、本文のオーストラリア土人の様な、農耕始原的の行爲は、未だないとの比較に出されたものである。從つて何地方のオーストラリア土人であるか、又其出典は何に基くか等は、全く示されてない。

にも關係があるが、こゝでは、單に食鹽に對し、注意をして置くに止める。



a.

b.　c.

Fig. 7. ブッシュマン人の吸水

a. 吸飲狀態（傍に掘棒と卵殻水入あり）
b. 地下斷面
c. 吸水管末端
(nach K. Weule)

八、飲　料

水分が動物に必要なことは、申すまでもない。而して水を其儘飲むことが、最も簡單である。然し水の少ない所では、これを充實する爲に、何等か文化工作が行はれてくる。ブッシュマン族の吸飲方法（第七圖）の如きは、面白き一例である。[111] 井戸の如きが何時より始まつたか、未だ詳かにはして居らないが、兎に角、史前住居研究に當つては、この用水位置に就ては、常に注意すべき一要件である。

水の外、果實中には水分豊富なものも多い。瓜の一種でブッシユマン族の主要な飲料となつて居るのもある。[112] 更に嗜好飲料とでも云ふ可きものに、茶、コーヒー、コヽア等があり、[113] コヽアはアメリカ史前時代から存したとのことであるが、[114] 前二者が、果して史前文化まで遡り得るものか、只今全く不明である。

尚一言附加するのは、酒である。このアルコール飲料が果して史前にまで遡る可きか、否かも、著者は全く知

反省すべきことである。植物其儘の姿で勞せずして出土せしめようとするが如きは、餘りに蟲のよい註文である。特に我國の如きは、人工遺物出土の豐富なだけ、それだけ植物質出土に對する要求も高くなる。然るに我國に於ては、朽腐性に富むに比例して出土は稀である。それ故この困難な事狀に對しても、一增の研究と努力とを必要とするのであつて、必ずやこれに報いらるゝものもあると信ずる。而して一方に出土に努力すると同時に、他方には豫め植物質に對する認識を高め、食料研究の促進を計り、文化究明に對する一方面をより開拓せねばならない。

七、無生物質食料

哺乳類等に於ける營養素は、前々回（本誌、六の五）に其四大要素に就て概説したが(第三節)、これ等の有機化合物の外、尚灰分と稱せらるゝ無機化合物がある。其中にはカルシューム、燐、鹽分、鐵、沃素、銅其他がある。これ等は殆んど動植物質中に包含せらるゝから、通常直接元素の形からは攝取はせられない。只食鹽だけが、問題となれば成り得る。

この食鹽に就て心得可き原則は、一般に草食獸はより食鹽を要求するが、肉食獸はより要求しない。これは植物質中に少なく、動物性食料に多いからである。[一〇] そこで人類にあつても、其主食料の性質に從つて要求に高下が生ずる。食鹽なるものは、岩鹽の如く、其儘の形でも存在するが、多くが動物質中に含有せらるゝから、史前獵漁者の如きは、特別にこれが要求量が高いとも考へられない。然し純然たる農者或は所謂菜食者には、要求量が高くともよい。現に今日でも農家の食物には鹽分の多いのが一般である。[一一] そうなると、農耕以後に、この問題がより大きくなる。但し未開土俗には、鹽を知らないものもある。又他の食料問題としては、後述する食料の貯藏

も色々の要件があり、奥ウエッダの掘り棒如き農耕具が農耕に先行したり、或はオーストラリア土人の如く、根の幾分を殘して次の收獲に備へる如き、又ボルネヲのダイヤ族の掘り棒農耕の如きは、土地に穿孔蒔種するのみで、土地を耕起するのではない等、[四] 原始農耕には甚だ簡易なものがあり又必すしも穀類が先行するものでもない。今日の進歩した農耕を見た目では、標準尺高きに失する。これ等に就ては更に將來愚見開陳の機もあるとは思ふが、取り敢へず其一端を述べて置く。

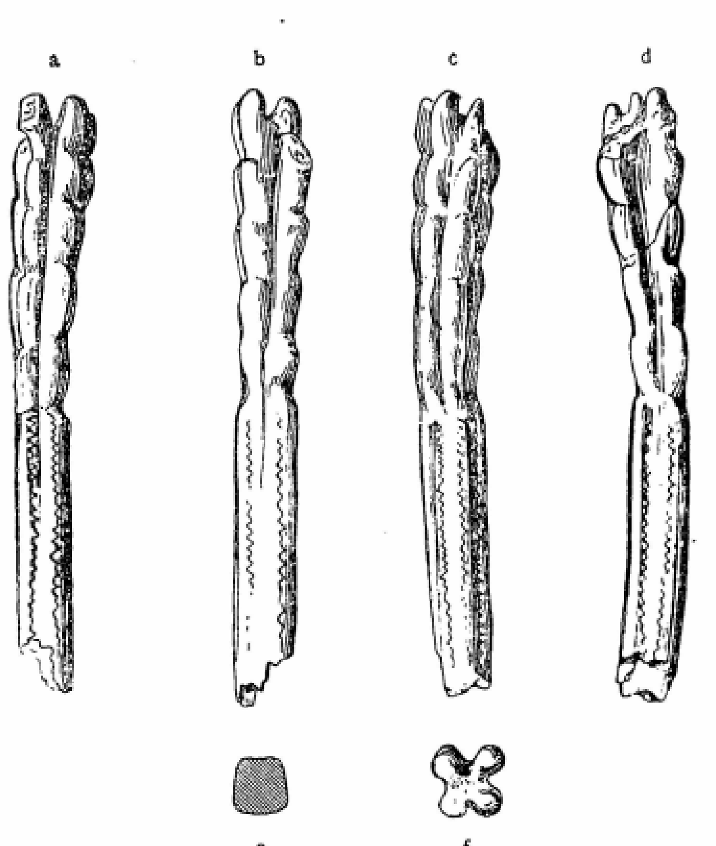


Fig. 6.　所謂穀類の穗と稱せらるゝ歐洲舊石藝術作品
（佛、Lourdes 縣、Espélugues 洞窟出土）（nach J. Hoops）

六、植物質食料小括

植物質食料の研究は、動物質とは異り、現實資料により乏しいだけ、如何にも假空の研究の様にも見られるが、根本的に顧る可きものがある。原則として人類が雜食性である以上、動物質と相對し、重要なる點は、動かし得ざる所である。して見れば何とかして研究を進めねばならぬ問題である。且つは現在の發掘調査なるものが、果して今日の科學として最善を盡して居るか否かも、更に史前學者として大に

「トチ」「クルミ」「クリ」等を見る外、他の多くが尚未決定であり、埼玉縣眞福寺泥炭文化層の植物も亦、同様であり[102]、近く何とかして研究を委囑したいと考へて居るから、暫く猶豫を御願し、將來改めて研究を期して居る。

五、食用文化植物

文化植物として、其全般から見れば、獨り食用に止まらず、他にもあるけれども、食用が主體をなし、且つこれが先行するものと考へる。然しながら今日尚其始原は未だ明でない。歐洲の如きでは、舊石藝術よりして早くも舊石始原論さへあるが疑はしい（第六圖參照）[103]。中石文化に農耕始原が存したかも知れないが[104]、其確たるものは、已述の如く新石文化である。而して歐洲では大麥（Gerste）小麥（Weizen）キビ（Hirse）ソラマメ（Erbse）其他多くあるが[105]。一面から見れば、多きに失する感が深いと共に、始原のより遡り得べきことゝそれが普遍化性の多いことゝを想はしむるが、こゝではこれ以上には言及しない。

我縄紋式文化に於ては、今日尚明確な文化植物の發見は殆んどない。僅に山内氏の陸前桝形囲（カコイ）貝塚出土土器底に、稻の壓痕を發見せられたに過ぎない[106]。これとて同氏に依れば、所謂彌生式的傾向の手法を加味せられたものとのことである。それ故今日では果して無かつたと見可きか、或は發見し得ないのか、尚將來に待つ可きものががある。今日の發見狀態で文化植物の存在を否定するは尚早と考へる。而して否定なるものは、遠く明日の發見までも否定することを覺悟の上で行はねばならない。

尚この食用文化植物は既に發表した如く[107]、其多くが長期保存可能で、特に穀類（Getreide）が然りであり、その消費には定食性が附隨發生する。それ故文化上の著しい發展性も、こうした食料安定からも生れ出づる。只食料文化植物出現の如きを、餘りに高等文化視することも亦、認識を缺く恐れが多い。前述の如く野生種の蒐集に

が進展し、植物に對する認識も高上したものと考へらるゝ。

四、史前遺存植物

前述した如く、史前植物は通常朽腐して遺存しない。從つて現實に遺存する資料は、寧ろ特別とすべきであり、甚だ貧弱を免れない。この點が史前植物研究の不振ともなり、認識不良に導く結果ともなる。其内でも食用部分の如きは、殼、種子等が殘れば殘り得ると云ふ有り樣で、葉、莖、根の如きは、通常は殘り得ない。只最近に於ける科學の進歩は、限定的ではあるが花粉分析法(Pollenanariese)の如き、檢出法が考出せられ、又化學的分析法も考慮せられてきたから、近き將來に於ては、從來の肉眼的發見の範圍をより增大せしめることゝ信ずる。只今では主として泥炭(Torf)文化層に含まるゝものが、發見の主體をなし、外に若干の炭化した殘片を見る外、殆んど發見せられて居らない。泥炭文化層として最も著名なのは、スヰス杙上生活跡であるが、其文化たるや、新石器終末に近く石器時代としては、最も進展したものであり、既に農耕も行はれて居るから、こゝの野生植物の如きは、文化植物と對照せらる可き性質を有し、純然たる野生植物のみの收集者ではない。又この杙上生活は、獨り石器時代に止まらず、青銅時代にも及んで居り、往々兩文化遺跡の互に直近に存するものがあり、中には吟味を必要とするものも存するからこの出土植物に就ても注意がいる。(四) 而して一九二七年、マウリチヲが數へた史前植物種(蒐集植物)は、約百種に達して居る。(四)

我國に於ては、一般石器時代遺跡からは、植物其儘の姿に於ては、發見せられない。稀に貝塚等より「クルミ」等が發見せられ、又炭化した植物の一部が存する位である。先年私共は青森是川縄紋式遺跡で、一種の泥炭文化層を發掘し、植物殘骸を多く出土せしめたが、不幸にして當時植物學方面との連絡を缺き、素人に鑑別し得る、

けば、主要食料とすべき様なものは少ない。又これ等の保存も困難なものが多いから、一時的の食料にしかならない。又乾果（栗、椎、銀杏、胡桃等）であれば、蛋白、脂肪、含水炭素等も含み、保存も前者より長期に亘り得るが、個々の果物が少であるから、食料とするには多量の蒐集を必要とする。而してこれ等果實の殆んどが生食可能であると云ふ所に、特徴づけらるゝ。これに對し、史前當時に於て、稻、麥、稗、粟等の穀類の野生種が自生して居つても、夫々の粒子が少であり、脱穀の上、通常は火食せねばならないから、多くの文化工作を必要とする。それ故史前民で既に農耕文化にまで到達したものであるならば、穀類野生種の採集も可能と思はれるが、未知の民では出來悪い様にも思はれる。次に荳類や蓏果（西瓜、甜瓜、南瓜、胡瓜、トマト、等）の如きの野生種であるなれば、乾果の場合と大差がない様である。又葉菜類（「ネギ」「フキ」「ウド」「タケノコ」等）や、各種の菜類（「ナ」「セリ」「ミツバ」「チソ」等）の如きは、概ね水分が主成分をなし、若干の含水炭素、ビタミン等を包含し、主食性には乏しいが、副食、配合食品として、効果を有するものが多い。又これ等は生食乃至簡單な調理の上、攝食し得るが、果實と同樣、多くが長期保存には適さない。根類（ヤマイモ、マニオーク、サツマイモ、サトイモ、ジヤガイモ、カブ、ダイコン、ニンジン、ゴボウ、クワイ等）は水分に富み、澱粉、糖分、ビタミン類が含有せられて居るが脂肪に乏しいのが一般である。これ等も一部は、生食可能であるが、多くは簡單な調理攝食を要し、現土俗例から見れば、其繁殖する地方では、主食料ともなる。然しこれが採集には、所用根塊は、地下にあるから、地上の葉莖等を見分け、且つ掘り出すだけの、知識と工作とを心得なければならない。

之を要するに、植物質に於ける可食部分と、これに伴ふ榮養價値に對しては、天然界では殆んど本能的に攝取し、且つ蒐集工作に於ても、知能的な働きは低い。それ故史前人に於ても、最初は低く、漸次發達して文化工作

耕始原の一道程として意義深き範疇でもある。更に又この野生植物、特に地下に埋藏せらるゝ根塊等に對しては、發掘器具を必要とすることである。インド、セーロン島の奥ウェッダ人の如きは、全く農耕は知らないが、「ヤマイモ」を蒐集する爲には、掘り棒（Grabstock）を使用して居る。[17] 卽ちこの土俗例を以てすれば、『農耕具も農耕以前より出現が可能である』と云ふことも出來る。それ故この點も史前農耕研究には、着意すべきことである。かく野生種の蒐集に於ても、見逃す可からざる件々を包含し、これが進展は、農耕始原となり、漸次原始農耕の充實ともなつて行くと共に、一面に於ては野生種の蒐集も併せ繼續せられて行くことを認識して置かねばならない。

三、植物に於ける可食部分

植物に於ける可食部分は、動物とは異り、夫々其種類により甚だしい違いがある。植物一般に備ふる所は、根、幹、莖枝、芽葉、花、果實、種子等であるが、通常これ等の某一部のみが食用に供せられ、從つて其種に基き個々に可食部分を見る。又植物中に存する榮養素も亦、個々の種によつて著しい相違が見らるゝ。一般に動物質と同樣、蛋白質、脂肪、ビタミン、含水炭素其他[18]の基本要素を含むものがあるから、これ等植物の配合よろしきを得れば、強いて動物質食料を求めなくとも、或種生活は可能である。然しこの樣な野生の植物質食料のみで、或は其主要食料とするが如き生活は、主として南暖地方でなくては出來ない。溫帶にあつては、食料貯藏乃至は加工等の如き、特別な條件でも具備しなければ、野生種のみでは、多くが困難である。而して北寒地方では到底出來ないことである。それ故多くの場合が動植物質兩方面から採集する結果も生れ易い。

野生植物の内で、最も多く食用に供せらるゝものは、果實、葉芽、根等であるが、果實に於て、所謂漿果、仁果の類は[19]、含水炭素、ビタミンC等を含むも、水分の含有も多く、バナヽ、アナヽス等の如き南暖産のものを除

に、生存競爭も生れてくる。一面にはこの現象が、人類が蒐集するの難易ともなる。それ故理想的に植物質食料の充實なることが、中々容易でなく、一番理想に近づき得るのが、上述した南暖地方である。更に又、よしそれが理想的に惠まれても、必ずしも人類のみが獨專し得るとは限らない。卽ちその樣な植物が充實して居れば、それ等を愛好する鳥獸や昆蟲の類も、所謂甘きを求めて集つてくる。天然は獨り人類をのみ對象として居るのではない。そこには當然ある生存競爭も生れてくる。從つて人類として、これが獨專的に、或は所望量をたやすく獲得する爲には、根本的に自己の欲する各々の植物收獲に對する、或る程度の認識を必要とする。中には同じ食用植物でも、ほんの嗜好食程度に止まるものも、多かろうし、これ等重要でないものは、所謂行きあたりに見付け次第に採集してもよいが、必要大きなものでは、認識もより必要である。特に熱帶地方の如きは、種も多く收獲期も長いから、或は代用品も求め、又は時期を待つことが、容易であるけれども、溫帶や寒帶になると、チアンスを失はないことが、より必要となる。又直接有用部分の收集に當つても、收集地域、收獲時、收獲方法、運搬方法、收獲量、貯藏等に對しても、夫々ある認識が要求せられ、單に野生植物の收集と雖も、人類の食料充實慾に對し、幾何までこれに對應する文化能力を保有するかによつて、夫々相違が見らるゝ。この點をよく辨へないと、史前植物質食料に對する認識を誤る恐れもある。而してこの野生植物の蒐集が、或る程度に向上して、若干の文化工作が施さるゝに於て、そこに農耕始原も生れてくる。オーストラリアの或る土人の如きは、「ヤマイモ」の如き根塊を掘り出した際、其根の一端を切斷し、再び土中に挿入する。[6] このことたるや純然たる野生種の蒐集の樣ではあるけれども、其の後の收獲を企圖する所に、大なる進展が見られ、或る意味の農耕始原でもあり、よし根塊切斷、土中挿入の行爲が甚だ單純であるにしても、それは立派な文化工作である。又この行爲たるや、農

溫暖地方が寒熱兩者の中間的素質の存することは、申すまでもない。而して植物質食料も南暖地方の樣には、充實して居らないが、寒帶の樣な貧弱ではない。然し熱帶の樣に、殆んど年中充實しては居らない。季節により、大きな開きがある。卽ち季節に著しく支配せられ、收獲期には充實するが、他の季節では貯藏等の文化工作を行はざる限り、缺乏期も生じ得る。特に野生食料植物の如きが、中々都合よく充實してはくれない。それに若干の文化工作を施せば、著しく充實期を延長し得可き點も、溫帶としての一特徵である。又其食料植物の種に於ても、熱帶には遠く及ばないが、寒帶地方の樣に無理してまで、充實せしめないでもよい。勿論溫帶と雖も夫々其風土に地方色があり、夫々局地の地形によつても、雨量、土壤等の狀態によつても、決して一樣ではない。

二、野生植物の蒐集

上述の如く、史前文化植物質食料の、主體をなす野生植物の蒐集に就て概觀すれば、一言に盡きる程、簡單なものばかりではない。溫帶地方の如きが、特に季節に支配せられ、收獲期の存することは上述したが、尙この外、多くがある。根本に於て野生種なるものが、天然其儘の姿に於て生育し、何等人爲の支配を受けて居らないから、天然の法則、卽ち自然淘汰に支配せらるゝ。從つて繁榮もすれば凋落もし一定不變ではない。又人類の要求する種類が、よし繁榮しても、各種類を通じ種の配合よく自生してくれるとは限らない。某々種が榮へれば、他には反對に衰退し、兩立を許さぬものもある。例へば水潤を好むものと、乾燥を欲するものゝ如きが、それであつて、地形變化に富み低地と高地相接し、夫々分立してくれる樣な、理想的條件がなければ、共榮はしない。又野生種としては、必ずしも食用植物のみが、繁榮するとは限らない。某食用種繁榮に理想條件があつても、同樣に食用に供し得ざる雜木雜草中にも、同時に同一條件に適應したものを見るから、そこには、當然彼れ等の間

を除いた、現在氣候に近い、史前文化の北限線と一致する樣である。[81] 即ち換言すれば史前文化に於て、農耕可能の新石文化以降の分布範圍は特定の文化植物であれば、地理的條件としては、其最大限に於ては栽培が可能であると云ふことが出來る。勿論これは理論的に見たのであるから、史前農耕としての北限線は、更に多くの割り引きがあつてよい。少なくとも北緯六十度以南であつてよい。而してこれ等の北寒地方では、多くが食料の蒐集、特に冬期のそれに備へる爲、汲々たるものがあり、食物を撰擇するだけの餘裕を有するものが少なく、又已述の如く、保溫上脂肪質の要求も高いから、動植物を問はず、先づ攝食可能の食料を蒐集するのが常道であるから、史前農耕の如きが、他に先んじて初現するものとは考へられない。[82]



Fig. 5.　極北民の主要食用植物
1.　アイスランドコケ (Isländische Moos)
2.　馴鹿苔 (Renntermoos)
3.　沼イチゴ (Moosbeere)
(nach. F. Ratzel) N. G. [12]

3.　溫暖地方

尙南洋及印度地方に於ては、土人の食料たる可き、果實も多い。「バナ、」(Bananen=Paradisfeigen=Pisang=*Mosa*)や「ヤシ」(椰子=Kokospalme=*Cocos nucifera*)の如き、又「ナツメヤシ」(Dattelpalme=*Phoenix dactylifera*)は、今日でも北阿やアラビアの沙漠地方では重要食料の一つである。この外、「イチジク」「マンゴー」其他數十種が數へられ、果實のみでも充實が見らるゝ。尙球根食料に於ても重要な「マニオーク」(Maniok=Tapioka=Cassave=*Manihot utilissima*)「ジャガイモ」(馬鈴薯=Kartoffel=*Solanum tuberosum*)「サツマイモ」(甘藷=Süsse Kartoffel=Batate=*Ipomaea batatas*)の三者は、共に南米地方の原産とせらるゝから、[31] 史前食料としては、單に同地方に關否を見るに過ぎず、今日、アフリカ、南洋等で重要なる土人の食料ともなり、又吾人等にまで及んで居る。尙球根では「サトイモ」の類(「タローイモ」=Taro=Tarro=*Colocasia esculenta*)の如きは、一球の重さ往々五、六キロに達し「ジネンジョ」の類(Yams; Igname=*Dioscorea batatas*; D-sativa; D-alata)と共に、一部印度、南洋、アフリカ方面の重要食料となつて居る。

尙又他に「サゴヤシ」(Sagopalme=*Metroxylon*)の如きは、其木髓から澱粉がとれ、「サトウキビ」(甘蔗=Zuckerrohr=*Saccharum officinalis*)もあれば、種々な香料植物や藥草類も多くが南暖産である。

2. 北寒地方

南暖地方の植物豐富に比して、甚しく貧弱なのは、北寒地方であり、これぞと取りたてゝ食料植物とすべきものが皆無に近い。冬が長く夏が短いし、半歳に近く暗黑であり、多くが氷雪の塞す所となるから、植物には發展條件が最も悪い。タンドラ乃至はステップと云ふた植物景觀であり、稍々溫良の地にタイガーも見らるゝが、それ等中には、今日他地方にまで配給し得る樣な著名な食料植物はない。只極北人がその貧弱な植物中より、攝食可能な植物を搜出して居ると云ふ有り樣である。それでもグリーランドのエスキモー人の如きは、蘚苔類其他約二十三種の食料植物が數へらるゝ[32](第五圖)。又今日の文化をもつてしては、文化植物の栽培は、北緯七十度が概ね北限線をなし、暖流等の如き特別の氣候條件か、特種の植物でなければ、通常この線は越へて居らない。[33] この北緯七十度は概ねベーリング海峽北側よりシベリア北岸に沿い、ノルウエーの北端を貫ぬいて居るから、洪氷期

食料に於けるそれも亦、略天然界と同様な姿にあつたと考へらるゝ。此點は今日の文化人とは、根本を異にする。特に史前文化にあつては、新石文化に農耕が出現し、主要な文化植物を生んだが、尚幼稚な域を脱しないのみならず、必ずしも普及したものとも認められない。特に北寒地方に於て然りである。從つて舊、中石文化民は勿論、新石文化に於ても、農耕に親まない、或は親しみ不足な、一部の獵・漁民の植物性食料は、野生種を主體としたと考へらるゝ。それが新石農者だからとても、決して野生種の採集を行はないのではない。其一半は、これを野生種に求めて、植物質食料の充實を計つたと考へ可きである。今日に於てすら、高等文化民にして尚野生種乃至は、これに近き植物質採集は、よく行はれて居る。(三) 歐洲では青銅文化に入つて、漸く文化植物の或る程度の充實が認められ、(四) 我が國では、原史文化で略それが考察せらるゝ様である。從つて史前植物質食料の大局から見れば、野生種が主體をなす所を認識すると共に、新石文化に文化植物を見たことを明にせねばならない。

又根本に於て植物なるものが、動物とは異り、移動性に乏しいから、氣候環境の支配を、より多く受ける。根本的には南暖地方は、植物の寶庫であり、季節の支配も亦惠まれて居る。

1. 南暖地方

南暖地方に於て、果して史前文化に幾何まで關與するかは、只今全く未詳ではあるが、植物質食料に惠まれて居る例證として、二三に就て概見する。

「パンの木」(Brotfruchtbaum = *Artocarpus incisa*) の如きは、其原産は東印度諸島との説もあるが、今日一部南洋諸島の未開人にして、主要食料とせらるゝものもある。本樹は概れ九ケ月間も成果し、且つ果實に若干の工作を施せば、數ケ月間保存も可能である。本果は概れ一—二キロの重量があり、一本の成果も多いから、約十本の成樹があれば、一家を養ふに足るとのことであるから、本果の如きが繁植する地方は、植物質食料の充實と認め得る。

史前食料概説 其三

大山柏

第五節 植物、無生物質食料並に飲料

一、植物質一般

先づ人類文化に對する關係の有無深淺の上から、植物なるものを眺めると、有用植物（Nutzpflanzen）と不要植物とに分ち、有用植物を更に文化植物（Kulturpflanzen）と野生植物（Wildpflanzen）とすることが出來る。これを食料なる目で見れば、有用食物の中に食用植物（Nährpflanzen）と不食植物とに分たれ、食用植物は更に文化食用植物と野生食用植物とに分類することが出來る。勿論本節に述べんとする所は、この食用植物の範圍にあるのみならず、食料なるものを主體として居るから、動物質と對應した、植物質食料（Pflanzennahrung）として研究して居る點は、豫め御斷りして置く。

さてこの植物質食料なるものは、人類として天然環境が許すに於ては、動物質食料と互に長短相補い、食料を充實するに止まらず、榮養上からも、其配合よろしきを得れば、食料の偏向をも矯正し得る。勿論天然界に於ける雜食性のものも、動植物質配合の如きは、自ら意識するのではなく、全く官能の命ずるまゝであるから、史前

是等の各類は製作手法其他に依り分類を爲したもので何等竪穴の新舊を定めるものではなく從つて同一竪穴より共に出土し又各類の中間形に屬するものも少くない。

四

本遺跡は全體的に見ては近くに在る久ケ原より時代の下るもの。竪穴遺物よりは比すべきもないがそれを律する爲には何等かの意義あるものと考へる。久ケ原を圍む遺跡池上町八幡神社、嶺一丁目、雪ヶ谷町大下等に就いては他日改めて御報告したいと思ふ。

完形一　胴部二

C類　形態は壺及び高杯等にして比較的變化に富んだらしく製作は可、不可共に認められその方法は卷上げ?接合等にして燒成は凡良きも屢々黑斑を有す。質は硬く光澤を帶び色は赤褐色、褐色、淡褐色を呈し內外面に有する刷毛目を篦様のもので消したらしく朱?を塗りたるものあり。底部附近に——底不安定なる底等——特異な手法を見る。

第三圖1は本類に屬するものにして製作粗——口緣部外曲口頸部に接合せる痕跡を有し底部　底——小砂を混じ內面に刷毛目を有す。燒成比較的良きも黑斑を有し淡褐色を呈す。

第三圖5——製作優れ燒成凡可、淡褐色を呈し臺部に相對的に四孔を有す。

完形二　胴部九　高杯臺部一　底部二

第三圖6—製作燒成共に良內部に約幅一・五糎位の間隔を以つて條痕を有し褐色、外部は屢々鼠色を呈す。

Fig. 3.　彌生式土器

D類　第三圖2—製作燒成良、口緣部に無數の條痕を有し底部不安定、質は硬く光澤を帶び黑色を呈す。製作方法は口頸以下を卷上げ法に依りて製し而る後接合せしものと思考せらる。

K　竪穴の大きさ不詳なるも底部に灰を有し多數の本炭を出す（第三圖）

三

自然遺物

灰・木炭　竪穴より出土

燒石・鐵？　鐵らしきもの竪穴此より一片出土

人工遺物　土器　製作手法其他より見て久ヶ原式より時代の下るもの。分ちて次の如く爲す事を得。

A類　第三圖3に示せるものを基本形態とす。製作比較的優れども燒成不可にして粗弱吸水性に富み口緣部に無數の條痕內外面に刷毛口を有し色は黒味を帶びたる凡褐色を呈す。製作方法は口頸部、胴部、臺部に分ちて製作なし而る後接合せたるものと推測せらる。尚本類口頸部に條痕在りしものあり。

完形一　口頸部五　胴部六　臺部三類

B類　製作優良薄手にして燒成比較的可なるも質は粗弱吸水性に富み凡赤褐色を呈す。本類に屬する完形品は一個――第三圖4

該土器はその形態に於て甚だ異つて居る。今製作方法を見るに初め三ヶ所に分ちて製し之を接合せしめたものにして其接合箇所（口頸部、肩部、下肩部）及び口唇部には爪形紋？を廻らし外面は箆様のものにて圓滑に爲した痕跡認めらる。

底部は圓味を持つが比較的安定。

布の狀態より見て西方にはより多くの存在が思考せられるがそれ等は何れも既に建設された住宅に依り出現する事不可能な狀態に在る。尚本遺跡に於ける竪穴には鮮明なるものと然らざるものと在る事は注目すべきである。

竪穴A　詳細不明　爐址あり　彌生式土器第三圖１２　該爐址より出土１と共に木炭伴出す（第二圖A）

B　長二米五〇糎　地表より底部迄二米（第二圖B）

C　長二米六〇糎　地表より底部迄一米二〇糎　爐址あり　本竪穴との凡竪穴Bと中間地點に於て第三圖３を出土、前者は接合せる一破片に全く他と關係なく黑色を呈するものを認める。當時既に破損せし事を證明するものである（第二圖C）

D　長三米一〇糎　表土より底部迄一米二〇糎（第二圖D）

E　道路より凡東へ一米一〇糎長約二米五〇糎　地表より底部迄一米三〇糎　表土約八〇糎（第二圖E）

F　長八米七〇糎　地表より底部迄約一米二〇糎　表土約七〇糎（第二圖F）

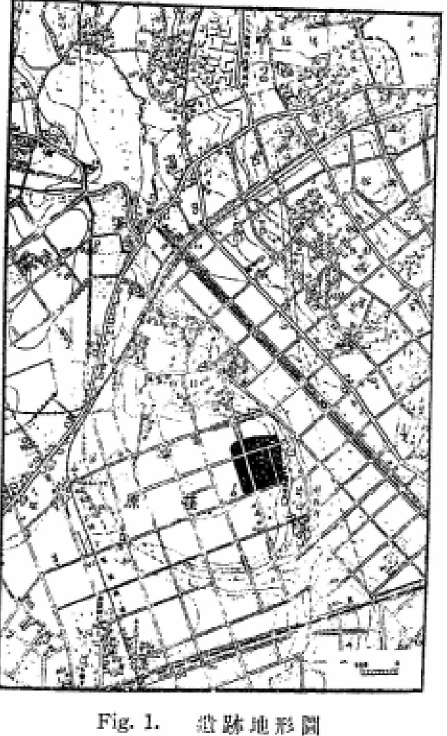
G　長約六米　表土より底部迄約一米三〇糎　表土約八〇糎　爐址あり　後記A類C類、鐵？等出土（第二圖G）

H　竪穴内に段を有するも詳細不明（第二圖H）

I　長四米五〇糎　表土より底部迄約一米　表土約五〇糎　數ケ所に灰を見る、木炭極めて多く炭化せる出土（第二圖I）

J　長四米　表土より底部迄約六〇糎　表土約三五糎　道路を挾んでIと相對的に存在す　同一竪穴と見るべきか

る雪ヶ谷遺跡の凡東北端を占むる清明學園敷地及びその南前の東寄に傾斜する約一五〇米平方の地點にして南はA貝塚（圓長寺裏貝塚）を經て雪ヶ谷町一二八三番地附近に於ける彌生式遺跡に接續し東及び東南は呑川の沖積低地を隔てゝ雪ヶ谷町大下池上町八幡神社附近に於ける同式遺跡に相對する。（以上第一圖）本遺跡を構成する竪穴は


Fig. 1.　遺跡地形圖

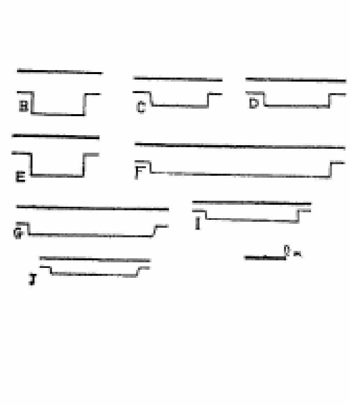


Fig. 2.　竪穴及び一般圖

今日迄に筆者が知る範圍内では一〇個あり、是等は殆んどその内部の狀態を明らかに爲し得ず唯僅に竪穴Aに就いてはその爐址を發掘しB.C.D.E.に就いてその内部の狀態を當事者の好意に依り窺ひ得た程度でその他のものは全く暗から暗へ葬られたのである。（以下第二圖）然して是等の竪穴は何れも土木工事の結果に依るもので遺物分

東京市大森區雪ヶ谷町清明學園附近に於ける彌生式遺跡

佐野又治
齋藤房太郎

一

東京市大森區雪ヶ谷町清明學園附近に於ける彌生式遺跡に就いては嘗て筆者が敬友齋藤武一氏と共に考古學雜誌第二十四卷第六號「大森雪ヶ谷遺跡」の中に於てその概略を記載する處があつた。而るに加速度的住宅地の建設は本年夏に至り急速に表はれた竪穴群をより急速に破壊せしめ本遺跡をして殆んど完全に壞滅に歸さしむるに至つた該工事に依り幾多の資料を得たとは云へ竪穴大部分の構造を明らかに爲し得なかつた事は眞に遺憾である。

宜しく御寛恕せられん事を乞ふ。

二

本遺跡は所謂多摩溪谷の左岸武藏野の一角呑川溪谷の一入江を圍む東京市大森區雪ヶ谷町の南端前記報告に依

にて、左に富士・愛宕の二山を仰ぎ、右に天草島を水煙の彼方に眺める。貝類はレイシ、クボガイ、ハヒガイ、カキ、シホフキ、アサリを主體とし、その他十九種、打製石斧、異形なる石器を伴出する彌生式貝塚にて見るべきものあるも、その報告は後日に語る機もあらう。（彌生式、打石斧、月形石器獸骨）

(20)南高來郡加津佐村良瀨（貝塚）　當遺跡は往日、史前學雜誌第三卷第五號に甲野氏の紹介あり、貝塚は僅かの貝層を橘灣岸に露出しその寂しさをとゞむるも繩紋式遺跡として本貝塚の文化的重要性を今更喋々すべくもない。尚ほ同氏採集貝類にシホフキ、イガイ、ウミニナ及び未詳二種を追記して置く。（繩紋式土器、打石斧、獸骨、石屑）

(21)南高來郡加津佐村野馬水　良瀨貝塚後方の畑地より野馬水聚落に到る附近はまた黑燿石片の散見も難とするものではない。（黑燿石）

—一九三五・四・一—

錘、石鏃）

(15)北高來郡長田村、東長田中島（竪穴）　肥前長田驛の北方百米筑紫海に面する標高一〇米の丘陵民家地域、北西に傾斜せる桑畑の切崩斷面に彌生式竪穴を認む。地表より底部に一・二米を計測し得、竪穴底部に於ける火力に會ひたるハイガヒ及びアサリ、カキ、カハニナ等の少量堆積は竪穴の存在とともに記すべきもの丶一つであらう。（彌生式、祝部式、黒燿石、貝殼）

(16)北高來郡長田村東長田小學校後方丘陵

(17)北高來郡長田村東村墓地附近

(16)(17) 東長田附近の丘陵性臺地を占むる畑地は夥しき貝殼の散布、併し之は耕作の爲に海より運搬し來れると聞くもの多く、採訪者はこの失望に代ふるに冷靜なる觀察を必要とする。小學校背後臺地警鐘塔下附近も貝殼密集散布の一地點なるも、黒燿石片の散見は寂しき一縷の喜びかも知れない。併しながら、「日本原始工藝概說」によれば西長田とともに東長田に彌生式貝塚の存在せること、及び諫早(イサハヤ)、長田附近の沿岸は泥砂に富み貝類棲息に適せることは見逃してはならない。（石鏃管狀土錘）

(18)北高來郡長田村西長田鐵道沿線墓地附近　諫早より湯江、小長井方面に至る鐵道は北走して西長田聚落の火山灰層を切斷してゐる。この最南端の斷面は包含地として土器その他少數の遺物を出す。就中繩紋土器片は南方有喜六本松繩紋土器に同定すべきものにて土質粗鬆、雲母片細砂粒を交へ、その一片は平行沈線紋を見られる。新しき遺跡として之を記す。（繩紋式、彌生式、祝部式土器、燒石、黒燿石）

(19)南高來郡口ノ津村三軒屋（貝塚）　島原半島南端口の津港を北上すること一粁半、標高七〇米の高地の東斜面

る貝層を認めらる。獸魚骨も豐富に出土し、人爲的遺物としては石鏃、石斧、石鑿、砥石、凹石、土器等を先に報ぜられたるも（長崎談叢第9輯）土器の出土を最も多量とする。硬質彌生式土器を主體とし、小數の埴部祝部土器及び管狀土錘も混在し、末期的匂ひの强さを持つ。尙記すべきは數個の箱式石棺の貝塚東接海岸礫内における埋葬である。二三の發掘の跡も伺はれ、一個のみ觀るべきそれを留むに過ぎない。かくて今少さき希望を許されるならば、このあたり住居に關する何等かの形式と生產的樣式の明らかな啓示そのものである。（彌生式、祝部式、管狀土錘、石鏃、獸骨魚骨）

(12)北高來郡田結村里　大門貝塚の北方八〇〇米、里部落は田結沖積地の谷緣に發達せる聚落にて約10—20米の丘陵上は開墾され、黑耀石無柄石鏃、及び石片は此の附近に散布する。（石鏃）

(13)北高來郡有喜村岩崎（貝塚）　有喜村六本松貝塚が僅少の彌生式土器を伴ふ繩紋式遺跡として、將又鐵器及び石棺出土によつて金石併用期にその下限を求められて學界の寂寥を打破つたことは今尙私どもの耳に新しく響き殘つて居る。岩崎貝塚は六本松貝塚を距ること北北西八百米、有喜川の形成せる沖積地を南西に控える丘陵斜面に位する純彌生式貝塚である。該地方特有の階段耕作地に貝殼の僅かなる散布を見らるゝも、小試掘にてはかゝる地形の貝層狀態は觀察困難である。本貝塚の詳細は他日に讓るとして、クボガイ、ハイガイ、レイン、カキ等の主構貝類及びその他九種及び土器の多量なること、加工の痕跡を認むべき石材の出土を記するに留めて置く。（彌生式管狀土錘、打石斧、黑燿石、凹石、擦石、獸骨）

(14)北高來郡有喜村岩崎貝塚後方丘陵　岩崎貝塚を北東に隣る臺上は彌生式土器の夥しき散布を見る。土質燒成等よりして貝塚と同時代の所產と考へらるべく、尙當地出土石鏃は黑耀石製無柄大形のものである。（彌生式管狀土

附着の人骨出土とゝもに地域的文化の下限及び文化圏への問題に、架橋的期待を爲すべき多くのものが存する。倂つて採集せる黒耀石塊を前にして今は亡き先驅者の墓に香花とする。

(9)西彼杵矢上村正覺寺前方の畑　橘灣に面し灣口に牧島を抱く矢上灣沿岸に位し、八郎川の右岸。現砂洲地帶より約千米、東に傾斜せる畑地である。黒耀石、砂岩質の石屑の散布を認められる。出土鏃は硬砂岩質無柄。現在八郎川は北方より矢上の低地を流れて漸次冲積地を營みつゝ、河口に於いては東房濱なる砂洲地帶と、沖合二百米の地點に一の堆砂を形成し、砂洲の內側にはなほ Lagune を留め、干潮時には戶石村戶石濱とともにすばらしき干潟の現象を眼前に展開することは見逃すことの出來ぬ事實である。かゝる地理的要因を以て附近の地形と東方諸遺跡の數々を指す時、明日に追究すべき何物かゞ待たれる。(石鏃)

(10)北高來郡戶石村池下　田結村大門より戶石村に至る里道は、五〇米の海岸の斷崖上を匍匐し、池下に西行して緩勾配の覆黒土層斜面を走り牧島に西面する。この斜面の畑上また少からざる黒耀石片と管狀土錘の散布を見る。(管狀土錘、黒耀石)

(11)北高來郡田結村大門(貝塚)　田結村の北方井樋尾嶽の東麓に起る一溪流は北流して橘灣に注ぐ。この間、清水・里近邊に到り稍ゝ廣き冲積水田地を緩流するも、河口近くに拒む大形礫を以て海岸に形成せられたる砂丘の爲僅かに左折して海に注ぎ出る。田結貝塚は海岸における砂丘及び之に北接する僅かなる冲積地に營爲せられたる水田比高約一—二米の共同畑地、及び民家聚落の一部にわたる。貝殼は耕作の爲廣範に散布し、その主要構成貝類はハイガイ、カキ、クボガヒ、レイシ、スガイ等を多とし、その他バイ、サゞエ、アワビ、マツバガイ、オキシゞミ、アカガイ、ハマグリ、バテイラ、コロモガイ、ボラ等を檢出し得るも、處々にクボガイ、カキの密積せ

ぜられる。謂ふところの城山町は浦上川右岸に侵刻せられたる一小支谷の稻佐嶽北東麓に及ぶ邊り、占在せる農村及び市營住宅地一帶を以て名付ける。城山小流の浦上川に合流する所、曾つて彌生式貝塚の存在を傳へ聞くも住宅建設による壞滅を以てしては更に追究すべき何物も見られない。市立商業學校背後を始めとし附近丘陵の耕地表面には此處彼處に黒耀石片の散布夥しく、特に(2)なるマリア學校北西百米の臺上には最もその濃厚さを見られ、一見製造所趾の如く思はれ、更に甦燒橋、立岩神社近傍の緩らかなる黒土層の臺地を考へる時、期待すべき遺跡を想はせる。鏃は悉く無柄。

(5)長崎市竹之久保町瓊浦中學校前（貝塚趾）黒耀石　浦上川右岸、城山遺跡に南接する。中學校入口に存せしこの彌生式貝塚も同じ近代文化建設の前に葬られて僅かに採訪の人々の胸を温すものは貝殼の散布と黒耀石片にとどまる。

(6)長崎市山里町小學校背後丘陵の畑　浦上川の左岸約三十米の丘陵、小學校運動場斷崖の後方にて、キリスト教墓地、江副氏邸間の畑地。雨後の丘の上は小形無柄の石鏃と石屑の散在に旅のポケットを躍らせる。此處より北方石切場附近に至るスロープは美はしき重疊を描いて小さき武藏野を彷彿せしめる。尚刑務所及び浦上天主堂近邊における黒耀石片の存在も、やがて失はれゆかむ一沫の慰めではある。（石鏃）

(7)長崎市鳴瀧町シーボルト宅趾背後丘陵　市の外延の遺跡を考へるならば諏訪神社北接丘陵より本河内水源地に至る附近である。シーボルト宅趾後丘、城の古趾より師範學校裏の斜面は僅かなる農園をなし、西南長崎港を一望の下に收め、遺跡として好き環境と思惟せられる。

(8)西彼杵郡雪の浦村下の釜　曾つて此處は八重津輝勝氏により考古學雜誌上、權威ある報告を見、石鍋及び鐵鏃

長崎縣下の遺跡遺物に就て

（昭和十年四月十七日長崎要塞司令部檢閲濟）

桑山龍進

九州島の西端に位する肥前、其處は水平的並びに垂直的肢節に繁たる一方、他面支那平原・朝鮮半島・北部及び中部九州の文化的煩鎖を思ふ時、更に私どもは此の地の史前文化に於ける役割を顧眄すべき必要に迫られる。その探訪の追憶を長崎にとる時、想へば昭和五年及び九年の夏の日に蘇つて來る。一二の遺跡に對する小報は他日に讓るとして、曾つての日の踏査の忘備にもと、復たの踏旅を夢みつゝ、こゝに遺跡遺物の描き紹介と不備の解說を附して學界に送ることゝする。幾何かの參考ともなれば誠に幸甚である。

地名並びに遺物

(1)長崎市城山町小學校背後丘陵の畑（彌生式土器、石鏃）
(2)長崎市城山町マリア學校西北の畑（石鏃、石匙、黑耀石、石屑）
(3)長崎市城山町立岩神社附近（黑耀石）
(4)長崎市城山町甕燒橋附近（祝部土器）

(1)(2)(3)(4)　長崎港灣を南に注ぐ比較的大なる溪谷として浦上川の夫れを舉げねばならぬ。それは稍ゝ豐富な沖積地帶と數多の小支谷を擁して兩岸に大略10―25米餘の段丘を形成してゐる。之等の丘陵地帶は僅かながらの耕土を保ち、沖積低地とゝもによく農耕に適すること、而も古き聚落は溪谷の周緣を廻つて發達せるもの丶如く觀





群馬縣新田郡世良田村米岡發見の大岩版（約二分の一）（大場氏報告參照）

Die besondere grosse Steinplatte von Yoneoka, beim Dorf Serata, Prov. Gumma.

會報

目次

史前學雜誌

第七卷 第五號

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關聯スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會　員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名擧會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史　前　學　會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常惠

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄

甲野勇　大山柏　樋口清之

山口隆一　池上啓介

會計　岡田義一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關聯スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿提載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込アル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年十月二十日印刷　第七卷第五號

昭和十年十月廿五日發行　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介

發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區神保町一丁目三十四　株式會社開明堂東京營業所　高田壬午郎

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區須田町一ノ一〇　合資會社巧藝社　電話神田二二九四番　振替東京四〇六六六番

史前學雜誌

第七卷　第五號

昭和十年十月發行

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

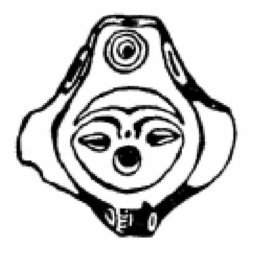
ORGAN DER JAPANISCHEN

PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



7. BAND 6. HEFT

TOKIO

Detzember 1935

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Shibuya-Ku Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Shibuya-Ku Tokio

   Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa Jookei Shibata

Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami

Isamu Kohno Iwao Ooba

Sueo Sugiyama Kingo Tazawa

Ryuichi Yamaguchi

INHALT

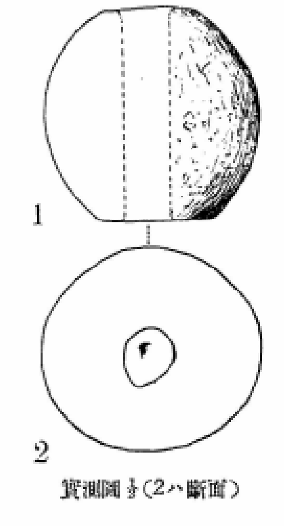
I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

TAFEL



玆に紹介する一例は岩代國伊達郡伊達崎村の出土に係るが、明確な出處が、不明なのを遺憾とする。紡錘形ではあるがやゝ球形に近い。高さ四・六糎で褐色を呈する。中心に貫通孔を有する點など他と變りないが、他の例品と異るのは全然素紋粗製あることである。然も甚だ堅くかつ重く、形狀も多少は歪んでゐる。これは同村の西山正倫氏の所藏である。同村の石器時代遺蹟は大字伊達崎に一ヶ處あるのみであるから、其處よりの出土とも考へられぬではないが、いまは强調しないでおかう。



實測圖 $\frac{1}{2}$（2ハ斷面）

喜田先生のお話によると、この種土製品は各地研究家の所藏品中に往々見られるとのことであるから今後の注意次第でかなりの例品を紹介し得ることゝ思ふ。新例品の紹介を兼ねて諸彥の御教示を願ふ次第である。

この場所へ行つて見ると、道の兩側に、大きな竪穴の斷面が、數箇所に見られる。

（因みに、乙連澤は、丸山瓦全氏が、前記校長さん達の肝煎りで、數年前ほんの一部の發掘をされた事があるさうだが、大部分は全く未着手の大遺跡である。

Fig. 2.

土器は、厚手の類いものを主とするらしいが、それに混じて、純粹の薄手もある。この兩者の關係が、どうなつてゐるかは不明である。現に角、土印が出てゐたり、東北系の土偶があつたりして、仲々遺物の種類も豊富らしい）

大體、上述の諸遺物は、石器時代の大切な生產要具乃至寶物であつたらうが、それがかうした甕の中から出たと云ふことは、土器が一種の道具箱になつてゐた事を示すものであらう。

臺灣の原始人間には、晴衣を甕に入れて置く習慣があるさうであるが、この場合土器は、一種の箪笥であり、勿論寶物があれば、それもこの土器の中に收藏されて、土器は金庫の代用になつた譯であらう。

八幡一郎氏が嘗て人類學雜誌上に報告された、下總國東葛飾郡古作貝塚出土の、甕に入つた貝輪の如きも、この類例と見られる。

土器の用途は現代人が想像するより以上に、多角的であつた事は、事實であらう。然し從來、如何なる遺蹟から、如何なるものが土器の內容物として發見せられたか、その實例については、餘り注意されて居らぬ樣である。この事については、何れ稿を改めて、論ずることゝしよう。（昭六・一〇—三〇）

球形土製品資料　其ノ一

角田文衞

曩に此の種土製品、殊に其の紡錘形なるものを中心として小考をものした時は、一二の新例品を報告するに急で、從來出土した例品に關しては深くこれを追求せず、また他方徒らに用途の解決を急ぐ憾みがあつた。爾後、余白を得て新發見品を報告し、更に從來の出土品に就いても實際に調査した場合はあはせ報告し、這般土製品の闡明に幾分なりとも資したいと思ふ。

この貝を採取する場所を穿ち、大岡川谷方面にのみ依據せず、屏風ヶ浦方面に迄赴いたと考へられぬこともない。

かうした實例に逢着すると、貝塚とは何である事を再考させられるのであるが、少くとも、後者の如く、その堆積が、人工的要因によつてゐるものは、貝塚と斷定して、差支へないと思ふ。これは、少くとも、貝塚なるものの、極限に存在してゐるものと考へられる。文化遺物が併存すれば、先づ貝塚と見て、間違なからうが、さうしたものを出さない（非常に文化遺物が少くない爲に、それを發見し得ない）貝塚も、あり得る譯である。日本では、まだ歴然たる、さうした貝塚に發見されてゐないが、鶴見の丘陵には、大分それらしい貝塚もある樣であるし、大山公爵の御教示によれば、ブラジルに、その立派な類例があるとの事である。然し、此等二つの貝塚が、それであるかと云はれても、何ともお答へする勇氣はない。そんなに古く考へるには、貝が少しく、生々しすぎる樣に思へるからである。兎に角、此等の貝層に屬する貝類を、もう少し詳細に檢討して見たら、多少何とか判斷がつくのではないかと思はれるが、今は一應性質不明の貝塚として資料的に報告して置かう。

土器に入れたもの

土岐仲雄

よく田舍へ行つて貝塚をほり、土器が出て來るのを見て、「一體その中には、何を入れて置いたのでせうか？」と土地の人に、質問されることは、實に屢々經驗するところである。

最近栃木縣西那須郡乙連澤字長者ヶ平遺蹟へ、池上氏等と行つた折、途中羽田小學校に於て、校長瀧井氏の好意によつて、下圖(1)(2)(3)(4)の如き種々のものが入つた、(5)の如き土器底部を見せて頂いた。

(1)は石製の石小刀で、(2)は同じ石質の石錐、(3)は燧石製の、多少赤みを帶びた、非常に美くしい石の皮剝である。(4)は土器で、小型ながら、これで完全品。無飾で、粗製、色は淡黄色。以上孰れも實大である。之等のものが(5)の如き土器底部破片内に、ごつそりそのまゝ入つて出土したと云ふのである。

出土した地點は、長者ヶ平遺蹟を横斷して、最近出來た道路の、側面からであつたさうで、土器の口は約三十度ばかり傾斜して出たとのことであるが、勿論農民諸君が發掘したので、詳細は不明である。

5. Polynices didyma Röding.　ツメタガヒ

等で、カガミガヒ及バカガヒが最も多い。その他の自然遺物は勿論、一片の文化遺物をさへ、何處の地點に於ても發見する事が出來なかつた。例の洪積層に屬する化石貝層が、何とかして、地表上に露出したものではないかと考へるより致し方なからうが、現在見えてゐる崖側面の青色粘土層には、全く貝類の痕跡がなく、以上述べた諸點にのみ、一定の範圍に限られて、貝が散布してゐると云ふ事は、不思議と云へば不思議である。

今一つは同じ横濱市内磯子區の、杉田の手前、森と云ふ市電停留場の裏山位に當るところに、笹下(さゝげ)町と云ふとこがある。この町の背後の丘陵上に、性質不明の、今一つの貝塚がある。この丘陵は、大岡川谷に直面した、標高四〇米以上を示めす高峻なもので、その頂點近くに一つの三角點があるが、今述べようとする貝塚のある地點は、その三角點から西北約二百米の、竹藪の側にある山道のふちと、今一つは、これから更に十數米を距てた西方の、畑地の側面に包含されたものとである。前者の方は貝の散布は、廣さ約5米×2米位の不正矩形に近い形を呈し、貝殻まじりの五糎乃至一〇糎の表土の下に二〇糎乃至三〇糎位の、目茶苦茶に細破した貝殻片からなる純貝層があり、その下には更に二〇糎程の黒褐土層があつて、自然にローム層へ移行してゐる。その間、掘れども掘れども、文化遺物は、一片だに發見し得なかつた。貝は殆んど完全に細破されてゐるので、その種類を判定するのさへ困難であつたが、大體わかつたものは次の六種であつた。

1. Paphia (Ruditapes?) philippinarum Adams & Reeve.　アサリ
2. Arca (Anadara) subcrenata Lischke.　サルボウ
3. Meretrix meretrix Linne.　ハマグリ
4. Mactra veneriformis Deshayes.　シホフキ
5. Rapana thomasiana Crosse.　アカニシ
6. Babylonia japonica Reeve.　バイ

畑の方のものは、約一米半程の崖側面に、貝層の一部が露出してゐるのであるが、この方は、表土三〇糎程で、貝層も同じく約三〇糎、貝は細破されて居らず、貝種は前者と略同樣、アサリ及ハマグリを主とするものであつた。この方にも、文化遺物とては、一片だに發見する事は出來なかつた。

大岡川谷に於ける現在の上限貝塚は、左岸に於ては南永田貝塚、右岸に於ては、蒔田三殿臺(まいたさんでんだい)貝塚で、此處から尚約五粁の下流であるが、然し余は、これから約二粁上流の、杉田町字貝塚の背後、同町新川にも、立派な貝塚の痕跡を發見してゐるから、

中段が出來てゐて、その崖上から、崩れ落ちた樣な形で、眞白に貝が散つてゐるのを見た。これかな？と思ひながら、更に先へ進むと、此處にも同じ樣な形で、同じ樣な貝の堆積があり、その降りは崖が後退して、同じ道に沿ふて、約二百坪位の畑になつてゐる所に、一面に、如何にも貝塚らしく貝が散つてゐる。それればかりでなく、この畑の先の小道を左に折れた、人家の裏になつてゐる、一段高くなつた植木畑の中にも、明かに貝の散布してゐる箇所が、二箇所あり、そのうちの一個所は、崖下の人家の庭に迄亙つて、眞白になつてゐる。

その先は間門の小學校の校庭で、直接行く譯には行かなかつたが、迂廻して、しらべて見た所、校庭の一側をなす崖の下にも、數ケ所貝の散布してゐる場所があるのを確かめる事が出來た。

Fig. 1

貝は

1. Mactra sulcataria Deshayes. バカガヒ
2. Dosinia japonica Reeve. カガミガヒ
3. Astrea denselamellosa Lischke. イタボガキ
4. Paphia (Ruditapes?) philippinarum Adams & Reeve. アサリ

然しながら、木鏃は下圖に示した、直剪鏃として代表的な樣式とは、又特異の點も多く、決して代表的なものとは申されない。外國の諸例から見ると、多くの剝取を試みた所など、新石文化所産の一樣式であり、最早古拙な所がない。從つて單に新石文化に在つても、一般的な尖頭鏃中に伍して、尖頭に代ふるに、刄を以てした木鏃如きが、交り得ると云ふに過ぎない。それ故、本鏃、特に一二の稀れな例から、型態學上、古形式であるも申されない點は、明かにして置く。

只從來我が國では、直剪鏃の存在に對する認識不足の結果か、明に直剪鏃であると認められたものは、不幸にして未だ聞知しては居らない。又從來、尖端も利用出來れば、反對に刄も利用出來る樣な、兩者何れともつかぬ樣な樣式は、發見もせられ、議論も聞いたこともあるが、今回の樣な明確な例は、見て居らない。然も捜出して見たならば、必ずや他にも發見し得ることと考へるから、鏃を見るに當り、一通り直剪鏃の有無に就いては、一顧を煩し、發見あれば、御發表を御願する次第である。これも類例を増すに從つては、或は文化上の一特色とも、ならぬとも限らない。只今回は一發見例を報告し、石器の一樣式を、増補するに止める。

神奈川縣下に於ける性質不明の二貝塚(?)に就いて

土岐仲雄

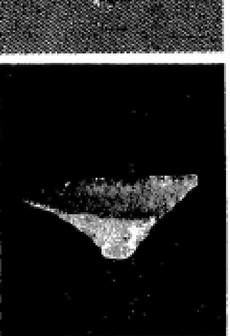
人類學雜誌第三卷第二十九號（明治廿一年七月）の、坪井正五郎氏、「貝塚とは何であるか」と云ふ一文のうちに、海岸から一番近い貝塚（約四五丁）の一例として、横濱市中區本牧町オヤト二の谷入口の右方貝塚と云ふのを擧げて居られる。まづオヤトは、マカド(間門)の誤植であらうが、二の谷入口右方とは、道路から右方なのか、海岸から右方なのか、鳥渡難かしい問題である。實際行つて見ると、ここにある三つの谷は、何れも海岸までぬけてはゐるが、道路の方が入口になつてゐて、海岸の方は崖を爲して、海に落ちると云ふ狀況を呈してゐる。それでこれは、道路から右を指すものと考へて、先づ第一に余は、この谷の右方の丘陵上を隈なく探がしたのであるが、當日は遂に發見し得るに至らなかつた。序いで、右方は、谷の左岸、右岸の意味の右方ではないかと云ふ事に氣が付いたので、その次に反對側へ行つて見た。すると、間門の本道路から、ほんの半町程入つた、道に沿ふた崖の側面下に、丁度人の丈位の高さに、

資料

西那須附近發見の直剪鏃

大山柏

此程西那須附近調査に際し、一個の直剪鏃(Quelschneidige Pfeilspitze)を發見した。而してこれに關聯して、根本的に直剪鏃に就て記述もして見たが、自分に滿足するに至らない。色色考慮の上、今回の發見に關しては、單に其事實を報告するに止め、直剪鏃全般の研究は、別に改めて近く本紙上に開陳することゝし、夫々分割することにした。それ故、直剪鏃に對する愚見は追つて述べることゝし、こゝには一切觸れない。



上、金田村長者平(研究所)
下、北阿中石(仝上)

この直剪鏃は、同地の戸畑運治氏が、金田村長者ケ平附近に於て、他の一般的な石鏃(尖頭鏃)其他と表面採集せられたものであり、今回同氏集品中より發見した次第である。而して同地は昨年自分も一覽し、且つ石鏃、石皿其他を表面採集し、又道路工事の斷面に於て、燒土層其他を認め得た。當時自分等の採集した土器は、表面よりも斷面中からも、廣義の勝坂式のみであつて、他は見て居らない。特に彌生式らしきものは、一片も見なかつた故、この結果からすれば、本直剪鏃は少なくとも、繩紋式の所產であるとは、云ひ得る。

本器は圖の如く、其長軸二糎二强、刄幅一糎半、稍ゝ不規的ではあるが、柄部が認められ、刄に向つて急開して居る爲、所謂撥形をなして居る。この柄部たるや、端末鈍で、この端末を尖頭として使用するには、餘りにも尖銳を缺くと同時に、刄部は銳利な打裂刄の利用ではないが、丁寧に刄と直角に剝取作出せられ、相當に銳利となつて居り、これを使用する爲に、かく作出せられたと肯定し得るから、かく直剪鏃と認めた次第である(上圖)。

である。他に毒については、Harmar, Herdman, etc.: ib., pp. 176—178. 參照。

(16) 河豚の毒等から史前學に齎らす問題に就いては、大山柏「日本石器時代の生業生活」改造、十六ノ一、(昭和九年) 六九—八三頁、參照。

(17) K. Kishinouye: ib., p. 374. 發見地は *Trygon akajei* (Caudal spine) — Kuwagasaki, Yashikihama, Miyatojima, Yoyama. *Myliobates tobijei* (Teeth and Caudal spine) — Kuwagasaki, miyatojima, Sonno.

(18) 調査が未だ不充分であるから、研究所藏品の全部であるとは斷言致し兼ねる。

(19) K. Kishinouye: ib., Pl. XIX, Fig. 28.

(20) 毛利・遠藤氏藏品

(21) 大山史前學研究所藏品

(22) 陸奥國三戸郡是川村一王寺發見、大山史前學研究所藏品

(23) 武藏國菊名貝塚發見、大山史前學研究所藏品

(24) 史前食料としての魚類に關しては、岸上鎌吉「原始民族の水產食料」中央史壇、六ノ一、(大正十二年) 及び、大山柏「史前食料概說」其二(史前學雜誌、七ノ一、八頁以下) 等參照。「エヒ」類は多少の適不適はあるにもせよ、殆んど大部分の種類は今日でも食用に供さる。その內でも「アカエヒ」には食用として喜ばれ、殊に夏期に於いて美味であるが、又、藥用としても用ひられる。その鮮肉成分は次の如きものを云ふ。(倉上政幹「水產動植物精義」大正十四年、二九〇頁) アカエヒ科鮮肉成分一〇〇分中、蛋白質二一、四五。脂肪質〇、三〇。灰分一、〇三。水分七七、二三。

(25) 骨角器が多く食料殘骸より作られてゐる事は、拙稿「日本石器時代陸產動物質食料」(史前學雜誌、六ノ一) 三九頁IV參照。

(26) H. Breuil の骨銛編年 (Les subdivisions du Paléolithique supérie uret leur signification. Compte Rendu de la XIV Esession, Genève, 1912.) による。邦文としては、大山柏「歐洲舊石器時代」後編(考古學講座、昭和四年) 五三頁以下參照。

（2）魚類遺骸の極めて多量に遺存されてゐた貝塚としては、例へば、北足立郡新郷村貝塚、牡鹿郡高木村沼津貝塚、板橋區志村小豆澤貝塚等がその著しいもの丶一つである。

（3）魚類の主要體形を分けて四とする。「あゆ」の如きを基本形若くは紡錘形（fusiform）、「まながつを」の如きを側扁形（compressiform）、「あかえひ」の如きを縦扁形（depressiform）、「うなぎ」の如きを、うなぎ型（anguilliform）若くは延長形（elongated form）と云ふ。内田惠太郎「魚類圓口類頭索類」（岩波講座〔生物學〕昭和五年）六―八頁參照。

（4）内田惠太郎、前掲書、一六、一七頁。横山次郎「魚類・兩棲類・爬蟲類・鳥類」（岩波講座〔地質學及び古生物學〕昭和六年）一三、一四頁、參照。

（5）事實私自身諸書を見たが是に概當するものも發見し得ず、一應は專門家に御尋ねしたのではあるが、實物もない事だし、空で學名を求める等は到底望み得ない事である。

（6）田中茂穗「魚類講話」（岩波講座〔生物學〕昭和六年）五五、五六頁、參照。

（7）K. Kishinouye: Prehistoric Fishing in Japan. (Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo, Vol. II, No. 7. (1911) Pl. XXVIII, Fig. 110 & 112. 等參照。

（8）私共が骨骼標本を作るために、魚體を砂等に埋めて置く場合にも、軟骨は、所謂硬骨類の骨骼に比して遙かに早く腐朽するものである。

（9）岡田、内田、松田「日本魚類圖說」（昭和十年）三六頁。Harmar, Herdman, Bridge, Boulenger: Fishes, Ascidians, Etc. (The Cambridge Natural History, Vol. VII.) pp. 182―192. 横山次郎、前掲書、一二頁、等參照。

（10）横山次郎、前掲書、一三頁。

（11）尾棘の質について明記せる文獻を發見し得ないので、詳細は不明である。

（12）エヒ類の尾棘に關する纒つた文獻は遂に見出し得ないので、D. S. Jordan, S. Tanaka, & J. O. Snyder: A Catalogue of the Fishes of Japan. 1913. 岡田、内田、松田「日本魚類圖說」（昭和十年）、田中茂穗、其他「水產動植物圖說」（昭和八年）等の挿畫、寫眞等によつて第二表を作つた。第二表によれば、「アカエヒ」科と「トビエヒ」科と「イトマキエヒ科」との三科に屬するもの丶みであるが、この三科に屬する他の種に於いても、果して尾棘が有るのかどうか、明かでない。

（13）帝大動物學教室富山一郎氏の御話による。

（14）極く常識的に、同一種内に於いては尾棘の大なるものは小なるものよりその體長が大であるとは云へるであらうが、尾棘が二倍大であるから體長も二倍あらうと云ふ事は斷定し得ない。斯かる研究は、多くの類例を並べて始めて爲し得る事であつて、從來研究された事がないとなれば、これ等については今の所全く不明である。

（15）例へば、毒腺のあると云ふ說は、岡田、内田、松田、前掲書の如きであり、無いと云ふ說は、田中茂穗「魚類講話」五一頁の如き

殆んど總ての骨角器が食料殘骸の廢物利用品である點[註]と同様であるが、「エヒ」類尾棘の形狀は、他の獸骨角等とは異り、既に完全なる刺突器としての機構を有してゐる。その兩側に、逆生する鋸歯を備へてゐる點はそれが天然の所產とは云へ單なる尖頭の刺突器よりも、形式上一歩進歩せるものと云へるのであつて、斯かる形狀は歐洲舊石器時代に於ける骨銛進化の過程の第二階梯として、マグダレニァン (Magdalénien) に見る、有歯骨銛 (Die gezänte Knochenspitze) と同様のものであり、[註]更に降つて新石器時代にも見る所である。

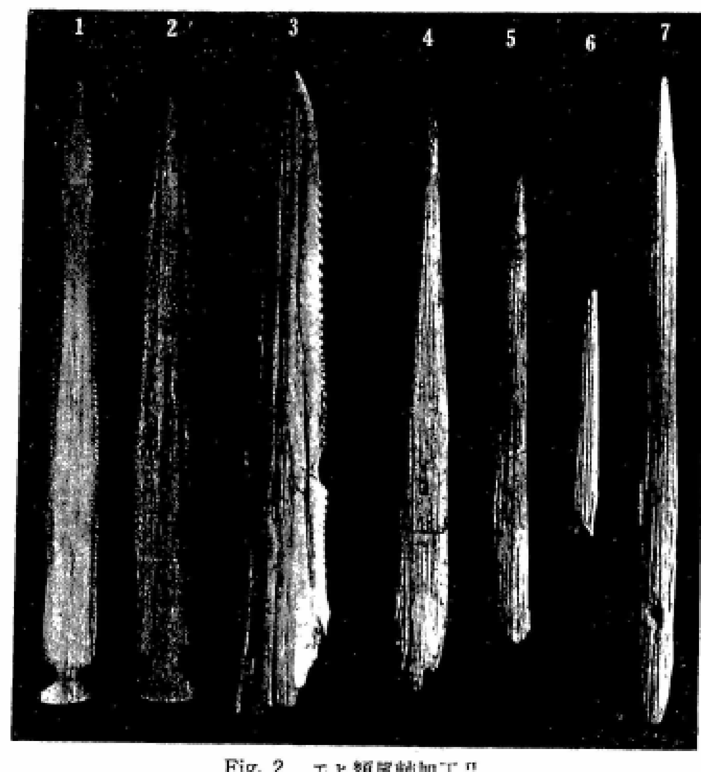


Fig. 2. エヒ類尾棘加工品

我が石器時代の骨銛と「エヒ」類尾棘との形狀の比較、その相互關聯の有無、その零との關係に於いても、又、「エヒ」類尾棘利用の時間的空間的分布範圍等に於いても、多くの問題が殘されるのであつて、今後斯かる方面の研究にも進みたく思ふのであるが、幸に、諸先輩の御教示御叱正を賜らん事を希ふものである。

最後に、種々懇切なる御教示を賜り或は御紹介の勞を執られた、帝大動物學教室常山一郎、帝大生化學教室佐藤金治同保坂一郎、川本信之の諸氏の御好意に感謝するものである。

註

（1） 諸種遺跡とは、貝塚、洞窟、竪穴、遺物包含地等を指すのであるが、通常、貝塚洞窟等以外の遺跡からは殆んど骨骼類は發見し得ないし、貝塚等と雖も、場所によつては、獸類魚類の遺物を發見し得ない事もある。

第三表

エヒ類發見地名表（大山史前學研究所藏品）

地方	番號	遺蹟	遺骸部分名	發表書
東北	(1)	陸奥國三戸郡是川村一王寺遺蹟	尾棘（加工・針）	宮坂光次 史前學雜誌二ノ六
	(2)	陸前國桃生郡宮戸嶋村里濱貝塚	尾棘	
	(3)	常陸國猿島郡文間村小文間中妻貝塚	尾棘（*Trygon akajei*）	甲野勇 史前學雜誌一ノ一
關東	(4)	下總國香取郡良文村貝塚	（*Trygon akajei ?*）	宮坂光次 史前學雜誌一ノ五
	(5)	武藏國南埼玉郡豐春村花積貝塚	齒	
	(6)	下總國東葛飾郡關宿町元町儀台貝塚	尾棘	
	(7)	武藏國北足立郡新郷村東貝塚	齒	
	(8)	武藏國北足立郡三橋村並木貝塚	齒	
	(9)	武藏國東京市板橋區志村小豆澤貝塚	齒	
	(10)	武藏國都筑郡新田村高田貝塚	尾棘（加工・銛先）	
	(11)	武藏國横濱市鶴見區下末吉小仙塚貝塚	尾棘（*Dasyatis sp.*）	大給尹 史前學雜誌七ノ四
	(12)	武藏國横濱市神奈川區青木町三ッ澤貝塚	齒	
	(13)	武藏國横濱市神奈川區菊名貝塚	尾棘（加工・針3）、齒	

種名も、その大きさをも遙かに知る事は出來ない事になる。これ等が分明する事によつて、更に史前漁撈に關する考察を進める事が出來るのであるが。

「アカエヒ」の尾棘には激烈な毒があつて、これに螫されると著しく疼痛を感ずる由であるが、毒腺があると云ふ説と無いと云ふ説とがあるらしい[15]。毒腺の無いと云ふ方は、尾棘を被つてゐる粘液に毒があるのであらうと云ふらしいが、その研究も、毒そのものについての研究も寡聞にして知らない。又、「アカエヒ」以外の尾棘ある種類に於ても、毒は有るのかどうか、それさへも解らない。先に書いた「ヌタエヒ」を釣り上げた漁夫は、その強力な尾部とその毒を恐れて、釣り上げると直ぐに、是を切り落したと云ふが、斯かる毒に關する認識を史前民は如何なる程度に有したであらうか。これと共に思ひ起す事は、河豚の毒であるが、「エヒ」の場合には河豚の場合よりも、利器の補助手段としての毒の利用に於いて、更に直接的な關係を見出し得るのである[16]。

「エヒ」類の遺骸——齒及び尾棘は屢々貝塚より發見される事は先にも述べた如くであるが、古く故岸上博士はアカエヒ（*Trygon akajei*）及びトビエヒ（*Myliobatus tobijei*）を各々四個所より檢出されて居る[17]。

今、大山史前學研究所々藏品を見ると第三表の如くである[18]。

第三表にもある如く、尾棘の中にはこれを利用せる加工品がある。尾棘は既述せる如く、質も强固であり、鋭い尖端と、鋭利な逆生する鋸齒を備へた立派な刺突器を成すものであるから、是をそのまゝ利用すれば、槍や銛の先となる。只これを取付けるに便なる樣に僅かに加工すれば足りるのである。下總國餘山貝塚發見品[19]は根元を棒狀に作り、陸前國沼津貝塚發見品[20]（第二圖1・2）は根元の兩側に凹みを作り、先端を更に鋭くするために兩側を僅かに削つた樣である。武藏國高田貝塚のそれ[21]（第二圖3）は、尾棘の全長の下半部より成り、削つて尖端を作つてあるが、一旦折れた物を繕つた樣にも思はれる。

この他、兩側の鋸齒を削り取り、表面を滑かに磨いて、針と爲したものがある。これには、下部に穴を穿つたもの[22]（第二圖6・7參照）と、穴のないもの[23]（第二圖4・5參照）とがある樣であるが、尾棘の鋸齒を殘して銛先等に利用したものゝ方が、一般に針等に加工したものより原形が大型品であるのは、その利用が誠に巧みになされてゐたものと云へよう。

「エヒ」類漁獲の目的が食料にあつた事は云ふ迄もない事[24]であり、尾棘加工品は、その廢物利用に過ぎない事は、加工されざる尾棘が多く發見される事でも知り得る所である。それは恰も

琺瑯層を被り、内部には髓腔があるので一名皮齒（dermal denticle）と云はれてゐる。[9] 斯かる質を有する楯鱗は、哺乳類の齒牙と同樣に遺存する筈であるが、寡聞にして、貝塚等より是が發見せられた事を聞かず、又、私共自身も是を得た事がない。恐らく、それが細小である爲め、見落してゐたのであらうが、是を發見する時はこの楯鱗の形狀から、種類鑑別にも役立つものが有らうと思はれる。

「エヒ」「サメ」の齒は、又、その鱗と同質である。是等の種にあつては、皮の中にあつた楯鱗が擴大されて齒の働きをする樣になつてゐるものであつて、畢竟、その齒と稱するものは鱗の變形に過ぎない。只、形狀には「アヲザメ」の齒の如く銳利にして捕獲齒型を爲すものと、「トビエヒ」の如く磨碎に適する形のものとの差がある。[10] 是等の齒は堅固であつて保存にも適するのであるが、事實「エヒ」類の齒は貝塚等より屢々發見せられる。

次ぎに尾棘であるが、これも恐らく、楯鱗と同質のものであらうと思はれるから、[11] 遺存に適する事は前者と同樣であつて、事實貝塚から發見した例も可成り多い。只、尾棘は「エヒ」類の中、種類によつて有るものと無いものとがある。私の知り得た範圍に於いて、尾棘を有する「エヒ」類は次の如きものである。[12]

以上の表にも示した如く、尾棘は種類によつて多少異つてゐる樣である。けれどもその形狀は素人眼には殆んど區別がつき兼ねる程似てゐる。帝大動物學教室の標品を見せて頂いた所によると、全體長に於いては小さい「ツバクロエヒ」の尾棘は全體長に於いてそれより大きい「アカエヒ」の尾棘よりも遙かに大きいものであつたが、大きさ以外には、この二種を區別する特徵を見出し得なかつた。

であるから、私共には、今の所、貝塚から發見される尾棘のみからその種名を知る事は困難であり、尾棘の個數は魚の種類によつて異るものではなく、魚の個體によつて一個より三個位までの變化があるらしいから、[13] 尾棘の個數は直ちに魚體の個數を示すものではない事になる。尾棘の大きさを魚體の大きさとの關係に於いても簡單には云へない樣である。同一種內に於ける尾棘の大きさのみを考へても、その大きさが魚體の大きさと如何なる比例を有するか、魚體の大きさの增減と尾棘の大きさの增減とが如何なる比を有するか、[14] 更に尾棘を數個有するものに於いては如何であらうか、これ等に關する研究が有るのか無いのかも私は知る事が出來なかつた。

以上の理由から、貝塚發見の尾棘から、これを有した魚體の

るかを考へて見たい。

先にも述べた如く、エヒ類は、軟骨魚類と云ふ文字が示す如く、軟骨より成る魚であるから、その內骨骼は、貝塚等に於いて永く遺存するには不適當のものである。尤も、現に貝塚より屢々軟骨魚類に屬するもの々脊椎骨を發見するから(7)、全然不可能と云ふのではなく、所謂硬骨魚の骨骼の遺存性に比しては劣るものと思はれる(8)。

この內骨骼に比して、軟骨魚類の有する外骨骼は遙かに遺存に適するものである。先に「ヌタエヒ」の鱗を述べた時に少しく觸れた如く、「サメ」に於ても「エヒ」に於ても、その鱗は一般硬骨魚類のものとは著しく相違せるもので、(第一圖2參照) 楯鱗 (placoid scale) と稱されてゐる。楯鱗は是等軟骨魚類に限られて存するものであつて、その外骨骼を爲し、形狀は六角形、星形、葉形等をなしてゐる。その構造は齒と同樣に最外側には

第二表

	尾棘 (Caudal spine) ある Batoidei	尾棘の數・性質
アカエヒ科 Dasyatidae	アカエヒ *Dasybatus akajei* (Müller & Henle)	1個—3個强大
	ズグエヒ *Dasybatus zugei* (Müller & Henle)	
	ツバクロエヒ *Pteroplatea japonica* Temminck & Schlegel	頗る弱小
	ヒラタエヒ *Urolophus fuscus* Garman	强大
トビエヒ科 Aetobatidae	トビエヒ *Miliobatus tobijei* (Bleeker)	1個—2個稍大
	マダラトビエヒ *Aetobatus narinari* (Euphrasen)	
イトマキエヒ科 Mobulidae	イトマキエヒ *Mobula japonica* (Müller & Henle)	1個—2個

第一表

Class 綱	Subclass 亞綱	Order 目	Suborder 亞目	Family 科	文献
PISCES 魚類	Ela-mobranchii 板鰓類	Plagiostomi 横口類	Tectospondyli 椎類	*Batoidei* えひ類	内田「魚類圓口類頭索類」昭和五年
PISCES	Elasmobranchii	Plagiostomi	*Batoidei*	1. Rhinobatidae　さかたざめ科 2. Platyrhinidae　うちはざめ科 3. Rajidae　がんぎえひ科 4. Torpedidae(=Narcobatidae) しびれえひ科 5. Pristidae　のこぎりざめ科 6. Dasyatidae　あかえひ科 7. Myliobatidae　とびえひ科 8. Mobulidae　いとまきえひ科	岡田、内田、松原、「日本魚類圖説」昭和十年
PISCES	Selachii 鮫類	*Batoidei*		1. Rhinobatidae 2. Narcobatidae 3. Rajidae 4. Dasyatidae 5. Aetobatidae　とびえひ科 6. Mobulidae	Jordan, Tanaka, Snyder: A Catalogue of the Fishes of Japan. 1913.

素人である私の、而も慌たゞしい觀察と簡單な記載では、この方言「ヌタエヒ」の學名を、專門家にお尋ねした所で分明する筈もない。[7] 只、私の知り得た範圍では、その形態は「アカエヒ」によく似てゐるが、漁者及び魚商の言に依れば、「アカエヒ」とは異る由であり、不味の理由から、全重量十五貫もあり、横たへると一坪にも近いこの魚が僅か八十錢で取引されたのを見、「アカエヒ」ならば五、六圓位するであらうと云ふ事を聞いた。その安價なのには、私共も驚いた事ではあるが、是を漁獲した漁夫等からも、苦心した甲斐がないと嘆ずる聲を聞いた。

十五貫の「ヌタエヒ」を釣り上げた釣針は、太さ五粍の鐵棒を曲げた、長さ六五粍程の大型のものであり、是に三—四〇糎の長さの鐵線を結び、更に是を太いロープに繋いだ漁具であるが、これで、三十貫位までの鮫をも釣る事が出來ると云ふ。餌には三〇糎位の鯖の生餌を丸剌にして用ひた由であるが、この太いロープを二度迄切られ、三度目に三人掛りで引き上げたとの事である。

II

「エヒ」の類は所謂軟骨魚類である。私共には魚類を二大別して軟骨魚類 (Chondrichtyes) と硬骨魚類 (Osteichthyes) とし

た、古く行はれた分類學上の言葉の方が、よく解る樣な氣もするのであるが、此分類も全然廢されたわけではなく、今日も相當に採用されてゐるらしい。けれども、從來の一般動物學書には、軟骨魚類は板鰓類 (Elasmobranchii) と稱されて來てゐる。板鰓類の中には四目あつて、二目の絶滅種族と二目の現生種族がある。現生のものゝ一つは全頭類 (Holocephali「ギンザメ」)であり、他は、「サメ」「エヒ」を含む横口類(Plagiostomi)である。又、狹義に云へば、サメ類 (Selachii) と云ふ言葉の中には、「エヒ」や「ギンザメ」は含まれないのであるが、「エヒ」の類を含めてゐる事も相當に多く、更に是に「ギンザメ」を加へて云ふ場合も稀にはあるらしい。[8]

斯かる分類學上の事柄は、種々難かしい議論がある事ではあらうが、私などには到底解らないものであり、只繁雜と感ずるのみではあるが、これらを簡單に表示して「エヒ」の類の分類學上の位置を示して置きたい。

IV

以上述べ來つた「エヒ」類の遺骸を、自然遺物として貝塚其他の遺跡から私共が求め得るとすれば、如何なる部分であらうか。又、それ等から如何なる事柄を史前學に寄す事が可能であ

至るまで生えてゐる棘がこれには無かつた樣である。尾棘は尾の附け根から餘り遠くない尾の背面に、大小二本が一個所に殆んど重なつて生えてゐた。體色は暗褐色無紋、皮膚は滑かであるが、強い彈力のある尾部のみには一面に、中央に突起のある敷石狀の鱗が密生してゐて、二本の尾棘と共に、有力なる武器を構成してゐる。その體長、卽ち吻の先端から尾の附け根まで約一四〇糎、尾部の長さ約一三〇糎、幅卽ち體の左右兩側をなす胸鰭の邊から邊まで約一五〇糎、全重量約十五貫(約五六瓩)ばかりであつた。

齒も恐らく、「アカエヒ」「トビエヒ」等と同樣に磨碎齒 (grinding teeth; Mahlzähne)[2](第一圖3參照)であつたらうが、何分、この「ヌタエヒ」を觀察した場所が魚市場の事であり、混雜した競賣の最中であつて、充分に見たい中に、現物は賣買されて了つたので、今その齒に就いては殘念乍ら全くわからない。只、魚商には不用な軟骨骼の一部と、漁夫がこれを釣り上げた時に切り落して了つた鞭狀の尾部のみは、私共が貰ひ受けて歸つた。その尾部に生えてゐた二本の尾棘は、一つは全長一八五粍、他は一三五粍を有し、兩者とも兩側に無數の細かい鋭利な逆生せる鋸齒を具へた劍狀のもので、その表面は暗褐色の粘膜樣のもので覆はれてゐたが是を洗ひ去ると棘そのものは眞白であつて、縱に數條の細溝が認められる(第一圖1)。又、尾部の表面を覆つてゐた鱗は、この尾棘と同質、同色であつて、私共の普通鱗と云ふ概念とは大部かけ離れた形狀である。昔時、刀の柄に貼られ、今日も軍刀の柄に用ひられる鮫皮と云ふのは、卽ち鮫の鱗であるが、「エヒ」類の鱗も是に似たもので中央に突起のある敷石狀のものである。この「ヌタエヒ」のそれ(第一圖2)は大小種々あつたが、大なるものは、一三—四粍位の略圓形をなす基部の中央に高さ三—四粍位の突起を有するものである。

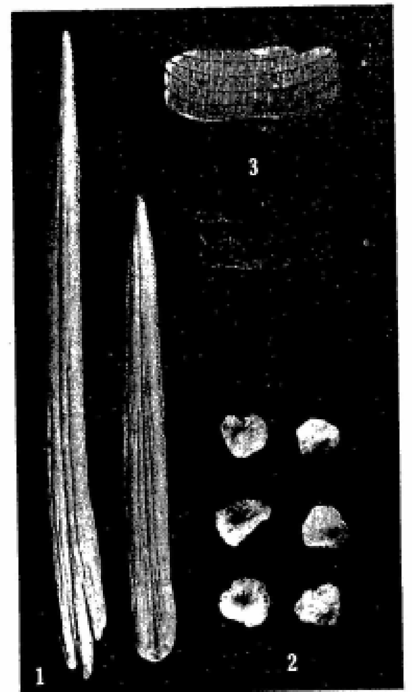


Fig. 1. 1—エヒ類尾棘(現生)
2—鱗(現生)
3—齒(貝塚出土)

史前漁撈關係資料としての エヒ類(Batoidei)に就いて

大給　尹

I

我が石器時代の諸種遺蹟、殊に某種貝塚の發掘に際しては殆んど常の如く幾干の魚類の遺骸が發見される事は周知の事實であるが、(1) 屢〻極めて多量に遺存されてゐる場合に遭遇する事がある。(2) かゝる遺物は、通常獸類の遺物よりも細小であり、從つて眼にとまり難くもあり、又より脆弱であるから形を毀さずに採集するに困難を感ずるものが多い。斯かる苦心を致てして持ち歸つた遺物——魚類の齒や骨や鱗を前にして常に感ずる事は、それが微細にして整理に困難な點と、僅か一片の魚骨から種名でも科名でも、それも出來ないならば、せめて目 (Order) 名でも知りたいと願ふ事である。事實、魚類の專門家でない私には、魚骨の一片を見乍ら、それが魚のどの部分を構成してゐたものであるかさへ見當がつかない事も屢〻であつて、殘念に思ふのであるが、さりとて一々專門家を煩す事も出來難い。出來れば自ら或る特定の種類位は檢出し得る樣になり、又、貝塚發掘者としての私の魚類に對する常識と、更に細かい發掘に對する注意點と、それによつて、幸に漁撈其他に關する何らかの資料でも得らるゝならばと、常に希つてゐるのである。

處が、今夏、沼津海岸に一ケ月半ばかりを送るに際して、幸に年來の希望の如く、僅か數種ではあるが、自ら魚類を解剖し、貝塚發見品に對する比較用の骨骼標本を作る機會を得、僅かばかりの知識と、多くの疑問を得たのである。今その一つを此處に記して、大方の教を乞ふ次第である。

II

沼津市我入道海岸の發動機船大瀬丸（二十噸）が八月某日伊豆七島の新島附近で漁獲して來た、方言「ヌタエヒ」を魚市場に實見し、その骨骼の一部を貰ひ、更にそれを漁獲した人々から漁撈の方法等に關して聞き及んだ事柄を簡單に述べて見たい。

この「ヌタエヒ」の形態は、大體アカエヒ (*Dasyatis akajei*) に似て、體は著しく扁壓せられ盤狀をなした所謂縱扁形 (depressiform) (3) であつて、吻は僅かに突出して鈍く尖り、口は腹面に開き、尾部は細長くして殆んど鞭狀をなしてゐる。けれども「アカエヒ」に見る如き、背の正中線の尾棘 (caudal spine) に

つた。此等は此の地方は那須嵐が强いと言ふ事であるから、保强の意味で北に向つて傾斜をつけたものではなからうか。又深さ十糎内外の淺いものが十一個所あつたが、此等は前述の如く、竪穴の周圍に石積を行つたものもあり、又河原石が無數存したから、柱を立てるとしても、深く掘り立てることをせずとも、柱の周圍に石を積んで支へる事に依つて用を足したものとも考へられる。

爐　跡　爐跡を七ヶ所發見した。第一號の爐は、第一竪穴と第二竪穴とが接した所に設けられたもので、石で圍まれたもの、第二號の爐は、第三竪穴の中央に設けられたもので、前述した如く、注口土器が存したもの。第三、第四號の爐は、第五竪穴の上部に設けられたもの、第五號の爐は第七竪穴に屬するもので、爐として特別の工作はないが、煉瓦狀を呈し、その燒土の厚さは、一番厚い所で四十糎もあつた。恐らく、或る長期間、可成りの程度に火熱を受けた事が想像せられる。第六號の爐は第九竪穴の東方一米を距てた所にあつて、長徑四十糎の不整楕圓形を呈したものである。而も此の中央には第三類土器に屬する一個分の土器が存した。第七號は、第十竪穴の床面の壁に接した部分にあつて單に焚火の跡を止むるのみで爐跡とは云ひ得ないかも知れない。以上七個の爐の中、竪穴内にあるものは、第三竪穴に於けるものゝみで、他は何れも竪穴の外部にあり、殆んど、ローム表面上に設けらる。從つて、爐を中心として設けられた竪穴は少なく、他の地方に於けるものと比較すれば一特異相として舉げる事が出來る。（以下次號）

たもつく作を出の物遺は床、の穴竪

第十竪穴　徑一米四十糎、深さ一米、黒色有機土が軟く充滿してゐた。黒色土中には、木炭、灰輕石、河原石等が含まれてゐた。土器は甚だ多く、大破片が多い。即ち第三類土器百四十二片、第四類土器九十二片を出土した。

第十一竪穴　此の竪穴は精確に云へば四個の穴よりなつてゐる。即ちA・B・C・Dよりなる。Aは軟く、第三類土器に屬する大形土器を出土した（第十五圖D）で、Bは褐色の硬い土が充滿し第二類土器數片を止めたに過ぎない。又此のBの底部には壁に接した部分に焚火の根跡を止めたが、深い竪穴の內部で焚火した根跡のあるものは、本遺蹟に於ける唯一のものである。A・B共に床面は同一のレベルにあり、同じく青砂が敷かれてあつた。C・Dの內部は褐色を呈する硬い土であつて、C・Dの床はA・Bよりも二十糎淺い。而して青砂は敷かれてない。C・Dより出土した遺物は殆んどない。

以上十一個の竪穴を發掘した。尙此の他、前述の如く、村道の道路壁面や畑の溝に竪穴の斷面が七個見られる。何れも發掘を行つたものと變りはなく、發掘區外にも尙多くの竪穴の存する事を知るに足る。

柱　穴　口徑十五糎乃至二十糎、深さ五十糎內外のものである。此の穴は竪穴の周圍に四個乃至六個が附屬する樣であるが、竪穴が近接してゐる場合、何れに屬するものか區別が付かないので、不本意ながら別に記述する事にした。柱穴と思はれるものは、全部で七十六個發見した。柱穴は或る一定の間隔に設けられてあるものもあるが、中には竪穴內部にあるものや、離れた所にあるものがあり、又數個が殆んど一個所に集つて設けられてあるもの等があつて、柱穴の位置と數量との配合等より、當時の建築樣式を求める事は頗る難しい事である。

又、柱穴は垂直設けられてゐるものが普通であるが、北にに向つて傾斜をつけて設けられてあるものが四個あ

竪穴と同様圓柱形の穴で底部は青砂が敷かれてある。



Fig. 9. 第八、九、十、十一竪穴

第九竪穴

徑一米四十糎、深さ八十糎の圓柱形の穴である。黑色有機土が軟かく充滿し、土器片は多量あり、而も大破片が多い。又、竪穴の上部の周圍に接して、柱穴が四箇設けられてある。而も此の中一個は斜に柱を立てた跡が明瞭である。土器は第三類土器百三片餘、第四類土器百三十四片出土した。

接して六個の柱穴があり、内一個は竪穴の内部にあり、又、不規則な大小の穴が接して存したが此等は如何なる種類のものか判斷に苦しむものがあつた。遺物は竪穴の中央に四個分の土器が破碎して存した。即ち第十五圖A・B・C及び第二十圖の淺鉢の土器である。第十五圖Aに示す土器は、壁面に接して一部ロームに喰ひ込んで發見された。本竪穴よりは第二類土器の完全なるもの四個、他に同類破片五十六片、第三類土器百五十片餘、第四類土器は僅に十二片に過ぎない。





Fig. 8. 上圖一第五、六　竪穴
下圖一第十、十一竪穴

第八竪穴　徑一米四十糎、深さ八十糎の深い穴がある。黒褐色土の硬い土で充満されてゐた。遺物は第三類土器のみにして二十七片殘したに過ぎない。黒褐色土の中には火山灰が豊富であり、輕石、炭等を検出した。第六

穴に於ける如き、特別な工作は見られなかつた。

第五竪穴　學友大給尹君が發掘されたものである。此の竪穴は二つの生活面が明に重複した事實が認められる頗る興味ある穴である。表土下二十糎の所に一種の敷石を行ひ、此の敷石の一部には石で圍つた爐趾があり、又同一、レベル上に土器の口縁部及び底部を缺いたものを埋めた爐趾が存し明に生活面の一つが認められた。更に此等を除去して發掘を續けると徑一米八十糎、深さ一米の正圓に近い竪穴となつた。卽ち此の竪穴の直上が最初の竪穴を排棄し、其後に其直上に第二の生活面を置いたものである。竪穴底部近くは硬い褐色土が充滿し、床面には青砂が敷かれてある。遺物は甚だ少量で底部に近く、第一類土器二片、第二類土器、第三類土器各八片及び、底部に接して石皿片二片を得た。敷石ある第二の面の近くには土器片少なく、第四類土器四片を得たに過ぎない。

第六竪穴　戸畑逆治氏が御助力の上、主として發掘せられたものである。竪穴は圓形で、徑一米三十糎、深さ九十糎の、極小さいものである。床面は青砂が同じく敷かれてあり、內部は褐色土の硬い土が充滿し、發掘には頗る困難の樣であつた。遺物は甚だ少なく、第三類土器二十五片と第二類土器三片を得たのみで、第四類土器はない。

第七竪穴　此の竪穴は主として同學の土岐仲雄氏が終始發掘されたもので、同氏の勞を多と致し度い。竪穴の表面には河原石が一面に敷かれてあつた。但し此の石は整然と敷かれたものでなく、凹凸の甚だしいものであつた。此の石を除去した結果、圓形の竪穴を發見した。卽ち徑一米六十糎、深さ四十糎の比較的淺いものである。竪穴の床面及び壁面附近は、火熱を受けた根跡が明で、殆んど煉瓦狀に硬く燒けた部分もあつた。此の竪穴に近

二十六片、第四類土器四十二片、把手三等を發見す。



Fig. 7. 第五竪穴

第四竪穴　第三竪穴に次いで發見されたものである。二個の穴が連結したもので形になつて存した。即ち第四圖の如くA・Bとする。Bは殆んど褐色土を充滿し且つロームを混じ、從つて內部は非常に硬い。Aは黑褐色を充滿するが、Bに比し軟かい。然し第三竪穴の內部よりは幾分硬い。恐らく、A・Bの穴を同時に掘開したものでなく、Bが最初に設けられ、此れが排せられて後Aが掘開されたものであらう。Aを掘る際、Aより生じた土をBに捨てたものと解せられ、又Aは第三の竪穴の淺いのを掘る際に、Aにも若干投げ捨てられた結果、內部の堅さが各々違つて出來たものではなからうか。遺物に於いても土器の種類が各々異り、其の出土量が違ふ。即ち、Aは第三類土器は十九片、第四類土器は細片が十六片出土し、Bは、第二類土器は六片、第三類土器は二十二片、第四類土器は僅に三片に過ぎない。尙、A・B共に口徑一米六十糎深さ共に九十糎あり、底部に至るに從つて廣がりを見せて居り、同じく靑砂を床面に敷く。竪穴の上部には河原石が多數存したが、第一竪

同じく廣がり氣味で、青砂が敷かれてあつた。第一と相違する點は、有機黒色土の中に拳大の輕石が數個發見された事である。遺物は竪穴の直上に於いて、完形な第四類土器一個を出土し（第十八圖A）、内部よりは第三類土器片十六片、第四類土器八片を得た。

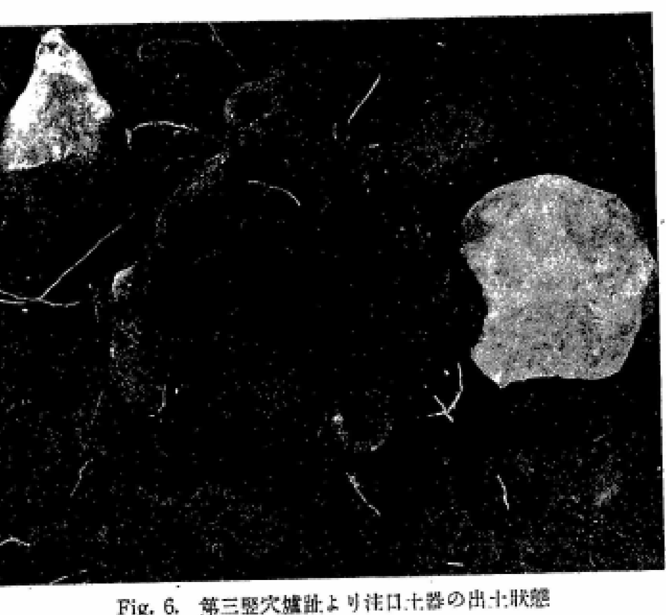


Fig. 6. 第三竪穴爐趾より注口土器の出土狀態

第三竪穴　口徑一米六十糎、深さ三十糎の極く淺い圓形のもので、本遺蹟の竪穴中一番淺いものであつた。有機黒色土が充滿し、内部は軟い。竪穴の中央に第九圖及び第二十圖の双口の台付注口土器が完全に發見せられた。此の注口土器の出土狀態は特筆したるものがある。卽ち石で圍んだ小さい爐があり、更に厚手土器大破片をこの爐にかけ渡した上に注口土器が、當時を語るもの丶如く、整然として發見されたのであつた。又、竪穴の底の周圍に河原石が環らされてあつた。第五圖は、發掘に際して、石を取り上げてしまつた後に原位置に復したものであるが、圖に見られる如く發掘の不用意さを遺憾なく發揮してゐる。此の竪穴に限つて床面の青砂がない。又、此の竪穴は台地の斜面に近く設けられてる關係からか、穴の外緣に排水工事を行つたもの丶如く、ローム面を長く數條の溝に斜面に向つて削られてあつた。遺物は注口土器の他に、第三類土器

ら底部にかけた三十糎の高さの部分が穴一杯に埋まつて發見された。而して此の土器の口緣部は第一竪穴の底部に近く發見され、接合の結果、圖版第七のAに見られる如き大土器となつたのである。此の出土狀態は後述する如く頗る興味あるものと云はなければならない。



Fig. 5. 第三、四竪穴

遺物は此の大土器、及び圖版第七のBの把手のある大土器、並に椀形土器（第十八圖B）、何れも後述の第三類土器に屬するものが底部に近く發見され、上方には第四類土器十七片を發見したのみである。

第二竪穴　第一竪穴同じく、第一回の發掘に際して發見したものである。第一竪穴の南方四十糎を隔てゝ存した。徑一米二〇、深さ九十糎の比較的小さい竪穴で、第一と同じく有機黑色土が充滿し、底部は

を容易に發見する事が出來た。此の結果、第四圖の如く、大小の竪穴、柱穴、爐趾及び不整形の穴が、數多く、相接近して發見せられた。竪穴の或るものは重複してゐる事實が歴然たるものがあり、或は相互間に竪穴構築時に於ける時間的經過が明瞭なもの等があつて、個々に此等を取り扱ふ事を許されないものがある。卽ち一個の竪穴に對して、此に附屬する柱穴、爐趾等を判然と摘出する事が出來ない。一般に竪穴と云へば柱穴、爐趾等を含めた竪穴住居跡を意味する樣であるが、本報告に於ては、記載の便宜上、竪穴と稱するものは、個個の穴そのものを意味し、柱穴、爐趾等を含んでゐない事を豫め御了解を願つて置く。

第一竪穴　此の竪穴は第一回の調査の際發見したものである。竪穴はローム層中に圓形に掘り下げて設けられてゐる。上部の徑は一米七十糎、底に至るに從つて廣がり、底徑一米九十糎あり。深さ九十糎ある。發掘に際して、竪穴の內部は黑き有機土が充滿して、甚だ軟く發掘に容易であつた。竪穴底部は踏み固められた如く、特別に堅く、而もその上に靑砂が約三糎の厚で、一面に敷かれてあつた。此れに對し、竪穴の周壁は、甚だ荒削りで、云はゞ、掘つたまゝとでも云ふか、粗雜であり、何等特別の工作が行はれてゐない。以上は本遺跡の竪穴の殆んどが共通する點である。尙他の竪穴と少しく趣を異にする點は、穴の上部の周圍に、河原石が無數に發見せられた。此等は竪穴の上部の周圍には石垣の如く二段乃至三段に積み上げを行つたものゝ如く、一部にその影跡を發見した。又、此の竪穴に附屬すると思はれる柱穴をその周圍に六個發見した。此の柱穴の三個は他の三箇に比し、淺くその周圍に石を環らしてあつた事から考へると、石を柱の支へとして、深く柱を埋沒せしめる手數を省いたものらしい。

又、此の竪穴と不可分の關係にあると思はれる甕形の穴を二十糎離れた所に發見した。此の穴に土器の胴部か

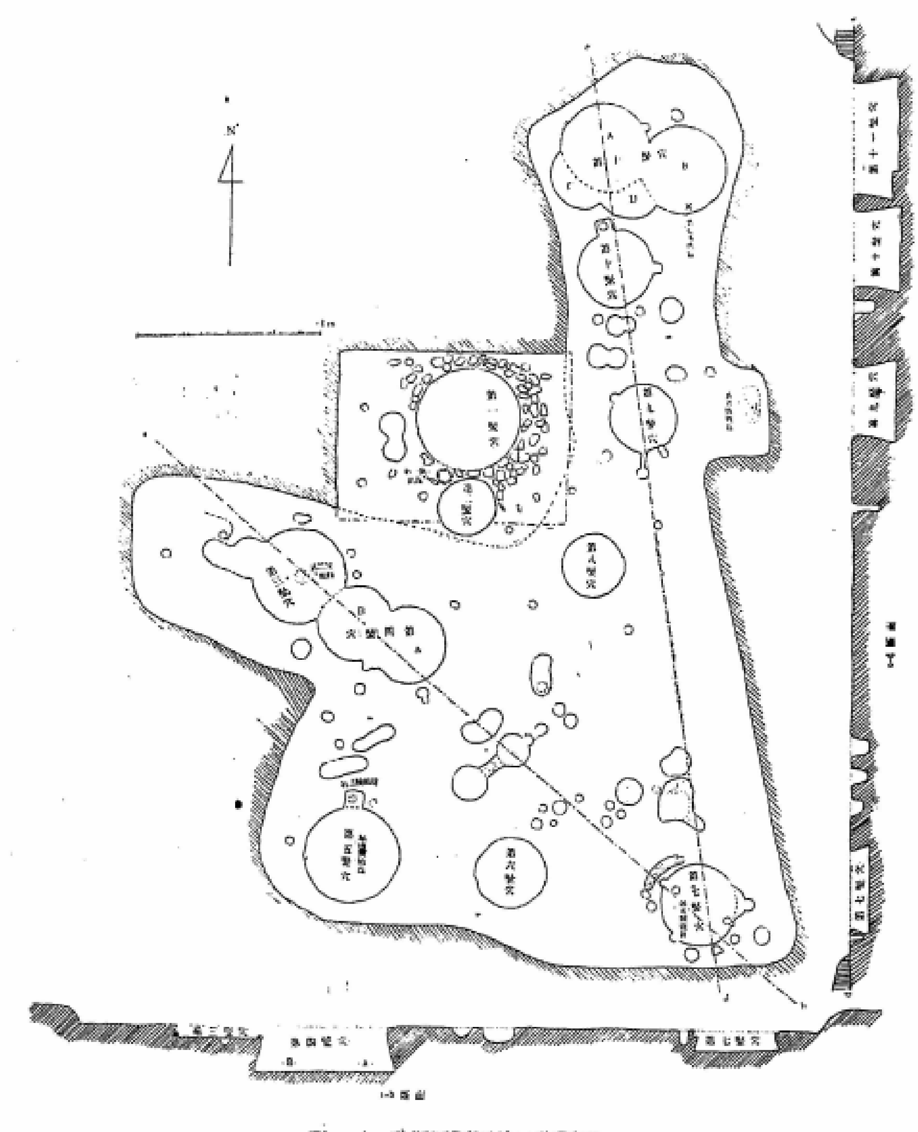


Fig. 4. 發掘平面圖並に斷面圖

發掘に際しては、遺物の發見は勿論望んだ所であるが、寧ろ竪穴斷面が一部に露出する關係から、竪穴住居趾の發見に主眼を置いた。

遺跡表面の表土は僅か十五糎から二十糎にしてロームに達し、此の表土をはがすことによつて、ロームに設けられた竪穴

現在、同地の高村藤五郎氏所有の畑及び雜木林となれる部分に、散亂露出せる多くの土器破片の分布を辿る事に依つて遺蹟の大容を知る事が出來る。卽ち東西約二百米、南北約百米、大略二町歩餘の頗る廣範圍に亙つてゐる。而も道路壁面及び雜木林と畑との境の濠の一部に、竪穴の斷面を見る事が出來る。

三、發　掘　發掘は前後三回行ひ、之に要した日數は二十二日間に過ぎなかつた。第一回は嚴寒の候であり、後の二回は五月空の惡天候の爲、發掘を妨げる事が多かつた。前回は自分一人で當り、後回は史前學研究所員一同と共に發掘を行つた。從つて、全發掘區に於ける私の觀察は十分を缺くものがある事をお斷りして置く。發掘を行つた地點は、前後を通じて第三圖の如く、遺蹟の西側部の雜木林中にして、東西十五米、南北十五米、約七十坪を發掘した。卽ち、土器散布の區域から云へば、その西側の一部にして、遺蹟の中心と思はれるものは畑地にあるもの丶如く、その地點は土器の散布狀態も密であり、燒石、焫土等が甚しく、掘り出されてゐる部分が認められる。又、畑境や路傍に、石器片、土器片が河原石に混つて、うづ高く積み上げられたものが二十一箇所にも及んでゐる。此等は耕作の爲、除去されたものが積み重つたもので、遺蹟の廣大な事、遺物の豐富な事を、發掘前旣に期待する事が出來た。

Fig. 3.　遺蹟附近一般地形圖

る丶加曽利貝塚E地點出土の土器に類似するものが最も多く且つ普遍的に見受けられた。又、此れに次いで我々が後期縄紋式土器と稱するもので堀ノ内貝塚出土の土器と同型式のものが多い。尚若干の古式土器と思はれるものも小範圍に分布してゐる事が見受けられた。以上の如く那須野ヶ原方面の石器時代の文化の大様を知る事が出來た。更に古墳群に至つては那珂川沿岸地方、特に那須國造碑をもつて著明な湯津上郷を中心とした沿岸方面に多く分布するもの丶如く、河川による上代文化の發達の過程が見られて面白い。

Fig. 2. 槻澤遺蹟遠望

其の昔、荊蕀榛莽の鎖す所は、野獸野鳥及び自然食用植物を主なる生活資源とする石器時代人には、却つて恵まれた天地と云ふべきか、今日こそ立派に開墾こそせられてはゐるが上古は兎も角も、史實の物語る那須野原とを對照すれば、頗る奇異な感にうたれる。

二、位置と地形　本遺蹟は栃木縣那須郡狩野村字槻澤（ツキノキザワ）、通稱、上ノ台と稱する洪積臺上にある。東北本線西那須野驛の北方約二粁の地點にあり。權見山と稱する標高二八一・七米の獨立丘陵の北緣に當り、蛇尾（ジヤビ）川の一支流である俗稱津雲川に沿つた丘上にある。卽ち那須高原の殆んど中央に所在する石器時代住居遺蹟である。遺蹟に立てば、北方遙に那須火山を望見し、遺蹟附近は坦々たる平原をなし、東京附近の貝塚遺蹟に見る如き高低差なく、其の地形の大觀を知る事は頗る困難である。僅に前記の津雲川に沿つた西側斜面のみが、その單調を破つてゐるに過ぎない。

ゐる。即ち、日本石器時代地名表第五版に網羅する所に依れば、那須郡に於ける遺蹟は六十三ヶ所に達す。而して、最近の調査に依ると、尚多くの遺蹟を發見し、殆んどその倍數を算するに至つてゐる。此の中、那須野原に存するものは、三十六遺蹟ある。此等は那須野原中の低丘陵上に存するものが多い（私の那須野原と稱するものは諸川の流域にある平原にして、廣範圍のものを意味する）。此の那須野原に於ける遺蹟にして地名表に記載なき石器時代遺蹟を列擧すれば次の如し。

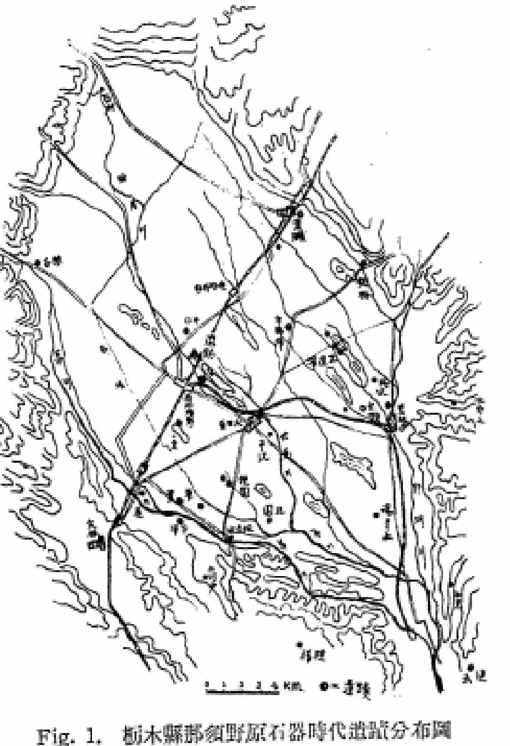


Fig. 1. 栃木縣那須野原石器時代遺蹟分布圖

那須郡狩野村槻澤（本遺蹟）　狩野村西富山、井口
大田原町富士山下　西那須野村南郷屋
西那須野村二室　東那須野村沼野田和
親園村花園小字小種島　親園村實取
親園村下平澤　親園村南區吉澤
親園村五本木　川西町檜木澤
金田村市野澤　金田村北金丸
金田村富池　金田村舟山
金田村奥澤　金田村松原

以上十八遺蹟がある。

尚調査を行へば多數の遺蹟を發見する可能性は充分あるものと信ずる。而して、縣立大田原中學校並に遺物所藏家の所藏品を拜見した所によると、遺物の主なるものは土器片にして、關東貝塚研究に於ける中期繩紋式土器に稍々同定せられる所のもので、所謂厚手の土器が主體をなしてゐる。即ち厚手退化型と稱せら

栃木縣那須郡狩野村槻澤石器時代住居趾發掘報告（其一）

池上啓介

緒言

昭和八年十二月十一日、表記の遺蹟を或偶然の機會から發見し發掘を行つた。次で、本年五月、第二、第三回第四回の發掘調査を行ひ、大略の研究を終了する事が出來た。

本遺蹟は、全く學界に於て、未知の遺蹟であり、又未知に近い地方でもある。私は本報告を以て、那須野原研究の第一歩とし、將來此地方の石器時代の研究を行はんとする希望を有するものである。從つて、本報告に於いては、單に發掘報告に止めて置く。發掘調査に當り大山史前學研究所員一同並に蓮池俊、戸畑鎭治、高村藤五郎、平山助右衛門諸氏の御援助並に御厚意を感謝致し度い。

遺蹟

一、一般環境　遺蹟の所在する那須野原は、下野國那須郡にある廣大なる平原であつて、西北には那須・高原の兩火山聳ゑ、東は常陸の國境なる八溝山地に限られ、南方に漸傾する箕形平原である。東西六里餘、南北十里餘、全部那珂川の流域に屬し、其支流箒川黑川蛇尾(ジャビ)川等が何れも西北より東南に向つて流れてゐる。此の諸水流は那須平原を滋す自然の恵であつたものゝ如く、石器時代の遺蹟は何れも此等の大小の水流に沿ふた地點に發達して

田戸遺蹟を世に出すのである。筆を擱くにあたつて田戸式土器の特徴を表示して參考に供する。

田戸式土器の特徴

土

○多量の砂を含むもの大部分
○白色微細物を含むものあり
○纎維を含むものあり
○雲母を含むもの僅あり

紋様

○沈線紋大部分を占め、數條の並行線の交錯よりなるもの多し
○刺突紋あり、沈線紋と複合紋をなす場合多し
○結節沈線紋あり
○隆線紋あり、多く刻目を有す
○貝殼紋あり、相當發達す
○縄紋僅あり、他の紋様との複合紋少なきが如し羽狀縄紋なし
○穀粒捺型紋、ジグザグ捺型紋あり
○條痕を存するものあり
○朱塗を存す
○紋様は腹部以上にあるもの多し
○紋様構成上に特徴あり、鋸齒狀V字狀配列をなすもの多し、渦紋僅あり
○紋様全くなきもの多し

形態

○深鉢形多きが如し、上方に少しく廣がるもの多し
○內彎、外彎するもの僅あり
○尖底、丸底多く平底僅なり
○胴に箍狀隆起帶を廻すものあり
○口緣にへ字突起あるもの、外緣に疣狀小突起あるものあり、疣狀突起頂には貝殼紋を加ふるもの多し

を認められた事と思ふ。遺跡の小さい割に石器の種類や數も相當あるし、石斧は楕圓形小形であり打石斧、半磨石斧共略同形同大であり、別に長形のものを伴ふ。片面自然石のまゝのものが大部分である事等が特徴として擧げられる。石鏃亦小形であり其の形式に於いて他と相違する事を認められた事と思ふ。石匙にしても其の形式の他と相違する點を認められた事と信ずる。更に土器は其の土質中に大部分砂を多量に含み、又白色微細物を含み、纖維を含むものも亦存する。其の紋樣に於いては沈線紋を主とし刺突紋、結節沈線紋、隆線紋、貝殼紋、繩紋、捺型紋等を存し之等の手法に於いて大いに他と相違し、其の類似が遠く九州、朝鮮にある事を認められた事頗る近似し、且茅山式土器にも類似を持つ事をも認められた事と思ふ。筆者は本土器がこの三浦半島に於いて三戸式土器に次ぐ古式土器であつて、三戸式土器と茅山式土器とを連ぐべき關係位置にあるものと信ずるのである。茅山式土器は其の同類を東京灣岸各地に發見されて次第に姿を明にし出してゐる。三戸式土器資料に乏しいため尚其の姿が不明瞭であるが之亦やがて明にされる日が來る事を信ずるものである。更に又本土器も同樣に何れ何處かで同類が發見されて姿を明にする日の來るべきを信ずる。三浦半島は今や古式土器を次々に出して關東繩紋土器文化の出發地であるかの如き感あらしめてゐる。何回にも渉つて調査した本遺跡も其れが處女地でなかつた事が之を充分闡明ならしめる事にさまたげをして居り、更に研究途上に於いて遺蹟が開墾をうけて更に遺物の埋沒狀況を混亂ならしめた。しかも此處を調査するにあたつて山内淸男氏と共同作業をなし上下層遺物上（特に紋樣）の相違の有無に兩者意見の相異を來してしまつた。發掘後發表の非常におくれた理由の一は此處にある。筆者は上下層中に特記すべき相違なきが如く考へるものであるが山内氏は此れに充分の相違を認められてゐる。其の點に對しては氏から御敎示がある事と思ふ。此處には自己の考ふるところを記して田戸式土器なる一形式を闡明し

いては肥前の戰場ヶ谷（考古學雜誌第二十四卷第五號三友國五郎氏）、肥後の御領貝塚（考古學雜誌第五卷第六號）、四國に於ては讚岐小蔦島（杉山壽榮男氏談）等から發見せられて居る。ジグザグ形捺型紋は前記各遺蹟に大體に於いて前者と共出してゐる。他更に朝鮮にて釜山府絕影島東三洞貝塚（前出）に於いて之を見る。以上の各遺蹟は未だ層位的研究の充分行はれて居らぬものもあるから、其れ等捺型紋が果して如何なる土器に伴出するか、其の古さ如何の世顯も今後に待たねばならぬが恐らく古式繩紋土器系統の或物に伴ふものかと考へる。

更に土器形式を見るに本遺跡に於いては完形品の出土なきため明確に之を論ずるをひかへねばならぬが、推定されたる形式より見て南鮮地方の釜山府絕影島東三洞貝塚土器に頗る類似を見る樣である。口緣—胴—底と見てゆくと如何にも似た感じである。內地に於いては未だあまり發見例の多くない尖底が此處から澤山出てゐる等どう見ても似てゐるのである。更に滿洲や北支那方面に於ける土器の中にも部分的に似たものがある樣な氣がする（東亞考古學—世界歷史大系2—の挿繪にて比較）。實物を見たのでないからあまり強い事を申されないが、本遺蹟出土土器や三戶式土器等は九州や琉球等の繩紋土器と共に朝鮮半島のものと連絡があり、更に大陸方面と連絡があるかの樣に思はれてならない。

石器についても比較する必要を感ずるがこれに對しては他遺跡のものについて確實なものを充分見てないから何とも言ひ得ない。石鏃にしても石斧にしても確かに相違あるものと思ふが之は他日更に研究してからにしたい。

結論

以上各項に於いて述べた所によりて本遺跡出土遺物は他の繩紋式遺蹟出土の遺物とかなりの相違を有すること

て舉げられる事は三戸式には無紋の殆どすべてに條痕があるといふ事、刺突紋が少ないといふ事、結節沈線紋のないこと、貝殼紋が少ない事、疣狀小突起のないこと、白色微細物を含まぬ事、纖維混入のない事、朱塗のない事、隆線紋のない事等があげられるのである。次に思ひ出されるのが茅山式土器である。纖維混入の土質や條痕の工合等に先づ類似點を見、更に刺突紋に、蚯蚓脹樣の隆起紋にし、其の上に着けられた刻目に、腹部に於ける橫狀隆起帶に、尖底に類似が認められるのである。しかし茅山式に最も特徴とする纖維多量混入と內外面條痕は本土器に見られぬ所であつて、この三者を比較するとき本土器を仲介として三戸式と茅山式とに充分なる連絡をつける事が出來るのである。而して本土器は既述の如く三戸式に極めて近似し、茅山式に若干の類似を持つ一形式たる事を知るのであり、本土器が三戸式及茅山式の中間形式としての推測が行はれるのである。三戸式が茅山式より下層に發見された例は同郡三崎町白須遺跡（考古學雜誌第二十卷第十一號）であつて三戸式はローム層直上に存在してゐたものである。

本土器は更に其の類似を廣く諸遺跡に求めて見る必要を感ずる。第一に本土器紋樣の主要部を占める沈線紋は本州島には之が近似を知らず、九州に至つて鹿兒島縣伊佐郡菱刈村塞ノ神及山野村日勝山（考古學雜誌第二十二卷第十號木村幹夫氏報）の土器に類似し、奄美大島群島德之島貝塚（史前學雜誌第五卷第五號大山柏氏小原一夫氏）の土器に更に類似を見、朝鮮に至つて慶尙南道蔚山郡西生面新岩里遺跡（考古學雜誌第二十五卷第六號齋藤忠氏）の土器に、釜山府絕影島東三洞貝塚（史前學雜誌第五卷第四號橫山將三郎氏）の土器に類似を見るのである。更に又穀粒形捺型紋は信州にては南佐久郡地藏平（南佐久郡の考古學調査。八幡一郎氏）、西筑摩郡の井出の頭、南佐久郡芦の平、諏訪伊那の郡境後山染場、又佐渡に於ても發見せられ（以上史前學雜誌第六卷第五號藤森榮一氏）、飛彈に於ては高山附近（同誌第五卷第二號林魁一氏）、九州に於

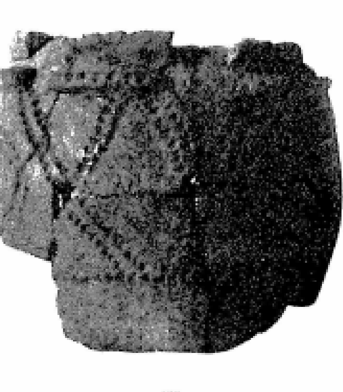
ために久しく注意してゐるが未だこれを知り得ない。たゞ一片の類似土器が神奈川縣津久井郡與瀬町字下原（與瀬小學校南畑）から出た事を小學校所藏（？）遺物中に見て知る事が出來た。小さな口緣部斷片で幾分內彎ぎみな口緣の外側に疣狀小突起があり、之に貝の緣による壓痕があるもので其の下に二本の細かい點列があり、更に沈線紋が描かれてあるもので口緣には刺突に依る點列が加へられてある。この口緣の點列といひ疣狀小突起といひどうしても本遺蹟土器と同じ感である。しかし同所からは阿玉臺式土器が多く出土し、蓮田式土器が少數出土してゐるのみである。ことによると深部に本遺蹟のものと同じものがあつて過然一片採集されてゐたのかもしれない。この一片の他にはまだ類似のものを出す遺蹟を知つてゐないのである。せめて單獨にでも出てくれる益々本土と器の本態が明になるのだが今迄にはそれすらないのである。他式土器と層位關係の明かなものでも出ればそれこそ喜びに絕えない。しかし今はどちらも望少ない。



Fig. 18. （上）三戸式土器（中）田戸式土器（下）茅山式土器

他式土器との比較　本土器をじつと見てゐてまづ思ひ出されるのが三戸式土器（神奈川縣三浦郡初聲村三戸出土—考古學雜誌第十九卷第十一號）である。本土器の沈線紋に於ける太沈線紋の狀態や砂を含んだ土質の工合、色、厚さに至るまで土器片を數片出されたのでは決して三戸式との區別は出來ない程近似してゐる。口緣の斷面を比較しても、尖底のある事をみても、穀粒形捺型紋やジグザグ形捺型紋のある事まで殆ど類似してゐるでのある。相違點とし

列等で沈線、刺突等と手法を異にするのみでこの配列法は確に本土器の特徴である。貝殻紋の相當發達してゐる事も亦一特徴として擧げ得る所であるが特に之が突起頂に捺される事は他に類を知らない。捺型紋として穀粒捺型紋とジグザグ型紋のある事も一特徴としてあげてよいものであらう。隆線紋の少ない事も細紋の少ない事も特徴としてあげてよいであらう。貝殻紋も捺型紋も隆線紋も上下兩層から發見してゐる。土器紋樣の大部分が口緣部から腹部にかけてのみ多く描かれ、腹部以下に及ぶものの少い事も亦あげ得られる特徴であり、紋樣の下限界に腹部をめぐつて沈線、點列のある事若くは隆線が箍狀に存する事等も特徴の一であらう。更に無紋土器の多い事も特徴として忘れてならないところである。



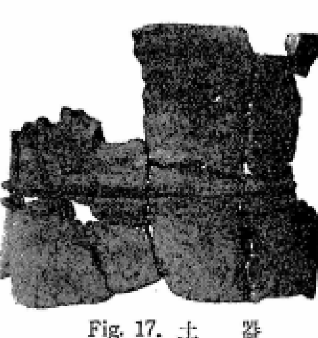


Fig. 17. 土　器

土器の形態が大部分深鉢形である事　而して口緣部に於いて幾分擴がる傾向のものが多い事、口緣外側に疣狀小突起のあるもののある事及その疣頂に貝殼紋の捺された事も亦本土器の特徴である。更に底部形式に於いて尖底、丸底が多く平底が極めて少ない事も特長である。尖底、丸底共に上下層から之を出し、A型尖底が下層から比較的多く出た事、平底が下層から出なかつた事等は上下層の差異としてあげ得られよう。平底が下層から出なかつた事は上層に於いてすら二例しかなかつた事から考へて出なくても不思議はない様にも思へる。

本土器の他遺蹟出土例　本遺蹟出土土器と全く同じものを出土する他の遺蹟特に他種土器との共存關係を見る

を以て上下層の差異とは言はれない。何故ならば下層からの土器全出土量が極めて少いのであるからだ。白色微細物を含むものも僅ながらある。この白色微細物が何であるかは未だ研究し得ない。顯微鏡で見ると圓柱狀をなし、しば〳〵半截されて中央にすぢが入つてゐる。この白色微細物を含む土器は未だ他遺蹟出土のものにあまり見てゐないが最近加曾利B式土器中（横須賀市榎戸貝塚）に之を含むものを見出した。この土器片はやはり上層下層共に出土してゐる。これは本遺蹟獨特のものであるかと思つてゐたらづつと新しいものの中に發見せられたのは案外であつた。雲母を含むものが極めて僅ながら存するが之は穀粒形捺型紋のものにのみ四例あるのである。穀粒形捺型紋は上下層共に之を發見したし、主包含層上方の層に於ても之を發見してゐる。雲母を含むものの中一片は確に之を上層に於いて筆者自身が採集した。他のものは洗つて後之を知り得たものである。普通雲母片を含む土器は加曾利式に多く諸磯式に僅を見る事が出來たものであるが、古式土器の一特徴として近來問題にして來てゐる捺型紋中に之を見るに至つたのは一新事實とは言へ意外である。

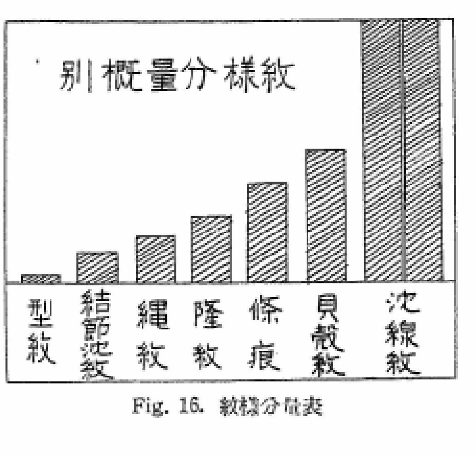


Fig. 16. 紋樣分量表

紋樣の大部分を占める沈線紋は刺突紋と多くの場合複合してゐるが單獨に之のみで存することも多い。この紋樣のものは上層下層共に同樣なものを出土し決して之に差異を認める事は出來ない。數條の平行線の交錯するところにこの紋樣の特徴がある。刺突紋亦上下層共に之を出土し、結節沈線紋亦同樣である。刺突紋は之のみにて單獨に存する事もあるが其の紋樣の構成法に於ては沈線紋のものとも共通點がある。其の一例を擧げれば字形配

推測により本遺跡出土土器の形態を考へて見ると其の多くが底の尖つた或は底の丸い鉢形であるらしい。底の尖、丸は土器の口徑や深さに關係があるらしくコップ形に深い鉢は勢底が尖り、やゝ淺いものは丸かつたものであらうと推測する。たゞ一例ではあるが胴部に瓢箪の如く僅ではあるが細くなつてゐるものが見られる。其の狭部の上下に纎の如く降線が廻らされこの部に把手が橋を架した如く着いてゐたものと思はれる（第十二圖）。これは他のものに比して頗る大形のものだから特殊の形態を持つたものであらう。片口類似の口が一個あつたから、そんな注口を有するものもあつた事を知る。しかし土瓶の様な口を有するものは全くない様である。

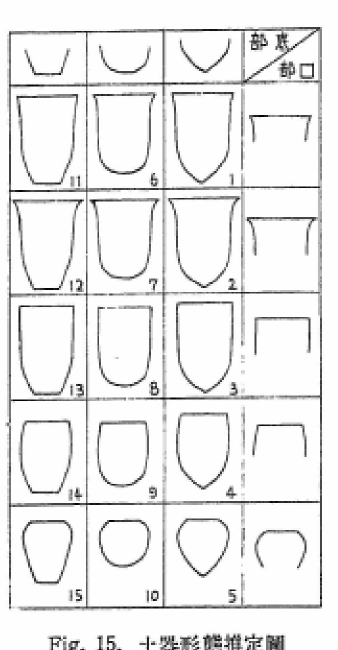


Fig. 15. 土器形態推定圖

土器の大きさ　完形品は全くなく復原し得たものも亦數例に過ぎないので實際の大きさを知る事は無理だが測定し得た口徑に依つて大きさの凡は知られる。口徑十八糎から二十六糎位までのものが多い事が推定される。且三十糎以上のものは少い事も知り得られる。高さに於いては之を知る事を得ないが破片に依つて考へた所では口徑より高さの方が大であつたものが多いらしい。

考察

本土器の特徴と出土層位　土質に於いて其の大部分に砂を多量に含む。主包含層よりは勿論其の下層よりも上層よりも之を出土する、上下層にて差異は認めない。纎維を僅ながら含むものがある。この土質のものは條痕土器が多い事を認める。勿論他の紋樣のものにも之がある。下層からも出た。多くは上層から出てゐる。しかし之

も共の頂を貝殼の縁を以て割られ若くは貝の背紋を押されて居る。時に竹管の刺突あることもある。又この突起中上方のものが殊更大きくなつて先のふくれた天狗鼻狀に突出するものも見られる。僅の例だがこの瘤頂が平に押しつぶされて大きく圓板狀をなすこともある。時にヘ字突起の下方に指の入る程の孔をあけるのもあるが稀な例である（口緣斷片中に時々石錐等で開けたらしい孔を見るが他の遺蹟に於ける如くこれも赤土器の破損した場合に於ける修理用のものである事は疑ない。二片の相接する部に對をなして孔のある確實な例も出てゐる）。

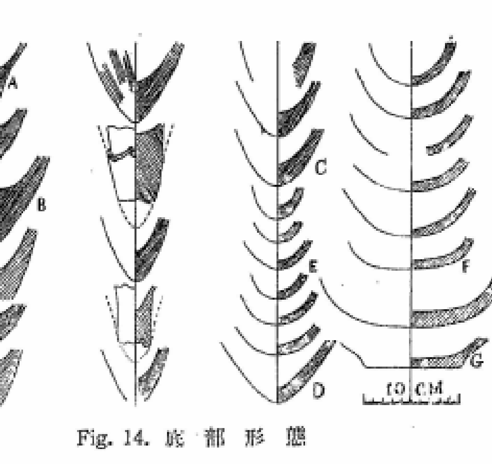


Fig. 14. 底部形態

胴部に於ける斷缺は所藏土器の大部分を占めてゐるが紋樣を有する斷片は其の四分の一にも足りない。其れ等の形態は次第に上へ擴がるものが大部分を占め、急に下へつぼまるもの或は外へ擴がるもの等はなく、僅に反るもの或は內彎するものはある。

底部　底部に於ける形態は之を三形式に分ち得る。卽ち尖底、丸底、平底である。尖底過半數を占め、平底僅二例あるに止る。尖底は之を四類に分つ。Aは乳頭形乃至之に近い細長い尖底。Bは太く頗る厚い尖底。Cはこれの稍ゝ短くなつて比較的薄くなつた尖底。Dは胴部と同じ厚さのまゝの尖底である。丸は之を二類に分つ球の一部を見る如き形態をなすものと之の稍押しつぶした扁圓形をなすものであり之等丸底も相當數に達する。これ等底部の數量は A〈B〉C〉D〈E〈F〉G の如くなる。

口緣部、胴部、底部と各別々に見て推測する外資料がないから不完全ながら復原し得た數例とこの斷片からの

を占め、口縁平らのもの六分の一を占め其の殘餘は或は内傾斜、外傾斜等をなしてゐる。内傾斜のものは數例に過ぎない。口縁部に於いて急に外反するもの五例、やゝ内反の傾向を持つもの五例、急に内に折れ返へるもの一例の外は腹部より次第に直徑をまして擴がるものが大部分を占めてゐる。口縁に於ける裝飾としては口縁に刻目を付するものが相當ある。併し之を缺くものの方が稍多い（八五對九七）。刻目の大部分は上から細い棒等を横にしてつけた刻目であるが中には上から刺突して點列をなすものや結節沈線紋をなすもの又は貝殼紋を付するもの等もある。斷面平らのものにあつては外側だけ或は内側だけ或は内外側共に之を付するものもある。しかし何れも少數の例に過ぎない。口縁は大部分水平であるが八例だけへの字形に突起してゐるものがある。完形品を得ぬから其の數は明でないが四個乃至五個のへ字突起があつて口縁が大きく波をうつてゐるものである。この他口縁外側に小さい疣狀突起を附するものがある。この疣狀突起は二個縦に並ぶこと多く何れ

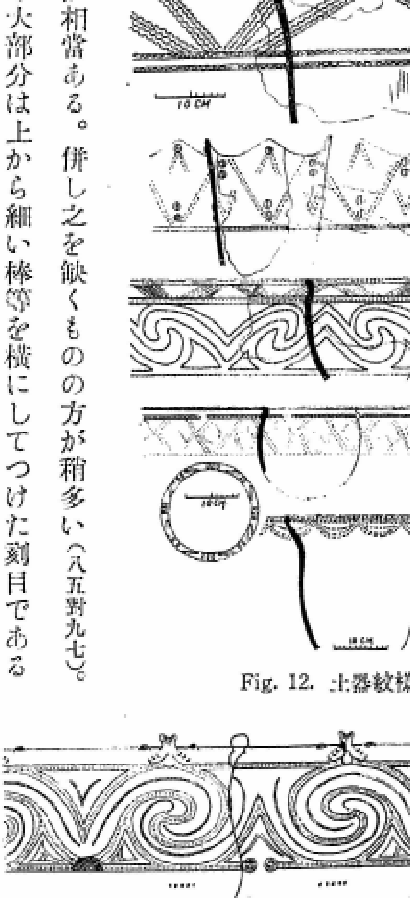


Fig. 12. 土器紋樣復原圖

Fig. 13. 土器紋樣復原圖

戸遺跡出土土器（三戸式）にあるが本遺跡からは發見しなかつた。略同じ程度の智力からは當然到達し得る所のものであるから此處にも當然あつてよいものと思ふが今までのところでは發見されてゐない（この捺型紋の方法については遺物を手に入れると共に其の施紋法を研究して見たが山内氏が其の研究をドルメル第四卷第一號に發表された）。

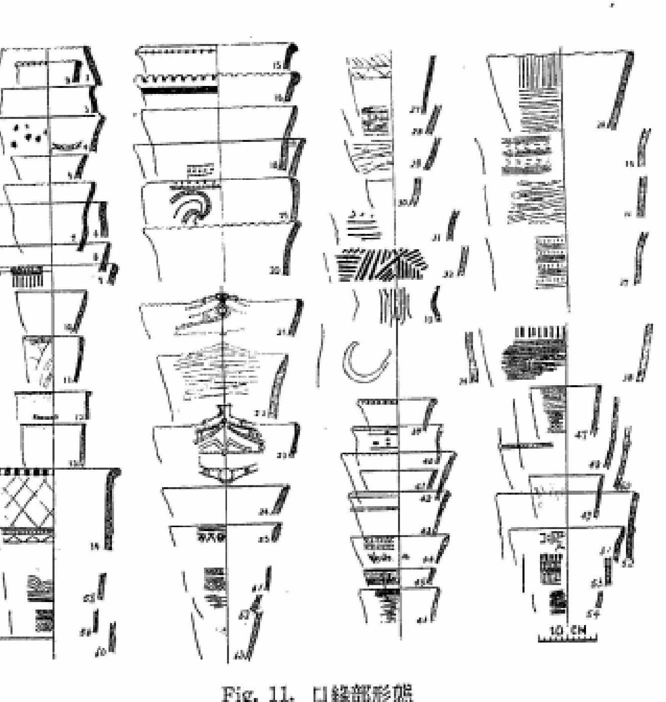


Fig. 11. 口緣部形態

土器面に於ける紋様の位置　斷片のみでは其の施紋部位が判明し難いが稍大片や復原し得るもの等に依つて之を見ると大部分の紋様が口緣から腹部にかけて行はれてゐる事を知る。腹部に於ける紋様の下限界には縮狀の隆起を作り或は刺突紋又は沈線による一線を描いて境してゐるものが多い。稀には腹部下方に至るまで貝殼の緣の押紋を施したものや沈線紋がないではないがこれは極めて少ない例である。土器内には全く紋樣をつけない。

土器形態　口緣部につき先づ見てみると手もとにある口緣部百八十二個の中無紋土器七十七個に對し有紋土器百五個ある。如何に無紋のものが多いかゞ知れるであらう。これ等口緣斷片につき其の斷面形態を見るに丸味を帶びたるものが約三分の一を占め、口緣が腹部等の厚さに比して急に薄くなつてゐる形式のものが六分の一强

となり、沈線となり、結節沈線となり、並行線となり等する。施紋の方法としては描く事と押す事と轉がす事との三方法に依つてゐる。押す方法に利用されたものとしては他にアカガヒ屬の貝、特にハヒ貝がある。其の背の結節と押すことに依つて結節沈線紋類似のものを得て居り、其の放射線狀の配列亦興味を覺えたものであらう。この

Fig. 10. 施紋具と施紋法

背の線條が土器整形中其の面についた事が彼等に之を意識的に用ひさせる事となりやがて沈線紋として數條の平行線を紋樣として用ひせしめるヒントになつたものであらう。又貝の緣を捺しつける事に依つて波狀を得る事が出來、遂には之を幾つも繼ぎ合はせ或は並列させ又は格子狀に配列するにまで至らしめた。繩も亦之を押しつける事に依つて粗なる繩紋を得られる。繩は又之を轉がす方法に依つて所謂撚絲紋を得、二重に或は三重四重により合はせたものを轉がすことによつて所謂繩紋を得られる（山内清男氏に依る）。又徑一糎位の棒の四周に鈍い石器で切目をつけ之を轉がす事に依つて穀粒形隆紋を得られ、同樣な棒に同じく石器に依つて斜に並行し互に連續する異方向の切目を付けたものを轉がす事に依つてジグザグ紋が得られる。本遺跡出土土器の紋樣は以上の如き施紋具に依り以上の如き施紋方法に依つて構成されて行つたものである。棒の四周にジグザグ紋をつける時の如き切目をやゝ粗くつけ更に之に直交する切目をつけ各切目の先端を連續せしめたものを轉がすことに依つて方形沈紋の連續するものが得られる。この紋樣は神奈川縣三浦郡初聲村三

は突起頂にも盛に捺される。縁を捺したものも背を捺し付けたものも存する。

縄紋　僅ではあるが結節沈線紋の量よりは幾分多い。粒の大きいものと極細かいものと其の中間に位するものとある。まばらに土器面に押されるものや或間隔をおいて平行に押されるものが多く、相接する様に密に押すものは割に少い様である（93.−106.、235.−237.）。縄紋の大部分が單節縄紋であるが稀に同方向の大小二種の縄紋が交互に押される複節縄紋もあるが複雜な複節縄紋等は皆無である。羽狀縄紋亦皆無である。撚絲紋はある。

特殊捺型紋　穀粒形隆紋の並列する紋様のものが少量ながら存する。手もとに八片あるが其の中四片には土質中に雲母を多量に含んでゐる。ジグザグ紋のある土器片は一個手もとにある。これ等は少量ではあるが其の存在することに重要な意義を感ずる。

條痕を附するもの　整形に際し使用したるアカヾヒ屬の背の條痕が附着するもので、これ刺突紋のものに匹敵するだけの量がある。條痕は土器表面全體に及び極めて明瞭なるものもあるが薄いものもある。内面にまで及ぶものも少量あり、更に之が意識的に紋様としてつけられ沈線紋の一種の如く見られるものもある。條痕ある土器には僅ではあるが纖維の混入するものが多い様である（85.−92.、148.−150.）。

朱塗　本土器に所謂朱塗のものを見る。内面にのみ見るもの十六片あり内一個は底部斷缺であるが一面についてゐるのはこの中に朱（鐵丹）を保存してゐたものであらう。内面より口縁にまで附くもの三片、口縁だけにつくもの一片、内面より外面にまで及ぶもの四片、紋様中に朱のつくもの二片ある。

施紋具と施紋法　本土器紋様の大部分を占める沈線紋や刺突紋が木や竹の先端に依つたであらう事は明であるが、篦、棒、竹管、半截竹等が之に用ひられて居る、其の用法によつて楕圓となり、爪形となり、點となり、圓

線を直角に交らすもの（123.125.126.）、數本の平行線が或間隔をおいて描かれ其の間を斜線にて埋めるもの（2.3.8.13.）、鋸歯狀沈線の中を平行線で埋めた鋸歯紋（131.191.192.199.）、平行線と點列との複合するもの（24.30.21.）、曲線よりなるもの（40.52.）、曲線と直線と複合するもの（154.155.）、格子紋をなすもの（139.－146.）、二重楕圓形、渦紋、青海波紋等をなすもの（134.－137.118.122.）、貝殼紋と複合するもの（64.－78.）等がある。口緣は沈線によつて刻目を附せられ又は其の上面に沈線紋を施したものが多い。

隆線紋　沈線紋に對しすべて土器面より隆起したる線狀のものを指す。沈線紋多きに比し隆線紋極めて少量である。いちじるしき隆線少く、蚯蚓程度のものすらある。大部分隆線上には刻目を付す。其の位置は口緣に並行に一線若くは二線を附するもの、腹部をめぐつて箍狀に一線若くは二線あるもの、口緣と腹部箍狀とを連ねるもの、或はこの間に隆線による曲線紋を付するもの等がある。この隆線上には貝殼紋が押されることもある（107.－117.第　圖）。

貝殼紋　アカガヒ屬の貝殼の緣を若くは背を押して、緣のジグザグを又は結節を紋樣としたもので相當多量に存し、甚しきはこれのみにて紋樣を構成するものすら存する。アカガヒ或はサルボウカヒ或はハヒカヒが用ひられ大小各樣の大きさのものが用ひられてゐる。緣を押し付けて紋樣の一部としたものは沈線紋の間に之と並行に押しつけ、或は斜に並列させるものがあり（64.－78.）、單獨にこれのみにて紋樣を構成するものもある（79.80.第　圖）。貝の緣は土器面に直角に押されるものが大部分であるが、斜方面に押しつけるものもある。貝背を押し付けたものとしてはこれのみをまばらに押したものと多數を押付けたものもある（81.－84.）。背を押付けるものはハヒカヒに限られる。緣を押し付けたものも或はこの貝であると思はれる。これ等貝殼紋は口緣の裝飾としても捺され、或

列の點列として又は二字形の並列として表現せられる（39.）。竹端を直角に土器面に刺突して圓形を表はす場合もある（27.38.）。之等刺突紋は土器面に描かれる他口緣上面に又は突起頂に施紋せられる。

結節沈線紋　施紋具として棒等を使用し之を刺突しつゝ走らせる事に依つて沈線紋の底に刺突の連續するものが生ずる。刺突紋とも沈線紋とも區別したい。この連續刺突が沈線紋底に結節狀をなすに依つて此の名稱を使用する。施紋法に二種ある。先端の平なものに依つて描かれたるものと尖端ある棒にて描きたるものとである。前者は少なく後者が多い。後者はへの字の連續に見える。この方法に依つて構成された紋樣として曲線をなし又は直線狀をなすもの、並行線をなすもの、兩者複合するもの、半月狀をなし又は渦紋をなすものがある。渦紋は四列ある。口緣にこの紋樣が施されたものもある。この紋樣を付けた土器片は全體からみて極めて少量である（41.—53.）。

沈線紋　文字通り土器面より沈下したる線を以て施紋せられたものを指す。本遺蹟土器紋樣の大部分はこれに屬する。其の幅一糎に及ぶもの（極太）、幅五粍內外のもの（太）、幅三粍程のもの（中）、幅一粍半乃至二粍程のもの（細）、幅一粍程のもの（極細）の五種に分ち得る。極太沈線紋は土器の厚十三粍に及ぶ特殊の厚いものに限られ其の量極めて少ない（215.—217.）。太沈線紋は前者の約三倍の量があるが之亦少量の方である（218.—232.）。中沈線紋及び細沈線紋は略等量あり沈線紋の大部分を占めるから本遺蹟出土土器の大部分を之が占めることになる。細沈線紋には先端の丸い棒にて施紋した柔かい感じのものが多いが、細い尖端を持つ棒にて施紋された硬い感じのものもある（118.—136.。176.—192.）。極細沈線紋に屬するものは極めて少量である（147.146.169.171.）。施紋具として先端一本の棒を使用したものが多い樣だが半截竹の使用に依る先端二又のものもある。構成されたる紋樣として平行直線大部分を占め、平行

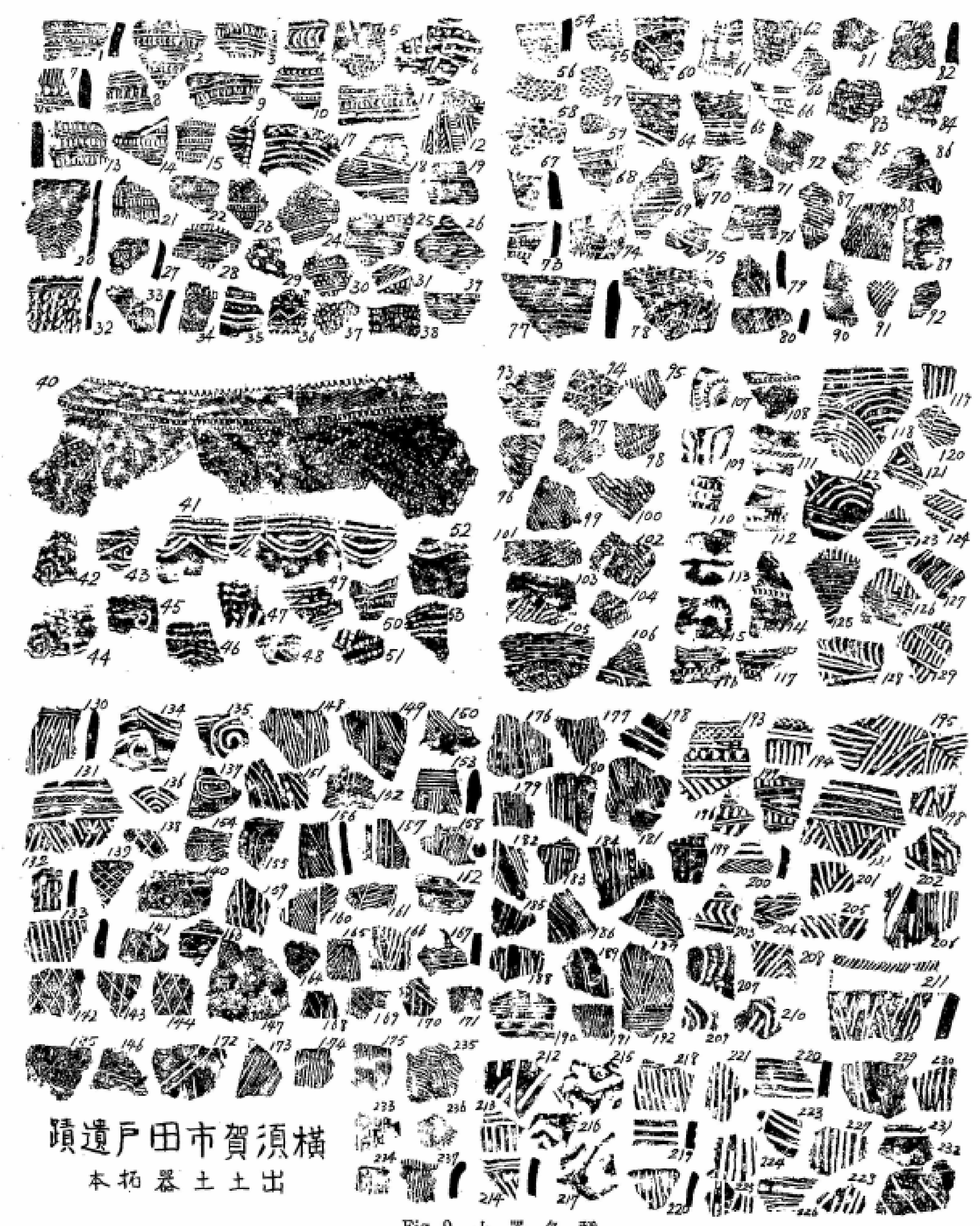


Fig. 9. 土器各種

程度で平均一〇粍内外。然し八乃至九粍のものが多い。其の多くは多量の砂を混じ、それがため割れ易く表面がぼろ〳〵崩れる程度のものさへある。比較的砂の少いものにあつては其の表面に磨きをかけたと見られるものもある。又白色の微細物を混ずるものも相當見られ、雲母を混ずるものも極めて少數ながら存する。纖維を混ずるものもあるが其量は僅である。何れも浸水性大であり、水を含むと極めて割れ易くなるものが多い。中には相當堅いものもある。

紋様　本土器に於ける紋樣は沈紋を主とし僅の隆紋の他貝殼紋、捺型紋がある。又整形のために付いたかと見られるアカガヒ屬に依る條痕を付するものも見られる。沈紋は刺突紋、結節沈線紋、沈線紋に分ち、貝殼紋はアカヾヒ屬の緣を押したものと背を押したものとに分たれ、捺型紋は米粒形隆紋を押出すものとジグザグ形の捺型とに分たれる。

刺突紋　篦、棒、竹、半截竹等を以て土器面を刺突する事に依つて紋樣を描いたものを指す。刺突による點列のみによつて紋樣を構成するものもあり（第九圖27.29.37.38.）刺突を主とし之に沈紋を加へるものもある（30.32.）が多くは沈線紋の間に刺突紋を加へた複合紋として存在する（1.—26.）。之等刺突紋は其の使用施紋具と配列とに依つて構成する紋樣に各種を生ずる。篦の先端を刺突するものには沈線紋の間に之と直角の方向に並列せしめるもの（9.11.13.21.）、斜に並列するもの（20.31.）、杉狀に並列せしめるもの（18.26.）があり又特殊の方法としては土器面に斜に突き刺したものをはね上げて土を半月狀に盛り上げるもの（32.234.）が存する。篦に代ふるに棒、竹等を用ふる場合之が丸味をもつ程度のものである時は點列として表現せられる。これは相當多く、其の大きさは大、中、小各種ある（1.30.37.）。半截竹を使用した場合皮の方を用ふれば爪形類似紋としてあらはれ（4.5.10.11.）、割口の方を使用すれば二

石器は遺蹟の小さい割に多く且其種類に富んでゐる様に思ふが何れも小形である。石棒等の如き大石器は皆無である。又石鏃の皆無である事も注意を要する。海に臨んだ地に住しながら之を缺いてゐる。

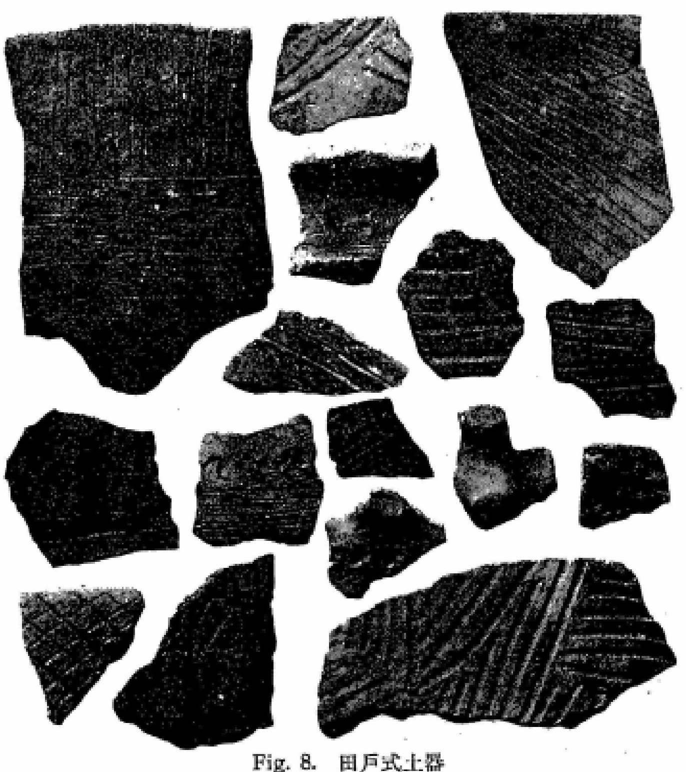


Fig. 8.　田戸式土器

ロ、土器

本遺蹟出土の土器は量に於いて決して少くはない。然るに紋様を有するものが極めて少量である事は發掘中に於いて既に之を認めた。それは紋様の位置が口緣部附近に限られたかの如き感のある事と全く無紋のものが相當量ある事に依るのである。其の大部分が發掘前に既に小破片であつた事と、地中に於いて多く破壞して居り且發掘中頗る破壞し易い狀態にあつたゝめ、有紋の或物を除いては發掘後特別の注意を以て別々に袋に保管した物の他復原不能になつてしまつたのである。土器の量は前後を通じて林檎箱五個位あつた。然し其の過半數は無紋の破片である。此處に示すものは筆者所藏のもの（林檎箱一個の有紋片）と山内氏所藏の一部に依る。

土器の性質　色は黄褐色乃至赤褐色のものが相當多く黒褐色のものも相當ある。厚さは最厚十三粍、最薄七粍

塊狀石　拳大の粘板岩塊。整形したかと思はれる打裂痕がある。打擊用にでも使用したと思はれる。

其の他(一)杵の如く其の尖端を使用したと認められる細長き石の斷缺三個ある。其の二個は頭が扁平にまでなつてゐる。(二)石斧の頭部とも見られる、しかし稍大形な半磨製の石器斷缺が二個ある。頭部は扁平、斷面は矩形に近い。用途不明。(三)粘板岩製で尖頭楕圓形。周に打裂に依る整形が見られる。石斧ではないらしい。(四)扁平で圓形。周は磨り減されたか細かに打つて形作つたかと思はれる狀態。片岩。用途不明。少し缺けてゐる。

この他打裂の痕あり何かの用途のあつた事を推察し得べき石片石塊が相當ある。所謂石器としての形態を備へずとも石器としての用途があつたであらう事は否定出來ないものである。其の他何等石器としての打裂をとゞめぬが包含層中から發見した石塊石片につき其の質と數量をあげて置く。

安山岩	十五、	硅岩	二、
粘板岩	十一、	玄武岩質浮石	六、
褐鐵鑛	一、	硅質浮石	三、
燧石	一、	蛇紋岩	一、
砂岩	三、	閃綠岩	二、
黑曜石	數十	凝灰岩	五、

其の他石質不明十數個

これ等石塊石片が包含層中に存したといふ事は此處に於いて石器の或物が製作された事を物語るものである。

特に黑曜石片の多數ある事は明に此を物語つてゐる。

面を存する斷缺であつて先づ石皿片の概念で取扱つてよいと思はれるもの十片。内九個は例に依つて安山岩だが中一個は凝灰岩である。

敲石　大體石鹸の或るものを見るやうな形をなして居る。完形品の出土はない。せい〴〵三分の二位までの斷缺であるが何れも表面は平滑に磨研されて居り（中には之が風化してゐるのもある）、周に於いて打痕を殘すものも見られる。總數二十個。これ等の兩面の中央若くは片面の中央に小穴を有するもの七例。これ等は普通の遺蹟出土のものと違はない。石質は安山岩二、凝灰岩三、石英閃綠岩二、粘板岩三、砂岩一、其の他不明。此等が磨り石として使用され、更に打擊用として用ひられ又は臺として使用された事が考へられる。

これに似た外形を持ち稍長形のものが二例ある、共に中央に小穴を持ち表面磨研されてゐる。何れも安山岩質。共に半缺。

これと外形の似た輕石（硅質）製石器がある。明に外形は磨研に依つて整形されたと見られるもので、現在の形は半圓。楕圓形だつたものの半缺になつたものと考へられ、楕圓形だつたとき兩面から穴があけられ兩者が通じたものと思はれる。

凹石　普通に見る如き安山岩に小穴のあるのと違つて凝灰岩の拳大の不正立方形のものの四面に計五個の小穴を有するもので臺として使用されたと考へられるものである。

團子石　名稱は適當でないかも知れぬが徑五糎乃至三糎の團子形に打ちかかれた石七個がある。石質は安山岩六個、風化したる閃綠岩と思はれるもの一個。用途不明。周が磨り減らされてゞもゐればすり石とでも言へ樣けれど何等それらしい樣子がない。

個。中三個は前者と同様に片面自然石のまゝであるが一個は打缺いた粘板岩に適當に打裂を加へて所要の形に整へたもので特に注意すべきはこの一個のみ彎曲してゐる事である。勝坂式土器等にはこの彎曲するものがよく伴出するが此式にも一個之を見る事が出來た。

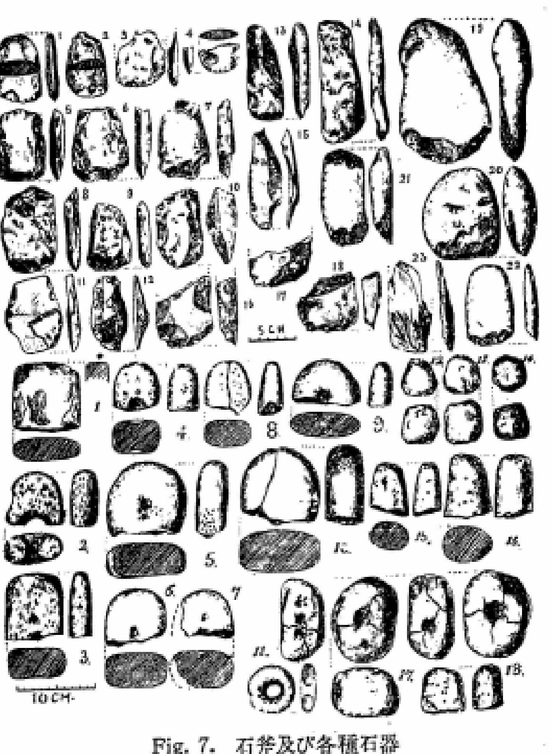


Fig. 7. 石斧及び各種石器

他に三個の斷缺がある。はたして其の三個共が打石斧であるかどうか疑はしいが何れもが完形品として出土したものより幾分幅廣であつて稍大形であつたと思はれるものである。この大きさの完形品は一個も出土してゐない。

礫器　從來打石斧の仲間に一形式として加へてゐたものだが、史前學會で此の名稱を稱へ出されたから之に從つて獨立させる事とする。自然石の一端に適當な打裂を加へて刄を附し石斧類似のものとしたもの。此に入れ得るもの八例。或は單なる自然石の打裂にすぎぬものもあるかも知れぬが打石斧よりもむしろ鋭い刄を持つてゐるものもある。砂岩のもの二、他は粘板岩。この中二三個は充分使用した痕跡があるものがある。

石皿　石皿としての形態のまゝで出土したものは一個もないが、其の兩面に若くは片面に平滑な平面を又は凹

までが苦心して不に打裂したらしい様子が見られる。後者の前者に異る所は前者は先端がやゝ直線的な傾向があるのに此れは曲線であり、小形である。これに柄を付して利器として使用した事に疑ない。

尖頭石器　何れも黒曜石。人工的尖端を有するもの。長さ十八粍の小形のもの二個。長さ五十粍の大形のもの二個。小形のものは柄を付ければ石鏃ともなり得るし、銛ともなり得る。大形のは其の儘手に持つても使用出來るし、柄を付ければ槍や銛の用をなし得る。

この他何等かの用途にあてられたと考へ得られる打裂を存する黒曜石片約三十を數へる。長八糎に及ぶ黒曜石の大片二個は尚原料であらうと思はれるが其の一は尖頭石器に見る如き尖端を有し、他の一は直線の鋭い稜を有して物を切るに頗る役立ち得る。

石斧　純然たる磨石斧はない。刄部のみ若くは大體を磨した程度のもの。完全なるもの二個。共に粘板岩。一は刄部のみを他は周をまで磨してゐる。共に長七糎幅四糎半位。角を取つた矩形と言ふよりむしろ楕圓に近い形。小形である所に注意したい。他に刄部の斷缺が二個。一は粘板岩、他は閃綠岩。何れも刄部のみ磨す。同じく小形。この四個の半磨石斧は何れも兩面より刄を砥ぐ。

打石斧　完全なるもの十一個、斷缺三個。完全なるものを二形式に分ち、一は半磨石斧に見ると同じ短形式、他は細長き形式。短形のもの七個あり。半磨石斧と略同大のものと稍大なるものとある。大なるものも長九糎幅五糎内外の小形である。片面自然石のまゝにて他の一面に加工して形を整へ刄をつけたもの。粘板岩質のもの四、閃綠岩質のもの三。長形のものは普通厚手土器に伴出のものに極めて似る。長十糎幅三糎半。長十二糎半幅四糎。長十糎幅三糎。長八糎幅四糎。かくの如く前者とはよほど形を相違する。粘板岩のもの三個。砂岩のもの一

した形。完形三個。(F)更に深くえぐつた形。三個。(G)前者の二等邊の部にふくら味をつけた形。一個。(H)D形の底邊中央に半圓形の凹所を作つた形。一個。これのみ石質を異にして硅質岩。

本遺蹟出土石鏃は一體に小形で肉厚である。阿玉臺式や加曾利E式若くは勝坂式に出る事のある大形なのや周が鋸歯狀になつてゐるものはない。石鏃等にも新古に依つて形式に相違のある事は疑へない事實である。

Fig. 6.　石器各種

石錐　何れも尖端を缺く。一は小形。一は大形。共に黒曜石。

石匙　二形式。一は黒曜石製できんちやくの様な形。一は燒いた碧玉岩の様な赤石と黒曜石の二個。これは横長形。柄が明瞭でない。特徴ある形式である。

鋸様石器　所謂石鋸として知られたもののやうに鋸歯が明瞭でないが平な一邊に小さい打裂を並列させてゐるから鋸の用をなし得る。三個。何れも黒曜石。この他にも黒曜石の大片中に平な鋭い稜を持つものには小さく打裂様の並列を見るものがあつて同じ用途に使用されたらしい事を察し得るものがある。

鑿様石器　何れも黒曜石。皆斷缺なので全形が知られないが鑿の様な形態をしてゐる。石鏃の或物に似てゐるがさうではない。片面平である事に相違點がある。三個。別に同じ黒曜石の略楕圓形の更に小形の完形品が二個ある。前同様に片面平である。前者の或物は大きく割れた平な面を其の儘使用したのもあるがこれ等五例中三例

遺　物

本遺蹟は遺物包含層であつて傾斜地に捨てられた遺物が残るもの。從つて斜面の上下及び深淺に於ける遺物は直ちに其の新舊を斷ずる資料とはなり得ない。しかも包含層は約四十糎の厚さを有する黒褐色土層であつて其の上下層に遺物を含む。これ等層中に於ける遺物間には明瞭なる相違をあげ得られない。

遺物としてあげ得るものは次の如くである。

自然遺物　極めて少いのは遺蹟が包含層の爲であらう。包含層下部の數所に獸骨と思はれる白色の骨片數個が存在した事を知り得たのはむしろ偶然な位なもの。しかし灰狀化してゐて取り出す事は出來なかつた。更に白色球形の魚齒が二三箇處から數十個出た。彼等石器時代人がこれ等のものを食用した事を物語るものである。この他木炭片が出てゐる。土器面にアカガヒ屬の貝背による條痕や緣の壓痕又は背面の壓痕あるにかゝはらずこれ等貝類が一片も發見されなかつた事は物足りない。

人工遺物　石器と土器とであつて骨角器其の他の出土はない。石器の大部分は斷缺であり、大概小形のものである。土器は特に注意すべき紋樣を有し、形態亦注意に價する。石器土器は項を改めて詳述する。

イ、石　器

石鏃　完形品十三個、破片八個。一個を除く他、何れも黑曜石。全部無柄。八形式に細別し得る。(A)正三角形に近い形。二個。高十三粍、底邊十二粍の頗る小形。しかも比較的肉厚。(B)前者より幾分長形。やはり小形。一個。(C)前者の各邊にふくら味を持たせた形。やはり小形。これのみ特別肉薄。一個。(D)幅一に對し長二位の割の長形。二等邊の部が幾分ふくらみを見せたのもある。完形二個。破片五個。(E)前者の底邊を少しえぐつて角を出

多數の石塊、石器等を得た。この土器の大部分は山内氏の手もとにある。

第六回に於ては其の後の遺蹟の狀況を見る事と更に發掘するとして如何なる場所ありやを知るための小發掘である。

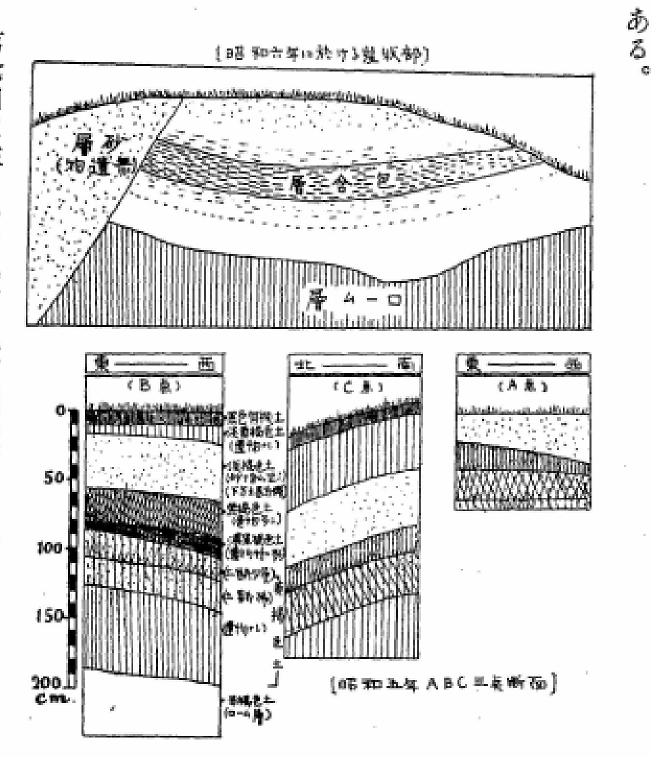


Fig. 4. 断面圖

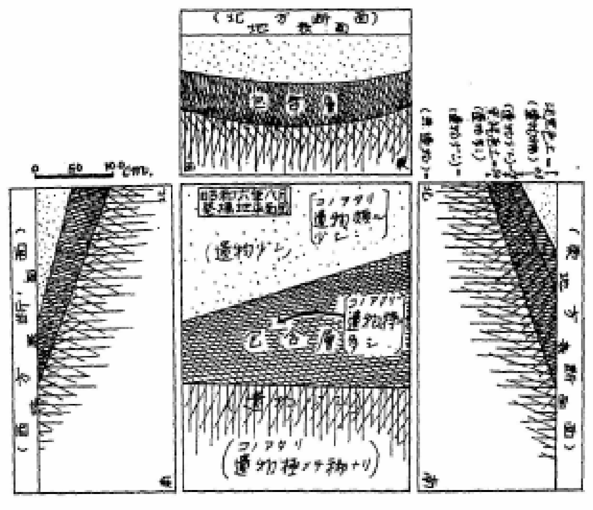


Fig. 5. 昭和六年發掘地點に於ける層位圖

第七回は主として地層の狀況調査である。

かくして前後七回の調査に依つて遺蹟狀況を略詳細に知るを得、遺物をも採集し得て此處に特殊なる土器を出す一遺蹟として之を報じ得るに至つたものである。

が捨てられたであらう事を想像し、遺物包含層の或物（昭和六年發掘個所の如き）は混亂されて居らなかつたが、其の全部は必ずしも第一次的の層と考へ得られぬものがあるといふ事を頭に置かねばならない。

發掘

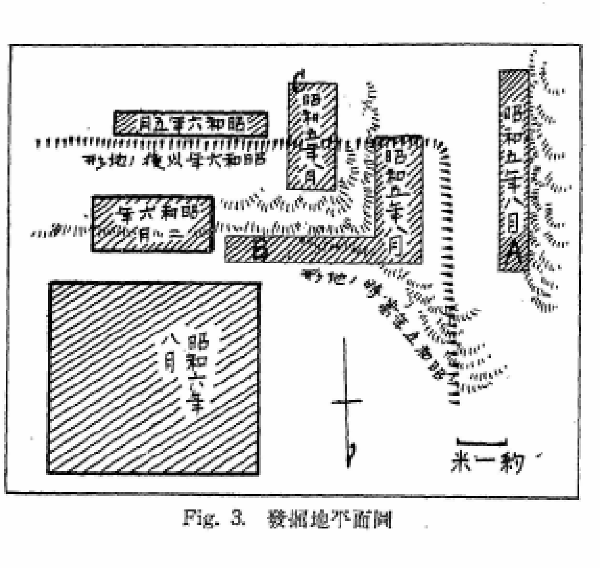


Fig. 3. 發掘地平面圖

第一回に於いては遺跡全面に亙つて目を通し、原形の存する部を發見するに努め、更に各所に小發掘を行つて少量の遺物を得た。

第二回に於いては山内清男氏と共に遺跡中原形を殘すと思はれる部に於いてＡＢＣ三處の溝掘を行ひ、遺物包含層の狀況を見、遺物の種類を見、更に遺物を集める事に努めた。Ａ點に於いては砂土中に普通の縄紋式厚手土器を得、Ｂ點に於いてはＬ形に發掘して本遺跡の土器を得、Ｃ點に於いても亦本遺蹟獨特の土器を少量得た。

第三回に於ては土工に依つて崩された舊斜面下を二米平方發掘して林檎箱一個に滿つる遺物を得、本遺跡土器資料を増す事が出來た。

第四回に於ては主として殘された崖面に於ける遺物包含層狀況を調査した。

第五回に於てはもとの斜面の包含層の續きの存在すると推定される宅地化された平地を南北四米二〇、東西三米八〇、深さ一米三〇に及ぶ發掘をなし、人夫二人を使用したが此の間憲兵隊との連絡を缺く事あつて一日仕事を中止したが直ちに連絡とれて炎天下にテントを張つて發掘續行九日間に亙り林檎箱三個に滿つる土器片の他に

遺蹟は包含層よりなり其の斷面に於ける各層の厚さは各所に於いて一樣ではないが現存崖狀の殘存部に於ける昭和六年調査の斷面にては上部より十五糎程の淡黑色土（彌生式土器包含）、百六十糎の淡黄色砂土（無遺物）、六十糎の淡黑褐色土（極少量の土器）、四十糎の黑褐色土（遺物包含層主要部）、六十糎の淡黑褐色砂土（遺物少し）、百二十糎の黄褐色粘質土（上方にのみ極少量遺物あり、下方全くなし）以下黄褐色のローム層となる。然るに昭和十年調査に際してはこの崖は自然の崩壞と兒童の遊戲との爲に約半米後退し以前の斷面とよほどの相異が認められた。卽ち上より五十糎の淡黄色砂土（無遺物）、五十糎の黑褐色土層（遺物僅あり）、五十糎の淡黑褐色土層（遺物僅あり）、三十糎の黑褐色土層（遺物僅あり—主包含層らし）、以下淡黄褐色砂土（遺物なし）の如く變り、しかも西方にてはこの黑褐色土層中に黄褐色砂土層が挾まれ、黄褐色土層は三十糎位の薄層となり其の下に再び黑褐色土層を見るに至つた。更に附近を調査の結果東方斷崖面に地層の露出を見たので之に依つて層の狀態を見たら上部に若干の淡黑色土あり、次に百五十糎位の淡黄色砂土層を見、其の下に約一米の黑褐色土層を、更に其下に一米位の黄褐色土層を、其下に淡靑黄色の粘土層の厚いものが存してゐて、この黑褐色土層が遺物を含む層の續きと思はれた。しかしこの層は厚褐一定せず處に依り黄褐色砂土と互層をなす部もあつて果して自然のまゝの狀態であるか否か疑はしいものであつた。かくの如き地層の狀態であるから大體に於いてこの山頂部に住居が營まれ、其の北面の凹地に遺物


Fig. 2.　昭和六年貳第十三號要塞司令部檢閲濟

遺蹟

本遺蹟は神奈川縣横須賀市公卿町田戸にあり、聖德寺裏山である。今此の地は全く拓かれて宅地となり一部に遺物包含層を有する低い崖面を殘すに過ぎない。此の地は高さ五六十米に及ぶ山頂であつて東は斷崖をなして直に海に臨んでゐた地である（大正十二年以後此の崖下は埋立てられて今は街となる）。先史時代に於いて此處に人類の住した頃は勿論斷崖上の僅なる平地であり、南には深く谷が食ひ入り、北亦淺い谷を以て前面の山頂をくぎり、ただ西方にのみ山の續く、言はゞ海中に突出した高い半島形の先端部であつたのである。この先端部の頂點に僅に平地を見出して此處を居住地と定め、不用物は此の谷に捨てられてゐたものであるらしく、幸ひ北方の谷は淺く、之へ緩傾斜をなしてゐた爲、此の斜面に遺物が殘つたものと考へられる。然るに明治に至つて此の地が陸軍用地となるや遺蹟の大半は工事の爲亂されて

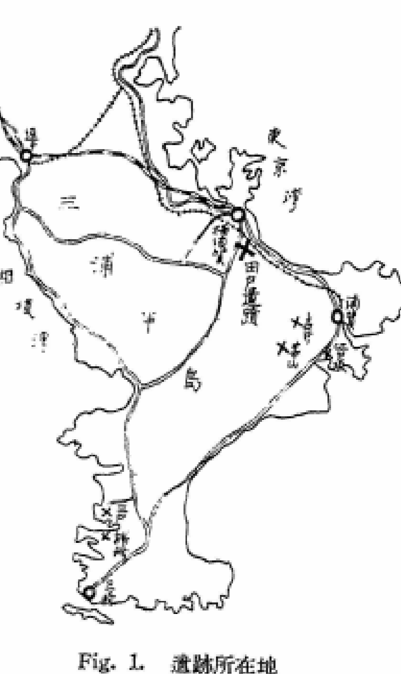


Fig. 1. 遺跡所在地

失はれ、たゞ南北五米東西十米程の北の斜面のみが無事に保たれてゐた樣に思はれる。發見當時遺物は此の斜面の下方一帶に散在してゐた。大正十三年第一回調査の際は發見當時の地形の儘であつたが第三回調査の際は既に宅地としての工事が進捗して大變化を起し其の斜面の大部分が失はれてゐた。第五回調査の際は既に全く現在見る如き立派な宅地化して遺蹟の舊狀は全く見られなくなつてゐたものである。

に散在する土器片の存在を認める事が出來、特殊の紋様に興味を覺えてゐたが發掘調査をする事は出來ずにゐた。然るに其の後この演習砲臺は廢止され陸軍省の手から大藏省の手に移り更に宅地として一般人の手に渡つたので長い間の懸案であつたこの遺蹟の調査が實施せらるゝに至つたものである。

大正十一年十二月	遺蹟發見
同　十三年四月	第一回調査
昭和五年八月廿九日——卅一日	第二回調査（山内清男氏と共に）
同　六年二月廿一日	第三回調査
同　五月三日	第四回調査
同　八月一日——九日	第五回調査（山内氏と共に）
昭和十年六月	第六回調査
昭和十年八月	第七回調査

かくて前後七回に亙る調査に於いて大小發掘を行つた結果資料としての遺物は林檎箱に六個を數へるに至つた。第二回及び第五回は山内清男氏と合同して發掘し第五回は最も大きく南北四米二〇、東西三米八〇、深さ一米三〇に及び遺物たる土器は林檎箱三個に及んだ。本稿はこれ等遺物中手もとにある約林檎箱一個の資料と山内氏の手もとにあるものの中幾分かの拓影とに依つて記したものである。本遺蹟の土器に就いては昭和九年四月二日人類學會五十周年記念講演會に於いて略述し田戸式土器なる名稱を附してゐるものである（發掘は要塞司令部の許可を得て之を行つたものである）。

横須賀市田戸先史時代遺蹟調査

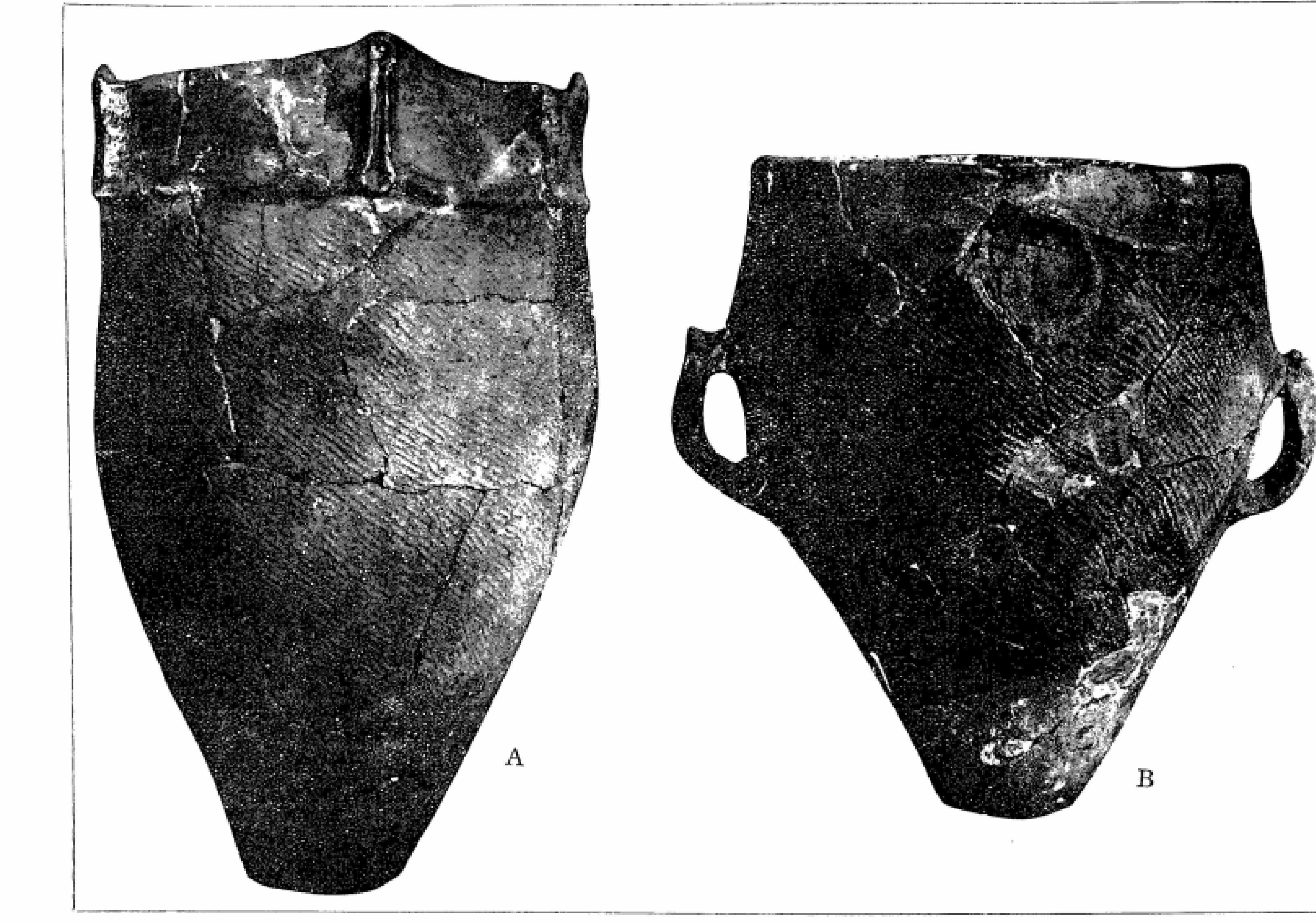
（横鎮E第四號検閲濟）

赤星直忠

目次

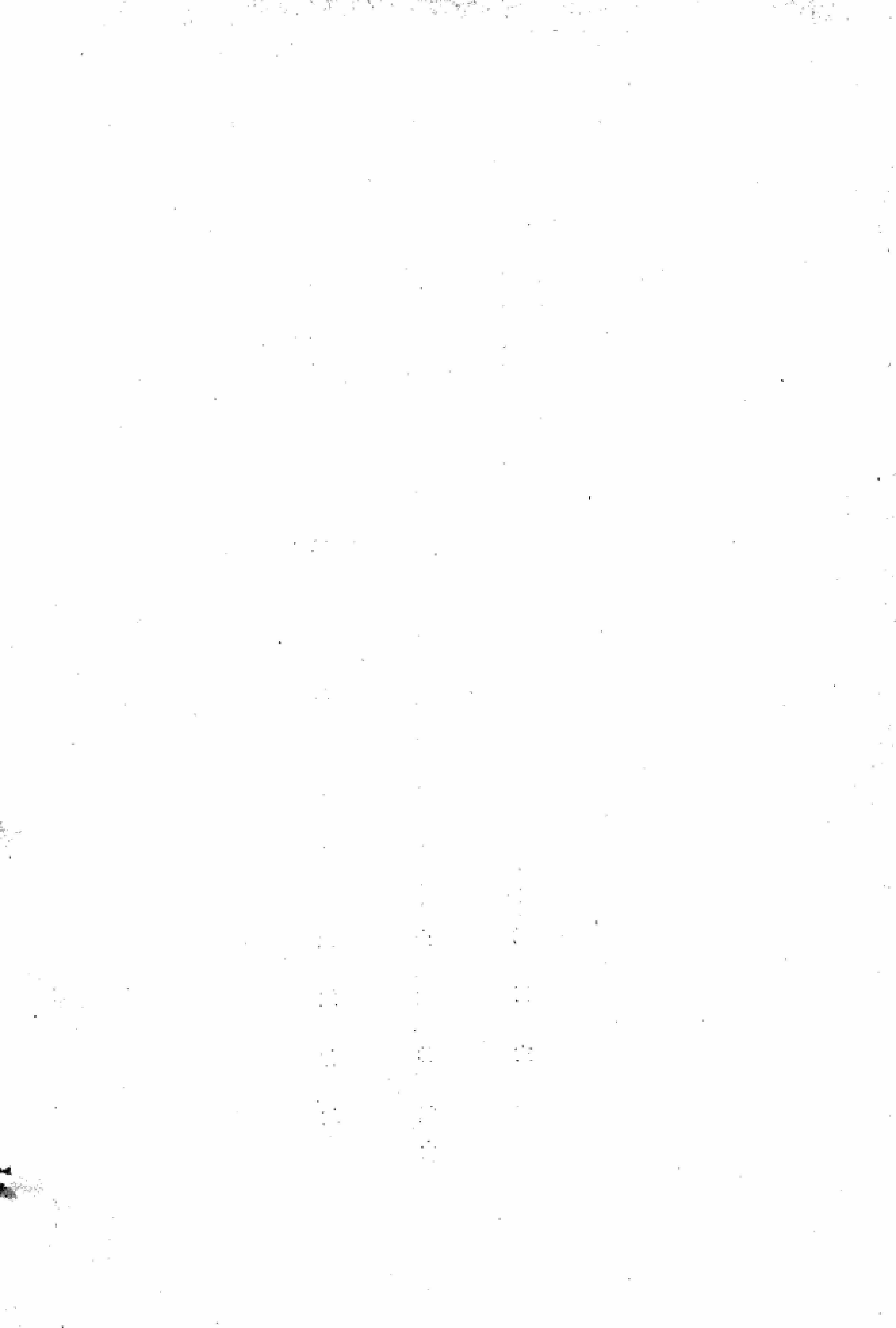
序

此處に遺蹟のある事を知つたのは大正十一年冬の事で、當時此處は陸軍の演習砲臺であつたから一般人は絶對に入る事が出來なかつたが幸ひ其の年此の聯隊に入營してゐた筆者は演習の爲しば／＼出入してゐたので地表面



栃木縣那須郡狩野村槻澤石器時代住居趾出土の土器（池上論文參照）

Keramik aus der Siedelung Tsukinokizawa, Prov. Tochigi.



資料

目次

史前學雜誌

第七卷　第六號

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關聯スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。臨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關聯スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタクシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込アル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年十二月二十五日印刷
昭和十年十二月三十日發行

第七卷第六號
定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介

發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區神保町一丁目三十四　株式會社開明堂東京營業所　高田壬午郎

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二一五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區須田町一ノ七　合資會社　巧藝社　電話神田二二九四番　振替東京四〇六六六番

史前學雜誌

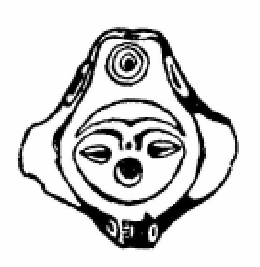
第七卷　第六號

昭和十年十二月發行

史前學會

JAHRESBERICHT
DER
JAPANISCHEN PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-NEMPÔ)



7. Jahrgang

Tokio

Detzember

1935

Japanische Praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Shibuya-Ku Tokio

Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa Jookei Shibata

Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami

Isamu Kohno Iwao Ooba

Sueo Sugiyama Kingo Tazawa

Ryuichi Yamaguchi

ABHANDLUNGEN

DER

JAPANISCHE PRAEHISTORISCHE

GESELLSCHAFT

AUF

EUROPÄISCHE SPRACHE

1929. Kashiwa Ohyama

Resume des Ausgrabungsberichts über die Muschelhaufengruppe Kaizuka beim Dorf Yoshibumi, Provinz Chiba. (Résumé)

Præhis. Zeitschr. Bd, I, No. 5, S. 1—4.

1930. Chiyomatsu Ishikawa

Professor Edward Sylvester Morse.

ibid. Bd. II, No. 1, S. E. 1—E. 3.

Kashiwa Ohyama

Denkmal beim Muschelhaufen Oomori zum Gedächtnis an Prof. Edward S. Morse.

ibid, S. E. 4—E. 8.

Letter From the family of Late Prof. E. S. Morse.

ibid, S. E. 9.

Kashiwa Ohyama

Korekawa-Funde, vom Korekawa, einer charakteristischen Station von Kame-ga-oka Typus der Nord-Ost Jômon-Kultur.

ibid, No. 4, S. E. 11—E. 41.

Mitsuji Miyasaka

Le gisement préhistorique d'Ichioji prés de Korekawa (Préfecture d'Aomori). (Résumé de l'ètude de Mr. Miyasaka) (texte japonais, p. 1 à 20) par M. Haguenauer, pensionnaire de la Maison Franco-japonaise.)

ibid, No. 6, S. E. 43—E. 49.



1931. Kiyoyuki Higuchi

Resume über die neu gefundenen Muschelhaufen Mori (森) unweit von Takada (高田), Gau. Bungo(豐後), Kyushu (九州) (Résumé)

ibid, Bd. III, No. 1, S. E. 1—E. 6.

Kashiwa Ohyama.

Die Maglemosien-Kultur in Nord-Europa. (Résumé).

ibid., Bd. III, No. 2/3.

1932. Kashiwa Ohyama.

Der chronologische Verauf des europäischen Palaeolithikums. (Résumé)

ibid., Bd. IV, No. 2.

P. V. van Stein-Callenfels.

Die Aufgaben der japanischen Praehistorie im Rahmen der internationalen Forschung. (Besprechüng im Ohyama Institut für Praehistorie am 22 Mai 1932.)

ibid., Bd. IV, No. 3/4, S. E. 1—E. 10.

1933. Kashiwa Ohyama.

Findet Man in Japan Palaeolithikum? (Résumé)

ibid., Bd. IV, No. 5/6, S. E. 1.—E. 3.

Kashiwa Ohyama.

Zum Gedächtniss an Herrn Hikoichi Motoyama.

ibid., Bd. V, No. 1, S. E. 1.

Kashiwa Ohyama.

Herrn Prof. Dr. Hubert Schmidt zum Gedäechtniss.

ibid., Bd. V, No. 3, S. E. 1.

Kashiwa Ohyama. Mitsuji Miyasaka. Keisuke Ikegami.

Vorläufiger Bericht ueber die Chronologie der Jômon-Kultur der Steinzeit im Kwanto (Mittel-Japan). (Résumé)

ibid., Bd. III, No. 6, S. E. 1.

Shôsaburo Yokoyama.

Resume des Ausgrabungsberichts ueber den Muschelhaufen Tôsando auf der Insel Maki-no-shima, Süd-Korea.

ibid., Bd. V, No. 4, S. E. 1—E. 7.

1934. Iwao Ooba.

Hoehlenfunde der japanischen Urzeit. (Résumé)

ibid., Bd. VI, No. 3, S. E. 1—E. 2.

Kashiwa Ohyama.

Die Muschelhaufen-Gruppe Shimosugeta.

Mitteilungsblatt des Ohyama Instituts. Einzelne-Ergebnisse zur Chronologie der Jômon-Kultur des Neolithikum im Kwantô (Mittel-Japan) No. I.

ibid., Bd. V, No. 6.

Kashiwa Ohyama.

Der Muschelhaufen von Orimoto.

Mitteilungsblatt des Ohyama Instituts. Einzelne-Ergebnisse zur Chronologie der Jômon-Kultur des Neolithikum im Kwantô (Mittel-Japan) No. II.

ibid., V, No. 6.

Ryûichi Yamaguchi

Sur l'homme néolithique au Japon.

(noch nicht erschien)

史前學會
大山史前學研究所

刊行書目

史前學雜誌第一卷（昭和四年刊行）定價 六 圓
史前學雜誌第二卷（昭和五年刊行）定價 六 圓
史前學雜誌第三卷（昭和六年刊行）定價 六 圓
史前學雜誌第四卷（昭和七年刊行）定價 六 圓
史前學雜誌第五卷（昭和八年刊行）定價 六 圓
史前學雜誌第六卷（昭和九年刊行）定價 六 圓
史前學雜誌第七卷（昭和十年刊行）定價 六 圓

研究小報第一號　神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地調査報告　大山柏著　定價壹圓　送〇、一〇
研究小報第二號　埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告　甲野勇著　定價壹圓廿錢　送〇、一〇
パンフレット第一號　史前の研究　大山柏著　定價十五錢　送〇、〇四
パンフレット第二號　石器時代の概要　大山柏著　定價十五錢　送〇、〇四
パンフレット第三號　未開人身體裝飾　甲野勇著　定價三十錢　送〇、〇四
パンフレット第四號　石器時代遺跡概說　大山柏著　定價四十錢　送〇、〇四
東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報（第一編）　大山史前學研究所　史前學雜誌第三卷六號代册　定價一圓五十錢　送〇、一〇
關東縄紋式文化編年學的研究資料第一冊　横濱市下菅田貝塚群（昭和九年刊行）大山史前學研究所　定價六十錢　送〇、一〇
關東縄紋式文化編年學的研究資料第二冊　神奈川縣都田村折本貝塚（昭和九年刊行）大山史前學研究所　定價六十錢　送〇、一〇
（但し、史前學雜誌第五卷全部希望の方には編年資料第一、第二冊を第五卷第六號とします）
日本舊石文化存否研究　大山柏著　史前學雜誌第四卷第五六號代册　定價二圓五十錢　送〇、一〇
史前學講義要錄（第一部基礎史前學）大山柏著　定價七十錢　送〇、一〇
史前學講義要錄（第二部事實史前學）大山柏著　定價八十錢　送〇、一〇
史前學繪葉書　第一輯（外國之部）定價二十五錢　送〇、〇二錢
史前學繪葉書　第二輯（日本內地之部）定價二十五錢　送〇、〇二錢

東京市澁谷區穩田一ノ九
史前學會
電話青山一二五五番
振替東京五八九六八番

第四號

横濱市鶴見區下末吉町小仙塚貝塚調査報告（池上、土岐、大給）

武藏國北寺尾上ノ宮貝塚調査豫報（桑山）

下總堀之内貝塚對岸に於ける古式繩紋式土器出土の一小貝塚（宮崎、稻生）

大和新庄町寺口附近の石器（島本）

第三號

挿圖目錄

雑

文献

史前學雜誌第七卷索引

論說

資料

第六號

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第五號

第三號

第四號

史前學雜誌　第七卷總目次

第一號

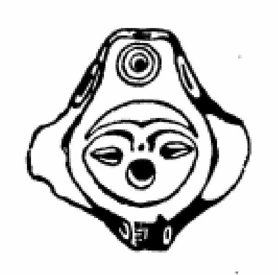
第二號



史前學雜誌

第七卷

總索引及目次



昭和十年

史前學會

寺洞里附近發見の玦　小野　忠明　ドルメン　四ノ四
瓦のかけ　宮川　饗　ドルメン　四ノ五
方位石とドルメン群發見の動機　狄島　敎雄　ドルメン　四ノ五
滿蒙の石器時代　島田　貞彥　ドルメン　四ノ六
滿洲の舊石器時代　直良　信夫　ドルメン　四ノ六
朝鮮の石器時代　藤田　亮策　ドルメン　四ノ六
朝鮮の石器時代人　今村　豐　ドルメン　四ノ六
西浦里附近の史前遺跡　小野　忠明　ドルメン　四ノ七
渤海の佛像　原田　淑人　文　化　二ノ二
昭和五年度古跡調査報告第一册　朝鮮總督府
昭和六年度古跡調査報告第一册　朝鮮總督府
昭和二年度古跡調査報告第二册　朝鮮總督府
塊狀多頭石器　水野　淸一　人　類　五〇ノ五
熱河老西營子塼墓調査記　三上　次男　水野　淸一　人　類　五〇ノ一〇
慶尙南道蔚山郡西生面出土の櫛目文樣土器片　齋藤　忠　考　雜　三五ノ六
熱河省南部の先史時代遺跡遺物　八幡　一郎　第一次滿蒙學術調査研究團報告第六部第一編

(五)　其　他

北米パーモンド大學寄贈の石器　池上　啓介　史　前　七ノ五
漢三國六朝紀年鏡銘集錄增補(其四)　梅原　末治　史　學　一四ノ一
印度文化の源泉　逸見　梅榮　岩波講座、東洋思潮
朝詳譜に現れたる古代文化の史的考察　崔　榮　翰　ドルメン　四ノ八
ツールーズ博物館とニオーの洞窟　飯塚　浩二　科　知　一五ノ四
アルタミーラの洞窟　飯塚　浩二　科　知　一五ノ六
印度支那茶綠の巨石遺跡　松本　信廣　人　類　五〇ノ五
印度支那に於ける甌榔墳(一)　小林　知生　人　類　五〇ノ八

(六)　雜

文學部考古學研究室蒐集品考古圖編第九輯　東京帝國大學
帝室博物館年報(自昭和九年一月至十二月)　帝室博物館
飛驒考古學關係文獻抄(四)　八幡　一郎　ひだびと　三ノ二
東亞考古學に關する座談會(一・二・三)(濱田、原田、島村、江上、駒井、三上、八幡、甲野、森本)　考古學　六ノ三・四・五
モヘンジョ・ダロの美術　上野　照夫　考古學　六ノ九
印度民族　木村　日紀　岩波講座、東洋思潮
印度支那民族　松本　信廣　岩波講座、東洋思潮
シヤール・エフ・ジヤン「最近の發掘より見たる前第三千年紀に於ける印度とスメル」　間崎　萬里　史　學　一四ノ二
東亞に於ける化石人類　松村　瞭　ドルメン　四ノ六
沈み行く東京　菊池　山哉
富民協會農業博物館木山考古室圖錄　末永雅雄編

記紀に現れたる考古學的記載に就いて　水上　毅　ドルメン　四ノ三
先史・原史時代に於ける文化の考察　水上　毅　ドルメン　四ノ四
貝塚で玉　松本　友雄　ドルメン　四ノ四
甲斐の先史並原史時代の調査　仁科　義男　人類　五〇ノ五
筑前沖津宮の石製模造品　田中　幸夫　考雜　二五ノ二
長門國見島村の彌生式遺跡と古墳出土遺物　山本　博　考雜　二五ノ八
播北に於ける新發見の繩文系遺跡と二三の彌生式遺跡に就て　島田　福雄　佐藤　正護　考雜　二五ノ一一
峠神の一考察　大場　磐雄　上文　一三

三、地方別

(一)　本　土(省略)

(二)　千島、樺太、北海道

カムチヤツカの石器時代　中山　英司　ドルメン　四ノ六
樺太の石器時代の遺跡遺物　伊東　信雄　ドルメン　四ノ六
北海道の石器時代の概要　河野　廣道　ドルメン　四ノ六
北海道釧路市附近の石器時代遺跡及び遺物　久保　常晴　銅鐸　五
北海道網走町モヨリ貝塚中の人骨埋葬に就いて　米村喜男衞　人類　五〇ノ二
北海道の細石器　八幡　一郎　人類　五〇ノ三
樺太亞庭灣沿岸小滿別遺跡に就いて　新岡　武彥　人類　五〇ノ六
北海道出土の石器の一部について　後藤　壽一　人類　五〇ノ九
石狩國江別町の竪穴住居址に就て　後藤　壽一　考雜　二五ノ二
石狩國江別町に於ける竪穴樣墳墓について　後藤　壽一　考雜　二五ノ五

(三)　琉球、臺灣

臺灣紅頭嶼イモロルの打製石斧　金子　富雄　史前　七ノ一
南島石器聚成―沖繩篇―　三宅　宗悅　考古學　六ノ五
南島の石器時代　三宅　宗悅　ドルメン　四ノ六
臺灣の石器時代遺物』　宮本　延人　ドルメン　四ノ六

(四)　朝鮮、滿洲國

滿洲の「ドルメン」を見て　河井田政吉　史跡名　一〇ノ二
冢―考古雜記―　島田　貞彥　考古學　六ノ一
金海貝塚の新發見　榧本龜次郎　考古學　六ノ二
南鮮小鹿島發見の多鈕細線文鏡・其他　榧本龜次郎　考古學　六ノ三
鬲形土器の推移　中村　清兄　考古學　六ノ四・五
北鮮の石器資料　榧本龜次郎　考古學　六ノ五
熱河赤峰遊記　濱田　青陵　考古學　六ノ八
熱河赤峰出土の一古鏡について　水野　清一　考古學　六ノ八
牧ノ嶋發見の注口土器　及川民次郎　考古學　六ノ一〇
瓦のかけ　宮川　肇　ドルメン　四ノ二
滿洲に於ける舊石器時代の最初の發見　ボノソッフ　ドルメン　四ノ二

題目	著者	誌名	巻號
板碑所在報告	日比野千雄	銅 鐸	五
上野古瓦文字考（上・中・下）	住谷 修	上 毛	三八・九・一〇
應安銘の板碑發見	依田今朝吉	上 毛	三九
上野古瓦文字（一）	松田 鑛	上 毛	三四
東北地方に於ける古瓦の特色に就いて	內藤 政恒	文 化	二ノ三
造 瓦	島田 貞彥		
古代佛像の人類學的研究	北村直躬 石崎達二		
爲因庵文永在銘寶篋印塔と高山寺式形式	川勝政太郎	考 雜	三五ノ一
伊豫奈良原神社境內經塚	玉田榮二郎	考 雜	三五ノ一
奈良朝に於ける塑と纏に就いて（一・二）	吉野 富雄	考 雜	三五ノ三・四
長谷寺の金銅版千佛多寶佛塔について（一・二）	福山 敏男	考 雜	三五ノ三・四
南山和尚祥勝塔と無縫塔形式	川勝政太郎	考 雜	三五ノ三
蓮華座に就いて	野間 清六	考 雜	三五ノ四
播州極樂寺瓦經塚並に遺物に就いての考察	鎌谷木三次	考 雜	三五ノ四
伊豫松山附近金石文	柳原多美雄	考 雜	三五ノ四
信濃國小縣郡武石村金石文（一・二）	小山 眞夫	考 雜	三五ノ六・七
但馬樂音寺一佛一字經瓦	太田 陸郎	考 雜	三五ノ六
宇治浮島十三重石塔銘など	高田 十郎	考 雜	三五ノ六
長門國三隅村の經塚遺物	山本 博	考 雜	三五ノ六
奈良時代に於ける興福寺の占地	足立 康	考 雜	三五ノ七
赤碕塔	川勝政太郎	考 雜	三五ノ七
播磨極樂寺瓦經に就いて	辻 善之助	考 雜	三五ノ七
鎌倉小學校庭發掘の古錢調査報告	入田 整三	考 雜	三五ノ九
尾道淨土寺の鍮金經箱に就いて	吉野 富雄	考 雜	三五ノ九
筑前鞍手郡都市八幡の經筒	田中 幸夫	考 雜	三五ノ九
上杉憲方の逆修塔	赤星 直忠	考 雜	三五ノ九
大和輿山の寶篋印塔について	佐々木利三	考 雜	三五ノ九
上野國金石文	相川 龍雄	考 雜	三五ノ一〇
源義助板碑否定論者に應ふ（一・二）	服部淸五郎	考 雜	三五ノ一〇・一一
赤城山神蹟考	大場 磐雄	考 雜	三五ノ一一
磐城國西白河郡五箇村借宿の遺跡遺物に就いて	內藤 政恒	考 雜	三五ノ一一
大化改新と駱駝の傳來	秋山 謙藏	上 文	一三
正倉院御物に見える竹鏃骨鏃について	樋口 淸之	上 文	一三
肥前風土記神埼郡の條に於ける僧寺に關する一考察	七田 忠志	上 文	一三

(五) 雜

題目	著者	誌名	巻號
遺蹟を巡る	川上 寒朗 福田 夕咲	ひだびと	三ノ九
九州史蹟巡禮雜記	川村 眞一	史 跡 名	一〇ノ二
入間郡高萩村牧場の遺跡	金鑽 武城	埼 史	六ノ三
旅に資料を探る座談會（一・二）	後藤守一、杉山壽榮男 大場磐雄、直良信夫	考古學	六ノ一・二

平將門の遺跡と稱する下總の古墳	中村 賓水	史跡名	一〇ノ九
八幡山古墳	柴田 常恵	埼 史	六ノ五
北足立郡川田村出土の勾玉形銅環	遠山 荒次	埼 史	七ノ一
木製品を伴ふ埴輪	末永 雅雄	考古學	六ノ二
船形石製品の一例	藤澤 一夫	考古學	六ノ三
徳川末期の古墳發掘報告	河野 國雄	考古學	六ノ五
石舞臺を掘る	末永 雅雄	考古學	六ノ六
埼玉縣八幡山古墳	編 輯 部	考古學	六ノ六
多鈕細文鏡	森本 六爾	考古學	六ノ七
讃岐出土の一古鏡	梅原 末治	考古學	六ノ八
塚廻り古墳發掘の思出	田中 恭子	考古學	六ノ九
上代の遺物遺跡と其の文化	梅原 末治	岩波講座日本歴史	
日本上代の甲冑	後藤 守一	ドルメン	四ノ三
石墳石室を裸にする	大場 磐雄	ドルメン	四ノ五
再び石舞臺を掘る(一・二)	禰津 正志	ドルメン	四ノ七・八
中野區川嶋發見の原史時代竪穴	奥田 直榮	ドルメン	四ノ七
前方後圓墳と古墳集團	相川 龍雄	上毛	二二三
赤堀村今井地内竪穴に就て	山崎 義男	上毛	二二五
古墳の分布と賓郷との關係(一)	松田 鎭	上天	二二七・八
梁夫山古墳考	大崎 範一	上毛	二二八
多野郡吉井附近の三大古墳群について	堀越一二三	上毛	二二九
廢墳出土の有文土器に就て	山崎 義男	上毛	二二九
鶴巻古墳と地名の考察	菁 花 生	上毛	二三〇
御富士山古墳(前方後圓考)(一・二)	相川 龍雄	上毛	二三一・二
山王古墳	相川 龍雄	上毛	二三三
古墳國上毛と土師	松田 鎭	上毛	二三三
上毛考古學(一・二)	相川 龍雄	上毛	二三三・四
山上碑と古墳時代	松田 鎭	上毛	二三四
諏訪郡湊村糠塚發見の六獸鏡	兩角 守一	信濃	四ノ七
播磨加古川流域の古墳及び遺物調査報告(續一・二・三・四)	栗山 一夫	人類	五〇ノ一・二・五・六
古鏡鑑の新資料二例	梅原 末治	人類	五〇ノ三
日本歴史時代初期墳墓研究提要	瀧田 芳朗		
筑後千年村徳丸古墳前方部石室に於ける埋葬の狀と遺物の一二	田中 幸夫	考雜	二五ノ一
伊豆で見た一二の資料	三木 文雄	考雜	二五ノ三
佐賀縣久保泉村西原裝飾古墳調査概報	七田 忠志	考雜	二五ノ四
大隅に於ける前方後圓墳に就いて	木村 幹夫	考雜	二五ノ五
信濃國遺存前方後圓墳概說	小山 眞夫	考雜	二五ノ五
讃岐に於ける前方後圓墳	寺田 貞次	考雜	二五ノ五
横濱市磯子區室ノ木古墳調査記	石野 瑛	考雜	二五ノ六
上野國佐波郡の前方後圓墳	相川 龍雄	考雜	二五ノ七
筑前發見祝瓷馬の二例	田中 幸夫	考雜	二五ノ七

(三)　原史文化關係

題名	著者	誌名	巻號
烏帽子形石器	角田 文衞	人類	五〇ノ七
奥羽地方發見の箆狀石器	八幡 一郎	人類	五〇ノ五
陰刻ある石斧の新資料	名取 武光	考雜	二五ノ九
那須野の直剪鏃	大山 柏	史前	七ノ六
土器に入れたもの	土岐 仲雄	史前	七ノ六
球形土製品資料	角田 文衞	史前	七ノ六

4. 雜

題名	著者	誌名	巻號
石器時代の人類と猪	甲野 勇	ドルメン	四ノ一
石器時代の埋葬法と蛇	笠原 烏丸	ドルメン	四ノ一
考古學上より見たる蝦夷	喜田 貞吉	ドルメン	四ノ六
先住民に對しての私の感想	鳥居 龍藏	ドルメン	四ノ六
日本貝塚の地域的研究に就いて	土岐 仲雄	ドルメン	四ノ六
史蹟として指定された石器時代遺跡	上田 三平	ドルメン	四ノ六
植物製遺物を出す遺跡	甲野 勇	ドルメン	四ノ六
大森介墟の分裂	松岡 巖	ドルメン	四ノ六
僕の考古史	清野 謙次	ドルメン	四ノ六
鮮陽雜記	林 魁一	ドルメン	四ノ六
東日本に於ける縄紋式土器型式一覽表	編 輯 部	ドルメン	四ノ六
アイノの人類學的調査の思ひ出	小金井良精	ドルメン	四ノ七
神いくさと山のかみ	中谷治宇二郎	ドルメン	四ノ七
鳥居博士の感想に對する感想	今村 豐	ドルメン	四ノ八
山名の出土品について	依田今朝吉	上毛	二六
日本の石器時代と細石器の問題	八幡 一郎	科知	一五ノ四
史前漁撈關係資料としてのエヒ類(Batoidei)に就いて	大給 尹	史前	七ノ六
神奈川縣下に於ける性質不明の二貝塚	土岐 仲雄	史前	七ノ六

(二) 彌生式關係

題名	著者	誌名	巻號
各大さを異にする袴跟のある大和及び三河發見の土器	樋口 清之	史前	七ノ一
彌生式土器の新資料二例	淺田 芳朗	史前	七ノ二
東京市大森區雪ケ谷清明學園附近に於ける彌生式遺跡	佐野 又治 齋藤房太郎	史前	七ノ五
濱名湖畔發見の有溝石斧	松本 吉治	史前	七ノ五
名古屋市南區呼續町東郷梅貝塚		愛知縣、史跡名、第三	
單純彌生式遺跡 (三)	加藤 鉀次	ひだびと	三ノ二
小型丸底土器小考	小林 行雄	考古學	六ノ一
遠賀川式土器の把手	小林 行雄	考古學	六ノ三
磨製有肩石斧の一例	三森 定男	考古學	六ノ三
彌生式遺跡出土の有肩石斧	小林 行雄	考古學	六ノ三
彌生式文化末期の研究	森本 六爾 小林 行雄	考古學	六ノ三
昭和九年度の彌生式土器研究	小林 行雄	考古學	六ノ一
筑前羽根戸の朝鮮式有溝把手	中山平次郎	考古學	六ノ四

題名	著者	誌名	巻號
武藏國橘樹郡橘村發見の石製耳飾破片	關口　齊	史前	七ノ二
圓筒土器紋樣二種	武藤　鐵城	史前	七ノ二
*大和國新庄町寺口附近の石器	島本　一	史前	七ノ四
武藏國南多摩郡稻原發見の土偶	宮崎　糺	史前	七ノ四
埼玉縣下眞福寺貝塚の土偶二例	池上　啓介	史前	七ノ五
石小刀治柄異例	武藤　鐵城	史前	七ノ五
栃木縣那須野原の石器時代資料	池上　啓介 大給　尹	史前	七ノ五
佐渡の繩紋式土器資料	湊　　晨	史前	七ノ五
群馬縣新田郡世良田村米岡發見の大岩版	大場　盤雄	史前	七ノ五
爪形紋ある土器	八幡　一郎	ひだびと	五ノ一〇
飛驒一之宮附近出土の石器時代土器について	赤木　清	ひだびと	三ノ九
江名子糠塚の土器（一）	赤木　清	ひだびと	三ノ三
〃　　　　　　（二）	赤木　清	ひだびと	三ノ四
玦狀耳飾發見地名表	高橋　直一	史跡名	一〇ノ二
石鏃小觀	加藤　鉀次	ひだびと	五ノ三
方形底の繩紋土器	赤木　清	ひだびと	五ノ三
尾參地方史前土器の一二の種類	吉田　富夫	考古學	六ノ一
北陸に於ける繩紋土器の一型式	藤森　榮一	考古學	六ノ一
肥後轟貝塚の土器に就て　―覺書―	三森　定男	考古學	六ノ二
越中に於ける陸奥式土器	湊　　晨	考古學	六ノ二
四國土器通路（一・二）	杉山壽榮男	考古學	六ノ二・四
肥後轟貝塚の土器續編	三森　定男	考古學	六ノ五
山國飾玉襍記	藤森　榮一	考古學	六ノ七
四國先史土器論	杉山壽榮男	考古學	六ノ九
石爪に就いて	藤森　榮一	考古學	六ノ一〇
石匙の或る斷面	藤森　榮一	考古學	六ノ一〇
古式繩紋土器研究最近の情勢	山內　淸男	ドルメン	四ノ一
土版岩版の表裏と上下	武藤　鐵城	ドルメン	四ノ五
石鏃型式分類	小川　五郎 澄田　正一	ドルメン	四ノ五
日本の石器	八幡　一郎	ドルメン	四ノ六
石鏃の思出話	濱田　靑陵	ドルメン	四ノ六
「山」字紋ある土版	池上　啓介	ドルメン	四ノ六
甲斐の先史土偶	仁科　義男	ドルメン	四ノ六
九州に於ける繩紋土器の一形式	三森　定男	ドルメン	四ノ六
貝塚から發見せらる哺乳動物に就て	直良　信夫	ドルメン	四ノ七
玦狀耳飾發見地名表	高橋　直一	（謄寫版）	
石小刀は如何にして使用されたか	武藤　鐵城	灰	三
纖維を含む土器	齋藤　武一	銅鐸	五
下沼部貝塚出土の貝輪	水野　孝紹	銅鐸	五
黑川峽の繩紋土器	岩澤　正作	毛野時報	四
石器時代貝塚出土の獸骨片について	鈴木　尙	人類	五〇ノ五

縄紋式文化　山内　清男　ドルメン　四ノ六
史前學講義要錄(基礎史前學)　大山　柏
考古學的遺物整理法　土岐　仲雄　科　知　一五ノ九
化石人類發見史　マルセル・ブル　科　知　一五ノ一〇
上代文化の發達に對する一考察　後藤　守一　上　文　一三

二、時代別

(一) 縄紋式關係

1. 縄紋式汎論

東京灣を繞る主要貝塚に於ける「はまぐり」の形態的變化に依る石器時代の編年學的研究　鈴木　尚　史　前　七ノ二
關東地方に於ける縄紋式石器時代文化の變遷　甲野　勇　史　前　七ノ三
筑後二川以北に於ける縄紋式遺跡　七田　忠志　考古學　六ノ九
東日本海系石器文化の輪廓　藤森　榮一　考古學　六ノ一〇
日本石器時代研究小史　大場　磐雄　ドルメン　四ノ六
日本石器時代の遺跡と遺物　編　輯　部　ドルメン　四ノ六
石器時代研究概觀　柴田　常惠　ドルメン　四ノ六

2. 地方誌並に調査報告

神奈川縣横濱市中區中村町稻荷山貝塚調査概報　池田　健夫・齋藤房太郎・佐藤陽之助　史　前　七ノ一
東京市上目黒東山石器時代竪穴調査報告概要　下村作治郎　史　前　七ノ一
横濱市鶴見區下末吉町小仙塚貝塚調査報告　大山史前學研究所　史前　七ノ四
下總國堀之内貝塚對岸に於ける古式縄紋式土器出土の一小貝塚　宮崎　糺・稻生典太郎　史　前　七ノ四
長崎縣下の遺跡遺物に就て　桑山　龍進　史　前　七ノ五
京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告　梅原　末治　京都、史蹟名、第十六、別冊
(東八代郡・西八代郡)先史時代遺跡遺物の概要　山梨縣史蹟名、第八
飛驒石器時代遺跡地名表　飛驒考古學會編
飛驒國益田郡川西村西上田の遺物及び遺跡　林　魁一　人　類　五四ノ六
加賀國河北町宇ノ氣村上山田貝塚概報　秋田　喜一　考　雜　二五ノ三
栃木縣川西町石器時代住居址　渡邊　留吉　考　雜　二五ノ三
安房東海岸に於ける石器時代遺跡　平野元三郎・瀧口　宏　考　雜　二五ノ八
横須賀市田戸先史時代遺跡調査　赤星　直忠　史　前　七ノ六
栃木縣那須郡狩野村槻澤石器時代住居趾發掘報告(其一)　池上　啓介　史　前　七ノ六

3. 遺物研究

埼玉縣皆野町新井出土の土製耳飾　齋藤房太郎　史　前　七ノ一
羽前國庄內地方出土の石劍　大給　尹　史　前　七ノ一
貝殼押捺紋土器資料　桑山　龍進　史　前　七ノ二
南多摩郡鶴川村發見土偶　高橋　光藏　史　前　七ノ二
眞福寺貝塚發見の一土偶　宮崎　糺・稻生典太郎　史　前　七ノ二
馬込貝塚發見の石槍と棗玉　久保　常晴　史　前　七ノ二

昭和十年度史前學關係論文報告資料（昭和十年十二月〆切）

一、一般

題目	著者	掲載
史前食料概說　共二	大山　柏	史　前　七ノ一
〃　　共三	大山　柏	史　前　七ノ五
陶器製作史概說（一）	赤塚　幹也	陶器講座　第六卷
佛國人類學の現況	中谷治宇二郎	考古學　六ノ一
日本舊石器時代研究の昨今（一・三）	直良　信夫	考古學　六ノ二・七
土器研究の科學的方法	ヴオエヴオドスキイ 彌津正志譯	考古學　六ノ三
日本先史學と蘭學	中谷治宇二郎	考古學　六ノ八
手　帖（一）	森本　六爾	考古學　六ノ八
先史學編年への異見	景山　哲二	考古學　六ノ一〇
日本文化の源泉	濱田　耕作	岩波講座東洋思潮
昭和九年人類學界展望	三宅　宗悅	ドルメン　四ノ一
昭和九年考古學界素描	八幡　一郎	ドルメン　四ノ一
考古學年代の決定に就いて	水上　毅	ドルメン　四ノ五
考古學	大場　磐雄	現代哲學全集一六
考古學概論	物質文化史アカデミー編 早川二郎譯	
明治考古學史	八木奘三郎	ドルメン　四ノ六
貝　塚	田澤　金吾	ドルメン　四ノ六

本名	略號
Mitteilungen der Anthropologie. Gesellschaft in Wien.	Mitt. d. Anthr. Ges. Wien.
民俗學	民俗學
民族	民族
N	
日本研究	日研
Natural History.	Nat. His.
P	
praehistorische Zeitschrift.	Praehis. Zeitschr.
R	
歴史地理	歴地
歴史と地理	歴と地
Revue anthropologique.	Rev. d'anthr.
Revue mensuelle de l'Ecrle d'anthropologie de paois.	Rev. mens. d. Ecol. anthr. d. Paris.
S	
社會學雜誌	社雜
宗教研究	宗研
史學	史學
信濃考古學會誌	信考
埼玉史談	埼史
史學雜誌	史雜
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名
史前學雜誌	史前雜
史苑	史苑
史林	史林
T	
東北文化研究	東文
東洋學藝雜誌	東學誌
東洋學報	東學報
Z	
Zeitschrift für Ethnologie.	Zeitschr. f. Ethnol.

遺跡記號例（再錄）

地上標式の一例

- 貝塚
  - 鹹水 ▲
  - 淡水 ▲̄
  - 鹹淡 ▲̇
  - 未調査 △
- 住居跡
  - 竪穴 ▼
  - 平地住居 ⌂
  - 洞窟 ∩
- 單なる遺物發見地 ×
- 縄紋式を示す場合 ↑
- 彌生式を示す場合 ＋

備考

1 本標式は私共研究所で主として遺跡を標式する爲に作出したもので，會員諸君の御參考までに掲出したものであります。
今後私共ではこれによつて標式してまいりますから，本標式と御對照を御願します。

2 標式は猶不足のものもありますが，漸次増補を加へて行きたいと思ひます。

3 標式の樣式は必ずしも，本標式のみとも限らず，更に色々の考案もあることゝ思はれますから，これ等に對し，諸君の御考案を御知らせ下さい。

雜誌名略稱一覽（再錄）

1 論文中に屢々引用せらるゝ雜誌名を,一々記載する煩を避け,或は本名未詳の略稱等を統一する爲,本覽を設けた。便利であるなれば御使用を願ふ。
2 雜誌の種類も,手近にあり,且つ比較的多く引用せらるゝものと考へらるゝ範圍に止めた。特に外國雜誌に於て然りである。
3 本覽は,本年度の試みに過ぎない。次年度に於て,改正增補も期して居る。

本名	略號
A	
American Anthropologist.	Americ. Anthr.
Aarboger for Nordisk Oldkyndighed og historie.	Aarbog. f. Nord. Old. o. His.
B	
Bulletiues ef Mémoires de la Société D'Anthropologie.	Bull. et. mém. Soc. d'anthr.
C	
地理學評論	地評
地質學雜誌	地質
中央史壇	中央
D	
動物學雜誌	動物
E	
Eurosia Septentrionalis Autipua.	Euras. Sept. Autip.
G	
現代の科學	現科
J	
上毛及上毛人	上毛
人類學雜誌	人類
上代文化	上文
人性	人性
Journal of the Royal Anthroolpogical. Institute of Great Rritain and Irlaud.	Jour. Anthr. Inst.
K	
考古學雜誌	考雜
國學院雜誌	國雜
考古學	考古學
科學知識	科知
考古學會雜誌	考會雜
考古界	考古界
考古學研究	考研
Korrespondenz Blatt der beutschen Gesellsochaft für Anthroplogie, Ethnologie und Ugesehichte.	Korr-Blatt d. deutschen Ges. f. Anthr Ethnol. u. Urgeschichte.
L	
L, Anthropologie.	Anthr.
M	
民俗藝術	民藝
Man.	Man.
Mannus.	Mannus.
Memoires be la Seciété Royale des Antipuaires der Nord.	Men. d. l. Soc. Ry. d Antip. d. Nord.

神戸市御崎町一丁目鐘紡武藤理化學研究所	和食和
福島縣相馬郡　山上小學校內	渡部晴雄
東京市麻布區富士見町二八	渡邊泰三
東京市澁谷區原宿一ノ八五	和島誠一

Y之部

長崎市紺屋町一八	山田清
東京市世田ヶ谷區代田一丁目六五二ノ二	山口隆一
仙臺市東二番町八六　虎岩方	山本桝藏
京都市中立賣通烏丸西入	山本行範
長崎縣南高來郡加津佐村　山崎醫院	山崎重長
東京市中野區鷺宮一、一三五	山内清男
東京市澁谷區代々木三谷町二八三	柳澤保承
秋田市西馬口勞町	鑓野目条藏（ヤリノメ）
東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一四五三	矢崎芳夫
長野縣南安曇郡豐科高等女學校	安間清
東京市瀧野川區瀧野川町五四六	八幡一郎
東京市赤坂區青山同潤會アパート（參宮表參道）三號館第三十三番	横山健堂
朝鮮京城府東四軒町五〇	横山將三郎
北海道北見國網走町	米村喜男衞
奈良縣高市郡　鴨公小學校內	吉田宇太郎
兵庫縣西宮市社家町一〇	吉井太郎
横濱市神奈川區神奈川通六丁目一八一	吉川菊藏
東京市京橋區京橋二ノ一一	吉川弘文館
福岡縣築上郡友枝村	吉村鐵臣
大分縣西國東郡高田町字佐神宮	吉成安親
長野縣上伊那郡赤穗町下平	吉澤正男
東京市杉並區馬橋二丁目一九〇	依田雄甫

合計　二四四名（入會一五　退會四二　死亡四）

東京市淀橋區柏木町三四八　鹿野忠雄
奈良縣高市郡八木町新道　島本一
東京市豊島區池袋四丁目五〇一　島村孝三郎
東京市世田ヶ谷區池尻一五五　下村作次郎
東京市目黒區鷹番町三八　森田方　下村正信
三重縣宇治山田市古市町　篠田良二
山形縣酒田市山王森　白崎良彌
仙臺市東北帝國大學理學部地質古生物學教室　曾根廣
三重縣津市縣立女學校　鈴木敏雄
東京市牛込區辨天町一四九　鈴木恒治
滿洲國新京錦町三丁目　第四錦ビル內　菅崎三文
東京市牛込區河田町一一　杉山壽榮男
東京市日本橋區小舟町三ノ一　杉原荘介

T 之 部

東京市四谷區仲町學習院初等科　高橋一凱
東京市大森區東調布町田園都市第八四號　高橋正人
熊本縣鹿本郡山東村　高群清太
茨城縣新治郡石岡實科高等女學校　高野修正
神奈川縣川崎市南幸町三ノ一二九七　高島德三郎
東京市四谷區花園町九〇　竹下次作

東京市南葛飾區金町一〇七四　田邊孝次
滿洲國吉林省吉林顧問館田中公館　田中存雄
北海道函館市谷地頭町八六　谷徹一
東京市杉並區西荻窪町一ノ二四　田澤金吾
兵庫縣西宮市鞍掛町七九　辰馬悦藏
東京市澁谷區穩田町二丁目八　田原鎭雄
東京市外三鷹村牟禮四九〇　角（ツノ）田文衞
鹿兒島縣伊佐郡大口町　寺師見國
東京市世田ヶ谷區太子堂一〇一　酒詰方　土（トキ）岐仲雄
靜岡縣磐田郡見付町玄妙小路　鴇（トキ）田忠雄
東京市大森區山王二、八三二　德富武雄
東京市牛込區市ヶ谷町一一二　塚越卯太郎
東京市赤坂區高樹町三　岡本方　恒松安夫

U 之 部

京都市左京區下鴨北園町五八　梅原末治
東京市世田ヶ谷區羽根木町一七一五　宇宿捷
東京市大森區新井宿二丁目木原山一六一八　上田恭輔
大阪市北區中之島三丁目　終身會員　上野精一

W 之 部

O之部

北海道上磯町　落合計策
東京市世田谷區下馬町三ノ一〇三 山本英太郎方　小田基彦
岡山市醫科大學衛生學教室　緒方益雄
朝鮮釜山府佐川町陵風莊　及川民次郎
東京市世田ケ谷區玉川上野毛町　岡榮一
神戸市楠町七丁目神戸日々新聞社　岡田定信
神戸市荒田町四ノ一七八　小野楠雄
東京市外武藏野町吉祥寺一七六ノ三號　大場磐雄
東京市小石川區小日向臺町二丁目一六　大口寄六
東京市杉並區高圓寺四ノ五三七 淸風莊　大給尹
京都市伏見桃山大谷邸三夜莊　大谷光瑞
東京市麹町區有樂町東京日々新聞社　大塚虎雄
東京市小石川區原町一〇番地　大塚彌之助
岩手縣盛岡市加賀生新小路　小田島祿郎
東京市澁谷區穏田町一丁目九 大山柏方　大山梓
東京市澁谷區穏田町一丁目九　大山柏

R之部

關東廳旅順市大迫町　旅順博物館

S之部

東京市世田ケ谷區代田五〇七　齋田平太郎
東京市品川區五反田三ノ一六五 飛田邸內　齋藤武一
朝鮮慶北慶州博物館內　齋藤忠
東京市大森區堤方町一、〇〇一　齋藤房太郎
東京市世田ケ谷區代田鶴岡六三二　齋藤弘
東京市四谷區愛住町一六　齋藤庄太郎
新潟縣下千谷町旅屋町　齋藤秀平
東京市小石川區高田老松町四三　酒井忠一
臺灣臺北市龍口町三ノ一八　坂元軍二
熊本縣菊池郡泗水村字住吉日吉神社　坂本經堯
Köln, Hansaring 32 a Deutschland Dr. Alfred Salmony
東京市世田ケ谷區代田二丁目七一二　佐野淡一
東京市芝區高輪南町三〇　佐野又治
大分縣廳內　佐々木新七
横濱市神奈川區青木町神奈川高等女學校　佐藤善治郎
東京市淺草區淺草寺內　關口齊
北海道稚內町通り三　關正
東京市板橋區練馬向山町四一　柴田常惠
東京市牛込區市ケ谷仲之町三八　志賀三亥

臺灣臺北市臺灣博物館　松倉鐵藏
東京市目黒區紅葉ヶ丘一、二七九　松宮左京
東京市淀橋區諏訪町一四三　中根方　松本吉治
東京市世田ヶ谷區東玉川町三五九一　松本信廣
埼玉縣北足立郡浦和町鯛ヶ窪　松本與三郎
東京市目黒區下目黒四ノ九四七　松本芳夫
東京市本郷區曙町一六　松村瞭
大阪市東區高麗橋二丁目　松下商店　松下胤信
朝鮮京城府黄金町一丁目　丸善株式會社京城出張所
仙臺市國分町　丸善株式會社仙臺支店
東京市小石川區丸山町一一　明治聖徳記念學會
東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一五〇二有爲寮　三木文雄
石川縣江沼郡大聖寺町寺町一　三森定男
東京市牛込區原町二ノ五五　近岡博方　湊晨
兵庫縣川邊郡川西町加茂　宮川逸雄
京都市京都帝國大學醫學部病理學教室　三宅宗悦
東京市杉並區大宮前五丁目二二六　宮坂光次
東京府北多摩郡砂川村二六五　宮崎糺
中華民國、北京東華門、內、北河沿五六號　Dr. Harbert Mueller
新潟縣高田市横町一四　森成麟造
東京市豊島區長崎南町一丁目一九四〇　森貞成
岐阜縣大垣市東長町一〇四一ノ一　森俊雄
京都市東洞院丸太町南入　守屋孝藏
長野縣諏訪郡上諏訪町　兩角守一
福岡市春吉三軒屋四三三　合田方　許山通麿
宮城縣石巻町住吉町　毛利總七郎
横濱市中區南太田町一七五五　村田重義
京都市左京區下鴨松ノ木町五六　西野國太郎方　村田義夫
秋田縣河邊郡豊岩村　武藤一郎

N之部

東京市世田ヶ谷區若林町一一　内藤政光
横濱市神奈川區青木町東輕井澤一、八五七　中川直亮
東京市小石川區指ヶ谷町八五　中川徳治
東京市品川區大井町四七三八　中根君郎
東京市本郷區西片町一〇ろノ九號　中澤澄男
大阪市大阪毎日新聞社　中島秀雄
福岡市荒戸町四　中山平次郎
東京市中野區江古田町一丁目二〇五九　直良信夫
北海道札幌市帝國大學附屬博物館　名取武光
京都市室町通中立賣下ル　西村保太郎
東京市赤坂區氷川町三四　額田年

京都市左京區田中里之內町一二　牧嘉三郎方　神尾明正
東京市芝區白金臺町一ノ四八　神山能寶留
京都市帝國大學醫學部解剖學教室　金關丈夫
青森縣弘前市弘前女學校　神崎正
關東廳旅順市大迫町　關東廳博物館
朝鮮平壤公立中學校　笠原烏丸
仙臺市鹽屋下四五　高柳方　片倉修
愛媛縣越智郡宮田村　日東製絲株式會社內　片野貞明
東京市世田ケ谷區玉川奧澤町二ノ六六五　川合貞一
東京市牛込區拂方町一三　川村眞一
石川縣金澤市高等工業學校機械工學科　桒野藤二郎
東京市深川區東陽町二ノ一七　菊池山哉
仙臺市東二番町八六　喜田貞吉
東京市麴町區紀尾井町(四谷見附內)　Robert Keel
東京市江戶川區平井町三丁目七九九　桐生和夫
東京市澁谷區向山五八　北村嘉太郎
京都市上京區田中關田町二二　清野謙次
Institut für Vorgeschichte Köln, Ubierring 11. Deutschland.　Dr. Herbert Kühn
鳥取縣西伯郡淀江町　倉光清六
東京市板橋區石神井町二ノ八一九　小林胖正
熊本縣下益城郡隈之庄町　小林久雄

京都市左京區下鴨泉川町五二ノ二　小林行雄
東京市豐島區巢鴨町二ノ二四　小堀治平
東京市江戶川區小岩町下小岩四四八　小金井一郎
東京市本鄉區駒込曙町一六　小金井良精
京都市左京區北白川小倉町五〇　小牧實繁
秋田縣六郷町　小西宗吉
京都市上京區寺町廣小路上　終身會員　小島勇之助
東京市澁谷區若木町九番地　國學院大學圖書館
東京市杉並區東荻町三九　甲野勇
札幌市北十八條西六丁目　河野廣道
兵庫縣西宮市鞍掛町七　紅野芳雄
東京市品川區大井町五二八〇　倉本彥五郎
富山縣上新川郡大久保町　栗山邦二
熊本縣熊本醫科大學解剖學教室　忽那將愛
東京市芝區三田豐岡町三〇　桑山龍進

M之部

東京市芝區三田慶應義塾大學寄宿舍　前原光雄
東京市澁谷區若木町九國學院大學　丸茂武重
東京市牛込區矢來町　正木直彥
東京市麴町區有樂町東京日々新聞社　增田

朝鮮釜山府寶水町二丁目　濱田俊象
新潟縣佐渡郡河原田町　原田廣作
横濱市中區吉田町六二　原田久太郎
東京市杉並區下荻窪町三丁目四七　橋本增吉
仙臺市北六番丁一一三　長谷部言人
岡山市國富八〇四　畠田和一
富山市清水町五八　早川莊作
岐阜縣加茂郡太田町　林魁一
東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室　林禮
愛知縣清洲町　林良幹
東京市世田ヶ谷區松原町四ノ一五一　樋口清之
栃木縣那須郡金田村羽田　平山助右衛門
鹿兒島縣大島郡伊仙村面縄　廣瀨祐良
朝鮮平壤府牡丹台公園　平壤府立博物館
福島縣安積郡福良村中町　本田七郎
東京市神田區田代町二　中村方　北條憲政
東京市中野區江古田九三五　堀野良之助
埼玉縣北足立郡六辻村大字沼影　細淵貢象

I 之部

青森縣三戸郡八戸町　泉山岩次郎
横濱市中區西戸部町境谷三〇　池田健夫
東京市深川區冬木町一一　池上啓介
水戸市西原町三二七四　生沼豐彥
東京市向島區吾嬬町西四ノ四八　稻生典太郎
東京市目黒區下目黒四ノ九七四　今宮新
富山市外稻荷三四　石淵三郎
横濱市神奈川區岡野町一三一　石野瑛
長野縣埴科郡松代町六二九　石坂福治
東京市麻布區龍土町五八　伊丹信太郎
仙臺市北二番町八五　伊東信雄
三重縣桑名郡七取村大字香取　伊藤富太郎
東京市杉並區田端七二六　岩井貞麿

K 之部

Museum, Koningsplein, Batavia-Centrum Batavia, Java,　Dr. P. V. van Stein Callenfels　終身會員
千葉縣香取郡良文村貝塚區豐玉姫神社社務所内　貝塚保存會
小倉市上富野一一四八番地　海法成一
北海道岩見澤町空知支廳内　加藤要
山形縣東田川郡手向村神林　神林淳雄
大阪府堺市三國ヶ丘四七〇反正帝陵前通東端　神田德明

史前學會々員名簿（昭和十年十二月一日）

A之部

東京市品川區大井水神町二二一六　阿部武義
東京市大森區入新井四ノ七四四　相川廣秋
横須賀市公鄕町二七九六　赤星直忠
京都市山科町厨子奥若林三五　明石國助
石川縣石川郡出城村字北安田　曉烏敏
秋田縣南秋田郡脇本村　天野源一
東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室　新井正治
朝鮮京城府蓮建洞一三二　有光教一
東京市世田ケ谷區駒澤町大字上馬引澤八四　有坂鉊藏
東京市中野區上ノ原町二九　淺田芳郎
東京市本鄕區向ケ岡彌生町三　淺野長武
兵庫縣尼崎市宮內町二丁目九番地　淺野隆

D之部

盛岡市仁王小路三三　終身會員　大坊善章
關東州大連市　大連圖書館

E之部

宮城縣石巻町裏町　遠藤源七
51 rue de Lévis Paris (17e) France　Eugéne Pépin

F之部

Ragional Seminary, Aberdeen, Hong-kong, China.　Rev. D. I. Finn' S. J., M. A.
長野縣上諏訪町本町　藤森榮一
朝鮮京城府東崇洞二〇一藥水台　藤田亮策
東京市淀橋區戸塚町三九六三　中村綠野方　藤田嗣治
横濱市關東學院中學部　福田正作
滿洲國哈爾賓文物研究所內博物館　福島一郎
大阪市西成區南海道一ノ三五　船越政一郎方　船越章
臺灣臺中州大甲郡沙鹿庄昭和製糖株式會社沙鹿製糖所　古澤國彥
東京市外吉祥寺一九〇一　布施安昌

G之部

東京市杉並區阿佐ケ谷五丁目五二六　後藤守一

H之部

c/o Ecole Nationale des Laugues Orientales Viantes 2 Rue de Lille Paris Erance.　Haguenauer
北海道函館市　函館圖書館
京都市上京區田中野神町一八　濱田耕作

史前學會昭和十年度會計報告 （昭和十年十一月一日締切）

收入之部

總計 金一〇三九、〇九錢也

内譯

一、前年度より繰越殘金　金　一、二五錢也
一、昭和十年度中會費收入　金　七五三、〇〇錢也
一、史前學研究所より補助金　金　二五〇、〇〇錢也
一、雜誌、小報、パンフレット等賣上代金　金　三四、八四錢也

支出之部

總計 金一〇三二、五九錢也

内譯

一、雜誌製作費　金　七一四、二一錢也

内譯

一、昭和九年度年報及目次索引　金　七五、〇〇錢也
一、第七卷第一號雜誌　金一三七、五六錢也
一、第七卷第二號雜誌　金一四四、八八錢也
一、第七卷第三號雜誌　金一一五、〇〇錢也
一、第七卷第四號雜誌　金一三一、五八錢也
一、第七卷第五號雜誌　金一一〇、一九錢也

但第七卷第六號雜誌及昭和十年度年報及目次索引の製作費は昭和十一年度會計に送る

一、雜誌發送料郵便切手購入及通信費　金　一四〇、一八錢也
一、事務委託手當　金　一二〇、〇〇錢也
一、振替貯金諸手數料及用紙代金　金　三四、九二錢也
一、諸雜費　金　二三、二八錢也

差引殘額（次年度へ繰越殘金）　金　六、五〇錢也

會費分納に就いて

會費は從來通り年額五圓に變りはありませんが、昨年度と同じく便宜上分納の方法をとりまして金參圓宛集金致す事もありますから御利用下さい。從つて餘分の一圓は翌年度の會費の一部に充當させます。

で、論説なり資料なり何れにても結構ですから奮つて御寄稿をお願ひ致します。

五、遺物寄贈者

本年度も亦本會々員諸氏より姉妹關係にある大山史前學研究所に多數の資料の寄附に預つた事は誠に感謝の至りであります

戸畑運治氏　栃木縣那須郡金田村　石鏃
梅澤丈吉氏　新潟縣南魚沼郡石打村の縄文式土器　石器
京都大學考古學教室　北白川遺蹟の土器　石器
カーレンフエルス氏　ジャバの石器　土器

六、寄贈及交換雜誌

本年度に於ける本會への寄贈及び交換雜誌は左の如くであります。

人類學雜誌	東京人類學會
史學	三田史學會
史苑	立教大學史學會
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名勝天然紀念物保存會
本山考古室要錄	末永雅雄氏
玦狀耳飾發見地名表	高橋直一氏
沈みゆく東京(菊池山哉著)	柴田常惠氏
上毛及び上毛人	上毛鄉土史研究會
科學知識	科學知識普及會

考古學雜誌	考古學會
雜誌索引	雜誌索引發行社
大和考古學	大和上代文化研究會
歷史と鄉土	神奈川縣中等學校歷史研究會
吉備考古	吉備考古會
上代文化	國學院大學上代文化研究會
考古學	東京考古學會
ひだびと	飛驒考古土俗學會
北見鄉土史話	米村喜男衞氏
東方學報	東方文化學院京都支所
ドルメン	岡書院
信濃	信濃鄉土研究會
佐久研究	信濃佐久研究會
神社協會雜誌	大場磐雄氏

Mémoires de la Société Royale des Antiquaires du Nord
La Société Royale des Antiquaires du Nord.
Eurasia Septentrionalis Antiqua.
La Société Finlandaise d'Archéologie.

史前學年報 昭和十年

昭和十年度史前學會事業報告（創立第七年）

一、序

本會は本年報を以て創立第七年を送り第八年の春を迎ふる事になりました。

本年報に於ては昭和十年度の史前學會事業を報告なし、一つに幹事の責を明かにすると共に、これに基き會員諸氏の忌憚なき御意向を伺ひ、以て昭和十一年度に於ける會務を律し、史前學會々員相互の研究機關たる實を益々發揮して行きたいものと考へます。

二、會員

現在會員 二四四名 本年度 退會者四二名 入會者一五名

又別記の死亡會員に對し謹んで弔意を表します。

會員數に就ては幹事の責任の存する所でありますが、本會をして充分發展せしめ其使命を發揮せしめる爲に毎年の事ではありますが、會員諸氏に於かれても多數の新會員の御誘導をお願ひ致します。又本年は特に會員の方で大山史前學研究室附屬資料室を見學に御出でになられましたが、今後も御遠慮なく御出で下さる事を希望致します。

三、顧問及び幹事

顧問 小金井良精 中澤澄男 柴田常惠

幹事 杉山壽榮男 田澤金吾 大場磐雄

大山柏 甲野勇 樋口清之

山口隆一 池上啓介 （順序不同）

此等の諸氏の御熱心なる御助力により會務を執る事が出來ました事は、幹事の一員として甚だ幸福でした。特に幹事中から互選により編纂幹事を設け、毎月、編纂會を開きましたが、御業務に御多忙にも拘らず其都度御參集を願へた事は全く感謝の他はありません。又、本會幹事備野啓氏が本年四月御死去せられた事は誠に殘念の次第で御座いました、故人の冥福を祈り度いと存じます。

四、史前學雜誌に就いて

本年度は會員諸氏の御投稿により、有益なる問題を學會に提供し得た事は誠に喜ばしい事であります。特に地方の會員諸士より貴重な資料を豊富に御投稿された事は編纂幹事として、感謝の他はありません。此の機會に本誌を益々發展せしめる意味

史前學會々則

一、本會ヲ史前學會ト名付ケル

二、本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三、本會事業ヲ達成スルタメニ史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ヲ發行ス。又年會及ビ春秋二回研究會合ヲ行フ。隨時ノ見學旅行、講演會並ニ展覽會ヲ催スコトアリ

四、會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額五圓ヲ納ムル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ終身會員ニ準ズル

入會希望者ハ宿所氏名ヲ明記シ本會ニ申シ込マレタシ

五、本會員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ本會所藏ノ資料圖書ヲ使用閲覽スルコトヲ得

六、年會ノ決議ニヨリ會長及ビ數名ノ幹事並ニ會計ヲ置キ本會ノ會務ヲ執ル

七、幹事會ノ決議ニヨリ顧問ヲ置クコトヲ得

八、幹事會ノ決議ニヨリ本會々則ヲ變更スルコトヲ得

九、本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山史前學研究所内

史前學會

顧問　小金井良精　中澤澄男　柴田常恵

會長　大山柏

幹事　杉山壽榮男　田澤金吾　大場磐雄　甲野勇　大山柏　樋口清之　山口隆一　池上啓介

會計　岡田義一

(順序不同)

投稿規定

寄稿ノ範圍ハ史前學研究ヲ主體トシ、之ニ關連スル諸學ヲ包括ス。寄稿者ハ通常、會員並ニ會員ノ紹介アル者ニ限ル

原稿ハ返還セズ、但シ寫眞、圖表等ハ豫メ申出デアルモノニ限リ之ヲ返還ス

原稿掲載ニ就イテハ幹事ニ一任サレタシ

寄稿ノ別刷ハ豫メ申込ミアル場合ニ限リ、當分所要部數ノ實費及ビ送料ヲ申受ケ需ニ應ズ

昭和十年十二月二十五日　印刷

昭和十年十二月三十日　發行

第七卷附錄　定價　三十錢

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　池上啓介

發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區神保町一丁目三十四番地　高田壬午郎

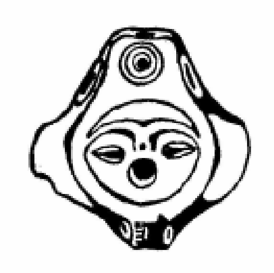
株式會社開明堂東京支店

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二一五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區須田町一ノ七　巧藝社　電話神田(25)二二九四番　振替東京四〇六六六番

史前學年報

昭和十年



史前學會

ABHANDLUNGEN

DER

JAPANISCHE PRAEHISTORISCHE GESELLSCHAFT

AUF

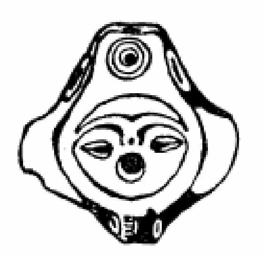
EUROPÄISCHE SPRACHE

VON

ZEITSCHRIFT FÜR PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

I BAND (1929) ―7 BAND (1935)



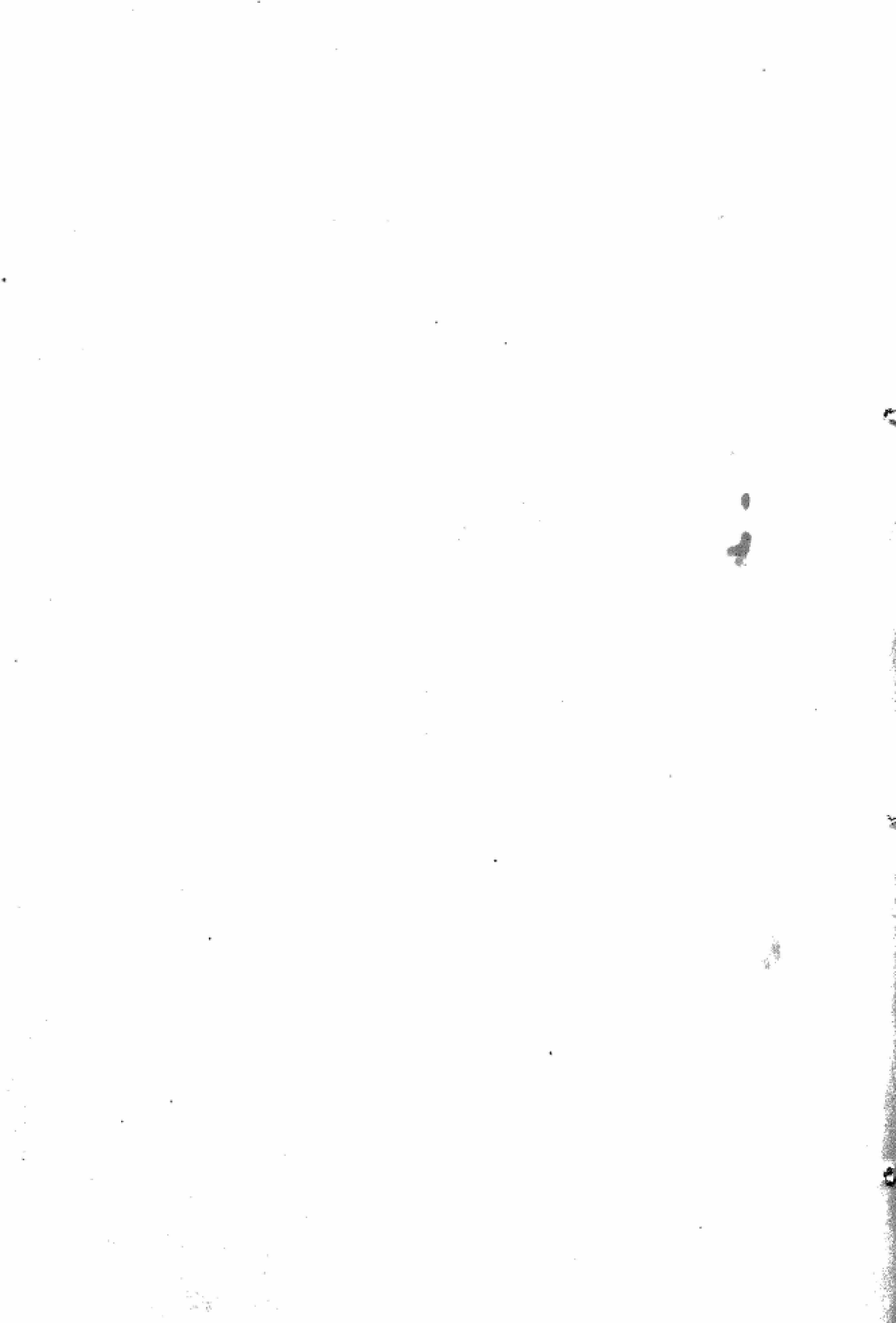
1935

TOKIO

JAPANISCHE PRAEHISTORISCHE GESELLSCHAFT

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, ONDEN SHIBUYA-KU TOKIO



ABHANDLUNGEN

DER

JAPANISCHE PRAEHISTORISCHE GESELLSCHAFT

AUF

EUROPÄISCHE SPRACHE



ABHANDLUNGEN
DER
JAPANISCHE PRAEHISTORISCHE
GESELLSCHAFT
AUF
EUROPÄISCHE SPRACHE

1929. Kashiwa Ohyama

Resume des Ausgrabungsberichts über die Muschelhaufengruppe Kaizuka beim Dorf Yoshibumi, Provinz Chiba. (Résumé)

Præhis. Zeitschr. Bd, I, No. 5, S. 1—4.

1930. Chiyomatsu Ishikawa

Professor Edward Sylvester Morse.

ibid. Bd. II, No. 1, S. E. 1—E. 3.

Kashiwa Ohyama

Denkmal beim Muschelhaufen Oomori zum Gedächtnis an Prof. Edward S. Morse.

ibid, S. E. 4—E. 8.

Letter From the family of Late Prof. E. S. Morse.

ibid, S. E. 9.

Kashiwa Ohyama

Korekawa-Funde, vom Korekawa, einer charakteristischen Station von Kame-ga-oka Typus der Nord-Ost Jômon-Kultur.

ibid, No. 4, S. E. 11—E. 41.

Mitsuji Miyasaka

Le gisement préhistorique d'Ichioji prés de Korekawa (Préfecture d'Aomori). (Résumé de l'ètude de Mr. Miyasaka) (texte japonais, p. 1 à 20) par M. Haguenauer, pensionnaire de la Maison Franco-japonaise.)

ibid, No. 6, S. E. 43—E. 49.

1931. Kiyoyuki Higuchi

Resume über die neu gefundenen Muschelhaufen Mori (森) unweit von Takada (高田), Gau. Bungo(豊後), Kyushu (九州) (Résumé)

ibid, Bd. III, No. 1, S. E. 1–E. 6.

Kashiwa Ohyama.

Die Maglemosien-Kultur in Nord-Europa. (Résumé).

ibid., Bd. III, No. 2/3.

1932. Kashiwa Ohyama.

Der chronologische Verauf des europäischen Palaeolithikums. (Résumé)

ibid., Bd. IV, No. 2.

P. V. van Stein-Callenfels.

Die Aufgaben der japanischen Praehistorie im Rahmen der internationalen Forschung. (Besprechüng im Ohyama Institut für Praehistorie am 22 Mai 1932.)

ibid., Bd. IV, No. 3/4, S. E. 1—E. 10.

1933. Kashiwa Ohyama.

Findet Man in Japan Palaeolithikum? (Résumé)

ibid., Bd. IV, No. 5/6, S. E. 1.–E. 3.

Kashiwa Ohyama.

Zum Gedächtniss an Herrn Hikoichi Motoyama.

ibid., Bd. V, No. 1, S. E. 1.

Kashiwa Ohyama.

Herrn Prof. Dr. Hubert Schmidt zum Gedäechtniss.

ibid., Bd. V, No. 3, S. E 1.

Kashiwa Ohyama. Mitsuji Miyasaka. Keisuke Ikegami.

Vorläufiger Bericht ueber die Chronologie der Jômon-Kultur der Steinzeit im Kwanto (Mittel-Japan). (Résumé)

ibid., Bd. III, No. 6, S. E. 1.

Shôsaturo Yokoyama.

Resume des Ausgrabungsberichts ueber den Muschelhaufen Tôsando auf der Insel Maki-no-shima, Süd-Korea.

ibid., Bd. V, No. 4, S. E. 1–E. 7.

1934. Iwao Ooba.
Hoehlenfunde der japanischen Urzeit. (Résumé)
ibid., Bd. VI, No. 3, S. E. 1—E. 2.

Kashiwa Ohyama.
Die Muschelhaufen-Gruppe Shimosugeta.
Mitteilungsblatt des Ohyama Instituts. Einzelne-Ergebnisse zur Chronologie der Jômon-Kultur des Neolithikum im Kwantô (Mittel-Japan) No. I.
ibid., Bd. V, No. 6.

Kashiwa Ohyama.
Der Muschelhaufen von Orimoto.
Mitteilungsblatt des Ohyama Instituts. Einzelne-Ergebnisse zur Chronologie der Jômon-Kultur des Neolithikum im Kwantô (Mittel-Japan) No. II.
ibid., V, No. 6.

Ryûichi Yamaguchi
Sur l'homme néolithique au Japon.
(noch nicht erschien)

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - B Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - C Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Shibuya-Ku Tokio

   Ohyama Institut für Praehistorie (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

Ehren Mitglied und Ratgeder Prof. Yoshikiyo Koganei

Sumio Nakazawa Jookei Shibata

Vorsitzender Fürst Kashiwa Ohyama

für den Vorstand

Kiyoyuki Higuchi Keisuke Ikegami

Isamu Kohno Iwao Ooba

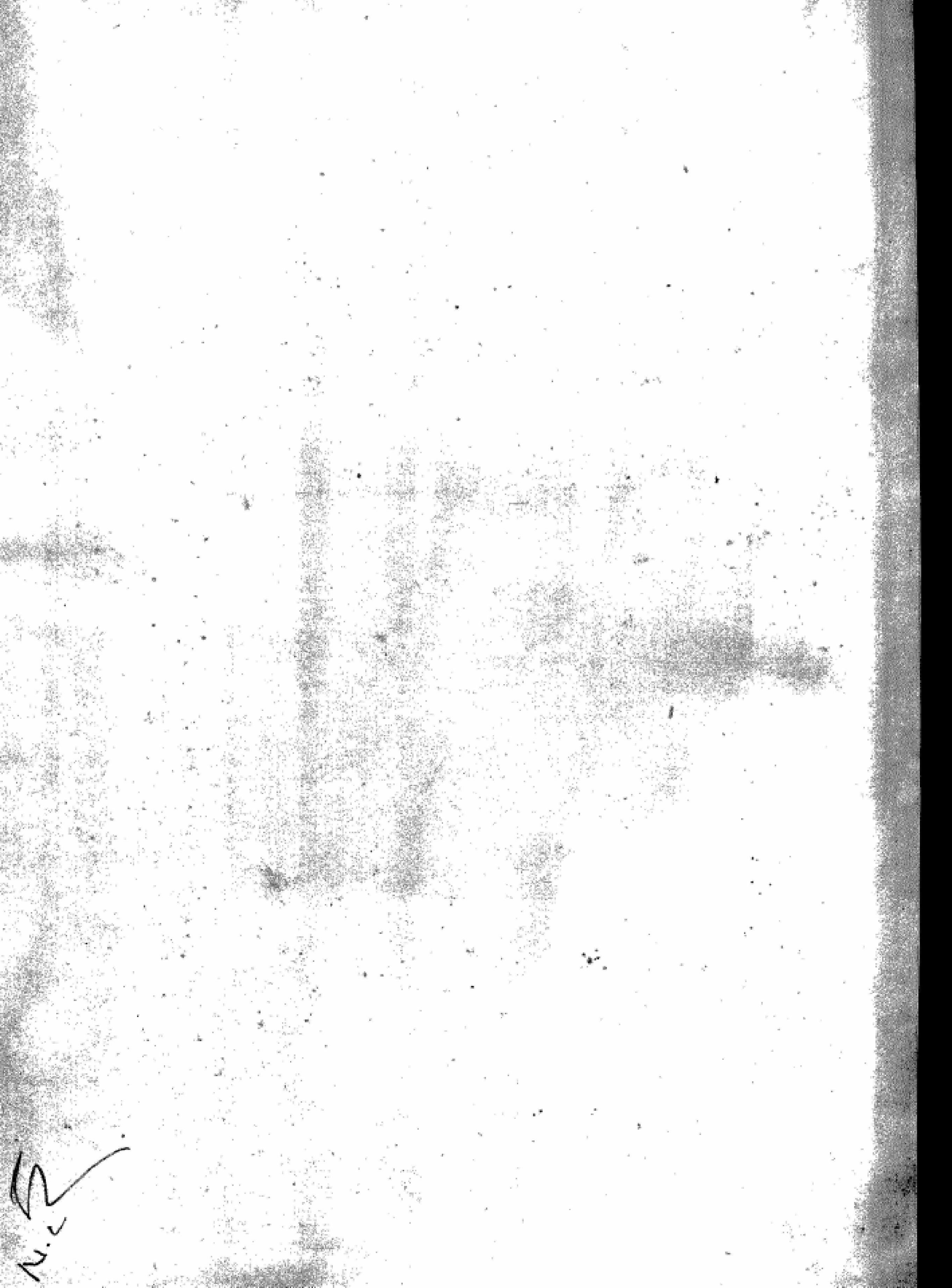
Sueo Sugiyama Kingo Tazawa

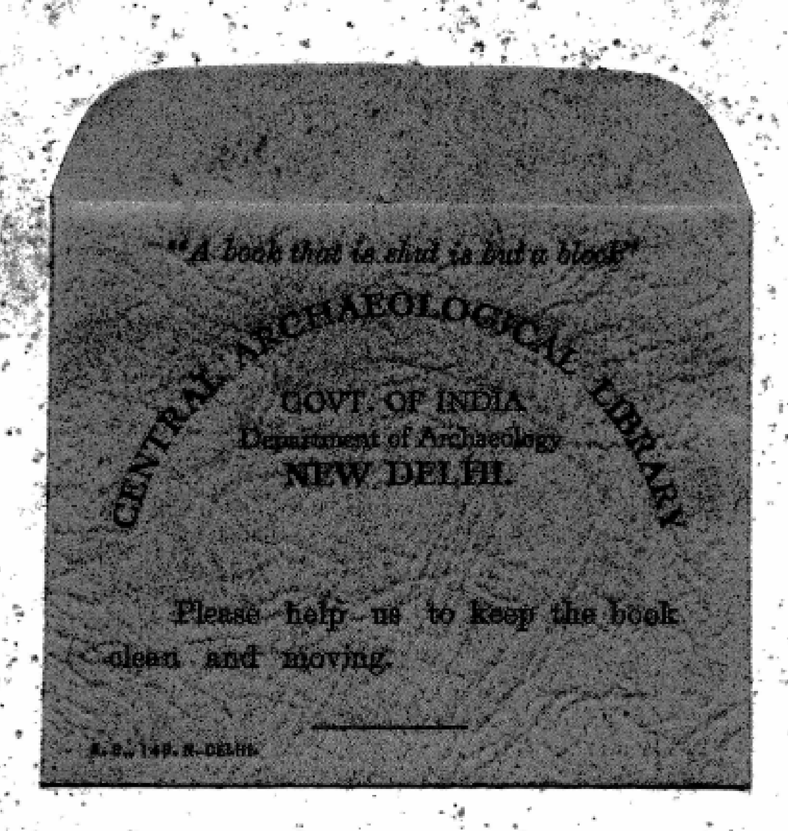
Ryuichi Yamaguchi










"A book that is shut is but a block"
CENTRAL ARCHAEOLOGICAL LIBRARY
GOVT. OF INDIA
Department of Archaeology
NEW DELHI.
Please help us to keep the book clean and moving.